
明日は晴れるだろ 3rd season

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日は晴れるだろ 3rd season

【Nコード】

N4669L

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

時は化政時代。処はお江戸。秋色薫る江戸の街の片隅で、発明に気炎を上げる男が一人、その男に惚れる少女が一人。さてさて二人の恋愛模様の行く先はいかに？ まさかまさかの第三弾。はじまりはじまり――。

これはシリーズものです。前作及び前々作をお読みいただかなくても楽しめるような作りにしたいのですが、出来ていない恐れがあります。ご了承ください。

【1】

野良犬歩く暗い夜道。十月にもなれば、吹く風に熱は感じられない。ぴゅーっと吹くたびに、着流しの裾からほのかながら残っていた温かみも吹き誘われてしまう。

「あー、ちくしょうめ」

せつかく酒飲んで温まったのに、とイエモン氏は心の中で呟く。そして、空を恨めしげににらむ。けれど、空の上に誰がいるわけもなく、結局イエモン氏のメンチは空を切る格好となっている。

犬っこ一匹通らない往来。往来の端では十六文蕎麦屋じゅうろくもんそばやがさびしげな明かりを掲げて商売をしている。繁盛している様子はなかった。こんなに寒い時期に、夜に出歩くような人間なんてどうかしているのだ。

延々続く鼠色ねずみいろの瓦の列。それが嫌に寒々しくて、思わずイエモン氏は組んでいた手を強く組み直した。

風が吹いた。

もちろん、そうして吹いた風がハワイの南国軟風のはずはなく。当然吹くのは、冬の色さえまとい始めた秋の空っ風である。薄い着流しをその風に揺らしながら、妻のお岩ちゃんに冬の装いの準備をさせないとなあ、と酔いどれ頭のイエモン氏は呟く。そして、左に差している刀の柄頭を撫でながら、ぶるぶると身震いした。

さてさて、ここいらで説明しなくてはなりませんまい。このイエモン氏、ただのお武家さんではないんです。

え？ ただのお武家さんじゃないってどういうことだ、って？
よくぞ聞いてくれました。

この方、辻斬りなんです。怖いですねー、恐ろしいですねー。
詳しい事情はわかりかねますけども、一度辻斬りをして病みつきになって、夜な夜な酒をあおっては辻で人を斬る、ろくでなしの甲斐性なしなんですよー。そのくせどこかの家中（藩のことだよ）に

も仕えずに浪人を気取っていて、奥さんの実家からの仕送りと内職で食ってるんですよー。（いろんな意味で）怖いですねー。恐ろしいですねー。ちなみにイエモンさん、ある瓦版師の前で、「誰かに仕えたら負けだと思ってる」って発言してそれが瓦版に載っちゃって、江戸の八百八町じゅうに乾いた笑いとなんとなない“世も末感”を提供した奇特な人物でもある。

それはともかく。

そんなろくでなしなイエモン氏が夜の道を歩くからには、当然その理由は明らか。

柄頭を撫でながら夜の暗い辻を歩く侍。どう見ても辻斬り目的でしかあるまい。ケタケタと笑みを浮かべながら刀の柄頭を撫でて、ふらふらと歩いてる男なんて、まあ好意的に見ても変質者でしかないけれども。

さて、そんなイエモン氏、不意に足を止めた。

「来た」

イエモン氏、思わず舌なめずりをして、往来の先に目を凝らす。往来の先は、深い闇にさえぎられて何も見えない。月が出ていれば良かったのだけれど、この日に限って新月だった。だから、往来の先にいる“何か”の輪郭すらも捉える事が出来なideいた。

けれど、イエモン氏には分かっていた。その“何か”が確かにその闇の中に存在すること、そしてこちらに向かってきてきていること。

「ふん、刀のサビにしてくれる」

イエモン氏は刀を抜いた。ところどころ鹿皮がほつれ、滑り止めの鮫皮が外れかかった柄を握ってから、しゃらんと間抜けな音を立てて鞘を払われた刀身は、ところどころサビが浮いていた。青サビみたいな上等なものではない。赤サビだ。ビンボー生活のせいで刀を研ぎにも出せず、さりとて刀の手入れを欠かさないような几帳面さもないイエモン氏を鏡映しにしたような刀である。

一歩一歩イエモン氏が間合いを詰めるたび、向こうからやってくる“何か”も、その姿を少しずつはつきりとさせてくる。

まずわかったのは輪郭。手が二本に足が二本。どうやら幽霊の類ではないようだった。

次にわかったのは上背。五尺何寸かくらい。身長が五尺そこそこ（大体150cmくらい）のイエモン氏としては見上げるくらいの身長差だ。

うむ。で、でかい。

こりゃ勝てないかも。

思わず既に抜き身になっている刀を納めてしまおうかと悩むイエモン氏。正確には、一度抜き放ったものを何もせず納めるなんて武士の名折れじゃないか、いやいや「三十六計逃げるにしかず」という格言があるではないか、ちよつと待て「義を見てせざるは勇無きなり」とか孔子さんも言ってるではないか、いやいやそもそも俺のしてることって褒められたことでもないだろう、いや待て俺はまだ酒を飲んでぶらぶらしているだけではないか今は、とバカバカしいシーソーゲーム・モノローグで揺れに揺れていた。

そうやってオタオタしているイエモン氏の耳に、風向きでも変わったのか突然聞き慣れない音が届いた。

ウオン、ウオン。

思わず、身を仰け反らせるイエモン氏。オオカミの唸りのようにも聞こえるし、どこかのオヤジの歯ぎしりにも聞こえる。けれど、その音は今までイエモン氏が聞いてきたどの音とも違った。オオカミの唸りにしろオヤジの歯ぎしりにしろ、その音はどこか不規則なものだ。けれど、イエモン氏の耳に届いているこの音は、まるで測っているかのように正確な脈拍を描いていた。

そしてその音は、確実に前から——つまりは歩いてくる“何か”のいるほうから——聞こえてくる。

な、なんだ、この音ア。

イエモン氏から、酔いの色が飛んだ。

そして代わりにイエモン氏に降りかかってきたのは、ただただ疑問だけだった。そして、その疑問への答えが見つからない今の状況

に、やがて焦りのようなものを感じ始めた。額の汗が冷たい風に撫ぜられて地面に落ちる頃になると、恐怖さえ感じるようになっていた。

がしゃん、がしゃん。

音が変わった。

ガラクタを地面に落としたような音。あるいは、鎧武者が歩いているような音。

よ、鎧武者？

その言葉をイエモン氏が口の中で転がしたころ、イエモン氏の中に、ようやく“何か”の全貌が飛び込んできた。

さて、結論から書いてしまおう。イエモン氏の目の前には、鎧武者が立っていた。

頬当てで顔が隠れているから、その顔を拝むことはできなかった。大きな前立てが目立つ兜をかぶり、天気の良い日にはよくその色が映えるような緞の大鎧をまとっている。時代遅れもいいところな、ひどく古臭い具足姿は、鎌倉武士のバイブル・平家物語を地で行くような格好だ。

【2】

ななな、なんだこいつは。

思わず刀を取り落としそうになったイエモン氏、刀でドジョウすくいのまねを披露する羽目になった。まるで生き物のように手と手の間を跳ねる刀と格闘することしばらく、ようやく刀の柄をなんとか握り締めたイエモン氏は、ぎりつと歯噛みしてその鎧武者に向いた。

瞬間、鎧武者の目が光った。

いや、別に誇張だとか喻えだとか、そういうことではない。本当にピンクと光ったのだ。頬当てによって今一つ定かにならない顔の、ちょうど目のある辺りが、クポーンと音を立てて、確かにピンク色に光ったのだ。もしイエモン氏が現代人だったなら、某リアルロボットアニメの一つ目敵ロボットを連想しただろう。

「あ、あ、あ……」

声も出ない。目が光る（しかも赤、というかピンク色に）なんて怪異どころの騒ぎではない。アヤカシか何か、あるいは妖怪変化の類にしか映らない。

けれど、イエモン氏は逃げなかった。正確には、逃げるタイミングを思いつき切り逃した。もう既にそのアヤカシ鎧武者はイエモン氏のすぐそこにまで迫っている。今から逃げても、すぐに追いつかれてしまう。そんな計算がイエモン氏の頭の中で既になされていた。ちなみに、その計算の中で、逃げ足に関して相当低い数値で見積もられていたのはただイエモン氏だけが知る事実である。

「あわわわわ……」

イエモン氏がそううろたえている間に、鎧武者は後ろ手にしていた右手を前に突き出した。その瞬間、イエモン氏の蚊のような心の臓は一気に縮みあがった。

その鎧武者の手にあったもの、それは槍だった。何の奇のてらい

もない直槍。^{すくやり} 武家屋敷の門番さんとかが交通整理代わりに使っているアレである。緘^{おとし}の大鎧なんて豪壮な格好の割に、何やらシヨボい武器だった。けれど、シヨボかろうがなんだろうが、手にあるものは槍なのだ。怖いに決まっている。

その槍を、鎧武者はゆつくりと構えた。右手を後ろに、左手を前に。典型的な槍構え。けれど、その構えはどこか棒立ちで、見る側にそこまで威圧を与えるようなたぐいのもではなかった。

けれど、そんな鎧武者の構えが、イエモン氏に妙な自信を与えたのも事実だった。

あれ、これ、勝てるんじゃない？

剣術なんてからきしダメなイエモン氏にそう思わせるほどに、鎧武者の構えは隙だらけだったのである！ まるで子供が棒きれをなんとなしに構えているような感じで、持っているものが槍でさえなければ、それこそさおだけを無造作に持っているかのようなだった。

そんな妙な自信に裏打ちされたイエモン氏、逃げればいいのに刀を大きく振りかぶった。

そして。

「うらあ！ 死ねやあ！！」

思いつきり、刀を振り下ろした。イエモン氏の頭の中では、鎧武者はその一撃で真つ二つになっている。そのはずだった。

けれど、イエモン氏の予想は大きく外れた。

イエモン氏の放った剣の切っ先は、緘の糸一本たりとも斬っていない。確かに鎧に少しだけ刀がめり込んではいいるけれど、全く斬れていない。刃筋が立っていないせいで、全然斬れていないのだ。

ちなみに、——これはイエモン氏の知らない事実なのだけれど——、辻斬り・イエモン氏の手にかかって死んだ被害者はまるでいない。せいぜい打ち身やあざを作った程度、運が悪くてもちよつと切り傷を作ったくらいである。奇跡的なまでに剣の振りがヘタクソなおかげで、今までイエモン氏の刀のサビになった江戸っ子はどこにもいない。どの時代にも、下手の横好きはいるものなのだ。

クポーン。

鎧武者の赤い（というかピンクの）目が強く光った。見ようによつては怒っているようにも見えたし、笑っているようにも見えた。

「あ、あのう……、見逃してくれない？」

イエモン氏の悲痛な声は辺りに拡散していく。

が、鎧武者がその言葉を拾い上げることはなかった。

鎧武者、突然何の前触れもなく、行動を開始した。

「突キイ！！」

ものすごく甲高い声。そして、その声とともに繰り出される槍の突き。けれど、その動きはまるで精彩を欠いていた。槍の切っ先にトンボが留まってしまうんじゃないか、と心配したくなるほどにゆっくりな振り出し。まるで、ある種の舞のようでさえあった。

もちろん、いくらテンパっているイエモン氏といえども、そんなゆっくりな振り出しをかわせないはずはない。ちよつと怪訝に思いつつも、イエモン氏はその槍の穂先をかわした。

「……」

声も出ないイエモン氏。別な意味でだけど。

イエモン氏の心中に去来していたのは、ともかく疑問だった。 “

こいつは一体何がしたいんだ？” “っていうか、なんで緘の大鎧？

” “なぜ目が光る？”……。 そんな疑問の数々が頭の中に渦を巻い

て、結局それらが一つの感情にまでまとまってゆく。

その思いを代弁するように、イエモン氏の口からこぼれたるは。

「はぁー……」

とてつもなく深いため息であった。

もはや、様々な感情がないまぜになつて一回り、遂には呆れにまで至っていたのであった。意味がわからなすぎて、呆れるしかない。そんな感じだった。

その溜息に勢いをそがれたのか、それとも別の理由からなのか。

イエモン氏を尻目に鎧武者は槍の構えを解いた。構えていた槍の左手を外し、右手だけを槍に添えた。そして槍を杖のように地面に

ついて、ゆつくりと歩き出した。がしゃん、がしゃん。現れたときと同じく、大仰な音を上げながら。まるで、さつき槍を繰り出したのがウソだったかのように。

「ななな、なんだったんだ、アレア」

刀の切っ先をだらしなく地面に向けながら、イエモン氏はどんどん小さくなってゆく鎧武者の後姿を見送っていた。あわてて抜いていた刀をしまってから、イエモン氏は闇の中で一人頭を掻いた。

酒の飲みすぎかな？

そんなイエモン氏の問いは、秋の夜長の真っ最中・大江戸八百八町に流れて、ゆつくりと溶けていった。

【1】

大江戸八百八町の空は、今日も晴れである。

きりりと引き締まった秋の空気が頬を撫でる。

ところどころ打ち水をされた形跡のある往来では、ほとんど埃が巻き起こることはない。ただ、枝と別れてしまった葉っぱたちがカラカラと笑いながら道を転がるばかりだ。江戸っ子たちになんとか冬が近いことを予感させるような秋風。そんな秋風が、往来をすりと抜けて行った。

その風に顔を引き締めるは数え年十五歳の乙女・ちあき。最近住まい近くの長屋の間では、“鳶小町”とかささやかれてはじめている、結構なべっぴんさんの鳶職の娘である。長屋のある人曰く――。「ああ、最近顔に子供らしさがなくなつて、ずいぶんとこぎれいになったね」。またある人曰く――。「鼻筋の整った感じは父親似、頬が地黒でふつくらした感じは母親似だね」。

まあ、長屋の大人たちの言うことなんて八割方誇張されているものなので、あまりあてにしない方がいい。いや、決してちあきが美人じゃないって言いたいわけじゃないません。ただ単に、〇〇小町なんて呼ばれ方をするほど美人じゃないって言いたいただけなんです。まあ可愛いのは認めるけれど、それはころころ変わる表情が魅力的なおかげだろう。それ程度のものだと思っただければ。このお話に主人公補正はありませんです、はい。

そんな乙女・ちあき。瓦が軒を連ねる往来の向こう側を眺めながら、ふうとため息をつく。その溜息が乙女っぽいならそれでいいのだけれど、その溜息はともそんなつややかなものではなかった。たとえるなら、佐々木小次郎が宮本武蔵を待ちわびているときに、幾度となくついただらう溜息によく似ている。

ついにちあき、言葉を放つ。

「おっそいなあ。何をダラダラと……」

履物の頭を地面にゴリゴリと押しつけながら暇をつぶすちあき。朝早く起きて着付けた小袖の袖をちよつと直して、来るべき“敵”がやってくる方向に向いている。

江戸の朝は、もう明けていた。往来には行商人たちがあふれている。「とうふう」とアンニュイな声を上げながら豆腐屋がちあきの脇をすり抜けてゆく。「ごめんよごめんよ、水は鮮度物なんadenaア！」と叫びながら、往来を走るは水売り。そして、それらの行商人たちに群がる江戸っ子たち。もう江戸は目覚めている。

頭上に輝く太陽にメンチを切りながら、ちあきは呟く。

「おそい！ おそすぎる！ まさか、逃げたんじゃないでしょうね！？」

そうちあきが呟いた瞬間だった。

往来から、のびやかな高い声が届いた。

「お待たせしました〜！」

その声は、ちあきの心を逆撫でにする。あまりに声が浮ついていて、全然謝る気なんかなさそう。遅れてきたくせに。

「遅いよ！」

ちあきのとげのある言葉を、その声はかわした。

「いやア、ごめんなさい、ちあきさん。思いのほか準備に時間がかかったちゃって……。色々とおめかしがしたかったんですもん。ちあきさんはいいですね」

そう言いながらちあきの前に姿を現したのは、黒髪の女の子だった。雪のように白い肌。そして細い手足。ちあきのように常日頃力仕事をしていないのだろう、きれいな手をしている。そして何より、つやかで真っ黒な髪の毛。同じ乙女であるちあきからしても、ほうと息を飲んでしまいそうになるほどに、その髪はきれいだった。いや、きれいなのは髪の毛だけじゃない。どのパーツを切り取っても絵になりそうなほど、ちあきの前に立つ女の子はきれいだった。……みなさん、こういうのを指して。。小町と言うのですよ。

ともかく、ようやく現れたその女の子に向かってちあきは吠えた。
「ところで、何が“いいですよ”なのよ、お鶴ちゃん！ この秋空の下、一人で待たされてるなんてとてもうらやましい状況じゃないでしょうに！」

すると、ちあきの前に立つ女の子、——お鶴——、はふふんと笑った。

「ああ、ちあきさんは、色々と準備が少なそうでうらやましい、って話です」

うむ？ ちあき、思わず小首をかしげる。けれど、そのお鶴の言葉の意味がわからないほどコドモというわけでもない。つまるところ、今のお鶴の言葉は、“見た感じだと、ちあきさんは身たしなみの時間が少なそうですよね”とでも言いたいのだ！

ようやくお鶴の謂いに思いが至ったちあき、鼻息を荒くした。

「なにおう！ これでもあたしだって結構いろいろと身たしなみで忙しいんだからね！」

とか言いつつ、実はちあきの身たしなみはさして時間がかからない。朝お湯を鍋で沸かして、それを水と混ぜてたらいで湯あみ。ただそれだけだ。まあ、朝シャンなんて言葉のないこの時代のことだから、母親のお冬さんには“朝から湯あみなんて……”とすこし嫌な顔をされるし、父親である春吉はバツが悪そうに視線を泳がせるばかりだったりする。

けれど、そんなちあきの言葉をお鶴は華麗にかわす。

「はいはい。そんなことよりちあきさん。始めましょうよ」

話の方向を無理矢理捻じ曲げられてしまった格好になったけれど、反論する理由もなかった。結局ちあきはお鶴の用意した話に乗っかる格好となる。

「うん、そーだね。別にお鶴ちゃんと話しても得はないもん」

「まったくです。ちあきさんと話してる暇があったら、私だって一刻も早く足を踏み出したいですもん」

「何よ」

「何ですかー」

「やるつての？」

「やるんですか？」

顔を3mmくらいのところにひっ付けながら、マジなメンチを切り合うちあきとお鶴。ちょっと背の高いちあきがお鶴をほんの少し見下すような格好になっている。なんというか、修羅場　バ　ラン　バな光景である。かわいらしい乙女二人のマジメンチを目撃する羽目になった江戸っ子たちは、皆その修羅場に巻き込まれないように視線を外して二人を避けた。

そんな二人に割って入るように、秋風が吹いた。

その風に身を震わせたちあきはぼつりとつぶやく。

「で？　合図は？」

「そうですね……」お鶴はしばらく視線を躍らせていたけれど、不意にある一点で視線を止めた。「あそこに、豆腐売りさんが居るの、見えますか？」

見える。ちあきのきわめてケンコーな両眼には、天秤棒を下ろして江戸っ子たちに商売を決め込んでいる豆腐屋の姿がクリアに入った。大体三間（五メートルくらいだよ）向こうで威勢のいい声を上げる豆腐屋は、ちあきたちに視線を向けることはなかった。ちあきはなんとなく豆腐屋とお鶴の顔を見比べた。

「で、あの豆腐屋がなんだつての？」

ぶつきらばうなちあきの言葉に苦笑いを浮かべながら、お鶴は答えた。

「あの豆腐屋さんが、天秤棒を肩に背負った瞬間。それが飛び出しの合図です」

「へえ、いいけど？」

ちあきとお鶴は、とんでもなく恐ろしい形相でその豆腐屋を見つめた、いや、睨んだ。その二人の睨み方たるや、まるで親の仇を追う姉妹が身をやつした仇を見つけた時のような顔だった。そんな二人の周りには、心なしかまっ黒いオーラがあふれているような気が

した。そのモヤモヤしたオーラに感づいた江戸っ子たちは冷や汗を流しながら二人と距離を置く。

けれど、当の豆腐屋は二人の視線に全く気付いていない様子ではなかった。天秤の両腕にかけられたたらいの中にある豆腐を何とか売りさばこうと、あれやこれやのセールストークを繰り返しているせいで、自分に向けられた視線に気づいていない。……まあ、気づいていなくて本当によかったともいえる。もし気づくものなら、二人の世紀末覇者のメンチによって気絶していただろうし。

そんなまつ黒いオーラの中、ちあきは思わず呟く。

「ち、早く豆腐売っちゃえよ、もう」

とりあえず、ちあきのイライラは豆腐屋に向かっていった。きつと年のころは二十歳くらいだろう、ちよつとベビーフェイスな豆腐屋のさわやかな笑みが、暗黒面に落ちているちあきにはまぶしい。まぶしいだけならまだしも、妬^{ねた}ましい嫉^そねましい。

「（イライライライラ……）あれ、ちあきさん、なんてはしたない言葉！」

「ふん、そういうお鶴ちゃんだって、それくらいのことばは考えてるでしょ！ 口に出すか出さないかの違いだよ！」

「いいえー。私はどっかのガサツな人とは違いますー」

「なにおう！」

顔を真っ赤にするちあきに、お鶴は勝利の笑みを向ける。

「あれ、なんで怒るんですか、ちあきさん。私が“ガサツ”だって言ったのは、“どっかの誰かさん”に対してなんですけどー。自分がガサツだって認めるんですかー？」

「うむむ……、でも、今の話の流れじゃそう言ってるようなもんじゃないが！」

くすくすとお鶴は笑う。

「まあ“どっかの誰かさん”ってちあきさんのことなんですけどね」「やる気？」

腕まくりをするちあきに対して、お鶴は屈託ない笑みでカウンタ

―を放つ。

【2】

「私、どこかの誰かさんと違って腕力に自信ないんです。っていうか、物事を腕力で解決するような野蛮な育ち方はしてないんです。」

「ムキー！」

そんなグダグダでどうしようもない会話が展開されているうちに、豆腐屋はたらいの中の商品売り切った。売り切れを宣言するかのようになり、豆腐屋は客たちの前でたらいをひっくり返した。豆腐を浮かせておくためにたらいに張られていた水が、ばっしょんと地面に落ちてほんの少しの間だけ水たまりを作った。

ばっしょん。

その音が、二人のどうしようもない言い争いに（文字通り）水を差した。

顔を見合わせた二人は、示し合わせたように豆腐屋にまた向いた。ごっくん。

ちあきの喉が鳴った。

「毎日毎日のことですけど、やっぱり緊張しますよね」

氷のように微笑みながら豆腐屋を見つめるお鶴。対するちあきも頷く。

「別に、負けてもいいかなって思うけど、そうもいかないのよねー。なんていうか、負けると癢しゃくっていうか」

そう言いかけた瞬間、豆腐屋は動いた。

両のたらいをからっぽにした豆腐屋は、たらいを天秤棒てんびんぼうにセットした。そして、天秤棒を手にとって持ち上げて……。ちあきの目には、豆腐屋のその動作はすんごくゆっくりに見えた。よく「一流スポーツ選手は一秒一秒の推移がゆっくりに見えることがある」って言うけど、まさにそれなのであった。

そして、そんなゆっくりな世界の中で、豆腐屋は天秤棒をがっし

と肩に担いだ……。

「キタ———！」

「行きますよ！」

目をらんらんと輝かせ、ちあきとお鶴は飛び出した。お鶴の「行きますよ！」はまだしも、ちあきの「キタ———！」はもはや奇声のそれでしかなく、ちあきの半径三十間（五十メートルくらいだよ）にいた江戸っ子たちは皆びくつと身を躍らせた。

「ひいっ！」

ちなみに、ここで一番不幸だったのは件の豆腐屋だ。乙女二人の突然の大声に肝を冷やして尻もちをついてしまったならまだしも、突然前に突進してきた二人に足で思いつきり踏まれた。踏まれただけならまだいい。踏まれたのみならずなぜか踏みにじられた。近所では「あの子はそのうち良い縁があつていい嫁さんを迎えるに違いないね」と噂されるその哀れな豆腐屋、土にまみれてひくひくと足をケイレンさせた姿を江戸にさらす羽目になったのだった。「神も仏もない」とは、まさにこういうことでやんすね。

さて、そんな豆腐屋のことなど知ったはずもないちあきとお鶴は、めちゃくちゃなデットヒートを繰り返していた。

「ハアハア！ あらアお鶴ちゃん！ そんな大股で走ってはしたない！」

「私は走ってませんー！ それよりちあきさん、鼻から鼻水出てますよ！ よつぽどはしたない！」

「ズズズ（すすつた音）！ ご生憎さま、これは鼻水じゃありません！ これは魂の涙！ それよりお鶴ちゃん、耳から毛が出てる！」

「え！？」

「やーい、ひつかかった！ バツ力でー！」

こんな会話を猛ダッシュの中で繰り返す二人。アホである。バ力である。そして、無駄な体力である。もしも「おしゃべりマラソン」なる競技が存在したなら、金メダルの行方はこの乙女二人が奪

い合うようになるのだろ。……そんな競技、あと何百年待っても絶対に発足する事がないだろうけども。

そんな二人はもうもうと土煙を上げながら、江戸の町をドバビュン！と疾走してゆく。大店の前を駆け抜け、奥に潜む長屋街も俊足のうちに抜けてゆく。途中、二人の前に立っていた丁稚のボウヤや小粋なおねさん、ちよつとふわふわした雰囲気の人浪さん、果ては「お」と大きく染め抜かれた半纏を着こなす鳶風の青年などを跳ね飛ばしながら。まさに二人、人間装甲車である。

けれど、やがてそんな二人にも疲れの色が見え始める。

「ハアハアハア、ちあきさん、もういい加減脇腹が痛いんじゃないですか……？」

「ぎく！ そそそ、そういうお鶴ちゃんこそ、めちやくちや汗かいてるんじゃないの！？」

「ぎくぎく！」

駕籠かきや大八車をハネ飛ばしながら繰り広げられるどこかのほんとした会話。どうでもいいけど、二人の周りはすわ振袖火事の再来かというほどに浮足立っていた。気の早い江戸っ子たちなど、自分の家から長持（服なんかを入れておく箱のことだよ。ちなみに大きさは人一人が入れるくらい。まあ棺みたいな大きさだと思っていただければ殆ど当たるよ）を持ち出そうとしているくらいだ。往來を歩く女はキャーキャーと叫び、男は怒声を振りまく。たとえ身長が数十間の火を噴くオオトカゲが上陸してもこんなに大騒ぎはしねえぞ、つてくらいの大狂乱。けれど、その大狂乱の台風の目であるちあきもお鶴も、周りの狂乱に気づいていない。

それは、ちあきもお鶴も、横にいるライバルのことしか目に入っていないからだ。

ぎりつと歯を噛んだちあき、痛い脇腹をさすりながら叫ぶ。

「こちとらチャキチャキの江戸っ子なのよ！ あんたなんかに負けてらんないのよオ！」

その叫びが、しっかりと足にも伝わる。

さつきまで少しもつれかかっていた足が、その叫びをきっかけにして元の働きっぷりに戻る。風切り音が変わった。風景の流れ方が変わる。ぐんとスピードを上げたちあき、一気にお鶴との差を広げた。

「ぬおおおおおお！」

……これが本当に乙女かよ、って突っ込みたくなるほどの叫びですけど、あんまり気にしないでください。そして、このお話のヒロインがこの野太い声を上げるちあきちゃんだ、っていう事実もあり気にしないでくださいませ。

「ああ、しまった！」

ちあきの耳に、お鶴の声が背中越しに届く。

勝った！ ちあきは心の中で勝鬨かちどぎを上げる。これ、あたしのぶっちぎり大勝利！？ ふふん、お鶴ちゃん、ちょっと可愛いからって調子乗っていると痛い目見るのよ！ ふふん、ちょっと髪の毛が真っ黒で手足が細いからって、この浮世を渡れると思ったら大違いよ！ けれど、そんなちあきのモノローグは一瞬にして破壊された。というの。

「なんちゃって」

お鶴が、そう呟いたからだ。

しかも、これ見よがしにはつきりと。

なに？ 思わず振り返ったちあきの目に入っただのは、夏に水浴びをする犬のように涼しげな顔を浮かべながら滑るようにちあきの後ろにぴったりくっついてお鶴の姿だった。

「ななな、なんで！？」

その言葉に、お鶴は答える。

「理由は簡単。これ！」

お鶴は足を振り出すのをやめて両裾を少し上げた。上げられた裾からは、ほっそりとして真っ白いお鶴の足が。そして履物が露わになった。足は何の変哲もない。むしろ、細くてきれいだった。変哲があったのは履物だった。

お鶴の履いている履物、ただの履物ではない。形状はフツの二齒のゲタなのだけれど、齒の底近くに半径三寸ほどの車輪が付いている。そして、どうやらその車輪はひとりでに回転しているらしい。ぎゅいーんと音を立てている。きつとあれ、“もーた”ってものが入っているに違いないわ、とその音に聞き覚えのあるちあきは何となく思った。

さて、イメージできないレディースアンドジェントルマンのために説明しよう。お鶴が履いている履物を現在の感覚で言うと、ローリースケートにモーターみたいな原動機が積んである代物だと思ってもらえばいい。別の言い方をすれば、三二四駆の上にスリッパをつけているようなものを想像して頂ければそれでいいかもしれない。ぎゅいーんと音を上げながらスピードを上げるお鶴に、ちあきは唇を伸ばした。

「うわあ、それ、ズルじゃん！ つうか、そんなもんどこで！？」

「え？ ズル？ なんのことでしょう？ わたしにはわかりませんー。ピーぴー（↑口笛）。それにちあきさん」

「ななな、何よ」

確信めいたお鶴の口ぶりに、柄にもなく仰け反り気味のちあき。

お鶴は答えた。

「これをどこで手に入れたか、なんて聞くだけヤボなんじゃないですか？」

「むむ！」

確かにそりやそうだ。

江戸広しといえども、こんなものを作れる人間は一人しかいない。そんなこと、ちあきがいちばん知っているはずだった。そして、それを真っ向から指摘されてみると、なにやら沸々と湧き上がるものがある。

うぬー！

どんどんちあきの中で高まる怒りのボルテージ。さっきからの走りっぱなしで少しカッカしているような気もするけど。

そして、遂にちあきの感情はマックスを迎えた。まるでイノシシのような猛進のさなか、ちあきは思いつきり叫んだ。

「あんの無粋者！ ろくでもないものばかり作ってからに！！あとで絶対にイワす！ ボッコボコにしてやるんだから！」

まあ実は、ちあきの怒りの矛先は“ろくでもないものを作っている”ことなんじゃなくて、むしろ別のところにあつたりするのだけれど、そこらへんのことは後々から分かってくると思います。

さて、そんなちあきの後ろで、長い黒髪を風に揺らしながら、お鶴はふふんと鼻を鳴らす。

【3】

「ちあきさーん、はしたないですよー。そんな顔を真っ赤にして。しかもイワすだのボツコボコにしてやる、なんて。おおコワ！くわばらくわばら、ってこういうときに使うんですね」

よりもよつて、ちあきの神経を逆なでしそうな言葉ばかりを選ぶお鶴。性格悪^{わる}う。

顔を真っ赤にして、しかも薄紅色の小袖の袖の端っこをガシツと握り込んだまま、猛烈な勢いで走るちあき。そして、そのすぐ後ろを滑るように走るお鶴。紫色の小袖の袖がまるで旗のように風に舞う。そして、お鶴の長くてきれいな黒髪も風に撫でられて宙を踊るけれど、そんな中、不意にお鶴は口を開いた。

「ちあきさん、ごめんなさい。今日はわたしの勝ちみたいです」

「は、ハア！？ 何言ってるのよ！ まだまだ勝負はこれからなんだからね！」

顔を真っ赤にした上、鼻息荒くしかも思いつ切り歯噛みをしながら走るちあきの言葉は、普段よりも少し歯切れが悪い。

そんなちあきをあざ笑うように、お鶴は宣言した。

「お先に、ちあきさん！」

そう言うや、辺りに奇妙な音がこだまする。

ギョルルルルルル！

現代人が聞いたなら、エンジンの回転数が上がったんだろうとかモーターが猛回転しているに違いないとアテ推量できそうな音だけど、江戸っ子であるちあきにはかつてはほとんど耳馴染みのない音だった。まだ、慣れないなあ。そう呟きながら、背中にトカゲを入れた時のような居心地悪さを感じる音に、ちあきはちよつと肩をすばめる。

と――！

ドバビュン！

一方。

「ふふふのふ」。これでちあきさんに勝った。もう勝って勝って勝ちまくっちゃいました。これ、ぶっちぎりってヤツですよ？　へん」

後ろに視線を向けることさえなく、お鶴は己の勝利を確信しきっていた。整った顔を、この子にしては珍しくフニャラーとゆるめながら、顔を赤く染めていた。そして、「でへへ……」だの「ふふふ」だのと若干気持ち悪い笑みを浮かべていた。どうでもいいけど、お鶴ちゃん、怖い……。猛スピードで走りながらデヘヘへと緩みっぱなしの顔を浮かべて笑う（めちゃくちゃ美人な）女の子。それ、都市伝説か何かである。

そんな都市伝説少女の頭上で、不意に「ひゅるるる」という、明らかに何かが落ちてくるオノマトペが響く。うむう？　さすがに勝利を確信しきっているお鶴といえども、なんとなくイヤな予感に苛まれて、思わず空に視線を向けた。

瞬間、お鶴の目の前に何かが落ちてきた。とっさのことだったのだ、ついその落ちてきたものをさっと両手でキャッチしてしまった。なにかしらん。これ。

お鶴は手の中にあるモノを観察する。

大きさ三寸ほどの球。真っ黒と表現した方がしっくりきそうだ。最初その色と“空から落ちてきた”というシチュエーションとが相まって、ものすごく汚いアンチクショウ（具体的には、鳥の……おっと、ここから先は賢明なる読者様のご想像にお任せいたします！　下ネタ反対！）を想像したお鶴だったけれど、けれどそれとは明らかにモノが違うようだった。

何、これ？

お鶴が首をかしげた、その瞬間だった。

バン！

「きゃ！」

不意に、その球が爆発した。けれど、その爆発そのものは大した

ことはなかった。かんしゃく玉なんかよりはるかに弱い爆発だった。けれどむしろ気になったのは、球から出てくるナゾの煙だった。しゅーしゅーと音を立ててどんどん煙が巻き起こる。気味が悪くなつて投げ捨ててもなお、その球からは煙が出続ける。

そして、やがてあたりに黄色い霧が広がる。周りの景色が、黄色に塗りたくられてゆく。

「な、なんですか、これ……」

思わず、お鶴はそう呟いた。

その瞬間、お鶴の身に、変化が起こり始めた。

「ふわーあ」

あくび。お鶴らしい、ちょっと控えめなあくび。けれど、次第にその数が増えてゆく。上まぶたがまるで鉛にでもなってしまったかのように異様に重い。そして、頭がぼーっとしてくる。なんだか考えていることすべてがフンワカフンワカとし出している。

気づけば、足元の車輪もどんどんその回転数を減らしている。よって、どんどんお鶴の走る速度も遅くなっていった。

うにゅにゅー？ どう〜なっ〜ているの〜かしら〜？

どんどんモノローグまでホンワカし始めている。

そんなお鶴でも、自分の身にのしかかっている感覚の正体に思いが至る。

ああ、私、眠いんだ……。

薄れゆく意識の中で、お鶴は心の中で呟く。

ちようど、その瞬間だった。

ひよっとこのお面のようなものを顔にかぶせて自分を追い越して行く影が、不意にお鶴の目に入った。顔は例のお面のようなもののせいで見えないけれど、薄紅色の小袖。間違いない。ちあきだった。

そうしてお鶴を追い抜いたちあきはへっへっへ、と意地悪く笑う。

「どーよ、お鶴ちゃん（コフィー）！ この黄色い粉を吸うと（コフ

ー）急激に眠くなるんですって（コフィー）！ まあせいぜい（コフ

ー）道端で朝寝を楽しんでね（コフィー）」

……え？ 「コフーコフーうるさい」って？ 「そもそも、この音はなんだ」って？

ええと、これはですね。

ちあきのかぶっている“防毒お面”が、ちあきの吸気および排気をこし取っている音である。まあお分かりのことだと思っけれど、“防毒お面”、現代風にいえば“防毒マスク”のことである。ほら、防毒マスクって口のアタリが出っ張ってて、ひょっとこみたいじゃないですか。お鶴が防毒お面を指して“ひょっとこのような”と思っただのはそういうことです。

ともかく、コフーコフーうるさいヒロイン・ちあきは江戸の街をひた走る。もう秋も深いというのに、どこまでも暑苦しい奴である。そのあまりに鬼気迫る様に、往來を急ぐ江戸っ子たちでさえちあきのゆく手を遮ったりはしなかった。

まるで海を割ったモーセのように、人混みが二つに割かれてゆく。そして、その真中をドバビュン！ と駆け抜けてゆくちあき。

そうやって江戸に軽い奇跡を起こしながらひた走るちあきは満面の笑みを浮かべていた。

勝った。勝って勝って勝ちまくった。爆勝。ついにお鶴ちゃんを完膚なきまでにぶっちぎってやったわ！ へへん、江戸っ子を舐めてもらっちゃ困るのよね！

心の中でそう勝ち名乗りを上げながら、ちあきはちらと後ろを眺めた。

と！

後方二町（二百メートルくらいだよ）で、もうもうと土煙が立っている。黄色い霧に交じって、土色の土煙が立っている。そして、二町後ろで響くは江戸っ子たちの悲鳴。

ま、まさかね……。

【4】

さすがのちあきといえど、嫌な予感ほぬぐい切れない。足をゆるめることなく、さりげなく後ろにも意識を傾け続ける。

そんなちあきの耳に、聞きたくもなかったあの音が迫り来る。

ギョルオオオオオ！

その音はどんどん大きくなってゆく。さっきと同等、いや、それ以上の轟音。金属同士がこすれ合うような音。そしてちあきにとつては“トカゲを背中の中に入れられた時のような怖気を感じる”音。そして、その轟音とともに届くのは、轟音にも負けない金切り声だった。

「ちゝあゝきゝさゝん！ 戦うなら、せめて正々堂々戦いましょうよ！」

もちろん、後ろから猛追^{もうつい}してきたのはお鶴である。どうでもいいけど、金切り声を出している時でさえ、お鶴の可憐な印象は全く崩れない。こういうのを真正の美人というのでしょあ。

それはさておき。

かぼんと防毒お面を外して懷にしまつてから、ちあきは応じた。

「へへん！ そもそもお鶴ちゃんが悪いんでしょ！ そんなイカサマみたいなものを履いて！ お鶴ちゃんが卑怯な手を使うから、あたしだつて使わせてもらつたのよ！」

「フン！ 私はどつかの誰かさんとは違つて遠くまで走るなんて野蛮なことはしないんですー！ そもそも走つたりしないんですー！

ああ野蛮人がうらやましいですうー！」

「なにおうー！」

「ふふん！」

……つていうか、全力疾走でこんな会話を繰り広げるあたり、ちあき、相当な肺活量である。こんな化け物じみた肺活量を相手にしているからには、お鶴の持つハンディは正当なものとして認められ

るだろう。っていうか、認めてあげないとちょっと可哀そうではありますね。

さて、そんな言いあいも、お鶴の一言によって打ち切られた。

「ところでちあきさん、もう、先に行っちゃいますよ!」

そう言うが早いか、お鶴の履いている履物の車輪がさらにその回転数を上げた。そうしてお鶴はいともたやすくちあきのことを抜き去ってしまった。

「ああ! ちょっと待ったア!」

ちあきの“待った”に対して、くるりと振り返ったお鶴は小悪魔的なスマイルで応じた。

「待ちません」

にべもない。

そう言い終わるやお鶴はくるっと行く手に向いた。そんなお鶴に応えるかのように、履物の車輪もぐぐんとその回転数を上げた。土煙をもうもうと立てながら、お鶴はどんどんそのスピードを上げていった。もう、人間が走って追いつけるような速度ではなかった。

それでもちあきはあきらめない。

「ぬおおおおお!」

もうこの娘がヒロインでいいのかしら、ってほどに野性味あふれた声を上げながら、ちあきは猛烈に足を踏み出す。けれど、無情にもどんどんお鶴との距離は引き離されてゆく。そもそもが、お鶴が人間の追いつけるような速度で走っていないのだ。当たり前なのだ。けれど、それがわかりつつも、ちあきは走った。猛烈に。

なんで、って?

負けるのが癪しやくからだ。ちあきってば、そういう娘なんです。

けれど、あきらめなければいつか芽が出るのが人生ってものの面白さというわけで。

やがて、はるか前に走っていたはずのお鶴の背中が、どんどん大きくなってきた。ちあきの走る速さは変わっていない。変わっているのはお鶴の方だ。

さつきまではグルングルン音を立てて走っていたはずのお鶴が、明らかにその速度を落としている。
いや、むしろ。

殆ど止まっている状態だった。

距離が詰まるに従って、どんどん前にいるお鶴の様子が見えてくる。そして、お鶴がどうして急失速したのかも見えてくる。

見ると、お鶴の足元から黒い煙がもうもと立っていた。お鶴はと言えば、あわあわとふためきながら「なんでこうなっちゃうんですか!？」と半ベソをかいている。どうやら、あの履物から煙が出ているようだ。

ふふん!

ちあきは鼻を鳴らす。

いつもは失敗作ばかり作る無粋者だけど、今日ばかりは感謝しないとね!

そう。お鶴の使っていた履物は、現代風に言えばオーバーヒートを起こしてエンストしてしまったのである! そりゃそうだ。あれだけ悲鳴を上げて走らせれば、こうなるのは現代人の目からは一目瞭然だけど、お鶴にそんなことが分かるはずもない。

今が勝機!

キュピーンと目を光らせて、ちあきはお鶴の背中を追う。ようやく後ろに迫りくるちあきに気づいたお鶴もまた、オタオタするのをやめて走り始めた。黒い煙を上げながら走るお鶴は、まるで力チカチ山のタヌキさんのようだった。けれど、そうやって走るお鶴はそれほど速くは走っていない。おそらく、からくりを仕込んだ履物が重いのだろう。

やがて、ちあきはお鶴と並んだ。あ、とでも言いたげなお鶴に、ちあきは思い切りのいい笑顔を向ける。そして、可愛い鼻のかしらをピンと右指ではじく。

「へっへっへ、純粋な追いかけっこなら負けないもんね!」
むむう、とお鶴は唸る。

「なめないでください！ 野蛮だからしないで、私だって結構走れるんですからね！」

意外に粘るお鶴。ほぼ本気で走っているちあきになんとか食らいついている。ようやく顔を真つ赤にしたお鶴は、そのきれいな顔をちあきに向けていた。

「それに、一か月もこうして毎日追いかけてをすれば、嫌でも体力がつきますもの！」

そう。二人はかれこれ一か月、こうして毎朝猛レースを繰り広げている。

そんな“ライバル”お鶴に、ちあきはニヤリ顔でもって向く。

「そうよね！ でも、負けないんだから！」

「それは私のセリフです！」

心なしか、お鶴もニヤリと嬉しそうに笑う。

「やるつての？」

「もちろん！」

この後、ちあきとお鶴は約四半時（三十分くらいだよ）の間中、まるで喧嘩独楽ケンカゴマのようにして肩をぶつけあいながら（ついでに言えば立ちはだかる邪魔な江戸っ子たちをどんがらがっしょんと跳ね飛ばして）、江戸の街を駆け続けたのだった。

なんのために？

さあ、そこら辺はそのうちおいおいにわかってくると思います。

けれど、ここいらでちよいと別の説明をしとかなくてはなりませんまい。

（いい加減に読者の皆様もお気づきのことだとは思いますが、ちあきとお鶴がデッドヒートを繰り広げているこの時代は、断じて現代ではない。

え？ 「じゃあこの時代はいつなんだ」って？

ちあきたちがこうして駆けているこの時代、この時代は中学校なんかの歴史の教科書では「江戸時代後期」とでもカテゴライズされている時代である。もっと詳しい歴史の資料集なんかには、「化政

時代」という言葉でくくられている場合もある。

江戸時代の二大カタブツさんである松平定信公と水野忠邦公の老中就任期間のちょうど真ん中に、さながらエアポケットのように存在するこの時代、よく言えばバブリー、悪く言えば向こう見ずな時代だった。特に風紀をとにかく言うような委員長キャラの老中様もいない上、將軍様も割といい加減。武士なんてほとんど太平の上に胡坐をかいていた。上がそんなだから下々の者たちなんかはもう毎日が浮かれ三昧の遊び三昧！ 多色刷りの浮世絵である“錦絵”の開発に伴って一大浮世絵ブームが起こったり、浮世絵の題材にされた東海道への旅行が流行ったり、歌舞伎役者たちがアイドルのうにきやいのきやいのと黄色い悲鳴を浴びていたり、とまあ、どこか現代とも一脈通じたモノのある時代、それがこの「化政時代」だ。ちなみに、ちょうど今この頃は化政時代のスタートのあたりなので、まだまだ爛熟期（せんじゅく）と比べれば元氣は足りないけれど、皆が上に上に向かって伸び始めている感じを肌で感じ取っていた頃である。

え？ 「まるでイメージできない」って？

大丈夫！

我々が想像する「江戸時代」のイメージのほとんどは、この「化政時代」のものだからだ。

と、いうわけで、時代劇の光景を思い浮かべていただければほとんど当たる。

……え？ 「なんで江戸時代なのに、明らかに江戸時代には存在しないようなものが出て来てるんだ？」って？ ああ、お鶴ちゃんの履物とかちあきの持っていた爆弾じみたものとかですね。

あれは……。

おっとと。

つい口が滑りそうでやんした。

先に結論を言ってしまうてもいいのだけれど、それじゃあ読む方の興を殺してしまうわけで。そして、いかに読者の興を殺そがぬかが語り手の腕の見せ所ってやつでござんして。とまあ、商売人の本音

が出てしまいやしたが、その種明かしもおいおい。ってか、すぐ後に。

【5】

。どどどどど。

まるで地鳴りのような音が、江戸の端つこにある“文人長屋”に聞こえてくる。なぜか、部屋の隅にちょこんと置いてある長持がカタカタと揺れる。地震かしらん、と思いつつふと手にあるお茶を見るけれど、その水面に乱れが全くない。

うむ？　ずずずと熱いお茶をすすりながら、長介は南向きの障子を見やった。障子からは秋特有のやわらかい日の光がほんわかと透けてくる。殆ど真つ白くなっている髪を撫でながら、長介は歌でも歌うように呟く。

「おやおや、ずいぶんとうるさいことですねえ、このあたりも」
間延びした声で頭を振った長介はまた茶をすする。そのお茶で口の中を洗い流したかのように少し明るい顔を浮かべて、またぼつりと長介は口を開く。

「“文人長屋”がうるさいなんて、困ったものですねえ。ねえ、変迅堂さん？」

長介は不意にさし向いに座る青年に声をかける。

その、変迅堂と呼ばれた青年は丸くて重そうなメガネをくいつと上げてから小首を傾げた。

「はは、そうですね？　私がここにお世話になった頃には、毎日こんな感じでうるさかったですけど？」

その言葉に長介はふふ、と笑う。

「ああ、昔はもっと静かだったんですよ。大通りからは遠いですがらなあ。そもそも、そういうところを選んでこの長屋を建てたんですから当然でしょう。それにこの長屋には子供がいまありませんからねえ。他の長屋と比べると、本来ならばかなり静かなはずなんですけどね」
胸を張る長介。年の嵩にかさびつたりの紫色をした頭巾をかぶって、

ふふんとふんぞり返る様はなんだか少し可笑しかった。思わず変迅堂、ぷぷつと笑みをこぼす。

「おやおや、ワシは何も面白いことは言っていないぞい」

「いえ、何でもありません。あくまで思い出し笑いです」

「ほっほっほ、若い人らしくていいですなあ。ここ数年、思い出し笑いなんかした覚えがありませんでな」

カラカラと笑ってニコニコ頬笑みながら、長介は部屋を見渡す。

こぎれいにされた部屋のそこかしこにある、見様によつては売れない前衛芸術の作品のような変なもの置かれている。その変なものたちに、長介は好奇心とも愛しみともつかない視線をひとしきり向けた。

さてさて、この老人・長介はこの長屋“文人長屋”の大家様である。

普通長屋の大家さんというと、長屋の隅っこにある一番豪華な部屋に住んであれやこれやと文句を垂れるのが常な役目なんだけれども、この長介という男には全く口やかましいところがない。というか、この長介、そもそもこの長屋に住んではない。日本橋界隈に居を構えて（現在の感覚だと、田園調布か渋谷・松濤、あるいはリバリ―ヒルズみたいな超がつく高級住宅街だと思っただければ殆ど当たる）、基本的には長屋の住人たちの行動については何も干渉してこない。

本来なら割と嫌われ者のくそじじいと後ろ指をさされがちな大家の中にあつて、長介は長屋の住人からステキなじい様と好印象を受けている。まあそれは、長介というじい様の、どこか憎めないキャラクター故のものなのだろうけれども。

「でも」変迅堂は声を上げた。「私は少しうるさいくらいの方が好きですけど」

「へえ、それはどうしてまた」

茶をすすりながら話を聞く態勢に入る長介に向かって、変迅堂は口を開いた。

「いや、私はもともとうるさいところに住んでましたもので。江戸によくあるような長屋、あんな環境で育ったもので、周りが静かすぎると落ち着かないんですよ。……って、貧乏性ですねえ、私も」

メガネの奥で屈託もなく微笑みながら、変迅堂は頭を掻いた。

ほっほっほ、と某ハサミ宇宙人のような笑い声を上げて、長介は口を開いた。

「で、変迅堂さん」

「はい？」

どこか間拔けた声を上げる変迅堂に少し顔をしかめた長介は、続けた。

「ところで、今日、どうしてワシがここに来たか分かりますかな？ 普段あなたたち店子一（大家様が長屋の住人を指す言葉だよ）に用があるときは、どうしておりましたかな？」

どどどど。地鳴りのような音がどんどん大きくなってきている。

けれど変迅堂は眉一つ動かさずに長介の言葉に応じた。

「ええ、そういう時は、長介さんの言伝ことづてを預かった丁稚てうぢみたいな人が来て、長介さんの家に呼び出されるんですよ？ まあ、私は経験したことないですけど」

うーむと天井を仰ぎながら、小首をかしげる変迅堂。

「ずず、と茶を短くすすって、長介は言った。」

「そう。家賃の滞納とか何かお上から怒られたとか、そんな些細な用事だったらワシだってあえてここに足を延ばす必要はありません。いて。こう言っちゃアレですけどね、長屋に大家がいたんじゃ“文人長屋”の意味がありませんでな。あなたがたみたいないな“文人”に静かな住まいを用意するのが“文人長屋”の肝心要ですからな。それを大家が破るんじゃ本末転倒、ってやつでしょう」

どうでもいいけど、この長介の発言、フツの大家さんに聞かせたら泡吹いて卒倒するだろうな、ってレベルの言葉だったりする。けれど、その長介の言葉にさして疑問の言葉を差し挟むことなく（長介さんの言葉のエキセントリックさ加減には慣れっこだからね）、

変迅堂は話を先に促した。すると思ひ出したようにして長介は続けた。

「そんな大家であるワシがあえて長屋に足を延ばすほどの用事、思いつかないかねえ」

「はい。さっぱり」

変迅堂、それはもう即答だったそう。そのあまりの即答っぷりに全世界に支部がある秘密組織“即答委員会”の江戸支部が恐慌をきたした、というウソだか実だかわからない話がある。

がつくん。

思いつきり肩を落とす長介。そしてその長介に好奇心いっぱい無垢な目を向ける変迅堂。

まるで景気づけのように熱いお茶をあおり飲んでそのお茶碗を板敷の上にどん！と置いた長介はさっきまでより少し早口に言葉を放つ。

「思いつかないんですか！」

「はい！ もうさっぱり！」

変迅堂、またもや即答だったそう。しかも今度は見ている方が嫌になるくらい潔く、しかもソークールに決めてきた。心なしか、変迅堂の口からこぼれ見える歯がきらりと光っていた。

このガキヤア。そんな涼しげな顔をしやがってからに。もしワシがあと十年若かったら、その無垢な笑みに拳骨をお見舞いしてやるというのに。好々爺・長介といえども変迅堂のさっぱりぶりに若干腹が立ち始めてきているのであった。

「まったく、仕方が無いですなあ、変迅堂さんは……。実は」

という長介の言葉を、変迅堂は不意に遮った。
どどどどど。

なんだか外の音がさらにうるさくなっている。心なしか甲高い悲鳴や野太い悲鳴が混ざっているような気がする。

そのせいもあってか、変迅堂は言葉を放たなかった。掌をちょこんと広げて見せることで長介を黙らせると、不意に立ち上がり、下

に敷いていた座布団を頭にひつかぶつてのろのろと部屋の隅で丸くなった。まるで雷を怖がる子供のような仕草だ。けれど、その割に部屋の隅に移動するまでの動きはものすごく落ち着いていてゆつくりとした動作だった。雷とか地震とか、そういう予測不能なものから身を守りたい風ではなかった。

「あの、変迅堂さん？（どどどどどど）したんですかな？ 雷どどどどどどませんよ」

外の音に遮られて、長介の疑問の言葉は細切れこま切れになってしまった。けれど、長介の言いたいことが分かったのだらう、部屋の隅で必死に頭を座布団で守る変迅堂は答えた。

「長介さん、悪いことは（どどどどどどどど）こういう態（どどどどどどどど）！ 怪（どどどどどどどど）から！」

外の、まるで工事現場を通りすぎた時のような音のせいで、ほとんど変迅堂の声が聞き取れない。結果、「むむむ？」と唸りながら首をかしげるしかなかった。

と、そうやって長介が首をかしげた、ちょうどその瞬間だった。

「せーんせい！」

「変迅堂さーん！」

乙女二人のこれでもかってくらいにキレイな声。と、ともに、入口の戸がバチンと外れ、長介めがけて飛んできた。ブオンと音をまきちらしながら戸が長介に覆いかぶさる。

「の、のわー！」

さすがに冷静な大家様といえど、戸が飛んでくるなんて状況、慣れているはずもない。長介らしからぬ間拔けた声を上げる。つていうか、長介、今自分の身に何が起こっているのか理解しきっていない。乙女二人の声が聞こえたと思いきや、次の瞬間には真っ白な障子が目の前にあつて、さらにその一瞬後にはそれに下敷きにされているのだから。

変迅堂、部屋の隅で頭を守りながら、ふと長介の方を見た。

「あーあー」

もちろん、大惨事だった。

入口の戸が長介に押し掛かっている。のみならず、その戸の上に、乙女二人がしっかりと乗っかっている。状況からみて、乙女二人が入口の戸を蹴破ったうえに勢い余ってその上に立ってしまっているのだらう。その戸の下から、「うーん、六文銭ろくもんぜにの持ち合わせがないんですが……、いや、家に帰ればたんまりとありますが……、え？ もう家に帰れない？」という長介のうめき声が聞こえる。地味に怖い。

どこからツツコめはいいのだらうとか思いつつ、とりあえず変迅堂は手をひよいと上げた。

【6】

「とりあえず、おはよう、ちあき殿。お鶴殿」

その言葉に、ちあきは二パツと笑顔で返し、お鶴は少し頬を赤くして頷いた。

長屋の中に、どこかほんわかとした空気が流れていた。けれどそれは、長介の犠牲の上に立った、はかないものだということに、この段階で誰も気づいてはいなかった。

○

「全く、戸を蹴破るとは。しかも大家の前で。全くお嬢さん、いけませんなあ」

晒（包帯みたいなものだよ）に巻きつけられながら、長介はため息交じりに呟く。その言葉に、晒を巻くのを手伝うちあきはちよろつと舌を出した。どうでもいいけど、実にかわええ。

「ごめんなさい！　けど、まさか家の中に長介さんがいるなんて思わなかったから」

「お嬢さん。だから、そもそも戸は蹴破るものじゃないんですよ。それに、今年で十五でしょう。早い人だったらそろそろ祝言しゅげんの話もあるような年齢なんですからね。もう少し色々と考えなくてはいけませんなあ」

アイタタ！　と声を上げた長介の顔を、ちあきは見つめる。

「ごめんなさい」

ちあきは不意にしゅんとしよげかえった（ように見えた）。けれど実際には……。

へへへエ……。祝言、祝言かア。いい響きだよねえ。あたしは白無垢ろくに角隠つのかくしてさあ。で、三三九度さんさんぐどをしてときどきちらつと相手に目配せ。それで目が合つて。で、相手の男の人は紋付袴。相手はもちろん……。キャー！　何、何よもう！　恥ずかしい恥ずかしいハズカシイ！　でも、でへへへへへ……。

何のことはない。長介の発した“祝言”という言葉に反応して、乙女なモーソーに浸っているのであった。だらしなく口をポカンと開けてよだれを垂らすちあき、とてもヒロインなんて（以下略）。そして、長介の前に座る変迅堂をちらちらと盗み見しては、またデヘヘへとだらしなく口を開ける。お前は金魚か。

「よろしい」

そんなちあきのモーソーなど知る由もない（のか痛いちあきをスルーしているのかは分からないけれど）長介はうむうむと頷いて、今度はお鶴に向いた。お鶴も甲斐甲斐しく、長介の腕に晒を巻いていた。

「おやおや、初めて見る顔ですね。年の頃もちあきさんと殆ど一緒ですなあ。ってことは、ちあきさんのお友達かな？」

あ。その声を上げたお鶴は晒を巻く手を止め、ちょこんと頭を下げた。黒髪がさらりと揺れる。

「初めまして。私、ひとすぎ仁杉家の娘・鶴と申します。よろしくお願いいたします」

少女らしくもない折り目正しい態度に、少し目を細めて長介も応じる。

「これはどうも。ワシはこの“文人長屋”の大家・長介と申します。以後よろしく。……ときに、変迅堂さん」

長介は前に座る変迅堂に声をかける。

はい？ 変迅堂が話を先に促すと、長介は変迅堂に少し寄ってから手を衝立にして、続ける。

「この娘さん、今、“仁杉家”とか言っていたが……、もしかして変迅堂は二コリとほほ笑む。

「はい。そのまさかです」

実は、このお鶴、変迅堂のお友達の妹さんなのだけけれど、そこらへんの詳しい事情はまたあとで。

そんな会話をぶった切ったのはちあきだった。

「ほら、お鶴ちゃん、手が止まってるよ！」

「あ、はい！」

さっきまでモーソーの世界に遊んでいた奴のセリフとも思えないけれど、ちあきのそんな言葉によってお鶴ははたと思い出したように晒をまた巻き始める。乙女二人によってどんどん埃及えじぶとの木乃伊みいらに近づいてゆく長介。

「はい、終わり！」

ぐるぐると何重巻きにもされた長介の背中を、何かの景気づけのようにしてポンと叩くちあき。そう、現代でも割と年嵩の女の子が、子供相手にやりますね。あれです。

けれど、それをされた長介は大人、しかもけが人なわけで……。

「い、痛い！」

悲鳴を上げる羽目になるのだった。

涙目になりながらちあきに頭を下げた長介は、今度は変迅堂に向いた。ちあきに聞こえないように、変迅堂に皺だらけの顔をずずいと寄せてから。

「変迅堂さん、いつもこうなんですか？」

「いつもこうです」

変迅堂は力強く頷く。

「つてことは」長介は続けた。「毎日ちあきさんは玄関の戸を蹴破つている、と？」

「いえ、正確にはちあき殿とお鶴殿です」

変迅堂の言うところはこうだ。

最近、ちあきとお鶴がほぼ同時にこの長屋にやってくる。二人ともなぜか汗びつしよりにして駆けこんでくる。最初のうちは割と静かにやってきていたのに、そのうちドタバタとうるさくなってきて最近では戸を蹴破つて部屋の中になだれ込んでくるようになった。まるで二人が追いかけてくことをしているかのよう……。

「で、なんで二人がそんなことをしてるのか、聞いたんですかな？」

「いや、一応聞いたんです」

いかに普段ほんわかとしている変迅堂も、さすがに毎日戸を蹴破

られたんじゃたまったものではない。なのでそれとなく二人にその話を振ってみた。「毎日毎日戸を蹴破られると、私が長介さんに怒られちゃうんですけど」と。すると変迅堂の長屋の中でガラガラと過ごしている二人はぐぐいつと顔を変迅堂に向けて、満面の笑みを浮かべた。

『先生（変迅堂さん）が怒られて済む話なら、それでいいじゃない（ですか）！』

ああなるほど。ぼんと手を打って、結局そのままにしまったのだという。

「はあーーーーー」

長介から、すごいため息が出た。頭を抱えて振ってみる。けれど、長介に降りかかる頭痛にも似た感覚は振り払えそうにもない。

それは決して戸が蹴破られていることに対してのものではない。変迅堂のあまりのほんわかぶりに、である。その場面で「ああなるほど」はないだろう。“今年二十二歳になる大の大人が、そんなアホウでは困るのだけどねえ……”という長介の心の内の言葉も、変迅堂の屈託のない笑顔によってファインセーブされている。結果、長介は腹のうちに煮え切らない怒りを溜める羽目になった。

けれど、ナントカ言葉を継ぐ。

「で、理由は聞いたんですか、二人がそうやってなだれ込んでくる」「それも聞いたんですよ、けれど……」

もちろん、変迅堂だって普通の人間である。なので、疑問が当然湧く。毎日毎日息急き駆けてくる乙女たちの意図を知りたいのは別にやましいものではあるまい。なので、変迅堂、今度は直截に切り出してみた。「あのう、どうして二人、そんなに毎日めちゃくちな勢いでこちらに来るんですか？」と。すると、長屋の中ででんでバラバラなことをしている乙女二人は、くわつと変迅堂に向いた。そして、声をそろえてこう言ったのだという。

『話してもいい（です）けど、聞いたら。すよ（しますよ）』

ヒイヒイヒイ！ 乙女二人のマジメンチにマジで変迅堂は戦慄

した。南蛮の神の供物である哀れな子羊もかくやのフルフルという細かい震えに襲われた変迅堂、これ以上の深入りは出来ないと思を投げたのだという。

「いやあ、分からないんですね。どうしてあの二人、あんなに一生懸命にここに走ってくるんでしょうねえ」

まるで他人事のように呟く変迅堂の前で、さっきよりも一段と深いため息をついたのは長介だった。そして、チツと舌打ちをして、ぼそつと呟いた。

「……この、無粋者^{ぶすいもの}が」

「は、何か言いましたか？ それに今、舌打ちが聞こえたような気が」

「いえいえ何でも」

手をぶるんぶるんと振って長介はごまかした。

さて、ここいらでもうお分かりかと思うんですが、一応読者様のためにご説明させて頂きましょう。

朝一番、ちあきとお鶴が江戸っ子たちを跳ね飛ばしながらデッドヒートを繰り広げているその理由。

種明かししてしまえば、ちあきもお鶴も、この長屋の住人である、変迅堂にホの字（死語）なのだ！

つまるところ、お鶴とちあきが毎日毎日喧嘩ゴマめいたデッドヒートを繰り広げているのは、惚れた男の家に一歩でも早く足を踏み入れたいっていう乙女のエゴのなせる業なのである！ 二人とも純粹かつまだまだお子ちゃまなので傍から見ればバレバレな感情表現なのに、なんと当の変迅堂は二人の気持ちにさっぱり気づいていないのである。元々抜けたところがある上、きつと恋愛めいたものに対してあまり興味を抱いていないのだろう。おそらく彼が現代に生を受けていたなら、今流行りの草食系男子としてカテゴライズされていることであろう。まあ、どちらにせよ、「野暮な野郎^{やぼやロー}だ」という言葉に尽きるんだけど。

「ところでさー」

不意に、変迅堂と長介の会話に割り込む者があつた。江戸の職人ナマリ（いわゆるべらんめえ口調）のちあきだ。ちあきはきつと変迅堂に向いて唇を伸ばす。

「先生のくれたあの“眠り玉”！ あれ効果が薄いみたいなんだけど！」

その言葉にかぶせるようにして、お鶴も口を開く。

「変迅堂さんからもらつた“快足ゲタ”、煙を噴いちゃいました……」

うへ？ 変迅堂は二人の顔を見比べてから、うむむむと唸る。

「うーむ、“眠り玉”は失敗か……。着眼はいいと思つたんだけどなあ。改良しなくっちゃ。あ、あとお鶴殿、“快足ゲタ”、見せてね」

【7】

すくと立ち上がるや、お鶴の言葉を聞くよりはるか前にお鶴の履いてきたゲタを拾い上げ、部屋の隅におかれていた巾着からあれやこれやを取りだした。やつとこのようなものから今でいうドライバーのようなものを左手に持ちながら、がちゃがちゃと履物をいじり始めた。

実は、“眠り玉”や“快足ゲタ”を作ったのは変迅堂なのである。え？「変迅堂って何者？」って？

ふふふ、そのご質問を待っておりました。

変迅堂は発明家なんです。江戸時代後期にあつて、独学で西洋並かそれ以上の発明に手を染めている男、それが変迅堂なのである。けれど、発明家という商売者は今も昔も山師^{やまし}めいたところがあるのは周知の通り。俗に百万都市と言われる江戸の中でも、相当な変わり者として扱われている。まあ事実ちよつと変わり者なところもあるので、本人も周りもあまり世間の冷たい視線を気にしてはいないけれども。

「ふむふむふむ。なるほどねえ……、これは……。あの、お鶴殿？」

「はい？」

「これでどこを走ったんですか？」

「え？ フツ一の江戸の往来を……」

「いや、そんなはずは……。実はこの“快足ゲタ”、機能検査をしてまして。砂浜で一日中走らせたり、重りを沢山つけて一昼夜連続で走らせたり。江戸の往来を走っていたくらいじゃ問題ないはずなんだけどなあ」

現代で言うところの“負荷検査”というやつである。車なんかの検査で行なうもので、普通に使う以上に厳しい環境下・条件下で運用してその摩耗^{まもう}を見る検査である。

そんな検査をパスした機器だから、まさか普通の道を走ったくらいでは壊れないだろうというのが変迅堂の言葉なのだ。けれど、変迅堂は知らない。確かにお鶴は普通の道を走っていたけれど、その走らせ方がめちゃくちゃなものだったという事実を。

「治りませんか？ この子のこと、なんとか治してあげたいんです」
物憂げな顔を變迅堂に向けながら、お鶴は變迅堂に聞く。なお、ちあきはこの時チツチツチ、と秒を刻む時計のようにして舌打ちをしていたのだけれど、あえて見なかったふりをしてあげてください。「あ、うん、分かった。直しておくから。けど、ちょっと時間がかつちやうかもだけど」

變迅堂がそう力強く答えた瞬間、お鶴は變迅堂に飛びついた。長介の横に座っていたお鶴、ひょいっと變迅堂の横に移って、變迅堂の腕を取って可愛らしく振り回す。

「やったあ、ありがとうございます！ 變迅堂さん、だ〜い好き！」
うむむ！？

もちろん、面白くないのがちあきだ。

なにが“やったあ”だよあのアマア……。しかもあのゲタを指して“あの子”？ さっきまでそのゲタを酷使してたのはどこのドイッだコンチクショウ。先生の前でだけブリっこぶりやがってえ……。しかも先生の腕持つてはしゃぐなんて……。

めちゃくちゃうらやましいんですけど！

なんだか負の感情（具体的には恨み、妬み、嫉み）に心を奪われていないこともないちあき、お鶴と同じように變迅堂の横にちょこんと移り、お鶴と同じように變迅堂の腕を持って振り回した。

「先生（ぐり）！ お鶴ちゃんのなんとかっていう（めき）ゲタよりも前にさ（パキ）、いまいち効果のない眠り玉を（ビチ）改良してよー（めきやめきや）！」

その言葉に、變迅堂が反応することはなかった。

代わりに長介が口を開く。晒でぐるぐる巻きになっている手をちあきに向けて開く。

「ちょ、ちあきさん！ その手を止めなさい！ 今すぐ！」

「うへ？ その手って？」

「変迅堂さんの腕をブンブン振り回してるその手ですよ！」

ふと、ちあきは力の限り振り回している変迅堂の腕をぴたりと止めた。そして、腕から肩、そして頭の方まで視線を這わす。

そして、ちあきは気づいた。

青い顔をしながらまるで蟹のように口から泡をぶくぶくと吐く、変迅堂の変わり果てた姿を。

「せせせ、先生！ どうしたの、何があつたの？ 誰にやられたの？ お鶴ちゃんにでも毒盛られたの？」

さりげなくお鶴へのネガティブキャンペーンを繰り広げるちあき。ち、小さい。

そんなわけないじゃないですか、と冷たく言い放つたお鶴はびしっとちあきに指を差した。

「ずばり。ちあきさんが下手人です」

「へ！？ 何言ってるのよお鶴ちゃん。恨み妬み嫉みは良くないよ！」

それはお前だろう、ってツツコミはなしでお願いいたします。

ちあきの言葉に応えたのは、この場で一番中立な立場である長介だった。

「いや、ちあきさん、あなたの仕業ですよ」

「へ、どうしてあたしが！？」

「決まっているでしょう」

読者の皆様もお分かりでしょう。

変迅堂の腕を取ったちあき。そのあとぶんぶんと手を振り回しまくった。お鶴のように可愛らしくではなく、力の限り。そこがミソである。つまるところ、ちあきが力いっぱいに変迅堂の手を振り回しまくったせいで、変迅堂の肩にサブミッションが極まった格好になっってしまったのだった。

その説明を長介から受けたちあき、しょんぼりと肩を落とす。

「あ、あたしのせいだったのか」

そんなちあきに、お鶴が追い打ちをかける。

「本当、ちあきさんはアレですよー。ガサツっていうかなんていうか」

「何よ、やるつての？」

「お望みなら？」

変迅堂を挟んでメンチを切り合う二人を見かねて、長介が間に割り込んだ。

「ちよつと！ 喧嘩は後にしなさい！ 変迅堂さんが泡を吹いているじゃないですか！」

うむ？

お互いの目を覗きこんでいたちあきとお鶴、恐る恐る変迅堂の顔を覗き込む。

やっぱり、状況は好転していなかった。

蟹のようにぶくぶくと泡を吐く変迅堂。「え？ 六文銭？ そんなものありはしませんよ。へ？ ないと運べない？ 泳いで渡るくらいですよ。え？ これまで泳いで渡り切った人がいない？」と、泡を吐きながらもぶつぶつと呟いている。

やや、やべえ。彼岸を見てるじゃん。

「きやー！ 先生先生先生先生先生！！」

バチバチバチン！

しばらくお待ちください……

「いやあ、死んだばあちゃんに会っちゃいましたよ。世の中不思議なこともあるもんですねえ。」

HAHAHAHAHAと朗らかに笑いながら、変迅堂は頭を掻いた。何が不思議なのよ、それ、あの世に行きかけてただけじゃないのよ、と心の中で苦々しく吐き捨てたちあきだったけれど、変迅堂を彼岸すれすれまで誘ったのは他ならぬちあきだったので、黙っているしかなかった。

「ところで」

変迅堂は首のまわりを手でさすりながら辺りを見渡す。

「っていつか、めちゃくちゃ首が痛いんですけど……。それに、なぜか頬が熱を持っているような気が……」

その変迅堂の発言に、あからさまに反応したのはまたもやちあきである。びくつと身を躍らせて、変迅堂から視線をそらす。変迅堂もさすがにちあきの変化に気づいて、ちあきの視線を追った。

「ち、ちあき殿、どしたの？」

うむむむ。どうごまかしたらいいものか。しばらくちあきは頭の中のソロバンを弾きまくり、なんとかごまかす手段を探す。けれど。「い、いや！ たぶん気のせいだよ！ うん！」

結局、力技でごまかすしかなかった。

「う、うん、ならいいけどね……」

うむむと唸りながら、変迅堂も引き下がるしかなかった。

けれど、実は変迅堂、すごいことになっている。

頬に大きな紅葉があらわれている。しかも左頬だけではない。右頬でもある。

実はさつき、気絶している（っていつか彼岸すれすれを漂う）変迅堂を気付ける意味で、ちあきが変迅堂にビンタをくれたのだ。けれど、相当に泡を食っていたのか、普段よりはるかに強い力で変迅堂の頬をはたいてしまったのだ。しかも往復何連打も。結果として、往復ビンタによって首を寝違え頬に紅葉が浮かんでいるという凄惨たる状態、といった次第なのである。

まあ、読者の皆様もいい加減お気づきのことだろうけれど、ちあきっていつのはこういう子なんです。ホラ、昔よくいたでしょ？ 「好きな子を苛めるのが好きな子」って。ああいうものだと思ってもらえば。ただ、ちあきはこの通りひどく素手ゴロ（素手の喧嘩のことだよ）が強いので、結果としてただのじゃれあいが命にかかわる。惚れられたほうはたまったものじゃないんだけれども。

まあともかく、両頬にちあきの手形をつけたままで、変迅堂は咳く。

「……あれ？　そういえば、何かを忘れているような気がするんですけど……」

「何か、ですか？」お鶴はちよつといじわるっぽく口をゆがめる。

「どっかの暴れ馬のせいで、大事な記憶が飛んじやったんですね。変迅堂さん、とんだ災難ですね……」

【8】

「なにおう！ 誰が暴れ馬だ！ この黒髪オバケ！」

バチバチと火花を散らしまくるお鶴とちあきの視線をよけながら、変迅堂は続けた。

「何か、聞かないといけないことがあったような気が……、あ」

変迅堂はポンと手を叩いた。そして、長介に向いた。

「あの、長介さん！ そうだ、お話の続きですよ！」

「うへえ？」

まさか自分に話が振られるとは思っていなかったのだろう、長介は目をぱちくりとさせて変迅堂を見つめていた。ふとした拍子にちよつと頭巾がずれた。その頭巾を面倒くさそうに直してから、長介は変迅堂に聞く。

「へ？ さっきまでの話？ 何を話してましたかな」

視界の隅では、ちあきとお鶴が取っ組み合いのケン力寸前までいつている。お互いがお互いの頬をつねりながら、「やゝいお鶴ちゃんのブサイクー！」「ふふん、ちあきさんなんか、今の方がよっぽどまともですよー！」「なにおうこの黒髪オバケ！」「さっきから聞きたかったんですけど、“黒髪オバケ”ってなんですかー！」「髪の毛を顔の前に垂らしてるオバケよ！ ホント、お鶴ちゃんの髪の毛って“黒髪オバケ”によく似てる！」「けっこうこの髪の毛、手入れに時間かかるんですよ！ もうあつたま来た！」と、遠慮のない言葉を浴びせまくっている。そんな二人の織りなす修羅場をスルーしつつ、変迅堂と長介は会話を続ける。

「ほら、さっき話してたじゃないですか」変迅堂は言う。「なんで大家さんである長介さんがここに来たのか、っていう話です」

すると、不意に長介は立ち上がった。

「ああ、そうだったあ！」

とてもじい様とは思えない大声。前に座っていた変迅堂も、取っ

組み合いのけんかになっていたあきとお鶴もぴたりと動きを止めて長介に向いた。

全員の視線が集まる中で、長介は不意に変迅堂を指した。

「説明はとりあえず後です！ 変迅堂さん、手伝ってくださいな！

あとお嬢さん方！ あなたたちにも手伝ってもらいますよ！」

「ええ！？」

三人のそろった声を、長介ははたき落とす。

「ええ！？」 じゃない！ あと数刻の間、ワシへの返事は“はい”です！」

あまりの剣幕に、変迅堂たち、頷くしかなかった。

「じゃあ！ 変迅堂さんはワシと一緒に力仕事！ お嬢さん方はホウキとハタキを持ってきて、部屋の掃除をしてください！ 分かりましたか！」

「は、はい！」

もう“イエッサー！”とでも言いだしそうな三人であつた。それほどに、長介の命令が堂に入っていたのだけれども。あなたはどこのグリーンベレーだと突っ込みたくなるような野太い声で、長介は命令を下す。

「では各自、持ち場に散りなさい！」

「イエッサー！」

……どうでもいいけど、この時代は江戸時代である。なんで、三人がイエッサーなんて言うはずないので、そこらへんは差っ引いてお読みくださいませ。

「なんで、あたしたちがこんな目に……」

「納得いきません……」

ブー垂れながらもちりとりとほうきで長屋を掃除する乙女二人。

そして、

「ちよつと長介さん！ この箆、めちゃくちゃ重いじゃないですか！ 何が入ってるんですか！ 腰が抜けちゃいそうですよ！」

「あ、ワシもちよつと腰が！ あ、今ポキって聞こえた、聞こえま

したよ変迅堂さん。というわけで、後はひとりでもよろしく！」
という男二人の会話が文人長屋のそこかしこに広がっていった。
うーん。なんて平和、何たる平和。

一方その頃……。

「ハアハアハアハア」

往来の真中で大の字に倒れながら、絶え絶えな息をついている青年が一人。手に身長ほどの長さのある棒の先に鉤のような金具がついた道具・鳶口とびくちを持って、袖口に「お」と染め抜かれた半纏はんとんを纏まとっている。ちなみに今は仰向けになっているから見えないけれど、背中にも大きく丸に「お」と染め抜かれている。そう、どう見てもこの青年、江戸を火事から守るいなせな男の代名詞、町火消しなのだ。ではなぜこの町火消しの青年が息も絶え絶えなのかというところ……それは、さっきのちあきたたちのチキチキ猛レースのせいなのである。

お気づきだろうか。実はさっきちあきたたち、この火消しの青年を弾き飛ばしている。あまりに扱いが小さいので誰も気づいてないかもだけれども。ちなみに、（これは書かれていないけれども）跳ね飛ばされたあとのその青年、空中でフィギュアスケート選手もかくやのきりもみ六回転を見せたあと着地に失敗し、ドンガシャーと地面に激突したのだった。まあ、そうやって跳ね飛ばされている瞬間の意識も同じくふつとばされているので、この火消しがそれを知る由はない。

ぐふ、と明らかに死亡フラグの立っている呻きを上げながら、その火消しは呟く。

「っていうか、なんだよアレ。イノシシか？ まあ何にせよ、俺、死ぬかもしれない。ああ、短い人生だった……」

江戸っ子特有の気の早さを悪い意味で体現しているその火消し、思わず自分の短い人生を振り返る。

結構楽しい人生だったなあ……。まるで8mmテープを早回しに

したような光景が、その火消しの前に広がる。そして、思い浮かべるどの景色の中にも、ある女の子が佇んでいた。ある時は泣きつ面をして自分の肩をポカス力叩いてくる。またあるときは満面の笑みを浮かべながら自分の頬にグーをかましてきた。またあるときはふんとお澄まししながらドロップキックをかましてくる……。

おや？ その少女って？

何やら思い浮かぶものがあつたのは読者様だけではなかったよう。その火消しも、上体をがばつと起こして、しばし首をかしげる。そして、何度考えても自分の頭の中にいる少女と、今さっき自分を跳ね飛ばしていった奴の顔が重なることに気付いたのだった。

「あれ、どう見てもちあつちゃんだったよな？ 隣を走っていたのはお鶴ちゃんか。で、二人が走って行った方向は……。あ！ 変の字の長屋の方じゃねえか！」

はい、この火消しさん、実はちあきたちと顔見知りなんです。世間が狭いのは今も昔も変わらないんです。

この町火消し、名前を勝次^{かつじ}という。建設業界の職人さんである鳶職の息子として生まれた彼、親と喧嘩して十代の半ばには親から巣立ち、今では町火消し「お組」の一員として広い江戸を処狭しと走り回る生活をしている。そんな、肩で風を切る商売者にもかかわらず、どうにも勝次、青さが抜け切らない。それは、仲間内や馴染みから“カツちゃん”とどこか子供っぽい呼ばれ方をしているところからも分かる。

ちあきとは同じ長屋に住んでいたので、腐れ縁の幼馴染に当たるんだけど、当のカツちゃんとしては、そんな幼馴染なんてカンケー、くそつたれの豚のケツである。

よく言われることだけれど、幼馴染っていう枠はものすごく安定していて、堅固な関係だ。けれど、その枠が堅固すぎるゆえに距離感を変えたいと思っても変えづらいのが幼馴染という関係だったりする。

つまるところ、カツちゃん、ちあきとの幼馴染としての距離感を

変えたいのである！

え？「どういう風に変えたいんだ」って？それはおいおい。さておき、カツちゃんはひょいっと立ち上がり、ちあきたちが走って行った方にきりりと向いた。

「ちつくしょう変の字！ちあつちゃんをたぶらかしやがつて！今日という今日は許さねえからな！」

固く拳骨を作り、空に向かって強く突き出した瞬間、アホーアホーとカラスが鳴いた。カツちゃんがマジメンチを極めると、軒先に止まっていたカラスは怖気でも感じたかのようにびくつと仰け反ってそそくさと逃げ出してしまった。

ふふん。なぜか勝った気持ちになったカツちゃん、両眼に闘争心という炎を宿しながら一気に駆け出すのだった。「おやおやどこかでボヤでもあったのかしら」とすれ違う江戸っ子が小首をかしげるほどの剣幕をまきちらすカツちゃん。そのあまりの剣幕に、江戸っ子たちは消防車に道を開ける車のごとく道を譲るのだった。

「ぬおー変迅堂！絶対にぎつつちゃんぎつつちゃんにしてやらあな！」少し離れたところで、さつきカツちゃんを笑ったカラスがアホーと鳴いた。

さてさて、このお話、まだまだ始まったばかりでございます。

変迅堂——ちあき——お鶴の三角関係はどうなるのか？さらにその三角関係にカツちゃんまで加わってどうなっていくのか？そして、そんな変則四角関係に、長介さんが加わることはあるのか？（……ごめん、勢いで書きちゃいましたけど、それは絶対にはないです）

まあけど、これはあくまで大江戸ラブコメ、要はそういう揺れる乙女心とかが主題なお話なわけでございます。こんなところで種明かしをしてしまうわけにも参りません。いかに話の結論を先述べにするかが語り手の腕の見せ所ってやつでございます。

と、つい商売者の本音が出てしまいやしたが、それはさておき。

「ではでは、明日は晴れるだろう3rd season」、始まり始まり〜！

【1】

「いつきし！」

秋も深まると、いかに昼間が温かろうと夜の風はひどく冷たいものになる。昼間っからずっとブラブラしているような暇人が夜の道を歩くと、どうしても寒い思いをするのは世の定めという奴で。夜道を歩くイエモン氏は、^{はな}涙をすすりながら夜の道を歩く。夜の寒さを恨みながら。

イエモン氏の前にも後ろにも人っ子一人ない。表店の続く通りにはただイエモン氏と秋風だけがのろのろと歩いているばかりだ。普段は露店を出している十六文蕎麦屋やおでん屋も今日に限っていない。露店の定位置であるはずの道端には、子供たちに追いつてられて疲れ果てている猫のような、ひどく淀んだ空気が佇んでいた。

イエモン氏は空を見上げる。こんなに風の強い夜なのに、なぜか星は見えなかった。輝く月だけが、イエモン氏の行く手を黄色く染めていた。

「寒くなつてきやがった」

イエモン氏は月に向かって文句を垂れる。けれど、月が何かを応えようはずもなかった。

ちつと舌打ちを一つする。けれど、誰もその舌打ちに振り向くことはない。たとえ昼間にイエモン氏が舌打ちをしたとしても、誰もそれを氣にとめることはないだろう。

にしても。

バツの悪さをあがなうようにして、イエモン氏は昼間の惨事に想いを馳せる。

なんだつたんだ、あれは。

道を歩いていたら突然前から女の子二人が走りこんできて激突してきた上、止まりも振り返りもせずに行ってしまった。残されたイエモン氏は、弾き飛ばされた中空で四回転半のきりもみ回転を披露

した上で、がしゃんと地面に崩れ落ちた。

おかげで頬やらおでこやらに傷をいくつもこさえてしまった。

別にイエモン氏が何をしたというわけでもない。なのに惨事が向こうからやってきた。で、しかもあつちからぶつかってきた。

けれど、そんなに驚くことでもない。イエモン氏はこれまで、大なり小なりそういつた目に逢ってきた。こちらは普通に生きようとして地味な生活をしていても、あちらからこちらの生活をぶっ壊そうとしてくる。そんなもんだ。イエモン氏はふと思う。けれど、そうやって覚悟が出来ていても、口にしないことにはやってられない時もある。ちょうど今は、そんな時だった。

「世の中ってやつは」

誰もいない闇の中で、イエモン氏は呟く。真つ暗な闇は、だれよりも聞き上手だ。誰の独り言をも拾い上げてしまう。そして、誰しもをおしゃべりに変えてしまう。

「理不尽なもんだ」

けれど、イエモン氏のその言葉には全く抑揚がこもっていない。

まるで歌うようにそう言つて、イエモン氏は刀の柄を撫でた。そして、自分の身の上を少し思つてみる。江戸の片隅で浪人暮らし。それなりに器量のいい恋女房がいる。女房が内職で稼いでくれるおかげでとりあえず生活には困っていない。幸か不幸か子供はいないが、よく出来た妻を持つて俺は幸せだ。俺は何をしなくても大丈夫。このままこのクソみたいな世の中に何を為すでもなく、ただのんびんだらりと酒でもあおつてればそれでいい。

それでいい。

それでいい。

それでいい……。

道すがら、イエモン氏の見ている光景がどんどん歪んでゆく。水面に水一滴を落としたかのような。ぐんにやりと曲がった江戸の夜の街。やがて、頬に伝う水滴を払いながら、イエモン氏はふと自分に問う。

「なんで、俺は……泣いているんだ？」

その声に、ほかの人間の声がかぶさる。

「なんで、でしょうかねえ？」

イエモン氏は自分の顔をごしごしと拭いて後ろを振り返った。

振り返った先には、男が立っていた。

武家髷。二本差し。驚色うつくしいろの着流しを纏っている姿はどこかの番頭

のようでさえあった。もし二本差しをしていなかったら、まるで侍には見えない。そして、その男を何より印象付けているのは赤っぱい羽織だった。何の変哲のある羽織というわけでもない。けれど、逆に言えばその羽織さえなければすぐに忘れてしまいそうな風体をしていた。事実、イエモン氏はその男の顔をまじまじと見てはいるが、それでも男の顔の印象がイエモン氏の中で全く定まらない。

くつく、とその赤い羽織の男は笑う。ほんのわずかしが見せなかった笑みが余りに醜悪で、イエモン氏の中に悪印象として残る。

「なんででしょうかね？ 少なくとも私にはわかりませんア」

鼻につく言葉回しだった。少しいらつきながら、イエモン氏は口を開く。

「あんたには関係のない話だ。忘れてくれ。そもそもあんたには聞いてない」

「うん、そうですねア。私には関係のない話でしたなア。そもそも私が答える筋の話でもなかったのでしょうかア」

空にぽっかりと浮かぶ月に目を向けながら、赤い羽織の侍は言った。さつきまではなんとなく影になつていたせいで分からなかったが、男には深い皺が刻まれていた。声に張りがあったから、ずいぶんと若いのだろうと予想していたのに、その男は妙に老けこんでいた。

けれど、そんな話はイエモン氏にとってどうでもいい話でしかない。道で偶然出会った侍と話すことなど何も無い。

そう思ったイエモン氏がすたすたと歩を何歩か進めた、その瞬間だった。

「……江戸っていう街は、生きにくい街ですなア」

赤い羽織の男が、口を開いた。

その言葉には、やけに引力があつた。捨て置くにはあまりに蠱惑こわくが潜んでいるような気がして、思わずイエモン氏は足を止めて振り返った。

「どういう意味なんだ？」

赤い羽織の男はカラカラと笑う。

「何、言つたままのことですよ」

ゆつくりと歩をイエモン氏に進める赤い羽織の男は、月を背負う。そのせいでイエモン氏からは、男がどんな表情を浮かべているのが分からない。月の逆光の中、赤い羽織の男は続ける。

「江戸っていう街は、ひどく生きにくい。それはそうですなア。江戸に住んでいる人間がどれだけいるか、ご存じですか？ 百万人ですよ、百万人。まあこの数字、相当にいい加減なものらしいですし、そもそも人の数を正確に数え上げるような暇人がいるとも思えませんから、まあ誰かが言い出した根拠のない数字なんでしょうが、けれど、江戸にはそれくらいの人数はいるんでしょうな。江戸っていう街は、約百万人が肩をぶつけ合つて生きているんですよ」

「それがどうした」

「そんな街の中では、勝者と敗者がくつきりとするものです」

「なんだと？」

イエモン氏の言葉に、少し怒気が混じる。その怒りを鼻先で笑うようにして、赤い羽織の男は大仰に続ける。

「たとえば、日本橋を歩いてごらんさい。きっとわかるはずですよ。江戸という街はとてつもない成功者がいる。毎日不夜城に通いつめてウハウハ言っている人間だっているはずですよ。けれど一方で、あなたのような人もいる。そうやってウハウハしている人たちと、あなたのような人たちが袖すりあうような街なんですよ、江戸というのは」

「貴様」

ついにやりきれなくなつて、イエモン氏は刀の柄を取った。

けれど、赤い羽織の男は全く怖じる様子もない。ほうほうほう、と熱いものを頬張っているかのような声を上げ、心なしかイエモン氏を見下ろしていた。

赤い羽織の男はイエモン氏を見つめた。

「いえいえ、別に私は、あなたに喧嘩を売りに来たわけじゃないんですよ」

「なんだと？」

あれだけ人をおちよくつておいて、か？　そう口にしようかとも悩んだが、さすがに品位が無いのでやめた。武士は食わねど高楊枝。貧^{ひん}しても貪^{どん}せず。曲がりなりにも、イエモン氏は武士だった。

赤い羽織の男は続ける。

「あなたに、ちよつとお頼みしたいことがありますてね。あなた様のような方に」

「断る」

イエモン氏は頭を振った。

「おやおや」

そうやって、赤い羽織の男はイエモン氏を一々苛立たせる。小馬鹿にしたような口調が憎々しい。

「なぜ」

そう聞く赤い羽織の男に、イエモン氏は答えた。

「そうだな、あえて理由をあげるとするなら、“誰かに仕えたら負けだと思つてる” ンでな」

その言葉に、赤い羽織の男は、ははははは、と声を上げて笑った。

「あー、そうですかそうですか、いやいや結構」

夜の街に溶けてゆく笑い声は、一タイエモン氏の耳に障る。それはまるで、自分の境遇を笑う江戸の人々の哄笑^{こうせう}のようでさえあった。
「ふん」

【2】

鼻を鳴らして、イエモン氏は踵かかとを返す。

そして数歩足を踏み出したところで、赤い羽織の男は口を開いた。その声はきんとよく響いた。

「けれど、無駄ですな。きっと、あなたはまた私と会うことになる。そして、きっと私のもとで働いてくれるに違いない。だってあなたは知っている。江戸という街の理不尽を」

ついにイエモン氏、腹にたまっていた思いをとどめることが出来そうにもなかった。がりがりと歯噛みして何とかせき止めていた思いのすべてが、口から暴発しつつある。我慢しようかとも思ったが、無駄だった。滓おりのような汚い言葉たちが口からあふれ出る。

「お前のような二本差しに何が分かる！ 俺の何が分かる！ お前みたいな爺じいに同情されるほど落ちぶれちゃいない！」

が、振り向いた先には、既に赤い羽織の男は立っていないかった。赤い羽織の男が立っていたはずのところには、ただ空白が広がっていた。

言いたいこと言って消えやがった。

しばらく呆然としていたイエモン氏だったけれど、思い直して前を向き、足を踏み出した。腹に残る想いを抱えたままで。

誰もいない暗い夜道をひたすら歩く。だからこそ、考えることは自分への問いとなってしまう。

俺はこのままでいいのか？

俺はこれからどうしたいんだ？

俺はいつまでもこんなでいいのか？

そして、そんな疑問が頭をかすめるたびに、赤い羽織の男の立ち姿が浮かぶ。やはり、顔を思い出すことはできない。ただ、“赤い羽織”だけが頭について離れない。

そして、あの男の言葉が思い出される。

『けれど、無駄ですな。きつと、あなたはまた私と会うことになる』
あの男とまた会う？ そんなバカなと笑い飛ばそうとしてみる。
けれど、嫌に確信めいた言葉が気になって、結局振り払うことがで
きない。

ちくしょう。ちくしょう。ちくしょう。

イエモン氏は齒噛みした。寒いからでもあつたし、ほかの理由か
らでもあつた。

道端に転がる石ころを蹴ってみた。けれどすぐに道端のドブに落
ちてしまった。ぽちゃり、という音だけがイエモン氏の耳に残る。

そんなイエモン氏のことを笑うかのように、月はきらきらと輝き
を放っていた。

ちくしょう。

心の中でそう吐き捨てながら、イエモン氏はどこか虚ろな足取り
で、夜の江戸の街を彷徨ほつこうしていった。

【2】（後書き）

すいません、UP分量を間違えました。

【1】

月明かりが文人長屋を照らす。普段は塵チリ一つ落ちていない道端にむしろを引いて、その上に座布団をいくつも敷かれている。昼間のうちに、変迅堂たちが長介と準備したのである。準備の間はさながら戦場のようだったけれど、こうして終わってみれば夢のようにさえ思えるから不思議だ。

昼間は割と暖かい江戸八百八町も、夜になると次第に冷え込んでくる。お天道様の偉大さを噛みしめつつ、変迅堂はくちゅんとかしやみをした。

「いやあ、寒いですねえ」

そうやって、隣にいる長介に同意を誘ってみる。

長介も寒いのか、両腕を組みながらビンボーゆすりをしている。

「うむ、寒いねえ」

鼻のかしらを赤くしながらそう答えた長介は、不意に視線を空に踊らせた。空には満月には幾日か足りない月が黄色く輝いて中空にぼっかり浮かんでいた。その月に目を細めながら、ぼそりと長介は言葉を継ぐ。

「まあけれど、こういう日の方が、月がよく見えるというものです」

「けど、長介さん」

変迅堂はメガネを上げながら、満月に足りない月を見上げる。確かに長介の言うように、雲ひとつない空の上で、月はよく映えていた。とはいっても――。

「どうして、こんな時期にお月見なんです？」

そうなのだ。

なんと長介が文人長屋にやってきたのは、「月見をするため」だったのだ。そのために昼間に「文人長屋」を訪ねてきて、「月見の準備を手伝え」ときたのである。

けれど、どう考えてもこの時期に月見はおかしい。

普通月見というと、中秋の名月と言われる陰暦八月十五夜と、その次の月、九月十三夜を愛でるものだ。けれど、今は十月。月を愛でるには少々遅い。特に気の早い江戸っ子がそんな話を聞けば、「はあ!？」十月に月見い？それだったら、十月に正月の祝いをする方がはるかにマシなんじゃねえか？」とそのヤボを笑うだろう。別に変迅堂は江戸っ子というわけでもないけれど、やっぱり疑問は湧くらしい。

ほほ、と笑いながら、長介は変迅堂に向いた。

「いえね。別に、中秋の名月じゃなかるうが、月っていうのはきれいなものです。それを肴さかなに一献したいと思うのは何も突飛なこととは思えませんがね」

「そついうものですか」

ついでに風流も分らない変迅堂、うむむむと唸って月を眺めた。月はそのな変迅堂に微笑み返した。

そうやって外に立ちつくす二人に、後ろから声がかかった。

「せゝんせい!」「変迅堂さん!」

ほぼ同時。しかも、どっちも長介の名前など呼びもしない。どうでもいいけど、自分の名前が呼ばれなかったことについて、長介のガラスハートが少し傷ついたのはここだけの話である。

二人が振り向くと、そこには当然……。

手にお皿を持って立つ、ちあきとお鶴の姿があった。

風に吹き誘われて、ふと、変迅堂の鼻にいいにおいが入ってくる。

「お、なんだかいにおいですね」

すると、へへんとちあきは鼻を鳴らす。

「あつたり前でしょ! これでもあたしだって料理くらいできるんだから!」

ちなみに、ちあきが作ってきたのはごぼうのきんぴらである。

おおー、と声を上げながら、変迅堂は目を輝かせる。

「へえ、美味しそうだね、ちょっと一口」

と、手を伸ばそうとすると、皿を後ろに隠しながら、ちあきがぐる

ると唸る。

「ちよつと先生！ はしたない！ 後で食べれるんだから我慢我慢
！」

「ちえー」

まるで子供のように、変迅堂はすねた声を上げる。そして、きんぴらとちあきの顔を何度も見比べる。けれどちあきは笑顔できつぱりと首を横に振り、変迅堂の視線を払った。

この人って、こういうところが子供っぽいよねー。心の中でちあきは続けた。そして、この人はなんとしてもあたしがどーにか手綱を握らなくっちゃ。

そんなちあきの心の声を知ってか知らずか（っていうか知らないに決まってるけど）隣に立つお鶴がひょいっと一歩出た。

「変迅堂さん、じゃあ、こっちをどうぞ」

「え、いいの？」

さっきまできんぴらに向いていた変迅堂の目が、今度はお鶴の持っている大皿に向いた。

もちろん、ここでちあきが齒噛みしたのは言うまでもない。

お鶴ちゃん！ 何でもかんでも甘やかせばいいってもんでもないでしょ！ と。……っていうか、あんたは保護者か。きつと、恋心ってやつは一回りするとこんな感じになっちゃうんでしょな。

そんなちあきの心の中など露知らず、変迅堂はお鶴の持っているお皿に手を伸ばし、ひょいと指でつまみあげ、口の中に放り込んだと。

ぼん。

変迅堂の頭から、確かに湯気のようなものが出た。いや、見間違いでなければ、あれは黒煙。そんなわけはないのできつと見間違いのだろうけれど、そんな変迅堂の口から出たのは尋常ならざる言葉たちだった。

「@。z：・えー！ p・hえ、ずおw、をあ・i@けq、じう」

うわあ、文字化けしちゃってるよ。

ちよつとこれ、まずいんじゃないだろうか。

思わずちあき、横のお鶴に聞く。けれど、案外落ち着いた口調で。
「あの、お鶴ちゃん、先生に何を食わせたの？ トリカブトみたいな毒の類？ それともアレ？ 食べると笑いが止まらなくなるキノコとか？ しびれ薬とか？」

「え、え、え！？」

ちあきなんかよりも、よつばどお鶴の方が混乱している。なんだか変な言葉を呟きながら白い目を剥いている変迅堂のことをさすりながらアワアワしている。

そんなお鶴を尻目に、ちあきはお鶴の手にある皿に目を向ける。そして、コンマ数秒で目を皿からそらした。

「あのう、お鶴ちゃん？」

「へへへ、変迅堂さん！ …… なんです、今取り込み中なんですけど」

変迅堂に向ける憂いを秘めた顔をあからさまに引つ込めて、お鶴はちあきに向いた。現金と言うか何というか。

「耳の穴をかつぽじってから、ゆっくりとあたしの言葉に答えてね」「なんです。そもそも私、かつぽじるほど耳ア力溜めてませんけど」

お鶴のつつけんどんな言葉になどちあきは応じなかった。

「あのさ、お鶴ちゃん、何を作ったの？」

「うへ？」

お鶴は思わず、自分の手の中にある皿に視線をやった。

皿の上には、何かが乗っている。ボロボロとしている様から見ても何かの佃煮なのだろう。けれど、何の佃煮なのかも分からない。それ以上に、匂いからしてただならぬ。佃煮なら醤油の匂いがしそうなものなのに、お鶴の皿の上にあるそれは、全く佃煮とは別種の匂いがした。っていうか、悪臭。絶対に口に入れてはいけなそうな匂いがする。

口さがないちあきに言わせれば、

「なんかそれ、長屋のドブの水をすくった後、それを煮詰めたような匂いなんだけど……」
となってしまう。

「ううむ、確かに」

ひよこつと顔を出すのは長介だ。鼻をつまみながら首をかしげる。そして、白い目を剥いたまま固まっている変迅堂と、ちょこんとその場にたたずむお鶴とを見比べる。

「ねえ」ちあきは聞いた。「これ、何を入れたの？」

むむむ、と眉間に少し皺を寄せて、お鶴はぽつぽつと答えた。

「ええとですね……。《ピー！》でしょ、あと《ピー！》でしょ……」

…、あと《ピー！》ピー！に《ピー！》……」

え？ ピーピーうるさいって？ だってしょうがないじゃないですか。この伏字が無かったら、きっと皆さんのトラウマになっちゃいますので。

うげえ、とちあきは顔をしかめる。しっかりとトラウマになったらしい。どんよりとした顔を浮かべながら、ぼそつと呟く。

「それって、本当に料理？」

「っていかお鶴さん、お料理は得意なのかな？ そもそも、料理、初めてではありませんまいな？」

という長介の問いに、お鶴は満面の笑みで応じる。

「え？ 料理は今日が初めてですけど」

ああ、なるほどね。ちあきと長介、顔を見合わせてうんうんと頷きあう。

そう。お鶴ちゃん、壊滅的に料理がヘタクソなのである！ 一体どういう育ち方をしたのかは分からないけど、料理なんか覚えないままここまで年齢を重ねてしまったのだろう。

【2】

ところで、ちあきなどは“やったあ、お鶴ちゃんの弱点発見！お鶴ちゃんって基本的にあたしよりも女の子っぽいからなあ……”。けど、これからは料理であたしの女っぽさを推して行って、あの子を蹴落とさないと！”とマツクロクロスケなモノローグを展開していたのだけれど、それを知るはただちあきだけである。

ところで、皆忘れている。

ちあきも長介も、そしてお鶴でさえも、異臭を放つ妙な物に注意を奪われ、今一番気を払わなくてはならないものに目が向いていないということに。

けれどそこは亀の甲より歳の功。最初に気づいたのは長介だった。

「あ！」

長介はようやく気づいたのだ。

「げふふふふ……」

よく聞き取れない言葉たちを呟きながら、フリーズしたままの変迅堂の姿に。

「ちよ、変迅堂さん！」

揺さぶるけれど、反応がない。

うげげ、やばいかも。

白目をむきながらぐおんぐおんと首を振る変迅堂にビビりながら、それでも長介は変迅堂の肩を持って揺さぶり続ける。いやーこれ、もうやばいんじゃない？ そう思いかけた瞬間、長介の背中に言葉が浴びせかけられた。

「長介さん、ちよいとどいて？」

うむ？ 背中を声で浴びながら、長介はこれまでとは違う熱気を感じ取る。さっきまではうすら寒い空気だったものが、まるでかがり火でも焚いているかのような熱気を背中越しに味わう。なにやら怪訝に思いつつも振り返ると、当然のようにそこにはちあきが立っ

ていた。

けど、ちあき、半端なことではなくなっていた。

燃えている。いや、実際にではない。なんというか、ちあきの華奢で少し柔らかそうな体から、ふつふつと炎が上がっているように見えた。歯をがりがりと噛みながら両の手で拳骨をつくり立ちつくす様は、まるで京師の青不動様のようなだった。

なにやら頬から伝う汗が止まらない。しばらくその汗を手で拭きながら、長介は今自分がひしひしと感じているプレッシャーの正体を探していた。

けれど、そんな長介さんに、ちあきは容赦なかった。

「ほら、早くどいて！」

顎をしゃくる。その姿たるや、青不動様も真つ青（当り前だけ）。

あわててどいた長介を尻目に、ちあきは一步一步変迅堂に向かい歩を進める。その一步一步の度に地面が揺れるんじゃないかというほどの威圧。

そしてちあき、変迅堂の前に立った。

白目をむいたまま立ち尽くす変迅堂。そして、その前に仁王立ちするちあき。

けれど、ちあきは意を決したように深く息を吸うと、行動を開始した。

右足を後ろに引いて、右拳を思いっきり握り込んだ。その目は変迅堂に向いている。ちょうど、江戸にいつぱいいる喧嘩師さんたちが、一色触発の直前に見せる臨戦ポーズだ。そしてそのポーズをとった喧嘩師さんたちが次に取る行動と言えば……。

ま、まさか。

長介とお鶴は顔を見合わせる。

すつ、と息を吐いて、ちあきは。

「どっせい！！」

そう。思いっきり握り込んだ拳を、その体ごと変迅堂に向かって

放ったのだった。格闘のプロがもしこの一部始終を見ていれば、「おお、なんといい見事な正拳突き！　なんだあの娘は！　出来る！」と口から唾を飛ばしながら立ち上がることに必至の見事な中段突き。そのちあきの拳は、見事に変迅堂のみぞおちにめり込んでいる。めきや。

その瞬間、変迅堂の口から、ようやく普通の言葉が飛び出した。「ウップス！」

まるで外人みたいなアクションだけど、実際みぞおちを突かれたらこんなリアクションになるのは当然でしょう。白い目を剥いていた変迅堂も、あの攻撃が気付けとなったのか、ようやく黒眼を取り戻した。そして……。

「うぷ！」

なんだかお食事中にお聞かせするには不味マズそうなおノマトペを口から響かせながら、トイレのことだよ厠に駆け込んだ。イヤに満足げなちあきとイヤに呆れ顔をみせる長介とお鶴を尻目に、変迅堂はしばらくして悠々と戻ってきた。

HAHAHAHA。変迅堂はからからと他人事のように笑う。「いやあ、今度は死んだはずのじいちゃんに会っちゃいました！　ははは」

ちあきはきつとお鶴に向いた。

「お鶴ちゃんが毒を盛ったりするから……」

「何を言うんですかちあきさん、人聞きの悪い！　っていうか、変迅堂さんが死んだおじい様に会っちゃったのは、ちあきさんの正拳突きのせいなんじゃないですか!？」

「なにおう!？　あれはお鶴ちゃんの盛った毒を吐き出させるためですう！」

まるで闘犬のようにぐるるとお互いをけん制し合う二人に割り込む格好で、長介が口を開く。

「さて、そろそろなんですがね」

「へ？」

変迅堂は長介の独り言を見逃さなかった。そろそろ？　どうということ？

「いえ、この後、来客が来る手はずなんです」

「ああ、なるほど」変迅堂はポンと手を叩いた。「道理で」

変迅堂の視線の先には、四人で飲み食いするにしては広すぎるスペースに置かれまくった酒の山や食べ物皿が並んでいた。それこそ、十人程度で飲み食いするくらいの規模の用意がされている。

「で、どういう来客なんです？」

「そのうち分かる」

なぜか長介、ニヒルに笑う。茶目つ気のあるじい様である。

と、そうやって長介がニヒルに笑った瞬間、文人長屋の入り口からはつらつとした声が届いた。

「おう、長介さん、来たぜ！」

「ほーいほい、入りなさいな！」

「あいよ！」

さて、それだけの短い言葉で、変迅堂たちは何やらその声の主に思い当たった。特に一番思い当たるものがあつたのがちあきである。さつきまでお鶴相手にぐるぐる唸っていたのに、その声を聞いた瞬間に「はれ？」と視線を空に泳がせた。

「ねえ先生……もしかしてあの声」

変迅堂からの答えを待つまでもなく、その声の主はちあきたちの前に現れた。

背中に「お」と大きく染め抜かれた半纏。そして手に持ちたるはとびくち鳶口。悪戯小僧のような小憎らしさを残しつつも、ちょっと大人びてきたような印象も漂う顔。ちあきや変迅堂、お鶴からすれば見慣れた顔である。

よ、とその青年・カツちゃんは手を挙げた。

「おうおう！　久しぶりだな、ちあつちゃん！」

その他の面々になど挨拶すらない。けど、そんな疑問をさしはさむより前に、ちあきがカツちゃんに駆け寄って、ひよいと挙げて

いる手をバチンと叩いた。

「久しぶり！ カツちゃん！ やっぱりお仕事忙しいんだね！」

「おうよ！ 火事つつうのはいつ何時起こるか分からねえからな！」
カツちゃんはカラカラと笑いながら応じる。「おかげさんで、あんまりちあつちゃんに会いに行けないけどな」

「まあ、別に会いに来てくれなくてもそれはそれでいいけどさー」
もちろん、ちあきのこの無神経な言葉に、カツちゃんのビイドロ（ガラスのことだよ）ハートが若干傷ついたのは言うまでもあるまい。ぐぽーんと肩を落とし、あからさまに落ち込むカツちゃん。にもかかわらず、ちあきは「？」な顔を浮かべている。自分の放った言葉の意味を分かっていないのだ。まあ、そこら辺の感情の機微が読み取れるほどにオトナなら、ちあきの周囲はもう少し平穏で静かなものなのだろうけれども。

ほっほっほ。長介が口を開く。

「勝次殿も呼んでみましたよ」

「も？ ってことは」

そう。言うまでもないけど、「も」という言葉は他にも何かがあることを暗示する言葉である。

ふふ。長介はまるで闇のフィクサーのような笑い方をした。

「きつと、変迅堂さんの想像は当たりますな」

と、そうやって長介が変迅堂に微笑みかけたその瞬間だった。

何やら、文人長屋の入り口がうるさくなってきたのに変迅堂は気づいた。うるさいとはいっても、太鼓を鳴らしているとかドラをバーンと叩いているとか、そういう騒音の類ではない。人が数人連れ立って、ワイワイガヤガヤとしている感じ。居酒屋の前で、「この店に入るのか？」と談笑している仲間連れの放つような明るくて楽しいげな言葉たち。

「あれ？ 外から声が」

「ほっほっほ、来なすったかな」

長介はゆっくりとした足取りで文人長屋の入り口にまで歩を進め

た。けれど、思い出したかのように振り返って、変迅堂に言う。

【3】

「あ、来たみたいですなあ。ちょっと行ってくるので、待っていてください」

「はい」

変迅堂は生返事を浮かべた。

「せんせーい。ひゃっはア、せんせいのてのひらってあつたかいんだねー。うへへへのへー」

顔を真つ赤にしているちあきは、さながら猫のように変迅堂にすり寄ってくる。“うにゅー”とか“にゃはー”とかよくわからない声を放ちながら変迅堂にすり寄る様は、普段の世紀末覇者の影が全くない。可愛い（けどもちよつとウザい）乙女そのものである。どんどんちあきは変迅堂ににじり寄り、懐のあたりまで腕を伸ばそうとしてくる。その手を必死で変迅堂は抑えにかかる。

「あの、ちあき殿？」

「うにゅー？ 何だあ、この無粋者ー、ようやくあたしの魅力に気づいたかタコー。接吻せつぶんでもしたいのかこのヤロー。あたしの唇は安くないんだぞこのバカっ面つらー。でも今日は大安売りだこんちくしょー。つうか男ならどんと来いオタンコナスー。ほれほれチューー」

ゆっくりとした口調で毒を吐くちあき。けど、言葉の端々に何やら彼女の本音が隠れてますね。

そんなちあきのおでこを抑えながら、変迅堂は言う。

「お酒はもうこれくらいにしておこうね、ちあき殿」

「ういー？」

顔を真つ赤にしながらかちあきのしたゲップから、お酒の匂いが立ちこめる。そしてちあきの右手には、湯呑みに入ったどぶろくが。それを取り上げた変迅堂は横にいる長介に非難めいた言葉を浴びせる。

「あのう長介さん！ どうしてちあき殿にお酒を飲ませるんですか！ まだまだちあき殿は子供なんですからね！」

もう子供じゃないぞー！ 胸だつて最近……、とか言い出しているちあきを無視しながら、変迅堂は長介に向く。けれど、そんな変迅堂の非難などどこ吹く風、長介はひょうひょうと変迅堂の言葉に応じる。

「何を言いますか変迅堂さん。お嬢さんだつて今年十五歳。別に祝言の話があつたつて可笑しくないでしょう？ ほとんど大人みたいなものですよ。……いつまでも子供だと思つてると、いつかとんでもない疾病返しがあるんじゃないかと思ひますがねえ」

なんというか、意味深なことを言うじい様である。

うむむむむ。変迅堂はちあきから取り上げたお酒を飲み下した。その瞬間だつた。

変迅堂の背中にとつてもない衝撃が加わる。まるで、人二人に同時にドロップキックされたような……。

つていうか、事実二人にドロップキックされたただけ。

変迅堂にこれぞというドロップキックを決めたのは、ほとんど足どりがおぼつかないカツちゃん、普段の優しい目つきが形を潜めてすっかり敵しいものになつてゐるお鶴であつた。二人とも、しっかりと酒のおいを辺りに振りまいていた。ちなみに変迅堂は地面にうつ伏せに転がつた上、衝撃でそのまま地面を転がる羽目になつた。

「へへん！ 変の字！ てめえの料簡は分かつてるんだぞ、この助平があ！ たとえ南町奉行所の名奉行・根岸様がお見逃しになられても、お組の火消し、酔いどれの勝次様が、あ、見逃すわけにやあいかねえ、な！」

歌舞伎役者のように節をつけて大見得を切るカツちゃんを押しつけるようにして、お鶴は変迅堂に駆け寄る。そして、うつ伏せに転がる変迅堂の背中を、肘でぐりぐりとやりだした。どうでもいいけどこれ、地味に痛い。

「あのー、変迅堂さん。そういうの、ひどく傷つくんですよー。いちやいちやいちやいちやいちやと……。そういう異性不純交際は私とすべき……もとい禁止です！」

お鶴、言葉自体はしっかりと呂律が回っている。にもかかわらず、普段にないことを口走っている。きつと、そういうタイプの酔い方をする娘なのだろう。まあ、なんにせよ「ぎゃああああ」という変迅堂の苦悶の悲鳴は変わらないわけだけれど。

そんなお鶴に、ちあきが絡む。

「あー、せんせいをいじめるなよこの長髪おばけー」

「ちっ！　いつか言おうとは思ってましたけど、ちあきさん、あなた基本的に口が悪いのよ！」

「猫を被ってる人よりはマシだ、このおばけー」

「きいいいいい！」

「あ、よ！　悪の変態代官変迅堂！　今日会ったが百年目、成敗してくれるわあ！」

「うるさいよカツちゃんー。つつか力バカー」

「ガビーン！　チクシヨウ変の字！　バ力野郎変の字！」

なんだか、変迅堂を中心にもものすごいエネルギー消費が起こっている。っていうか、三人が寄ってたかつて変迅堂をいじめているようにも見える。

やばい、やりすぎたかね。

心の中でそうつぶやいた長介、変迅堂をなんとか救い出した。しっしっ、と野犬を追い払うようにあしらうと、三人とも「ちえー」と唇を伸ばし、さびしそうな目でボロボロの変迅堂を見送っていた。ぜいぜいと息をしながら、ぼつりと変迅堂は呟く。

「はあはあ、死ぬかと思いました」

「一体あなたには、命がいくつあれば足りるのですかな」

「違いありませんね」

からからと笑いながら、変迅堂は長介の横に座りながら（しかも正座）、酒を飲む四人に目を向けた。そして、長介に向かい聞く。

「そういえば、この四方は一体？」

「ああ、そうでしたな。説明しておらなんだ」

長介は四人に目を向けた。するとその四人は緊張したままの表情で長介に向いた。

「この文人長屋の、新しい入居者だよ」

「ああ！」変迅堂は手を打った。「最近、文人長屋も人が減っちゃいましたからねえ」

実は、ここ最近、この文人長屋には変迅堂しか住んでいなかった。つい一か月ほど前まで創作寿司職人やら絵描きさんやら書道家さんやら腐れ儒者さんやらが住んでいたのだけれど、いい出来事というのは重なるのが世の必定^{ひつじょう}。ある者は職人として独り立ちし、またある者は京に住む絵の師匠^{ししょう}につくためにここを離れ、またある者はさる家中から招聘^{しょうへい}があつてその国へ、またある者は結婚を機にここを離れてしまった。そうして、秋も深まる十月ともなると、この文人長屋には変迅堂しか店子（住人のことだよ）がいなくなっていたのだった。

「まあ、いつまでも空き家を遊ばせておくわけにもいかないからねえ。そんなわけで、ちよつと見所がありそうなのを集めてみたんだよ」

この長介の言葉には説明が必要だろう。

変迅堂の住むこの“文人長屋”、ただの長屋ではない。普通長屋というと身元がある程度しっかりしていて、それなりに定職についていれば入れる（というか、定職についていなくてすら入れるところもあつたりする）のだけれど、この長屋に入るには、特段の条件が要る。

簡単に言えば、長介に気に入られることである。

いや、この表現も正しくない。大家の長介に“将来の可能性あり”と見なされた、芸術家の卵やら芸術分野・技術分野に近い職人さんの卵といった人たちしか入居できない。今でいう、アーティストの卵たちしか入れないのである。

まあ、ト。ワ莊みたいなものだと思つて下さいまし。

と、いうことはつまり……。

変迅堂はその四人に向いた。

「つてことは、みなさん何かに秀でていらつしやるつてことですね」

「ほつほつほ、これから秀でてくる連中さね」

変迅堂の横で、誇らしげに長介は笑う。

「ま、それはともかく」

変迅堂はそこらに置かれていた銚子を拾い上げると、長介の持つ杯にどぶろくを注した。そして自分で自分の杯に酌をしようとするものの、その手を長介に止められた。

「まあまあ変迅堂さん」

ひつたくられた格好になつた銚子から、なみなみとどぶろくが注がれる。それを「ととと」と受け取つた変迅堂は新たな入居者たちの顔を見渡して、その杯を掲げた。

「ともかく、飲みましようか」

その杯に少し緊張の色を見せていた入居者たちも、自分の手にある杯を変迅堂の杯にぶつける。がちゃん。少し鋭くて固い音が辺りにこだまする。その音のしじまに、皆くいつと杯を空ける。

誰からともなく、月を見上げる。満月に数日足りない月が確かに微笑んでいた。ほろ酔いの誰の目にも、空に浮かぶ月は嬉しそうに黄色く光っていた。そして、そんな月の笑顔にほだされたのか、誰からともなく笑顔になる。そしてその笑顔の輪はまるで水面に走る波紋の如く、ゆつくりと輪になつて広がつていった。

と！

「あー。せんせいー、見つけたー。ほれほれ、あたしとちゅーしたいでしょ、ちゅー」

「ちくしょう、変の字でめえ、この変態！　つつか女たらし！　おろろーん！」

「きいいいいい！　変迅堂さんは不細工を相手にしないです！」

そう、ヨッパライ三人衆がその輪の中に割り込んできたのだった。

「ちあきは変迅堂に思いつきり抱きつく。しかもダイブ。
うへへへへへへへへへへ。せーんせい、せーんせい」

【4】

やわらかい頬を変迅堂の頬に思い切りすりよせるちあき。やわらかすぎる頬はまるでぷくーと膨れたお餅のようだった。

「あ、あのう、ちあき殿……？ 近い、近いですって」

困惑気味に少し距離を置こうと弱く腕を払った瞬間だった。うにゅ！？ 突然ちあきが変な声を上げた。

突然ちあきは両手を胸の前でクロスさせて、ぐるんと背中を丸めた。顔だけ上げてはいるけど、恨めしげでいてちよつと恥ずかしげな顔を見せた。顔は真っ赤、目は少しうるんでいる。それが酒のせいなのか、それとも他の理由からなのかは、誰にもわからない。

「あ、あの、ちあき殿？」

ちあきの変化にさすがに気付いた変迅堂、恐る恐るちあきに声をかける。するとちあきはか細い声で弱弱しい言葉を呟いた。

「……あー。せんせいに触られちゃった、胸」

ええええええええええええ！？

驚いたのは変迅堂だけではない。

長介は驚きすぎて前のめりに倒れてデコを思い切り地面にぶつける羽目になった。けれど、もっと大仰な反応を見せたのは、何を隠そう変迅堂だった。

「ええええええええええええ！？ 触ってません！ 触ってませんって！」

僕は無実です、と言いたげに両腕を伸ばして手をぶんぶん振りながら後ずさる。声が明らかに上ずっている上、ちあきなんかよりもよっぱど顔を真っ赤にしている。けれど、ちあきはとろんとした目のままで続ける。

「触りましたー。せんせいに触られちゃいましたー」

「さささささ、触ってませんって！ ちあき殿、いくらなんでもそんなジョーダン……」

ちなみにこの時、変迅堂が覚悟していたのはちあきのマジな正拳

突きである。いつものちあきなら、恐らくはそういった反応をするだろう。「何をすんのよ！ 嫁入り前なんだからね！」と叫びながら、頭がい骨ごと首をふっ飛ばしかねないグーをお見舞いするのがちあきという娘だ。

けれど、そんな変迅堂の予想は大きく外れる。

うふふ、と不気味にちあきは笑う。

「ふふん、別に怒ってないよー。だってあたし、すつごくカンヨーなんだからー。それにー」

「そそそ、それに？」

先を促すと、ちあきはぽつと頬を染めながら、ぼそぼそと呟く。

「せんせいがセキニンとつてくれればそれでいいもーん。……ふえ？ ふえへへへ。でへへへへ、言っちゃったー」

自分の放った言葉にうにやーんとろけるちあき。やわらかい頬が、もうとろけて落ちそうなほどになっている。

……この場面での“責任”という言葉が、まさか「私は学級委員としての責任を全うしたいと思います」程度の軽い言葉なわけはあるまい。さしづめ、「アメリカ大統領の名を以って、私は責任を果たして参ります」くらいの重さはあるう。いやー、重い。実に重い！ ……っていうか、そんな重い言葉を酒に酔った勢いで言うなよ、ちあき。ハタ迷惑にもほどがある。

もちろん、その言わんとするところが分からないわけではない変迅堂だったけれど（いかに変迅堂が無粋者とはいえ、ね）、さすがにそれは冗談と取った。

「あの、ちあき殿、本当に酔っぱらい過ぎだからね」

「むむむー、あたしの胸を触ったくせに責任取らないのかタコー」
そう唇を伸ばして反論するちあき、既にぐわんぐわん頭を振っている。そして何がおかしいのかケラケラと笑いながら手をパチパチ叩いている。本当に誰だよもう、この娘に酒を飲ませたのは。

「ちちち、ちあき殿？」

ちあきのちよつとヤバ気な酔いっぷりに、変迅堂が思わず手を伸

ばした、その瞬間だった。

「やらせはしねえぞ！」

そんな叫びとともに、変迅堂の背中にとてつもない衝撃が走る。ぺきり。この時、変迅堂の耳にはそんな音が聞こえたそう。ともかく、前のめりに倒れる格好になった変迅堂、ひかれた筈に接吻をかます羽目になった。げぶん。

そして一瞬遅れ、また変迅堂の背中にごりごりという痛みが走る。まるで、足の裏で背中をぐりぐりされているかのような。

まあ、っていうか事実その通りのことをされているのだけれど。

「おいおい変の字」。今テメエ、何しようとしてやがったんだア？
エエ？」

変迅堂の背中に浴びせかかったのは、カツちゃんのドスの入った声だった。

ごりごりという痛みを我慢しつつ、変迅堂は声を上げる。

「え？ イヤ別に……ただちあき殿がだいぶ酔っぱらってたから、
と思つて。アイタタタ！」

めきりぼきりと変迅堂の背中を足で踏みつつ、カツちゃんは変迅堂を見下ろす。うひいゝ！ 変迅堂はどこか間抜けた声を上げる。それを尻目にカツちゃんは言葉の尻にさらにドスを込める。

「おいおい、分かてるんだぜエ？ おめえ今、ちあつちゃんの胸に手を伸ばしてやがったろ！ この助平！^{スケベ} うらやまし……もとい、
なんて悪辣な野郎だ！」^{あくらつ ヤロー}

「ハア！？」

いわれなき言葉に変迅堂は呆れた声を上げる。けれどその声はやがて、苦悶のそれに変わる。さっきまでは背中を踏まれた程度の痛みだったのに（ちなみにそれだけでもかなり痛い）、なぜかそのうち腕を思いつき後ろに引っ張られているような痛み……。つて
いうか事実、腕を背中の方に思いつき引っ張られているんだけれども。

うふふふふ。黒い微笑をたたえながら変迅堂の腕を曲げちゃい

けない方向に曲げようとしているのはお鶴だった。

「変迅堂さんのイケない手はこっち？ それともあっちかしら？
うふふふふ」

うわあ、お鶴ちゃん、怖っ。

座ったままの目で変迅堂を見下ろしながら、まるで取り込んだばかりの洗濯物を置くかのように事務的に変迅堂の腕を曲げるお鶴。ホラーである。カルトでオカルトである。

まったくもう、誰だよお子ちゃま三人に酒を飲ませたのは！

「おやおやまああ」

そのうるさい輪から少し離れたところで、長介は呟いた。

「あの三人に酒を飲ませたが間違いだったかねえ」

おや、あなたでしたか長介さん。

頭巾を少しずらして、“失敗失敗”とばかりに頭をかいた長介は、ほっほっほと笑いながら異様なまでにハイテンションな四人の戯れ（というか、事実上変迅堂の袋叩き）を眺めるのだった。
と――。

「ふん、夜半だというのにうるさいことだ。月見にはもう遅かろうに」

不意に、長介の後ろから声がした。少し斜に構えたようできて、張りのある若い声。その声に気付いたのは長介だけだった。

はい？

長介が振り返ったその先には、侍が立っていた。

典型的な武家鬘に大小を手挟んでいる。黒い羽織に着流し姿という風体。そして帯には螺鈿細工が美しい十手と、こんな涼しくなった江戸には不似合いな扇子が挟まれていた。年の頃はさして変迅堂と変わるまい。まだあどけなささえ残る顔ではあったけれど、深く刻まれた眉間のしわがその男の若さを少しだけ殺いでいた。

その顔に見覚えのあった長介は、ああ、と声を上げる。

「あなた様は南町の……」

「いつぞやは世話になったな。南町奉行所与力・仁杉だ。うむ、そ

の言い方も違うか。最近妹も世話になっているようだ」

「妹……？」

長介が首をかしげる傍らで、仁杉与力はふんと鼻を鳴らして、変迅堂の周りの面々に声をかける。

「お鶴！」

その仁杉与力の言葉をきっかけに、お鶴は変迅堂への攻撃の手を止めた。そして、ぼつねんと仁杉与力を見やった。最初、誰が来ているのか分からなかったようだ。けれど、次第に誰が現れたか分かったのか、あ！と声を上げた。

「あ、兄上！」

その声色からは、既に酒色が消えていた。あまりにびっくりしたのだろう。

そう、今現れた仁杉与力とお鶴、兄妹なのである。実はごくごく最近まで離れて暮らしていたのだけれど、まあ色々とあって（もうここで言い表せないくらい色々であったのだ。詳しくは前作を参照のこと！）現在では一緒に暮らしているという、“一年生”の兄妹だったりもする。

まあともかく、お鶴の兄にして町奉行所与力・仁杉は地面に倒れる変迅堂に向く。

「なんだ？ 変迅堂、もう酒に吞まれてしまったのか？ まったくだらしがないな」

まるでチワワのようにふるふると震える変迅堂、ぐぐつと少しだけ視線を挙げて、ようやくの体で答えた。

「いえ、ちあき殿と勝次殿、あとはあなたの妹様の手にかかって、あの世に連れて行かれそうだっただけです」

「ほう、それはそれは」仁杉は口角を少し上げた。「楽しそうじゃないか」

「なんなら替って差し上げましょうか」

「残念、実に残念だ。本当なら替ってやりたいのだがなア。だが、医者に止められていてな」

【5】

あからさまなウソを吐きながら、カラカラと仁杉は笑う。その仁杉の言葉に歯噛みしながら、変迅堂が“ううむコイツ……”と、ちよつと苛立ちを感じていたのは言うまでもない。っていうか、そもそも「医者に止められてる」っていう言い草、なんだそりやという話だ。

「ふふん、全く、お前たちは本当にユカイなやつらだな」

そう仁杉与力は笑う。普段の皮肉っぽい笑みとは違って、どこか優しげでうらやましげな表情を浮かべているのは気のせいだろうか。さて、この仁杉与力、変迅堂の顔見知りである。

昔色々とあって（そこらへんの顛末は前々作を参照のこと！）かつては敵役だったのだけれど、気づけば変迅堂たちの味方になってくれている奇特な人である。変迅堂と年が近い（というか同じく二十二歳）ということもあり、変迅堂と友人付き合いをしている。とはいっても、きっと変迅堂からすればかなり付き合いにくい友人には違いないけれども。

そんな仁杉与力は、不意に変迅堂から視線を外してお鶴に向いた。

「さて、お鶴」

「な、なんですか？ 兄上」

心なしか、お鶴が緊張している。さっきまでの酒乱めいた言動がしつかりとなりを潜めている。

すると仁杉は顔をあからさまにゆるめ、お鶴に手を差し出した。

「ほら、帰るぞ。親父様が“お前の帰りが遅い”とうるさいのだ。まったく普段は無口のくせに、お前のこととなるとお人が変わるのだ」

「え、でも……」

少し憂いを秘めた目で、お鶴は変迅堂たちに目を向ける。性格には、とろんとした目でぐでんぐでんのちあきの横、足蹴にしている

カツちゃんの下で、時折「ぐえっ」とアマガエルのように声をあげる変迅堂に向く。その視線に気づいた変迅堂はぼそりと呟く。

「お鶴殿、いいこと教えてあげましょうか」

「なんです？」

顔をぐぐつと上げながら、変迅堂は答えた。

「仁杉さんは“親父様がどうの”とか言ってますけど、本当はそんなの、ただの言い訳ですよ。ね？ 仁杉さん？」

思わずお鶴は後ろに立つ仁杉に振り向く。

そのお鶴の目に入っただのは、うむむむむ、と口を緩めながら、普段の真面目くさった表情から打って変わった顔を見せる仁杉の姿だった。ぽりぽりと頬を掻きつつ、つかつかと変迅堂のもとに寄るや、仁杉は変迅堂を踏みつけにした。ふぎゆる。

「ぐえ！ 死ぬ！ 仁杉さん、踏みが強すぎですって！」

「……フン、お前が変なことを言うからだ、バカ者が」

ぽりぽりと頬を掻くのをやめない仁杉は、バツが悪そうにお鶴から少し外れたところに視線を置いた。

「さて、お鶴。もう夜も遅い。一人で帰るのも物騒だろう。きっと親父様もそうお考えのことなのだろう。だというのに、明日も仕事のある私を使うことはあるまいに……」

テレ隠しがバレバレである。

最初はうむむむ、と唸っていたお鶴だったけれど、やがて仁杉の手を取った。

「兄上、ありがとうございます」

「……うむ」

何ともつかない返事を浮かべた仁杉と力は、長介にちょっと頭を下げた。

「いつも妹が世話になっている。礼を言う」

「ほっほ、いえいえ、お気になさらず。……けれど、どうも商人のくせが抜けませんもので。礼の言葉なんかより、もっと実利が欲しいんですが……」

「金を払えと？」

「いえいえ、滅相めっそうもない。……いざって時に便宜を図ってくださいませ、ってお話ですよ」

奉行所の与力というと、現在でいうところの警察署の署長兼裁判所の判事、といった肩書になる。江戸の民事・刑事事件のほとんどに首を突っ込むことができる、とてつもない権力者である。そして、そういった権力者のところにすり寄り寄る人間がたくさんいるのは至極当然のこと。この時代、与力と商人、あるいは大名や旗本との癒着構造は当り前のようであった。金をバンバン与力の前に積んで「悪事を見逃してくださいね」という分かりやすいことを言う奴もいれば、長介のように縁を頼りに後々の便宜を取り計らってもらおうとする人もいる。長介のこの言葉は、特段珍しい言葉ではない。ではないんだけど、長介、やることがえげつないですね。

けれど、仁杉は言った。

「はは、一応聞いておこう。が、長介、たとえばお前が何か悪いことをしでかしたときには、容赦なくお前をお縄につけるぞ？ たとえお前から袖の下をもらっていてもそれは同様のこと。お前が普段お鶴によくしてくれているとしても、同様のことだ。ゆめゆめ忘れるな」

その言葉に、長介は呆れ顔とも感服顔ともつかない顔を浮かべた。

「ほっほ、物分かりの悪い与力様で」

「何か言ったか？」

「いえいえ」

ほっほっほ、と長介は笑う。まるでさっきまでの言葉をすべて笑い声で押し流そうとしているかのようだった。

「さて」

仁杉はお鶴に向いた。

「帰るとするか」

「はい」

こくりと頷くお鶴。

そしてそれを見届けるや、仁杉はお鶴の手をゆつくりと引いた。その引きの手に従うように、お鶴もまた一歩一歩歩を進める。そうして歩く二人は、何年も一緒に暮らしてきた家族のようにえもいわれぬ睦まじさの香りを残し、文人長屋をお暇いとましていった。

「ありやりや」

その後ろ姿を目で追いつつ、変迅堂は呟く。

「お鶴殿、お帰りですか」

「そうですなあ」

ふうとため息をついた長介は、空を眺めた。

「ぼちぼちお開きとしましょうかねえ。宴もたけなわなことですかなあ」

え？ どこが“宴もたけなわ”？ そう言いたげな文人長屋の新人居者たち。さっきからちあきやお鶴たちが大騒ぎしているせいで、自己紹介さえしていないというのに。啞然あぜんとした顔で顔を見つめる視線に長介は気づかないのか、ほっほっほ、と笑う。

「さてさて、皆さん、そうときまつたら片付けですよ、片付け」

ぐでぐでんに酔っぱらっているちあきとカツちゃん以外の面々は、のろのろと宴の片づけに取りかかった。そうやって片づけをする誰もが、「うにゅー、ぐるぐる」とか呟くちあきと、暴れすぎて酔いが回っているのか「うひー」と声にならない声を上げ始めたカツちゃんのことぐらやましく思えるのだった。

月は、そんな皆のことを笑顔で見下ろしていた。ニコニコ。

「ほっほっほ、良い宴会でしたなあ」

顎を撫でながら、長介はそう呟く。風が長介の頬を撫でて、赤らんでいる顔を少しだけ冷ます。すると、横を歩くカツちゃんが同意した。

「うをー。おうよ！ タダ酒ほど旨いものはないって言うしなア！」
「いかん、まだコイツくだを巻いてる。っていうか、息がまだ酒臭い。せつかくさつきまで寝かしておいてやったのに、まだ抜けてお

らなんだか。そんな心のつぶやきは、長介の腹のうちにのみ留め置かれた。

へゲレケなカツちゃんから視線を外すようにして、長介は変迅堂に向いた。

「変迅堂さん、重くはないかね」

すると、変迅堂は額に少しだけ光るモノを見せながらも、ほがらかに笑って見せた。

「はっは、ちあき殿、ずいぶんと軽いですから」

変迅堂は背中に背負うちあきに目を向ける。変迅堂に身をあずけながら、ちあきはぐつぐつと眠りの世界にあつた。ときどきむにゅむにゅと何かを呟いている。けれど、変迅堂にはそれがどういう意味合いの言葉なのか、さっぱりわからない。そもそも、分かる必要もないのだろう。

さて、夜道をこうして四人が連れ立って歩いているのには理由がある。

宴会の後、酔っぱらったちあきをしばらく寝かしておいたのだけれど、一向に目覚める気配がなかった。むにゅむにゅと夢の世界に遊んでいるちあき。かといって、文人長屋に泊めるわけにもいかないので家に帰そうという話になった。そこで、日本橋に家がある長介と、他のところに長屋のあるカツちゃん、そして大人である変迅堂がちあきを送ることになったのだった。……とはいっても、「ワシ、最近腰が痛いよね」とウソ臭く腰を叩く長介にちあきを担がせるわけにもいかず。「アア？ 俺っちがちあつちゃんを？ おう、いいいいいいいい……」と、今にも立ったままで眠ってしまったそうなカツちゃんに担がせるわけにもいかず、結局変迅堂がちあきを背負う羽目になっているのだけでも。

「でも」

変迅堂は不意に空を眺める。その視線の先には天頂てんていに向かおうとしている月の姿があつた。月はただ、下天を歩く一切衆生しつていしゅうじやうを照らす。なんだか月の光が心地いい。

「ずいぶんと、時が経つたものです」
「ほう？　といいますと」

【6】

話を先に促される格好になった変迅堂は続けた。

「私が江戸に流れてきて、ちあき殿と出会った頃、まだちあき殿は私の腰くらの背しかない子供でした。けれど、気づけばもう背負わないと運べないほどに大きくなっているんですね」

「ほっほっほ、確かあなたがお嬢さんと初めて会ったのは、江戸に流れてきてすぐのことらしいですから……」

先回りして、変迅堂は答えた。

「ええ。五年ほど前のことだと思います」

五年。

その言葉に、変迅堂はまた空を見上げる。まるでそこに自分の歩いてきた道があるかのように、目を細めて。けれど、その表情のありどころが、長介にはよくわからずにいた。どこかへふらふらと歩いて行ってしまいそうなカツちゃんの裾をちょこんと握りながら、長介は言葉を紡ぐ。

「まあ、そういうものですよ、変迅堂さん。子供はいつか大人になる。けれど大人はいつまで経っても子供の変化に気づけずにいる。そしてあるとき、気づくんです。“ああ、いつの間にかこの子も大人になっていたんだな”と」

「そういうものですかね」

「ええ。そういうものです。……五年前に江戸に流れてきた頃にはあなただつて立派な子供でしたよ？ 変迅堂さん？」

「ぐむむ……」

変迅堂、ぐうの音も出ない。

そんな変迅堂に向け、突然長介はニヤリと微笑みかけた。一言でいえば、何かを企んでいる顔だ。

「な、なんですか？」

その顔には何度も痛い目を見ている変迅堂、思わず身構える。そ

の仕草さえ想定通りといった風ににんまりと笑う長介は、口を開いた。

「ちあきさん、きっと良いお嫁さんになるでしょうなあ。仲人なこうとやらせてもらいますよ、その時には」

「は!？」

思わず変迅堂、背中のちあきを取り落としそうになる。けれど、当のちあきがぐーすかと眠りながらも変迅堂にしがみついているおかげでそんな心配はなかった。ゴホゴホとせき込みながら、変迅堂はその長介の言葉に答える。

「ななな、何を言っんですか長介さん！　そもそもちあき殿はまだ子供……」

「まったく、何を顔真つ赤にしてるんですか変迅堂さん」ふふんと長介は鼻で笑う。「言っただでしょう。子供だっていつかは大人になる。それに、なんで変迅堂さんが顔を真つ赤にするんですか」

「へ?」

「別にわたしは、お嬢さんの相手について、何一つ口にしておらんのだが?　誰がお嬢さんの相手だろうが、私アお嬢さんの仲人をやりますよ、っていうごくごく普通の主張なんですがねえ」

「あ」

そうなのだ。さつきから確かに長介、ちあきの相手については全く言及していない。ただ、話の方向からなんとなく変迅堂が誤解しているだけの話だ。っていうか、誤解させる風に話をもっていったのだ。まったく、なんていうじいさんだ。

いよいよ顔を真つ赤にする変迅堂。ちょうどそのころになって、大きな十字路に差し掛かった。見計らうかのように、長介は呟く。

「お、ここいらでお別れですなあ。私はこの」長介はおと染め抜かれた半纏の裾を持ち上げた。「ボウヤを家まで送り届けるとしましようかな」

「ただだ、誰がボウヤだこんちく……うつぷ!」

吐き気によって言葉をブロックされた格好になるカツちゃん。口

元を抑えながら、青白い顔をしていた。典型的なヨツパライの顔である。

ほっほっほ。裾をぐいぐい引つ張りながら、長介は辻を右に折れる。

「それでは変迅堂さん、お休みなさい。お嬢さんをしっかり家までお届けくださいね」

「ええ」

ちょこんと頭を下げる変迅堂を、長介にぐいぐい引つ張られているカツちゃんにらが睨む。

「おい変の字イ！ ちあつちゃんがおとなしいからって、変なことしやがったら承知しないからなあ！ この無粋者があ！ もし変なことしてやがったら……うつぷ」

「うわあ、汚い子ですなあ」

「しょうがねえだろ！ 大声で……おえー」

なんだか聞くに堪えない会話（？）を繰り返しながら右の辻に消えた二人にひとしきり苦笑いを浮かべ、変迅堂はくるりとちあきの長屋へと続く辻に足を向けた。前も後ろも真つ暗。大通りに面する見世見世が、明日の朝日を待つて静かにしている。犬っころ一匹通らない道の真ん中、変迅堂はゆっくりと歩く。背中であぐさすり寝ているちあきを起こさないように。

風が吹いた。この時期の風は、もうずいぶんと冷たい。けれど、それほど寒さを感じないのは、小袖越しに感じるちあきの体温のおかげで背中が温かいせいだろうか。少し後ろを振り向く変迅堂。すーと寝息を立てて、幸せそうに微笑んで眠るちあき。なんの拍子か、ぎゅぎゅつとまた回していた手の力を込めてきた。ちあきにくすりと微笑みかけ、また前を向く。

「……ん、せんせい」

不意にはつきりとした声が辺りに広がった。

はっとしてまたちあきの方を向く。けれど、ちあきは目を覚ましていなかった。目を伏せて、変迅堂の背中に乗っかっている。きつ

と、夢の中で変迅堂に呼びかけているのだろう。

けれど、そんなことは分かりつつも、変迅堂はちあきの言葉に應じる。

「なんだい、ちあき殿」

むにゅむにゅとうわ言を呟いて、またスーシューという寢息に変わる。

寝ちゃったか。

変迅堂がまた前を向いたとき、ちあきはぼそりと呟く。さっきまでの寢言とは違って、ものすごくクリアな声だった。まるで、今宵の月明かりのように。

「はやく大人になりたいよ。だって……」

「だって？」

「だって——」

けれど、その先は続かなかった。

また、ちあきは眠りの世界に逃げ込んでしまったのだった。

ずるりと落ちそうになるちあきを持ち上げ直し、また変迅堂は歩きます。そして、何かの拍子に、変迅堂は口を開いた。まるで、自分へ放つ言葉のようにして、訥々と。

「そういうものでもないさ、ちあき殿。早く大人になったって、いいことなんてまるでないよ。だって私は——。大人になって、いろんなものを失くしてしまったような気がするもの」

変迅堂はふと、自分がちあきくらいの歳だった頃のことを思い出していた。

そうやって探り出してみると、いろんな思い出のカケラたちがあった。きつと嫌なことも多かったのだろうけど、それでも毎日が楽しかったような気がする。

「一体私は」

変迅堂はひとり、呟く。

「いつ、無くしてしまったというんだろう」

その問いへの答えは、いつも変迅堂の胸の中に用意されていた。

けれど、その答えを引つ張り出すことができないでいる。その答えを引きずり出すためには、あまりに自分の心をズタズタに引き裂いてやらないとならない。自分の幼い恋心と、相手への幼い思慕の気持ち。幼い気持であることは自分が一番よくわかつてはいるけれど、幼い感情であるがゆえに、変迅堂を深くとらえている。そして、浮かんでは消える、ある女の子の顔。

ふう、溜息をついた変迅堂は、ちあきに語りかける。

「大人になるってことは、大変なことなんだ。そんな急ぐ必要なんてありはしないよ」

ちあきはただ、スースーと寝息を立てるばかりだった。

変迅堂はぶんぶんと頭を振った。まるで頭の中にこびりついてい
る思いをすべて追い出そうとしているかのように。そうして頭から
振り払いたいものは去ってくれたのだろうか。変迅堂にさえ分から
なかった。けれど、それでとりあえず振り払ったということにして、
変迅堂はまた闇の中を歩き始めた。

と――。

不意に、変迅堂にしがみつく手の力が強まった。ちあきだ。

「せんせい」

楽しそうな、とろんとした口調。やっぱりまだ、眠りと現実の世
界を行き来しているらしい。

「せんせい、だいすき」

少しはかなげに笑い、変迅堂は月を見た。月は何も言わない。

「私も好きですよ、ちあき殿のこと」

けれど悲しいことに、ちあきの言う“好き”と、変迅堂の言う“
好き”には、ずいぶんと距離がある。そしてさらに悲しいことに、
変迅堂はそれに気づいていないのに、ちあきは薄々それに気づいて
いる。

浮世つてえのは、上手くいかない。

そんな二人を見下ろす月は、難しい顔をしていた。“人間つてえ
のは大変なんだね”と言わんばかりに。

けれど、そんな二人を応援するかのように、月は二人に光を投げかけ、真っ暗な道にほんの少しばかりながら行く手を見せてやっていた。

【1】

とげとげしい朝日を浴びながら、イエモン氏は帰途を歩く。歩きながら、“夜に会ったアレはなんなんだろう”と首をかしげる。

赤い羽織をはおった中年の二本差し。会ったのはわずか数刻前にもかかわらず、イエモン氏の脳裏にはもう赤い羽織の陰しか残っていない。あの男の顔の造形がどういったものであったか、全く思い出せずにいる。印象が薄い、どころの騒ぎではない。印象がない。あの赤い羽織を脱いでしまったら、あの男は江戸という街に溶け去ってしまうのではないかと余計な心配をしてしまいそうなほどだ。

けれど、それがゆえに覚えている。あの、赤い羽織。菓種の赤でもない。さりとて、桜や桃の花のようにほのかな赤でもない。火のように攻撃的な赤でもなければ、血のように不気味な赤でもない。そうやって様々な“赤”を弾いていっても、あの赤色が何の赤なのか分からない。

「まあ、いいか」

あまりに不気味すぎた。だからこそ、何かを考えようとする頭を無理矢理に止める。考えすぎればすぎるほどきつと分からなくなっていく。そんな気がしたからだ。

明け始めた江戸の街は、職場に向かって走りゆく江戸っ子たちであふれる。魚河岸に向かう魚屋。どこかの現場に向かう大工や鳶。あくびをこきながら自分の店に向かう番頭さん。皆、始まる一日に向かって一歩一歩を踏み出していた。

俺とは違う。

イエモン氏はふと自分の一歩とすれ違う江戸っ子たちの一歩とを比べてみた。けれど、あまりに不毛な比較だということに気づいたイエモン氏はそこで考えることをやめた。

そんなこんな悶々と物事を考えているうちに、ようやく自分の長屋に帰りついた。

イエモン氏の身の嵩に合った、それはそれはボロい長屋だった。長屋の戸がなければ、そこが長屋かと疑うほどに汚い。ドブの覆いは殆どはがれてしまっているし、厠の戸板も半分は破れてしまつて、そこから鼻をつくにおいが漏れ出ている。この時間ならばどこの長屋でもお内儀様の井戸端会議が繰り広げられているところだけれど、この長屋の井戸には誰もいなかった。この長屋には、お内儀なんてものがいないのだ。この長屋に住むのは、楽な暮らしがしたくて江戸に流れてきたはいけれどまるで仕事にあぶれてしまつた連中や、あるいは社会から弾かれてしまつた連中ばかりなのだ。そんな手合にお内儀などいない。いたとしても、とうの昔に逃げられてしまつている。

まるで墓場のようにしんと静まり返つた長屋の中を歩くイエモン氏は、脇目もふれずに自分の長屋の戸の前に立つた。

「おーい、帰つたよ」

ガラガラ、と戸を開けた瞬間、すぐにイエモン氏は異変に気付いた。

そもそも、そうやって戸を開けたときには、妻のお岩が返事をしてくれる。内職の傘張りをしながら、「おかえりなさい、あなた」と笑顔で迎えてくれるはずだった。

が、そうやって迎えてくれるはずの妻が、お岩が、どこにもいなかった。

あるのはただ、お岩が内職している傘たちと、まだ張られていない傘の骨たちだけだった。部屋のほとんどを埋める傘は、この部屋に住む者たちよりもはるかに大きな顔をして座っている。それがあまりにわびしいものがあつて、イエモン氏はこの家が好きになれずにいる。紙を張るときに使う米糊の、あまつたるくて貧乏くさい匂いも好きになれない。

「お、おい」イエモン氏は声を上げる。「お岩ちゃん、今帰つたよ」イエモン氏は弱弱い声を振りまきながら少し薄暗い部屋を見渡す。けれど、長屋に隠れるところなんてありはしない。イエモン氏

の横に見えるかまどには鍋が乗っていた。けれど、かまどに火がともっていない。いつもならばほかほかの米と一汁くらいは用意されているはずなのに。

「お岩ちゃん？ お岩ちゃん！？」

おたおたとしながら辺りをうろろろするイエモン氏。総髪を掻きむしりながら、座布団をめくったり小さな箆笥を開け閉めしたりしているイエモン氏を見るに見かねたのか、あるいはただうるさかっただけなのか、入口の戸の方からイエモン氏に呼び掛ける声があった。

「イエモンさん、落ち着きなさいな」

「へ？」

イエモン氏の振り向いた先にはこの長屋の大家が立っていた。この長屋の大家らしく、どこか卑屈でどこか世を諦めた風のある老人だ。いつも、イエモン氏はこの顔を拝むと嫌な気持ちになる。

その大家に向かい、妻のお岩の行方を聞いた。すると大家はつまらなそうに答えた。

「ああ、お岩さんね。昨日、倒れたよ」

「な、なんだと！」

今にもつかみかからんばかりのイエモン氏を避けながら、大家は耳の穴を小指でほじっていた。

「ああ、昨日の夜だよ。なんだかこの長屋の方から変な音がしてね。瀬戸物が割れたような音さ。まあ他の連中ならそれで放っておくんだが、何せお岩さんにはよく世話になっているからね。心配になって部屋を覗いたんだ。そうすると、中でお岩さんが倒れていた、つて寸法さ。で、医者を呼んで介抱させたんだ」

「で、お岩ちゃんはどこに！」

「うるさいね、一々がなりなさんな」

実につまらなそうにそう呟いた大家は、隣町にあるお医者の名前を挙げ、その医者の方に預けてある旨をイエモン氏に説明した。

「わかった！」

そう言うや、イエモン氏は取る物とりあえず駆けだした。

お岩ちゃん、お岩ちゃん、お岩ちゃん！

イエモン氏は走った。普段の運動不足がたたってすぐに悲鳴を上げる自分の膝を叩きながら。手挟んでいるだけで重い刀を睨みながら。江戸っ子たちは皆、そんなイエモン氏のことをまるで厄介者を見るような眼で見つめていた。けれど、そんな視線につきあう暇はなかった。途中往来を歩く子供や大人にぶつかりながらも、その医者者の所に向かつて走り続ける。

そうやってぐんぐんと走る速度を上げるイエモン氏は、そのままのスピードでお医者様の玄関の戸をぶち破った。

「お岩ちゃん！」

イエモン氏は叫んだ。自分の恋女房が倒れた。そんなことがあつてたまるか。ちくしょう。ちくしょう。

「お岩ちゃん！」

「何が“お岩ちゃん！”だ！うるさいぞ！」

不意な一喝に、思わずイエモン氏はたじろく。もともとあまり肝が太い方ではない。その上に、とてつもなくドスの効いた大声に縮み上がってしまった。

その声に遅れることしばらく、奥からのつそりと髪の毛をそり上げた男が出てきた。鋭い眼光に頬にある傷のせいで、どう見てもヤクザさんにしか見えないけれど、紺色の野良着に黒い羽織というお医者様然とした格好。おそらくは、この人が医者なのだろう。

その男は、はげ頭を撫でながらイエモン氏の足元を見やる。

「おーおー、まあ、ずいぶんと派手にぶち破ってくれたもんだ」

まるで熊のような風体。そしてのっそりとした言葉。そのせいで、少し気おくれが無いでもないイエモン氏だったけれど、そんな自分の臆病風を無理矢理打ち払いながら声を荒げる。

「んなことはどうでもいい！お岩ちゃんはどうした！」

「“お岩”？ああ、昨日担ぎこまれてきたお若い細君か。……おい、アンタ」

「な、なんだよ」

イエモン氏がそう口を開いた瞬間だった。
ごっつ。

思いつきり、イエモン氏の頭に痛みが走った。何のことはない。目の前のお医者がイエモン氏に固い拳骨をくれたのだった。イエモン氏の横鬢よこびんを思い切りとらえた拳骨はそののち空を切った。そしてその拳骨にやられたイエモン氏は思い切り玄関のタタキに倒れ込んだ。

「一体、細君に何を食わせていたのだ」

「な、どういう意味だ」

打たれた横鬢を抑えながら、イエモン氏は訊く。横鬢に残る感覚それは痛みではなかった。痛みを通り越して、横鬢に淡く違和感を覚える程度だった。くらくらと目の前に星が踊るばかりで、何の変調もない。

「いや、違うか。何も食わせていないからこうなっているのだろうしな」

「なんだと？」

「医者である俺の見立てだ」お医者はまるでゴミを見るような眼でイエモン氏をにらんだ。「お前の細君は、ひどく痩せているぞ。しかも、ただの痩せ方ではない。人間にとって大事な筋骨から痩せている。あれは、あまりものを食べられないことに起因する痩せ方だ」
へ？

イエモン氏は、ふとおとといのお岩の姿を思い出した。

自分にごはんのみそ汁、あとイワシを出したお岩は、何を食ってたっけ？

そうやって記憶の底を浚あらいいだすうち、イエモン氏はようやく気付いた。

お岩が、何も食べていないことに。

おとといは確か、「あんまり食欲がないの」と淡く微笑んでいた。その前の日は、「なんだか夕餉ゆづけの支度をしているうちにお腹がいっ

ぱいになっちゃった」と笑っていた。そしてまた前の日は、「味見をしているうちにお腹がふくれちゃって……」とやっぱり笑っていた。またある日は、「傘の納期が近いから……」と糊八ケを持ちながら笑っていた。

【2】

いつもいつも、お岩は笑っていた。だからイエモン氏は気付かなかった。「へー、そうか」と全然気にしていなかった。

けれど、気づくべきだったのだ。日に日に痩せているお岩のことに。

何も言えずにたたきに尻もちをついたままのイエモン氏に、お医者者は問うた。

「アンタ、なりは武士のようだが、どこかの家中の者なのか？」

イエモン氏は唇を噛んだ。そして、こう答えざるを得ない自分のことを、初めてちつぽけなものだと思えた。

「いえ、無職、です……」

お医者様に通された部屋の中で、お岩は眠っていた。

お岩のほかに、眠っている者はいなかった。夜にはそこで眠っているのだろう女性患者たちは、縁側で太陽の光を浴びたり、庭の花を愛でていた。「あまり、ここには重篤な患者はおらん。重篤な患者は小石川を紹介してしまうでな」と、なぜかお医者はいきなりことを言った。

ぐっすりと眠るお岩の枕元に座ったイエモン氏は、お岩の顔を覗き込んだ。

実に、深く眠っていた。日々の暮らしに疲れた一人の妻が、こうしてつかの間の眠りの世界に落ちている。

ふとイエモン氏はお岩との約束を思い出していた。

まだ、さる家中で武士をしていたころ。家中の憧れ江戸出府から数年経って、同じ家中に籍を置く少し格上の武家のお嬢様と恋に落ちた。その娘がお岩だった。結婚する前に、イエモン氏は確かにお岩に約束したのだった。

『お岩ちゃん！ 絶対に、俺、出世してお岩ちゃんに楽させてやる

から!」

お岩の家だつて、そこまで裕福なわけではなかった。イエモン氏の家よりはまだマシなものの、サンピンに毛が生えた程度だった。そんなイエモン氏の言葉に、お岩は笑つてこう応じるのだった。

『別に出世なんかしないでいいの。それに、イエモンさん、お優しいです。出せなんかできませんよ。それより――』

と。そうやつてともすれば冗談として流されてしまった約束だったけれど、イエモン氏の中ではしっかりと生きた言葉だった。けれど、結局そんな約束も、しばらく前、家中の人員整理に引つかかつて浪人生活となつてしまい、結局反故^{ほんご}になつてしまったのだけだ。

ふっと、障子越しに光が部屋に投げ込まれた。

そのやわらかい日差しに、お岩が目を覚ました。最初は夢現^{ゆめうつつ}の目つきだったけれど、目の前に夫の顔を認めたのだらう、お岩は目を少し伏せがちにした。

「ごめんね、あなた」

「なんで、謝るんだよ」

お岩は布団の間から手を伸ばした。そして、両手でイエモン氏の両頬を包み込んだ。そして、その時に初めて、イエモン氏は自分の頬に伝う冷たいものに気付いた。

「心配、かけちゃったみたい」

ぶんぶんと頭を振ろうとしても、お岩の両手に阻まれてそれすらできない。そんな自分が、本当にちっぽけなもののように思えて仕方なかった。イエモン氏はお岩の手を取った。ひどく痩せて細い指が痛々しかった。そして、死人の手のように熱のない手を握りながら、イエモン氏はただお岩を見つめる。

「ごめんね、私が不甲斐ないばかりに」

「お岩ちゃんが悪いわけじゃないよ」

言葉はそれしか出てこない。もっと言いたいことはたくさんあった。けれど、それが形になることはなかった。あまりにちっぽけな自分に、声も出ない。

そんな頃、後ろで無言のまま立ちつくすお医者様が言葉を放った。

「おい、患者に障る。ぼちぼち席を立つてくれ」

「！」

思わず刀の柄に手を掛けそうになるイエモン氏の手を、ふんわりとした手で止めたお岩。はっと正氣に戻ってお岩の顔を見つめると、お岩は弱弱しく首を横に振った。その顔は本当に安らかで、まるで菩薩様のような顔だ。

そうだった。ここで刀を抜いて何になるというのだろうか。

つくづく、自分の浅はかさに腹が立った。

ああ、なんて俺はダメなんだろう。イエモン氏の心のつぶやきは、ただイエモン氏の心の奥に押し込まれることとなった。

去り際、お医者様は言った。

『差し出がましいことだとは思ったが、お岩の実家の方に連絡をさせてもらった』

どういうことだ。そう訊くと、お医者様は首元を掻きながら答えた。『お前の細君殿は飢えている。飢饉でもないのに飯を食っていない。そして、お前に飢えている様子がない。ということは、導かれる結論はただ一つだろう。いかに夫婦の契りを結んだとて、どちらかがどちらかを食いつぶしていいという法はない。そして、俺は医者だ。医者であるからには、患者のことを最優先に考えなくてはならん』

その通りだった。

どんな理由があるにせよ、お岩が栄養失調で倒れたということは、そういうことだ。しかも、自分は全く飢えていないとなれば、夫が妻の分まで飯を食いつぶしていると言われても仕方ない。“知らないかった”なんて口上が通じるわけもない。

どこに行くあてもなくて、長屋に帰るしかなかった。

そうして長屋に着いたはいいいけれど、今一番会いたくなかった人が、長屋の前で待っていた。

その姿を認めるや、イエモン氏は反射的に頭を下げた。

「あ、ち、義父上」

殆ど白髪の髪を武家髷で結っている。茶色がかった羽織に鼠色の袴を着て、二本差しを差している様はなぜか痛々しかった。お岩の実家は後継ぎが早世して、その死んだ後継ぎの子が家を継ぐにはあと十年ほど時間がかかる。そんな事情で、未だに隠居もできないのだろう。そこに立っていたのは、お岩の父親で、イエモン氏からすれば義理の父親であつた。

「ああ、久しいな。イエモン」

その姿が目に入つた瞬間、イエモン氏は義父の変化に気づいていた。前に会つた数年前と比べて、はるかに服が粗略なものに変わつていた。お岩の義父は仕事ぶりよりもむしろ洒落者として家中でそれなりに知られていたくらいで、縮緬の羽織やら裏地のきれいな下帯やらを自慢して歩いていた。それが今では、麻かと思まごう程によれよれの羽織をまとい、雪駄もひどく汚れていた。前の人員整理以来、かなり家計が厳しいのだろう。

イエモン氏を見つめるや、義父は疲れた声を上げた。

「話はすべて医者から聞いた」

「……そうですか」

イエモン氏は何も言えなかった。

「お前に娘を任せたのは、間違いだつたようだな」

何も言えなかった。イエモン氏には、何も言う権利がなかった。

恋女房をあれだけ痩せさせたのは誰だ？ 栄養失調になるまで食わせてやらなかったのは誰だ？ そんな妻を尻目に、毎日グダグダと酒を飲んで辻斬りに手を染め、働きもしなかったのはどの誰だ？

イエモン氏は、自分の胸の中からわき起こる詰問の言葉と戦い続けていた。

「やはり、お前が家中から召し放ちになつたときに、娘を取り戻しておくべきだつた」

きつと、そうだつたに違いない。イエモン氏は卑屈ではなくて本当にそう思った。

しわだらけの義父の顔には、刻まれたしわより深い悔恨の跡が見て取れた。

「イエモン」

義父はイエモン氏に向いた。イエモン氏は、どこか虚ろな目をして義父に向いた。なぜか、義父が泣きそうな顔を浮かべていた。けれど、それがどうしてなのか、イエモン氏にはさっぱり分からなかった。

「娘を返してもらおうぞ」

その言葉の意味を、ぼんやりとした頭で考える。けれど、どんなに考えても答えは一つのようなだった。つまり、離縁。

「義父上」

「何だ」

不思議な目をして、義父はイエモン氏を見つめていた。その目には、娘を飢えさせた婿に対する憎しみの色は灯っていなかった。その目は憐みにも似ていたし悲しみにも似ていた。疲れているようにも見えた。だから、イエモン氏も言葉をどう継いだらいいものか分からなかった。

結局、イエモン氏はこう言うしかなかった。

「……何でもないです」

「そうか」

数日のうちにお前宛に離縁状が届くだろう、と言い残し、義父は長屋を後にした。

しばらく見ないうちに、義父は足を引きずって歩くようになっていた。背中に刻々と迫りくる老いが積み重なって押しつぶされようとしているように見えた。

何でもない、か。

イエモン氏は、さっき自分が放ってしまった言葉を嗤^{わら}った。

馬鹿か、俺は。

何をしてるんだ、俺は。

がらがらと、空が音を立てて崩れてくるような錯覚に襲われる。

全く重みも苦しみさえない重荷につぶされて、俺は死んでゆくのだ
ろうか。そんなことをぼんやりと考えながら、イエモン氏は部屋の
戸を開いた。

【3】

。 次の日、特にやることもなくて、結局お岩のところを足で運んだ。お岩は本当に嬉しそうな笑顔を浮かべてイエモン氏を迎えた。けれど、それがイエモン氏を逆に追い詰める。

「どうなの、加減は」

その問いに、お岩は曖昧に微笑む。

「うん、先生がいい薬を出してくれてね、おかげでだいぶ調子がいいの」

ウソだ。栄養失調に効く薬なんてありはしない。栄養失調に効くのはお粥かゆに塩気しおけだ。きつとお岩のこと、イエモン氏を憚はばってそんなウソをついたのだろう。

「ごめん、お岩ちゃん。俺が……」

その口を、お岩が塞いだ。ずっと手を伸ばして、イエモン氏の唇に掌を押し付けた。

「いいの。いいのよ。だって、あなたは数年前まで家中で頑張ってたんじゃない。この数年間は、休みのなかったあの頃の埋め合わせなのよ。それに――、きつとあなたは、いつかどこかの家中しゅっしに出仕が決まって、またあくせく働くようになると思うの。だったら、今は少しお休みくださいな」

数年前。イエモン氏は何が何でも出世しようとあくせくと働いた。この時代、出世は並大抵なことではない。一代賭けても一つ上の役職に出世できれば御の字だった。むしろそれが分からないイエモン氏ではなかった。同僚の三倍は働いた。それでも足りないような気がして、長屋に仕事を持って帰ったくらいだった。そうして若夫婦の長屋は家中の書類で溢れ返っていた。けれど、お岩はそんな状況に何一つ文句を言わなかった。むしろ、応援してくれていた。

「イエモンさん、もっと胸を張って？ あなた様は誰よりも真面目

で、誰よりも出来る人なんだから。それは私が一番知ってる。だってイエモンさんは、私の恋亭主なんだもの」

もう、この生活を続けてずいぶん経つ。人員整理にあつてから、もうかれこれ数年はこの生活を続けている。最初のうちは仕官の先もあるだろうと色々な家中を見て回った。けれど、どの家中でも「人員は一杯でござる」と門前払いを食つてしまった。どここの家中もカツカツな生活で、どこにも余剰な石いしなどない。そうやって何十もの家中から門前払いを受けるうち、もう就職活動さえイヤになつてしまった。そして、ありきたりな、酒に逃げ、他人に当たり散らす毎日。

何をしているんだろう、俺は。

もう昨日の夜に何度も繰り返した問い。けれど、答えを見ることがなかった問い。

そうやって呆けるイエモン氏の前で、不意にお岩は上体をすくど起こした。そうしてイエモン氏を見つめる目は、ひどく潤んでいた。

「……ごめんなさい、イエモンさん」

「何が」

「昨日、父が長屋に来たでしょう？」

「うん。いらしたよ」

「父は心配性なのよ。ただふらつとして倒れただけなのに。一度嫁に出した娘に干渉すぎよね。……でもね、イエモンさん、きっと父は——」

「わかつてるよ」

イエモン氏は虚ろに頷いた。昨日見えた義父の顔。そして、苦悶に満ちた言葉たち。別れ際の義父の姿を脳裏に思い浮かべるうちに、なんとなくお岩の言わんとすることが分かつてきた。

「ごめんね、イエモンさん。婚儀の前に交わした約束、反故ほんごになっちゃいそう。本当にごめんなさい」

婚儀の前に交わした約束？

イエモン氏はお岩の言葉を心の中で繰り返す。けれど、そんな約

束のことなど、さっぱり思い出せなかった。

そんなイエモン氏を知ってか知らずか、お岩は言った。声を震わせながら。

「ごめん、なんだか疲れちゃった。眠るね」

イエモン氏から視線を外すようにして布団をかぶり、彼女はその身を横たえた。

イエモン氏は立ち上がった。そして、お岩に問う。

「お岩ちゃん、また来るね？」

けれど、お岩からの返事はなかった。少し返事を待ってはみたけれど、ついに返事は来なかった。

酒でガンガンと痛む頭を抑えながら、イエモン氏は部屋の戸を開いた。

その瞬間、イエモン氏はあることに気づいた。

部屋にあれだけ置かれていたはずの、傘張り関係の道具や納品する傘が全て消えていることに。がらんとした部屋を見渡すと、部屋の真ん中に一枚の紙と巾着が置かれていた。その紙は、傘屋の置き書きだった。その置き書きには、“今日を以って傘の内職をやめると連絡があつたので、貸し出した道具全てを引き揚げる”旨、そして“張ってあつた傘の代金を置いておく”旨が書かれていた。月明かりによつて、なんとか読めたその文字たちは、残酷な現実を如実に物語っていた。

紙の横に置かれていた、巾着袋を手にとった。じやり、と音がした。中を開くと果たして銭が幾分が入っていた。確か、張り終わっていた傘はずいぶんとあつたはずなのにこれしきの金にしかならぬのか、と右手に広げた銭たちを眺めながらイエモン氏は溜息をついた。そして、その一瞬後に、自分が傘張り数十本分の働きの銭で、酒一杯を飲んでいたという事実に思いが至る。

誰もいない、がらんとした長屋。板張りの部屋にごろんと寝転がり、窓の外を見やる。月が奇麗に輝いていた。月明かりは半開きの

障子から部屋の中に忍び込んできてイエモン氏の頬を染める。

この前まで、この部屋には夥しい傘たちで溢れていた。紙を張られるのを待っている、骨だけの傘たち。張り終わって、糊が乾くのを待っている傘たち。納品を行儀よく待っている、完成した傘たち。人よりも傘の占める場所が多かった長屋。そのはじっこで、いつもお岩は微笑んでいた。けれど、今、どこにも傘はない。そして、どこにもお岩はいない。あれほどイヤだった米糊の甘ったるいにおいさえ、暗香としてさえ残っていない。

不意に、イエモン氏は上体を起こした。

そして、帯から刀を引き抜いた。さしたる業物ではない。イエモン氏の先祖がまだ戦働きをしていたころ買い求めたとかいう刀。どうせ足輕に毛が生えたような先祖だったのだろうから、きつと凡百とある刀のうち、それなりに仕立てのいいものを選んだだけなのだろう。赤さびが出てしまっている刀を鞘から抜き放つ。

このまま生き恥をさらすくらいなら。

このまま負け犬人生を歩くくらいなら。

イエモン氏の頭をかすめたのは、“切腹”の二文字だった。

切腹に使うには少々長い刀を自分の腹に向ける。切腹の作法なんて知らない。ただ、左に突き立てて右に掻つ捌けばいい。ただそれだけのことしか知らない。けれど、ただそれだけのことで武士として死ねる。

けれど、イエモン氏にはどうしてもできなかった。

双眸から涙を流すイエモン氏の手から、刀がこぼれおちた。ガシヤンと鳴って、床に転がる刀はくるくると回る。

イエモン氏を止めたのは、やはりお岩だった。

お岩の笑顔。泣き顔。あきれ顔。ふてくされた顔。

ころころと表情を変える妻。いつから俺は、あれを当り前のこととして受け止めていたのだろう。

なんて俺は――。

そうやって、自分と戦うさなか、イエモン氏の背中に声が浴びせ

られた。

「いやあ、大変そうですね」

どこかで聞いた声。まるで実感のこもらない言葉を、さもそれが親切であるかのように放つ、傲慢な言葉。イエモン氏はゆっくりと振りかえった。そのイエモン氏の目には、赤い羽織が目に入った。

「いや、どうも。切腹中のところ、失礼」

いつの間にか戸の横の壁に身を預けていた赤い羽織の男はうやうやしく頭を下げた。そして床に転がった刀を無造作に拾い上げ、イエモン氏に差し出す。まるで売り物を客に手渡す魚屋のような手つきで。武士の魂を扱うようなうやうやしさは無かった。

「ほら、刀を取り落としては切腹なんか出来はしませんよ。それとも」

赤い羽織の男は、少し羽織を揺らせた。

「最初から、切腹する気なんかないんですね」

「なんだと？」

「いえいえ、関ヶ原から早二百年。一生のうちにやるかやらぬかも分からない切腹の作法を覚えている武士なんてむしろ古風に過ぎるというものでしょう？ それに、見たところ、あなたに守るほどの体面があるとは到底見えませんがね」

全くその通りだった。

もう既に浪人している人間が切腹などしたところで、守るべき家もない。実家に妻が連れていかれてしまう今、守るべき家族すらない。イエモン氏は、何も持ち合わせていない。

あまりに赤い羽織の男の言うことが正しすぎて、イエモン氏は継ぐべき言葉が見つからなかった。

そうやって塞ぎこむイエモン氏を見かねたかのように、赤い羽織の男は口を開いた。

「いやいや、イエモンさん。別にあなたを落ち込ませにここまで来たわけじゃありませんよ」

なぜ俺の名を？ そんな疑問は浮かんでは消えた。

「この前、お話ししましたよね？ 仕事の話。あれ、やっては頂けないかと思ひましてね」

「この前、断つたはずだが」

虚栄を張るイエモン氏を見透かすかのように、赤い羽織の男は二イと口角を上げた。いやらしい笑顔の作り方だった。

「この前はこの前の都合がありましたのでしょう？ きつと、この前のイエモンさんは気が立っていて、それどころじゃなかったんですよ。そういうことは往々にしてあるものでしょう、あまり気にしてませんよ。それに、見たところ、だいぶ事情に変化があらひのようですしね」

【4】

それはその通り。事情がずいぶんと変わっている。何が何でも、嫁がなくてはならない。そうして、お岩を取り戻さなくてはならない。だけれど、一度栄養失調にまでしてしまったような男にもう一度娘を預けるからには、向こうだって形ある“証拠”を見たがるだろう。

「……アンタ、武士だったな」

「ぼそりとイエモン氏が問う。」

「ええ。そうです。名前をお教えする事は出来ませんが、さる家中の禄を食^はむ侍ですが？ それが何か」

「アンタの口から、家中に仕官の口を斡^{あつせん}旋してもらえるか」

イエモン氏にとっては、諦め半分の問いだった。この時代、この家中も金がない。新たに仕官を求めているようなところはどこにもない。それに、さしたる技能もなく才覚もないイエモン氏のような人間を、禄で以って囲い入れるような酔狂な家中があるはずもなかった。けれど、目の前にいる赤い羽織の男が権力者であることを祈りつつ、そう訊いたのだった。まあ、大方のところは断られると思っていた。

けれど、そのイエモン氏の予想は外れた。

「ええ、構いませんよ。きつと、十中八九、あなたのご希望を叶えることができます。実はわが家中、現在人員を募集しておりましてね。おそらくは猫の額ほどの石高しか用意して差し上げられないかもしれませんが。それに、私が口をきいてやれば、もう少し石高を積むことも出来ましょう」

「な、なんだと！？ この時代に切米でなく、石持ちで囲いこんでくれるというのか？」

「どうです？ 悪い条件じゃないでしょう」

「ああ」

頷くしかなかった。

「ただし、私のいう“仕事”をやって頂くのが条件です。念のため言っておきますが、うちの家中に入るためには、なんにせよ何がしかの仕事をしてもらうこととなります」

「どういう仕事なんだ？」

そのイエモン氏の至極もつともな疑問を、赤い羽織の男は笑殺した。

「いやいや、そのご質問にお答えすることはできません。あなた様も、もとはどこか家中に出仕しておられたのならばお分かりでしょう。家中には家中の秘密があつて、その秘密は人の命よりはるかに重いということくらい。残念なことですが、私もまた、家中からすれば一つの駒なのですよ」

さて、と赤い羽織の男は手を叩いた。パン、という音が辺りに響きそして消えた。

「あとはあなたの心持ち次第。私を信じて働いて仕官の道を開くか、それとも――、私を信じずにこのままずると生き続けるか。どちらかしかありません」

イエモン氏はごくりと唾を飲んだ。

しばしの沈黙。イエモン氏も赤い羽織の男も、その沈黙に耐え続ける。

けれど、そんな我慢比べに負けたのはイエモン氏だった。ぼつりと口を開いた。

「……時間が欲しい」

「時間、と？」

不思議そうな声を上げる赤い羽織の男をなだめすかすかのように、早口でイエモン氏はまくしたてる。

「一日だけでいい。その間に、確認したいことがある」

「一日。なるほど」

赤い羽織の男は顎を撫でた。無精ひげ一つない顎を撫でる様は、なぜかいやらしく映った。その手を胸の前に持っていくと、指を一

本立てた。

「いいでしょう。一日。猶予を差上げましょう。明日、この時間にここにやってきます」

「ああ」

その返事を訊くまでもなく、赤い羽織の男は踵を返していた。部屋の中から月明かりがあふれる外にするりと抜け出た男は、イエモン氏に一瞥さえ加えずにその場から溶けるようにして消えた。

イエモン氏は、闇の中で一人つぶやく。

「なんとか、しなくっちゃな」

部屋の中にいるから当然のことだけれど、月は全く見えなかった。

気後れする自分を叱咤^{しつた}しながら、イエモン氏は江戸の町を歩いてきた。板葺が続く裏路地をのそりのそりと歩きながら、イエモン氏は四角く切り取られた空を眺める。雲ひとつない空。けれど、確実に冬の近づく空気がイエモン氏の懷を冷やす。

このあたりは知り合いが多いんだよな。

イエモン氏の氣は重い。

この界限は、かつてイエモン氏が住んでいた辺りだった。まだイエモン氏が家中にいた頃、家中が貸り上げていた長屋がある一帯だった。新婚ほやほやだった頃のお岩と一緒に暮らしたのがこの界限だ。自分と同じような微禄の者たちが肩を寄せ合って生きていた、その一角だった。

けれど、イエモン氏は気づいた。

だいぶ、この界限の様が変わってしまったことに。

かつてこの界限はイエモン氏の同輩たち、つまりは侍が多く住んでいた。けれど、気づけばその長屋街に住まわっている面々の顔が変わっている。いつの間にか町人たちの長屋街になっている。そのせいで気後れはなかったけれど、氣の重さが増した。

侍が住んでいた頃と比べて、長屋には活気があった。井戸端では主婦たちが夫の悪口談義に花を咲かせている。その脇ではボ口をま

とった子供たちが追いかけてくをしている。板葺の上で、三毛猫があくびをして寝転がっている。

そんな、どこかお祭りめいた空気をまとう長屋をすり抜けて、イエモン氏は長屋の奥を目指した。

ある長屋の戸の前で足を止めた。

どこかうるさい長屋にあつて、この長屋だけはひどく浮いていた。まるで喪中の只中にあるかのようなしんとした静寂の中に包まれていた。どこか陰鬱で沈痛な静寂。昔はこんなだっただろうか、とイエモン氏はふと昔の光景を思い出そうとしたけれど、お岩の笑顔しか思い出せずにいた。

「失礼致す」

イエモン氏はがらりと戸を開いた。

部屋の中は、がらんとしていた。ほとんど家財道具は置いていない。あるものと言えば、部屋の隅に置かれている刀掛くらのものだった。その刀掛にはひっそりと大小の刀がかかっていた。

「失礼致す」

もう一度声をかけると、ようやく奥から人が出てきた。

「ああ、お待たせして申し訳ない……ああ」

その人影は、イエモン氏の姿を見るやどんな感情のものなのか判別の付かない嘆息を上げた。殆ど真っ白な髪の毛。そして嫌に老人めいた茶色の着流しをまとうその人とは、お岩の父。そして――。

「突然おたずねして申し訳ない。義父上。今日は非番ですか」

ふう、とため息をつき、義父はゆっくりと答えた。

「ああ、久しぶりの休みだ。先の人員整理以来、どうにも忙しい。

……と、愚痴をたれてもしょうがないな。で、何用だ、イエモン」

「実は、お願いがあります」

「断る」

きっぱりとした口調で義父は言葉を発した。

「どうせお岩のことだろう。だが、食わすことのできない男に、娘を預けるわけにはいかん」

踵を返そうとする義父の裾にすぎるイエモン氏。必死だった。体面も何もあつたものではなかった。ただ、自分の思いをそのままの形で吐き出していた。

「待ってください！ 話を聞いてください！」

「お前の気持ちは分かる。いや、分かるつもりでいる。だが、分かってくれ、お岩は私にとつてただ一人残った娘なんだ」

追いつがるイエモン氏から視線を外した義父は、部屋の隅に置かれていた小さな仏壇に向いた。その仏壇の中には、小さな小さな黒塗りの位牌があつた。数年前に死んだ、この家の跡取り。そして、お岩の弟の位牌。きれいにされている仏壇に、どこか所在無げにたずむその位牌に、かつてイエモン氏に「義兄上、義兄上」となつてきたあの義弟の面影はどこにもなかった。

俺は、俺は。

イエモン氏は叫んだ。

「実は、仕官が決まりそうなんです！」

「な、なんだと？」

不意に、義父がイエモン氏をにらんだ。

「本当なんです。さる家中のさる方から、“うちの家中に来ないか”とお誘いを受けているんです！」

「それは本当か」

心なしか、義父の表情がほころんだような、そんな気がした。

「本当です」

「本当に本当か」

「本当に本当に本当です」

イエモン氏のはつきりとした言葉に、義父は少し唸った。少し唇のあたりをわななせながら、イエモン氏をただ見下ろす。

【5】

なぜか嬉しそうな顔を噛み殺しながら、義父は言った。

「……だが、口から出まかせということもある。お前がウソをつくような人間でないのは長い付き合いで知ってはいる。だが、娘を一度あもされて、その相手の言うことをすべて信用できるほど、ワシはお人よしではない」

「はい」

「だから、その家中とやらから確約をもらってこい。確約をもらうまで、どのくらいかかる」

「……わかりません」

「ならば、三か月。三か月待とう。それまでにお前の出仕が決まれば、娘はお前に任せることにする」

その言葉は、さながら極楽から流れ来る天上の音楽のようだった。

「あ、ありがとうございます！」

「ああ。待っている」

そう義父は、確かに呟いた。

がらんとした長屋の中で、義父の吐息だけが音として反射する。

そつえば、とイエモン氏は呟く。

「後家様と栄一郎は、どこかに行かれていますか」

イエモンが問うたのは、死んだ義弟の妻とその子供の所在だった。

「ああ、二人連れ立って寺社に参つてくると言っていた」

「そうですか、久しぶりに顔を合わせたかったです」

そのイエモン氏の言葉に、初めて義父は顔をほころばせた。

「うちの倅せがれの残した子は順調に育つておるよ。最近はずを書くようになりおつた。きつとアレは学問が出来る子になる。うちの倅と同じく、きつと家中のために尽くしてくれるようになる」

家中のため、か。

イエモン氏は心の中で呟く。義父の言葉には何の嫌味もない。そ

れは、長い付き合いで分かる。この人は嫌味を言うような人ではない。けれど、それを嫌味としてしか取ることでできない自分に嫌気がさす。

「どうした、イエモン」

「いえ」

イエモン氏は首を横に振った。

自分の心の奥底にある、黒い淀^{よど}みに気付きながらも。

「お岩ちゃん」

イエモン氏は、お岩の枕元に座る。すると、眠るお岩はゆつくりと目を見開いた。

「イエモンさん」

いつもいつも、お岩は自分の名前をこつも愛おしげに呼んでくれている。当り前のことのように思えたことが、こんなにも得難いものだったということに今更ながら思い至る。そんな心の奥に沁み入る思いを抱えながら、イエモン氏は続ける。

「実はね、仕官が決まりそうなんだ」

「え？」

目を白黒させるお岩。それはそうだ。失業してから数年。何度も就職活動をしてみて上手くいかなかったものが、こうしてこんな時に急転直下のうちに決まるはずがない。信じられないのだろう。そう取ったイエモン氏は、笑顔を作った。その笑顔が上手くいったかは分からない。

「最近、ある人と知り合いになってね。その人が、自分の家中へ幹旋してくれるって。そうすれば、また一緒に暮らせるようになる。義父上からもそう約束をもらったよ」

義父から“あと三カ月”と期限を切られたことに関しては、何も言わなかった。

そして、幹旋してくれると約束してくれた男がどんな人間なのかに関して、イエモン氏は一切口にしなかった。

しばらく、お岩は何も言わなかった。けれど、しばらくしてゆっくりと口を開いた。お岩のぷっくりとした唇が、さながら蝶々が花に止まっているときのように舞う。

「ねえ、イエモンさん……」

「ん？ どうしたの？」

「嬉しい話なのに、どうしてそんなに不安そうな顔をなさっているの？」

え？

この時イエモン氏は初めて思い知った。自分が不安げな顔を浮かべているという事実。やっぱり、無理矢理に笑顔を作ってみても、恋女房には通用しなかったようだ。

仕方なく、イエモン氏はさわりだけ喋る。

「いやね、その仕官話、条件があつてさ」

「条件？」

お岩の言葉に促されるようにして、イエモン氏は続ける。まるで、何かから急きたてられているかのように。

「うん、ある仕事をさせて、それで働きを見るつもりらしいよ。でも、大丈夫。がんばるから」

自分の抱える不安をふっ飛ばす意味もあつて、心なしか前向きな言葉を選ぶ。

そんなイエモン氏の顔を、お岩が覗き込む。その目には、明らかに不安と疑問の色が見て取れた。けれど、そんなお岩から漏れ出る言葉は、幾分かその目の色よりも弱い言葉だった。

「……あんまり、無茶なことはいしないでくださいね」

「頑張るから。俺、頑張るから」

イエモン氏はただ、そう言ってお岩の手を握るしかなかった。

細やかで白いお岩の手は、ひどくささくれていた。日々の家事や傘張りの内職で、手の皮がアカ切れしている。これが、今年二五歳の俺と同じ年の、うら若い女の手だろうか？ イエモン氏は問う。そして、その答えはとうの昔に出ていた。

そして、イエモン氏は手をふんわりと握りながら、心の中でこう呟いていた。

『なんでもいい。浄も不浄もなければ、下賤げせんも何もあつたもんじやない。なんだつて、やってやろうじやないか。たとえば、俺がどうなつちまおうとも』

守りたいもののため。守りたい生活のため。そして、俺のために。けれど、イエモン氏は気づいていなかった。

そうやって覚悟を決めているイエモン氏のことを見つけて何も言えずにいる、お岩の悲痛な表情に。そして、そのときお岩が抱いた思い、そして、一緒に数年間を歩んできた夫の変化に戸惑う、お岩のことに。

【6】

「イエモンさん」

けれど、その言葉もイエモン氏に届くことはなかった。イエモン氏はただ、自分の心の中で吹き荒れる、様々な思いと戦っていた。

その日の夜のこと。

イエモン氏は好きな酒も飲まず、自分の部屋にいた。

しんとしている長屋の板敷の上に、足を崩さずに座って、耳をすませる。けれど、風の音以外には何の音もしない。開け放しにされている障子から覗く月だけがイエモン氏を見ていた。

あの男は、はたして来るのだろうか。

不安は波のように来ては返し、返してはやってくる。一日時間を置いたせいで、仕官の口が埋まってしまったらどうしよう。あるいはあの男の気が変わって、俺のところに二度と現れなかったらどうしよう。そんな不安で押しつぶされそうだった。

そんな問いを何十回となく繰り返し返した頃になって、戸ががらりと開かれた。

「どうもこんばんは。どうも、イエモンさん」

やはり、最初に目に入っただのはその赤い羽織だった。見れば見るほど不思議な羽織だ。それを着ている男の印象を、すべてその赤い羽織が殺してしまっている。だから結局、赤い羽織の男としてしか認識ができない。

立ち上がろうとするイエモン氏を手で制し、赤い羽織の男はイエモン氏に問う。

「単刀直入ですがイエモンさん。お聞きしましょう」

つくづく、イヤな声の響き方だ。心の中でイエモン氏は呟く。最初からこの男の物言いには好きになれない。きっと、これからも好きになることはあるまい。けれどこの男の言葉に従わないことには、

自分がどうしても守りたいものを守れない。ならば、ままよ。

言葉の続きを遮って、イエモン氏が口を開く。

「是非、やらせて頂きます」

「ほ、ほう？」

赤い羽織の男は少し戸惑った風を見せた。

まくしたてるようにして、イエモン氏は続ける。

「あなたの元で、働かせてください。必ずや、仕事をやり遂げて見せます。そして、あなた様の家中の一員として力を尽くしたく思います」

ほほ、と赤い羽織の男は少しだけ笑った。

「……いや、心配だったんですよ。以前あなた、“仕官したら負けだと思ってる”なんて言っていましたから。けれど、これで安心しました。ぜひとも、力を尽くしてください。我らが家中のために」

その瞬間に赤い羽織の男が見せた醜悪な笑みは、はたして俺の気のせいだったろうか。イエモン氏はふと自分に問うてみた。けれど、その答えが出ようはずもなかった。

そんなイエモン氏をよそに、赤い羽織の男はイエモン氏に向かって何かを差し出した。

最初、それが何だったのか分からなかった。月明かりの届かない北側に立つ赤い羽織の男は、完全に影に入っていた。そのせいでその手にあるものもよく判然としなかった。が、闇に向かって目を凝らすうち、赤い羽織の男がさし出すものが何なのか、ようやく分かってきた。

赤い羽織の男の目だけが、闇の中で浮かんで見えた。次に続く言葉は、まるでその目から放たれているかのようにだった。

「さあ、イエモンさん、お取りください」

赤い羽織の男の手にあるのは、刀だった。

黒塗りの拵え。菱の巻きが奇麗な柄。何の奇のてらいもない、どこにでもありそうな拵えの刀だった。

「これを受け取られた瞬間に、あなたは我々の仲間です」

そんな言葉に背中を押されて、イエモン氏はその刀を受け取った。どしりと重いその刀の黒い拵えは、さながらこれからの仕事の重さを表しているかのようにだった。

「さて、イエモンさん、これからあなたは私の仕事を手伝ってもらいます」

「ああ。何でもやります」

もう、イエモン氏はどこか覚悟していた。何をやらされてもいい。目の前にいるコイツがいかなる悪人だろうが尊敬ならない奴だろうが、あるいは天下を揺るがすような輩であつたとしたって、俺はもうこいつについていくしか道はないのだ、と。誰を押しつけようが誰を傷つけようが関係ない。俺は、俺には守るものがある。そのもののために俺は――、俺は――。

瞬間、不意に刀を抜きたい衝動に駆られた。どん、と身に迫りくる黒い衝動。それを無理矢理に抑えながら、身の奥に宿るその感覚に戸惑う。

なんだ、これは。

思わず刀と赤い羽織の男の顔を見比べる。刀は何事もなくイエモン氏の手にあつたし、赤い羽織の男は口角を上げてイエモン氏の前に立ち尽くしていた。

その赤い羽織の男は、確かにそのとき、そう呟いた。

「変迅堂。いや、夏之丞。^{なつのじょう} 覚悟するのだな」

が、その意味について、イエモン氏が分かるうはずもなかった。

こうして、江戸の片隅で、静かに企みは進行してゆくのだった。

【1】

夏であろうが冬であろうが朝の清々しさは変わらない。それは現代でも江戸時代でも同じこと。

そして、朝の清々しい空気は誰の心をも軽くする。それも変わらないわけで。文人長屋に住む発明家・変迅堂だってそれは同じ。

ふふふんふふん。

そんなご機嫌な鼻歌を飛ばしながら、がちゃがちゃと目の前のがらくた……もとい発明品を直す変迅堂。直しているのはお鶴から受け取っている、“快足下駄”。先日思いつきのお鶴が基盤を焼いてしまったせいで、殆ど動かなくなってしまったそれを、プラスドライバー（のようなもの）でツンツンつつきながらも変迅堂は笑みを浮かべる。

鼻歌のしじまにそう呟く。

「いやあ、見事な焼けっぷりですよー。サイコーです」

基本的に、変迅堂はこういうヤツである。機械をいじっていればそれで満足、三度の飯よりもメカをいじっている方が好き。それがゆえに乙女二人をやきもきさせていることになって興味が向かない。興味が向かないというよりもまったく関知できない。けれど、乙女ふたりはそんな変迅堂のことが好きなわけで。結局この三角関係は不毛で勝者のない消耗戦と化しているのだった。

そうやって“快足下駄”をいじっている間にも、変迅堂はいつもの朝に当然のようにやってくる“災難”をふと思ひ出す。

「あ、そろそろですね」

変迅堂は座布団をかぶり、部屋の隅で丸くなる。いつもなら、ちあきとお鶴が入口の戸を破って入ってくるはずだった。けれど、いつまで経ってもそんな気配はなかった。

おや？

座布団で頭を守りながら、変迅堂は首をかしげる。

あるえ？　今日は遅いですね、二人とも。

変迅堂は立ち上がって、うむむと辺りを見渡す。けれど、開け放たれた窓からは、何の喧騒も聞こえはしなかった。静かな朝そのもの。江戸っ子たちの悲鳴や怒号は全く聞こえない。けれど、逆にその静寂が怖いというのもまた純然たる事実なわけで……。

（座布団をかぶったまま）変迅堂は入口の戸を開け放つ。けれど、右を見ても左を見ても、長閑を絵にかいたような長屋の路地が続くばかりだった。

うむ、おかしい。

おかしいとは思いながらも、変迅堂は結局“快足下駄”の前に座り、またふんふふーんと鼻歌を歌うのであった。

そうやってがちゃがちゃと快足下駄をいじるうち、瞬く間に基盤を再設計し終え、その基盤をさまざまな配線につなぎ終えた。やっぱり変迅堂、その道の天才なのである。

「ふっ」

どん、と床に置いたときには、もう既に修理し終えているのだった。

「ふっふっふ、今度の快足下駄はすごいですよー！」

誰に言うでもない壮大な独り言をつぶやく変迅堂。こ、怖い。

「これは今までの物に比べて、熱に強くなってますよー！　ちよつとやそつとじゃ基盤が壊れたりはしませんからねー！　高々江戸の町を走ったくらいじゃ壊れませんよ今度こそ！」

そうやってひとり悦に至りつつ、けれどすぐに何か物足りないものがあるのを思い出し、ちよつとさびしい思いに襲われる。その理由をひとしきり考えて、ようやくその理由に思いが至る。

「あ、そうか。二人がいないんだ」

ちあきにお鶴の顔を、ふと思ひ浮かべる変迅堂。

もしもこの場にちあき殿とお鶴殿がいたら……、と変迅堂は考える。きつとちあき殿は、『全く、いつつも発明ばかり！』とか言いつつも“快足下駄”に興味を示すに違いない。きつとお鶴殿は、

『あー、変迅堂さん、本当にありがとうございます！』ってまぶしい笑顔を見せてくれるんだけどなあ……。と、二人の反応を想像して、なんとなく肩を落とす。

誰もいない部屋の真ん中で、変迅堂はぼつりと呟く。

「誰もいないんじゃないあ、つまらないなあ」

と、その瞬間だった。

「あの小娘はどうか知らないが、うちの妹は二日酔いだ」

入口の戸が開け放たれたのとほぼ同時に、そんな声が届いた。声の主は決まっている。この嫌味っぽくて若い声は……。

変迅堂はその戸の方に向いた。

「おや、今日は非番ですか仁杉与力。それに、お鶴殿が二日酔い？」すると、戸の入り口に立つ仁杉与力はたたきの上に歩を進め、首を横に振った。

「そんなわけあるまい。これでも与力職は多忙なのだ。親父様から職を譲られてからかれこれ数年経つが、冠婚葬祭以外で休みをもらったことはほとんどないぞ。休みだとしても、なんだかんだと呼び出しを食らうものでな」

と、愚痴にも聞こえる言葉をひとしきり口にした仁杉与力は、変迅堂を見やる。そして、見やった瞬間、仁杉与力は思い出したように眉を上げた。

「あと、妹は言ったとおり二日酔いだ。昨日さんざん飲んでいたようだしな。まあ、昨日が初めての酒だったらしいから、まあ仕方ないのかも知れんがな。ま、きつとあのうるさい小娘もそうだろう？ 私が顔を見せた時点でかなり酔っぱらっていたではないか。アレじゃ今頃、家でウンウン言っているに違いない」

そう言いながら、仁杉の目は変迅堂の顔に向かっていった。変迅堂のことは見つけているのではない。まるで不思議なものを見るような眼で、変迅堂の顔を眺めている。そんな仁杉の視線に気づいた変迅堂は、少し冗談めかした言葉を放つ。

「なんですか、私の顔に何かついてますか」

その変迅堂の至極まっとうな問いに、仁杉与力は至極まっとうな返事を返した。ものすごく困惑気味に。

「ああ、顔に何かについているというよりは……お前、何があったのだ？」

さて、ここいらで説明しなくてはなるまい。

変迅堂、今現在、顔がすっかり腫れ上がってしまったている。頬に何百回も拳骨をもらったような顔をしているのである。もうそれこそ熟れ上がった柿のような顔をしていた。誰がどう見ても、「何があったの!？」と問わずにいられないだろう顔である。

【2】

「ははは、実は……」

頭をぼりぼりと掻きながら、変迅堂は昨日の災難について話し出した。

変迅堂は前日、ちあきを家まで送り届けた。すっかり酔いどれているちあきを背負いながら、ほうほうの体でちあきの長屋まで達したのだった。けれど、そうしてちあきを送り届けた変迅堂に待っていたのはねぎらいの言葉ではなく、むしろその逆だった。戸を叩くと、青筋を思いつきり立てるちあきの母親・お冬がのっそり出てきたのだった。恰幅がひどくい人なので、“のっそり”という表現がよく似合う。でつぶりとした腹を突き出しながら、お冬はこう言っただという。

『変の字さん……？ アンタ！ うちの娘に何晒すんじゃない！』

そしてそのまま、平手打ちを一枚。もちろん変迅堂はきりもみ回転しながら宙を舞ったのは言うまでもない。……え？ 「ちあきはどうしたの？」 って？ 奥に座っていたちあきの父・春吉があわてちあきを空中キャッチして事なきを得てます。ぐふう！ 宙を舞う変迅堂に殺到するお冬は、変迅堂の襟を我つ師と握り込み、その巨体を生かして変迅堂を宙ぶらりんにした上で、頬を何発も打ったのだった。

『これでもうちの娘は嫁入り前なんだよ！？ だつていうのに、こんな深夜まで娘をたらしこむなんて、どういう料簡だい！ この助平が！』

いわれなき言葉に身に覚えのない助平疑惑までかけられた変迅堂、結局この後半刻あまりの間お冬の怒りのままに往復ビンタを浴び続けたのだった……。

「はっはっは、なかなか面白い話じゃないか」

懐から出した扇子をぱつと開いて笑う仁杉。本当に面白げに笑う。

さすがは江戸市中に「イヤミ与力」と知られる仁杉。まさにイヤミ与力の面目躍如である。けど、そんな面目も躍如もいらぬ。

ともかく、そんなイヤミ与力の言葉に変迅堂は反応する。

「まったく、大変だったんですからね」

ぶすつと頬を膨らませる変迅堂。変迅堂自身気づいていないけれど、仁杉というときには少しだけ態度が子供っぽい。

ははは、とよく響く笑い方を見せたかと思つたら、不意に仁杉は真面目な顔になった。この人が真面目顔になると、本当に怖い。元々氷のように涼やかな顔の造作をしているものだから、その冷たさが本当に際立つかのようだ。何となく怖気を覚える変迅堂をよそに、仁杉は口を開いた。

「だが変迅堂。大変なのはむしろこれからだな」
「は？」

仁杉の顔はまさに警察組織の長たる与力の顔だった。

いやーな予感に襲われつつも、変迅堂は話の先を促す。すると仁杉は言い放った。

「変迅堂、お前を拿捕する」

与力の言う拿捕。つまるところ、しょっ引くというヤツだ。

けれど、普通の人が訊けば卒倒必至のその言葉に、どこか呑気に変迅堂は応じた。

「え？ またですか!？」

まるで、“え、ここ、駐車禁止区域だったんですか!？”という言葉みたいに深刻さがみじんも感じられない。

というのも無理はない。

以前、変迅堂は仁杉与力に一度逮捕されているのである！ しかもマジで！

夏の頃、無実の罪を疑われて南町奉行所にお世話になったことがあった。実はその時に仁杉と知り合ったのだけれど、そんな強烈な出会いをした奴と友達付き合っている辺り、変迅堂のズレっぷりを推し量って頂くことができよう。まあ何にせよ、一度経験して

しまったことに関して、変迅堂は限りなく鈍感になっているのである。

そんな、どこか間抜けた変迅堂の反応に、なんだか仁杉は悔しそうな顔を浮かべた。

「なんだ、つまらん奴だな、お前は」

「なんですか、そもそも仁杉さん、私を驚かそうとしてたんですか？」

「まあ、半分はそうだ」腕を組んで、仁杉は続けた。「そして、もう半分は本音だ」

「うへ？」

もう半分は本音？ それ、どういうこと？

変迅堂の困惑をよそに、仁杉は口を開いた。

「変迅堂。お前を誤認逮捕する」

「はア！？」

さすがの変迅堂も、頓狂な声を上げた。

“逮捕する”なら分かる。けれど、“誤認逮捕する”とはこれいかに！？ っていうか、誤認逮捕は「してしまう」ことであって、「する」なんて力強く宣言するものでもないでしょうに！？ もう何、この与力！ さっぱり意味分かんない！

そう心の中で変迅堂が（オカマ口調で）あわあわと困惑する間にも、仁杉は変迅堂の両手に縄をかけてぐるぐる巻きにしている。ふんふふーんと鼻歌を交えながら。朝という時間帯は、鼻歌がよく映える。よく映えるしよく似合う。けれど、率直に言って、仁杉という青年に鼻歌は似合わないし、そもそも、すげえ音痴だ。

ふう、とため息をつきながら、仁杉はそんな変迅堂の耳元に口を寄せた。

「悪いな、変迅堂。ちょっとお前には、しばらくの間私と行動してもらおう。それがお前のためであり、お鶴のためであり、お前が大事にしている小娘のためである。そしてひいては私のためであり、さらにいえば江戸八百八町のためでもあるんだ」

うむ？

さっきまであわあわとしていた変迅堂も、その言葉を聞くやぴたりと落ち着いた。そして仁杉の顔を覗き込んで、こくりと頷いた。

「わかりました」

「ふん、物分かりがいいことだ。やはり、“小娘”の辺りが効いたか？」

「ちちち、違いますよ！ 私はまだ……」

「そんなことはどうでもいい」

自分から振っておきながら、変迅堂の言葉を袖にした仁杉は変迅堂の手にかかっている縄をぐいぐいと引っ張った。

「さて、まずは南町奉行所に来てもらおうか」

こうして、変迅堂は仁杉によって逮捕、いや、誤認逮捕されたのだった。

【1】

ずどどどどど。

一日のインターバルを置いて、また江戸は騒がしくなった。乱れ飛ぶ江戸っ子たちの悲鳴、悲鳴、悲鳴……。もう既に、これが日常の光景と化している。なので、もはや誰も悲鳴が飛ぶこの光景を気にしていない。「ああ、いつものことだな」とばかりに。

そして、その悲鳴の輪の中心には……。

「ちゅあ〜きゅさ〜ん〜！ さつき足を踏みましたね！ そういう卑怯な真似はしないで頂けると嬉しいんですけど！」

「そういうお鶴ちゃんこそ、さつき石を投げつけてきたくせに！」

「あれは偶然です！。あるいは神様がお与えになったバツです！」
「なにおう！」

……そうやって、肩を思いつきりぶつけあいながら全力疾走を繰り広げるちあきとお鶴が、悲鳴の輪の中心にあった。さすがは百万都市・江戸。乙女二人のいがみ合いくらいのもの、呑み込んでしまっただけの深い度量があったりする。とはいっても、途中道を歩く奥さんはきりきりと振り回される羽目になったし、道を歩く職人さんを数人ふっ飛ばしているのだけでも。

そうして火花が散りそうなデッドヒートを繰り広げながら、二人は文人長屋の門の前にまで達した。そして、いつもならばその門を一足飛びで踏み越えてしまふところだったのに、その時に限っては二人とも同時にその足を止めた。土煙を立てながら止まった二人。そして二人は土煙の向こうにそびえる見慣れないものを見上げて、示し合わせたように顔を見合わせる。

「ねえ、お鶴ちゃん」

「なんですか」

ちあきはぱかんとした顔で門の横に目を向ける。

「前に、あんなもん、あつたっけ？」

ちあきの視線の先には門が立っている。そしてその門の元に、見慣れない小屋が建っている。道にでんと張りだしている様子から見て、あからさまに“増築しました”感をかもすその建物。一人が入れるくらいの大きさをしていて、窓が大きく取られている。壁に使われている木板は明るい茶色をしていて、門の黒っぽく変色した木材とは比べるべくもない。

「うーん」お鶴は首をかしげる。「なかった……ですよね」

「もしかして、昨日の間に増築したのかな？」

「かもですね」

さて、毎日この文人長屋に来ているちあきとお鶴なのだけれど、昨日に限ってはこの長屋に足を運んではない。ちあきもお鶴も、うむむむ、と首を傾げ続けた。

おとといの夜、季節外れの月見の時、ハチャメチャな飲み方をしてしまっただちあきとお鶴。そのランキチぶりは皆さんもご存じだろうけれど、あれだけ大騒ぎをしでかすような飲みをした若い娘が、次の日何事もなく行動できるはずもないのだ。結果を言ってしまう、ちあきはちあきで一日自分の布団の上で「うーん、うーん」と唸り続けていたし、お鶴はお鶴で「うむむむむ」と布団の上で悪夢を見る羽目になっていたのだった。

そんな二人に、突然声がかかった。

「ああ、これが出来たのは昨日のことよ、お嬢さんたち」

少しハスキーな声。女のひとだ。

うむむむ？

左右を見渡すちあき。その視線の脇でお鶴も同じことをしていた。誰の声だろう？ この長屋に女の人なんていたっけ？ そう首をかしげながら。

声の主を見つけられずにいると、その声の主はカラカラと笑う。

「ここよ、ここ」

その声の主がひょこつと顔を出したのは、門の前に出来た小屋の窓だった。

窓から顔を出したのは、若い女の人だった。

何より、細さが印象的だった。頬の細さ。襟から覗かせる首元の細さ。窓を握る指の細さ。けれど、その声にはそんな細さからは想像できないようなしなやかさがあった。黒地に花をあしらった小袖をまとう様は、そんな細さとしなやかさと相まって“姉御”な雰囲気醸していた。そして、何より印象的だったのは、その髪の毛だった。

江戸時代の女のひとの標準装備・島田髷。なのだけれど、島田髷と言い切るにはその女の人の髪形は少し頭の中にある島田髷のイメージとずれていた。けれど、そのズレがかっこいい。少なくとも、ちあきはそう思った。

その女の人は、ひょいと片手を上げた。

「あら、あなたたち、一昨日の月見にいた子たちね？」

「へ？」 頓狂な声を上げるちあき。「なんで一昨日の月見のこと……」

「何言ってるのよ、あなた」

その女の人はびしっと指を立ててちあきに向いた。その顔には悪戯っぽい色が混じっていた。

「あのとき、私もいたじゃない」

「へ？」

ちあきは首を傾げた。

えー、こんな人、いたっけ。つつかそもそも、何にも覚えてないやー。

……そう、ちあき、酒のせいで何にも覚えていないのである。

そんなちあきの体たらくに対して、お鶴がふふんと笑う。

「酒は飲んでも飲まれるな、ですよちあきさん」

「じゃあ、かく言うお鶴ちゃん覚えてるっての？」

ちあきのツツコミに、お鶴は沈黙するしかなかった。値千両の笑顔凍らせたまま。

まあちなみに言っておくと、お鶴もまるで月見のことは覚えてい

ないのであった。ちあきといいお鶴といい、全く困った酒乱ですね、はい。

「あのねえ……、あんたたち……」

頬をぼりぼり掻きながら、女の人はいあきれ顔を隠さなかった。けれど、ふん、とため息をついてその表情を追いやると、仕切り直すかのように、さて、と呟いた。

「お嬢さんがた、ここに何の用？」

ああ。二人は同時にそう声を上げる。

そうだった、こんなところで油を売ってる場合じゃない、ってね。ちあきとお鶴は顔を見合わせ、門をさも当然のことのように通り抜けようとする。すると、女の方は叫んだ。

「あのねえ！ 質問に答える！」

さながら迅雷。

びくつと身を仰け反らせた二人はくると女の人に向いた。緊張のためか、ひくひくと顔を引きつらせる二人に、女の方は微笑みかけた。けれどその微笑に、なんとない怒りの色がきつちりと混じっていた。

「だ・か・ら？ あんたたち、ここに何の用なのよ？」

ここに、怖ええー。何この人お。

女の方の声色は優しい。けれど、なぜか凄じ怖い。

まるで迷える子羊のように身を震わせながら、ちあきは答えた。

「ああ、ええと……先生に会いに」

「せんせい？ ……ああ」女の方はからりと微笑んだ。「ええと、

変迅堂さん、だっけ？ この一番古株の」

ああ。その言葉を聞いて、何となくちあきはさびしい気分になった。

なんだかんだで、ちあきはこの文人長屋を何年も見続けている。最近までは変迅堂の隣近所の顔さえ見たことはなかったけれど、最近のバタバタのおかげで仲良くなっていた。けれど、そういった面々は一人また一人と巣立ってしまつて、結局文人長屋には変迅堂し

が残っていない。

なんだかなア、さびしいなあ。

ちあきはそう心の中で呟く。けれどちあきは知らない。結局のところ、人生なんて“さびしい”ことの連続で出来ているという事実
に。

ともかく、そんな感傷に浸るちあきを尻目に、お鶴は口を開く。

「通って、いいんですよ」

「ええ、別にいいけど……」

何となく女の人の口ぶりが気になって、ちあきが口をはさむ。

「けど、なんですか？」

「あの人、昨日ここに帰ってこなかったと思うけど？ 夜にこの門を閉めたのは私だけど、あの人が帰ってきた様子はなかったけどな
ア」

「へ、この門を閉めてるの！？」

ちあきは驚きが隠せない。

大家が近くに住んでいないというイレギュラーな長屋・文人長屋。なので、普通は大家がやるような雑務は住む店子たちの持ち回りとなっている。往来の掃除とか井戸の掃除とかである。けれど、この長屋に住む人たちには危機意識というものが無いのか、それとも全員が貧乏人だからと高をくくっているのかは定かではないけれど、長屋の入口の戸を閉めないのである。以前それで大問題になったにも関わらず、結局そのままにしておく辺り、この長屋に住む面々のテキトーさがおのずから分かる。

けれど、その門を夜に閉めている人がいる！ 文人長屋の事情通・ちあきとしては、驚きなお話なのであった。

そうやって顎をガコンと開けるちあきを眺めながら、女の方は呟く。

【2】

「……ってか、これまで門を閉めなかった方がよっぽど変なのよ」
「まあ、そりゃそうだけどさー、って、そういえば」

ようやくながら、ちあきは女の人に聞きそびれていることがあったのを思い出した。そして、口を開く。

「まだお名前を訊いてなかったよね、おばさん」

瞬間――。

「あいた――！――！」

頭を抱えて地面に崩れ落ちるちあき。そしてそれに一瞬遅れて、ちあきのものではないかんざしが地面に転がる。からんからん。そんなちあきをとてつもなく怖い顔で見下ろしながら、左手で右の袖を払う女の人は、間延びしたゆっくりと言葉を紡ぎ出す。

「うんうん、お嬢さん？　あなたが若いっていうのは認めるー。うん、お姉さん優しいから認めるー。けどね、さすがに“おばさん”って言う言葉は良くないわよねー？　これでも私、まだ二十七なのー。ぴっちぴちの二十七なのー。あなたとは干支が一緒かもだけど、それでもまだまだ若いのよー？」

ひ、ひい！！

ちあき、生まれて初めて肝を冷やした瞬間であった。全身から負のオーラを放ちながらちあきを見つめる女の人は、恐ろしくきれいだった。確かにおばさんなんて呼べない。つつか、呼んだら殺される。

ちなみに、ちあきには見えている。さっき、あの女の人は何をしたのかを。

ちあきが「おばさん」という言葉を吐きだした瞬間、女の方は機敏に行動を開始した。自分の髪に刺さっているかんざしを右手で引き抜くと同時に左手で右の袖を払い、ちあきに向かってかんざしを投げ払ったのだ。しかもそのかんざしを鋭い先っぽではなく根本側

をちあきに向けた形で、ちょうどちあきの眉間にクリーンヒットしたのであった。

何この人！　すすす、すげー。ってか、痛い！

しばらくそんなモノローグを繰り返しながら地面にバタバタと転がっていたちあきだったけれど、ようやく痛みも鎮まってきた。そうしてやがて痛みの代わりに巻きあがってきた戦慄に追い立てられるようにして、ちあきは言い直す。

「……す、すいませんでした、お、お姉さん……」

「うむうむ、よろしい」

お姉さんはふふんと鼻を鳴らしてから、続けた。

「私の名前だっけ？　私は髪結師の道。かみゆいし みちこの文人長屋の新店子です。しんたなこよろしくね」

「ははは、はい……」

眉間をのろのろとさすりながら、ちあきは頷いた。

どうでもいいけど、この場面で一番ほくそ笑んでいたのはお鶴であつた。そりやそうだ。ライバル・ちあきが地面をゴキブリみたいに転がる様子をじかに見られただけでなく、到底敵わない大人からマジメンチをきめられてぐうの音も出ない状況までも眼福つかまつたわけ……。楽しくないはずはなかった。

けれど、そんなことをおくびにも出さず、お鶴は口を開く。

「ええと、お道さん、でいいですか？」

「うん、いいよ。こつちの子は従順でいいね」

にこりと笑うお道。ふふんとちあきを鼻であしらいながら、お鶴は続ける。

「で、さっき、“変迅堂さんは昨日から帰ってない”って言ってましたけど、それ、本当ですか？」

「まあ、私もずっとここにいるわけじゃないから」と、まるで犬小屋のような小屋を見渡しながらお道は笑う。「けど、変迅堂さん、昨日から姿を見てないね」

うむ？

ちあきとお鶴は顔を見合わせる。

変迅堂^{せんせい}が、一晩も家を空けることなんてあるかしら？ と。

こう言っちゃアレだけど、変迅堂、かなりのヒキコモリである。つていうか、コモリキリである。発明が忙しいとかで、一日のうちほとんどを文人長屋で過ごしている。いつも発明品を買い取ってくれる問屋さんに顔を出したり、あるいは長介のところに顔を出したり、あるいは食べ物の調達などの軽い外出はあるけれど、一晩家を空けるような外出は基本的にはしない。仮にあつたとしても、そういう用事は数日前には決まっていて、周りの人間に何がしかの話はしているはずだ。

「ど、どうしたんだろ……」

「うーん、おかしいですね……」

そうやって乙女二人が顔を見合わせてうむうむと唸っていると、「ほ？」という間抜けた声が後ろから響いた。振り返ると、そこには――。

「おやおや、お嬢さん方ではありませんか」

ズレた頭巾を直しながら佇む、長介の姿があつた。いつものように落ち着いた色の着流しに、同じく落ち着いた色の羽織を風に揺らしていた。

思わずちあき、頓狂な声を上げる。

「あるえ？ 長介さん！」

ほっほっほ、と長介は呑気に笑う。

「なんですか。まるで真昼間から幽霊を見るようなその声は。私だつて一応この文人長屋の大家なんですからな。こうして様子を見に来るのが務めでしょう」

何を言つてんだか。ちあきは心の中で呆れ半分に毒づく。

ちあきがこうして変迅堂の元に通い出してからもう五年くらい経つけれど、今年の夏になって初めて長介と顔を合わせたのだ。“基本的に店子たちの自主性に任せる”とか言つて、これまで全然文人長屋の様子になんてほとんど気を払ってなかったくせに。

そんなちあきの視線に気づいたのか、長介はこほんと咳払いをした。

「ま、まあ、それに、新しい店子さんたちがどう過ごしているものか、気になりましたものでな。……と、お道さん」

ちあきたちを見つめる眼をお道に向ける。その視線に促されるようにして、お道はしゃんと身を立てる。

「うむ、しっかりとお勤めを果たしておるようだね、うんうん」

「ええ。そりやそうですよ。髪結たるもの、門番としても役に立たない！」

そう啖^{たんか}呵を切るお道に、長介はうんうんと頷いた。

この時代、髪を結う仕事人“髪結”には副業があった。基本的に待ち商売である髪結という商売者はどうしても暇な時間が多い。また、髪結が商売するためにはその一帯での髪結を一手に切り盛りするための権利書（株）が必要で、髪結はその権利書を持つている（地主様や金持ちな）人間と専属契約を結ぶケースが多かった。そんな条件が重なったことによって、髪結と言えば副業に長屋とか町の門番役に就かされていたことが多かったのだ。お道の言う「髪結なら」という言葉はそういうことだ。つまりとて、お道は権利書を持つ長介と専属契約を結んで髪結をしていて、同時に文人長屋の門番も任された、というわけなのだ。

「しかしまあ」

長介はまあ、とため息をついた。

「ちよつと困ったことになりましたものでな。本来なら、店子の自主性に任せて口を出さないのが私の流儀なんですがねえ。仕方なくここに来たわけなんですよ」

全くもって愚痴でしかない長介の言葉。

誰からともなく話の先を促すと、長介はのんびりと続けた。

「実はですな、昨日南町奉行所から連絡が入りましてなあ。……変迅堂さんが、南町奉行所に連行されたそうです」

「ハア！？」

小屋の中で思わず声を上げるお道。そしてその横で目をまん丸にしているお鶴。

けれど、当の長介と、ちあきだけは反応が薄い。

その温度差を表すかのように、ちあきは面倒そうに言い放つ。

「えー、まったく、先生つたらだらしないなア。ハア。今日はもう会えないのか……」

「っていうかアンタ」お道は叫ぶ。「なんでそんなに冷静なのよ！ 奉行所様に人が一人連行されたのよ！」

「だってさ、またなんだもん」

そう。繰り返すけど“また”なのである。ちあきなどは、“どーせ、また口クでもない発明をして、その釈明に追われてるんだろくなあ……”という想像が立っている。

けれど、そんなちあきの樂觀に割って入ったのは、お鶴だった。

「南町奉行所つてことは、兄上のお勤めになられているところですよね？ でも、昨日兄上は何もおっしゃっておられませんでしたけど」

「え、そうなの？」

あの妹ディスクーのイヤミ与力がその妹に何も言っていない？

どういうことかしら？ ちあきは思いつきり首をかしげる。

「おかしいのはそれだけじゃありませんよ」

長介はぼそりと呟く。

「どういうこと？」

ちあきの促しに乗っかる格好で、長介は続ける。

【3】

「うむ、最近の南町奉行所様は、イヤミ与……もとい仁杉与力のクソまじめ……もといきつちりとした折り目正しいお仕事ぶりのおかげで、人を捕まえるときにもある程度逮捕の理由を説明してくださっていたんですよ。“これこれこういう理由で某なるものを逮捕するので、これこれこういう風に緒端整えるべし”とねえ。……けれど、今回に限ってはそれが無いんですよ。ただ、“変迅堂にさる容疑がかかっているため、数日間身柄を預かる。念のため事情を聴くための逮捕のため、数日後には戻ってくる公算が高いので安心されまし”。ただそれだけなんです。どういった容疑で逮捕されたのかさっぱりわかりませんし、理由を問いただしても、知らぬ存ぜぬの一点張り。困ったものです」

つんつんと、ちあきは横のお鶴をつつく。

「どうなってるのよ、お鶴ちゃんのところのお兄さんでしょ！」

「私だって知りませんよ！　だって私だって初耳ですもん！」

小声でギヤーギヤーと言い争う（なんだか小難しいことをしてますね）ちあきとお鶴をよそに、長介はさらに言葉を重ねる。

「何か、あったのですかな」

「何か、とは？　どういうことですか？」

お道の言葉に水を向けられ、長介は続ける。

「そこまでは私にも分かりませんなあ。ただ、前例にない手続きを向こうが図ってきたということは、何か前例のない何かが起こっていると考えるのが自然ではありませんかな？」

「いや、まあそうですね」

そう言いかけたところで「ええい、うるさい！」と叫んだお道は、髪の毛からかんざしを引き抜いて、未だにギヤーギヤー言っている二人に投げやった。ヒュンと飛ぶかんざしは、やっぱりちあきとお鶴の眉間にクリーンヒット。ぶすっという地味な音の後に、「あぎ

「やー!」「痛い!」と、乙女二人の悲鳴が同時に上がる。

パンパンと手を叩きながら、お道は続ける。

「で、長介さん、私に何をしろ、と?」

「ヘエ?」長介はわざとらしく顔をゆがめる。「何のお話ですか?」

「あのう、そういう冗談、面白くないですよ。私はこの長屋の店子でもありますけど、一方で長介さんの雇われ者でもあるんですよ。そんな私にこんな話をするってことは、何かやらせたいことがあるんじゃないですか?」

最初、長介はきょとんとした顔を見せていた。けれど次第にその顔には悪戯っぽい色が混じってゆき、最後にはいつもの好々爺な笑顔に変わっていた。

ケロケロと長介は笑う。

「いやあ、さすがはお道さん。察しがよろしいことで」

「いえいえ、それほどでも。で? 頼みごとっていうのは?」

「ええ、実は……」

長介は眉間を抑えながら地面にのたうつ乙女二人を指した。

「あの娘たちの、面倒を見てほしいんですよ」

「め、面倒ですか?」

困惑を隠さないお道は、えりあしの辺りをかんざしで搔いた。そんなお道を見つめたまま、長介はゆっくりと頷いた。まるで念押しをするかのように。

「ええ。ほら、変迅堂さんが帰ってくるまで、あの娘たちは暇になつてしまつてしょう? だから、あの娘たちを面倒見てほしいんですよ。もちろん昼の間だけで結構。それに、お道さんだけでなく、他の店子さんたちにも協力を仰いでも結構ですよ」

「……まあ、分かりましたけど」

そう不承不承といった風に頷くお道。やってられるかい、と言いたげなのが見え見えであった。

けれど、長介は不意にさっきまで見せていた好々爺な笑顔を引つ

込めた。口元は緩ませているけれど、目にはさっきまでない力が入っていた。その長介の目に気付いたお道もまた、きりつと顔を引き締めた。

「あとは、これをお願いしましょうかね」

長介は懷から幾重にも折りたたまれた紙切れを取り出した。それをお道の手の中に落とした。

受け取ったお道はその紙切れを広げ、紙の上に踊る文字にしばし視線を落とす。そして、ふむ、と唸ってから、その手紙を懷のうちに入れた。

「確かに了解しました」

「うんうん、お願いしますね」

そう言うや、くるりと踵を返し、長介は江戸の往来の中に消えていった。

「さて、と」

残された格好となったお道は、小屋からゆっくりと出た。小屋の前では、かんざしに眉間をクリーンヒットされたまま悶絶しているちあきとお鶴が寝ころんでいた。「やっべえ、死ぬかもしれない!」

「ひいひい! めまいが、めまいが!」とか叫ぶ二人の前で仁王立ちをしたお道は、両手を腰において叫ぶ。

「こら、いつまでのたうってるんじゃない! そんなに強く投げた覚えはないわよ!」

すると、さっきまでばたばたとのたうっていたはずの二人は、すくりと上体を上げた。

「まあ、そうなんだけどさ」「そうなんですけどね」

お鶴もちあきも、お道に向かって涼しい顔を浮かべる。

なんというか、延々と一つの行動を繰り返していると、いつ終えていいものか分からずに延々と続けてしまっていることがある。二人ともそんなバカバカしいスパイラルに落ちていたのであった。

ふるふると辺りを見渡すちあき。そして、やがてあることに気付いた。

「あれえ？ 長介さんは？」

「もう帰りました。あなたたちがのたうってる間に」

「あ、そうなんだー」

どこかあっけらかんとした受け答えに、ちょこつとイライラしながらもお道は続ける。

「でね、長介さんからなんだけど……」

「知ってるよ」「知ってますよ」

ちあきもお鶴も同時に言った。

「ええと、先生が帰ってくるまでの間、お道お姉さんが私たちをどつかに連れてってくれるんでしょ？」

なんと、ちあき、全部聞こえているのであった。

ふん、とため息をついたお道は指を二つ立てて少し訂正する。

「二つ間違い。一つ目、あなたたちの面倒をみるのは私だけじゃありません！ 二つ目、面倒を見ると言っただけで“どつかに連れていく”とは一言も言ってません！」

その言葉に、うむむむとちあきは唸る。

「え？ “私だけじゃない”？ それってどういう……」

「決まってるじゃない」

お道はにつこりと微笑んだ。

「文人長屋の皆で、面倒見るに決まってるじゃない」

そうしてお道は、何にも知らずに門をくぐり出かけようとしていた男二人組に声をかけたのだった。

品川・東海寺。

三代將軍家光の招聘を受けた沢庵禅師の手によって開基された寺である。家光の庇護厚かった沢庵の権勢を誇るかのように、江戸は品川に広々とした境内が与えられ、幕府のポケットマネーから供出されたお金で以ってでんとお堂が立てられた。そしてそのお堂の周りには庭が広がり、そしてまたその周りには四季折々の花や木が植えられている。その様はさながら今極楽のようであったという。

ちなみに現在では寺の境内は殆ど削られ、五百石はあったという寺社領も全て取り上げられてしまい、当時の権勢を物語るものはほとんど残っていない。

ちあきたちの時代にはまだ品川の一等地を占めるその権勢ぶりは健在で、秋の行楽期には江戸っ子たちの散歩コースとして人気になつていたのであつた。それはそのはず、東海寺近辺には秋に色を変える木々が沢山植わり、目の保養になつていたのである。

そして今、ちあきたちは品川・東海寺にいたのであつた。

やっぱり十月ともなつてくると、紅葉もずいぶんと色づいてくる。赤と黄、そして橙。この時代はさしてカラフルなもののない時代だから、どうしても紅葉の鮮やかさが鮮烈な印象になる。そして、ちあきたちの前に広がっていたのは、恐ろしいまでに自己主張をする色の洪水だつた。

「へえ、今年はずいぶんと紅葉が早いですねえ」

紅葉の燃えるような赤色の葉っぱを眺めながら、お鶴は呟く。

その言葉に、つれないそぶりで答えたのは。持っている長い刀を抜き払つて、刀身をぎゅっぎゅと手ぬぐいで拭く浅兵衛だつた。

「ああお嬢さん、もう十月だぞ？ 例年通りだろう。それにこんな

赤い葉っぱの何が面白いのか」

「あのう」お鶴はちよつと唇を伸ばす。「もうちよつと、風流つてものが分かりませんかね」

「分かん」

なんと、重ねる返事までつれないのだつた。

お鶴との会話に飽きたかのように溜息をつく、その低い背に似合わない常寸よりもはるかに長い太刀を光に当てたり刀の筋に視線を添わせたりして汚れの有無を調べ始める。真面目な顔をしているけれど、それがゆえになんだか腹立たしい。

むきー！ お鶴が長い髪の毛まで逆立てんばかりに歯噛みしていると、横で三味線の調律チューニングをしている勘一がカラカラと笑つた。

「はっはっは、そういうもんなんだよお嬢ちゃん。俺たち芸人つて

いうのは、往々にして季節の移り変わりなんてエものに興味ねえもんさ」

「なんでですか！　だってこんなに紅葉が綺麗なのに！」

至極もつともなお鶴の言葉に、べべんと弦の張りを撥で測りながら、勘一が答えた。

「俺たち芸人は、客の顔しか見てないんだ。紅葉がなんだ、桜がなんだ、ってえのは客側の事情ってことさね」

「そういうことだ」

【4】

はー、と息を刀身に吹きかけてから、浅兵衛もその言葉に同意した。

ぐむ。

思わずお鶴はちあきに視線を向ける。こいつらにナント力言っちゃってよ、ちあきさん！　ってなものだ。

けれど。

「すぴー、すぴー」

……。

「すぴー、すぴー」

……。

なんと、ちあき、そこらへんの切り株に腰かけて、ぐつぐつと夢の世界に入っているのだった。いや、確かに十月の日の光ってえのは眠りを誘いますよ。しかも、今日という日に限って小春日和の穏やかな日で、しかもその明かりが紅葉の葉から漏れてきていて、確かに眠りを誘いますよ。けど、いくらなんでも本当に眠ることはないでしょう！

あー。もういいや、この娘。

そう思ったのかは分からないけれど、気を取り直してお鶴は二人に向かって訊く。

「そういえばお二人、元々知り合いだったんですか？　仲がいいように見えますけど」

その言葉に答えたのは、三味線を早弾きしはじめた勘一だった。べべべべべん。

「うんにゃ」

勘一曰く、二人が初めて会ったのはあの季節外れの月見の日だったという。

「え、ってことは二日くらいしか経ってないじゃないですか！　な

のにもう意気投合!？」

お鶴の言葉に、勘一は答えた。

「まあ、“同業者” っていう共通の話題はあるわけだしなア」

「そういうことだ」

浅兵衛も頷いた。

さて、勘一と浅兵衛は、大道芸人というくくりのうちでは同業者である。

当時、大道芸人と一口に言ってもいろいろな商売者があつた。けれどどの大道芸人も、道端で自分の芸を披露しておひねりをもらつて生計を立てている、その一点では同じであつた。どんな芸を見せるにせよ、大道芸人という商売者にはなんとなく抱えている悩みとか喜びまで相通ずるものがあるのだらう。

「……しかし、お道さんもずいぶんと面倒を押し付けるものだな」と、浅兵衛は小さな肩をすくませた。「仕事だというのに、どうしてこんな小娘たちの面倒を……」

「あのう、それ、ずいぶんと失礼な言葉だと思ふんですけど」

浅兵衛は何も答えなかつた。その代わりに、刀を手のスナップを使って表に裏に動かしていた。手の内で刀を反転させるときに、ちやき、と刀の鐔が鳴る。これ見よがしに聞かせようとしているかのようだった。

うむむ……別に私だって、好き好んでここに在るわけじゃないんですけど！

お鶴の声にならない言葉は、ただお鶴の胸の内に秘められたまましまわれていく。

そうなのだ。別にちあきとお鶴、ここに好き好んで来たわけではない。

さつき、文人長屋から並んで出てきた勘一と浅兵衛を捕まえたお道は、突然ちあきたちにこんなことを言ったのだつた。

『あー、今日はこの二人についていつてくれる?』

最初は何言ってるの！？ とばかりに頓狂顔を浮かべていた勘一と浅兵衛だったけれど、そのうちにお道のマジメンチに気づいた勘一が浅兵衛の肩を叩き「しゃーねえよ」と短く呟いたのだった。

結局、そうしてちあきたちは勘一たちの足が進むまま、品川の東海寺にやってきたのだった。

「で、勘一さん」お鶴はあえて浅兵衛を除外しながら続ける。「今日はここに何しに来たの？」

「何しにもクソも。俺たち大道芸人ってえのがこうやって商売道具を広げているからには……、そりや商売に決まってるあな」

そうやって笑う勘一を尻目に、浅兵衛は空を眺めた。

「ま、今日は空のご機嫌もいい。きつと今日あたりは紅葉狩りに客がたくさんやってくるに違いない」

そう言い放ってスクリと立ち上がった浅兵衛は、磨いていた長い刀をぶんと振った。目にもとまらない振り出し。さながら一陣の雷のように舞う剣先。ひらりと舞った紅葉のひとひらをパカリと一刀両断したのを確認するや、その刀身を鞘におさめた。

「ま、そういうことさね」

左手で弦の音色を変えながら、ベベベベんと三味線を弾く。本当に笑顔で楽しそうに弾いているのが印象的だった。

そんな勘一の奏でる音色はどこか懐かしくて、なんとなくジンとくるものがあつた。横で聞いているお鶴さえ、なんだか心の臓を思いつきり驚掴みされたかのような感覚に襲われる。

「ううーん、よく寝た！」

ちあき、お目覚め。

よだれをちよいちよいと懐紙で拭くと、ちあきは思いつきり切り株から立ち上がった。そして音色に引き寄せられるようにしてその視線を勘一に向ける。

「へえ、すごいねえ、勘一さん」

「へへ、まあな。だがまあ、大道芸人としての本領はまだまだこれ

からだぜ？」

三味線をギターのように構えながら、勘一は洩をすすする。鶯色の着流し。股を大きく割って立っているせいで、下帯が丸見え。けれど、そうして見える下帯さえもかっこいいから不思議だった。

「でもなあ」ちあきは呟く。「ちよつとここ、立地が悪くない？」ぎくり。

勘一も浅兵衛も、肩を一瞬すばませた。

そうなのだ。ここ、立地が悪い。

ここは東海寺の本堂からかなり離れたところとなっている。普通お寺さんの物見遊山というと、本堂とかの建物を見て、そのあと本堂近くの紅葉を見るのが相場だから、本堂から遠く離れたところで興行をやったところで、客はほとんど来ない。江戸っ子として大道芸を十五年も見てきたちあきの、まっとうきわまりない意見であった。

うむむ。その言葉に勘一は三味線を弾く手を止める。

「いや、まあ、それはその通りなんだけどよぉ……」

なんだか歯切れが悪い。

煮え切らない態度に業を煮やしたちあきが今度は浅兵衛に目を向ける。けれど浅兵衛はちあきと目があつた瞬間に、ひょいっとそっぽを向いた。

「何？　なんか不都合でもあるの？」

ちあきの（無駄に）純粋な問いに、答えられずにいる男二人。勘一は「あつはは……」と苦笑いを浮かべるばかりだったし、浅兵衛は視線をどこかに泳がせるばかりだった。

と、その時だった。

「おやあ？　そこにいるはへっぽこ芸人・浅兵衛じゃねえか……！」

「おお、横に並ぶはこれまた下手撥へたはきの勘一！」

そう呼ばれた浅兵衛と勘一は同時に身を仰け反らせた。

ちあきが声の方に振り返ると、その視線の先には男が二人立っていた。

一人はとてつもない大男。背中に身長よりも長い刀を背負うようにして差している。無精ひげがうるさい顔をニタニタとさせた、見えて気分の良いくない笑みでゆがめていた。

もう一人はやけに目立つ服の男。紫色の着流しに黄色く染められた角帯。そして手には三味線と撥を持ち、隣の大男にも負けない見えて反吐が出そうな笑みを浮かべていた。

「……針通しの貫吾^{かんご}」

「げえ、風撥^{かせばち}の己吉^{みきち}」

どうやら顔見知りらしい。浅兵衛も勘一も、一様に苦虫でもかみつぶしたような顔を浮かべて固まっていた。

そんな二人のことを嗤うように、大男（浅兵衛が「針通しの貫吾」と呼んだ方だ）は口を開く。

「はん、お兩人、こんな場末で興行か？ はは、お前ら下っ端にはお似合いだな、オイ」

その大男の言葉に合わせるように、派手な男（さつき勘一が「風撥の己吉」と呼んだ方だ）がその調子に合わせる。ときおり、手にある三味線をポロロンと弾きながら。

「はっは、貫吾さん、興行なわけないでしょ、こんな下っ端たちがきつと練習か何かをしているに違いないよ。でなきゃ、こんなところで興行をしようなんてバカはいないよ」

「はっは、言われてみればそりゃそうだ！」

「まあ、ここで興行をしようってえなら、相当の大バカに違いないね」

「あるいは」

「あるいは？」

「こんな場末でしか商売ができないような、クソ小物ってエことだな！」

はははははははは。

そんな男二人の言葉。傍から聞いていても、上から目線の言葉使用と相手を揶揄するような言葉が鼻につく。

聞いていて気分がいいものではない。

むろんけんかつ早いちあきが齒噛みしたのは言うまでもない。なんだかよくわかんないけど、こいつらなんだかムカツ腹！

けれど、肝心の勘一と浅兵衛が下を向いて唇を噛んでいるのもあって、結局ちあきも黙っているしかなかった。

はん、と笑った大男は、背中の刀の鐔をカランと鳴らしながら、くるりと踵を返した。

【5】

「おい、行こうぜ己吉。こんな下っ端を相手するほど、俺たちア暇じゃねえだろ」

「はは、確かに。私たちを待っていてくれるお客のために、せいぜいがんばりましようかい」

軽快なステップでくるりと踵を返した己吉は、大男・貫吾に続いた。そうしてどんどん小さくなってゆく男二人は、イヤに耳に残る高笑いだけを残していった。

無言でちあきは勘一と浅兵衛に目を向ける。男二人は、まだうつむいたままで唇を噛んでいた。

「ねえ。あの二人、何？　すぐえ腹立つんですけど」

そのちあきの問いに答えたのは、浅兵衛だった。苦虫をかみ潰したような顔をしてちあきに向いた。

「あの刀を持っていたのは、“針通しの貫吾”だ」

「……で、あの派手な奴、あれが“風撥の己吉”」

ぼつりと勘一も答えた。

「あの、あたしが訊いているのはそういうことじゃないんだけど。

あいつら、なんであんなに威張りくさってるわけ！？　傍で聞いてたあたしさえムカツ腹なのに、どうして勘一さんたちは何も言わないわけ！？」

「何も言わない」んじゃない」浅兵衛は続ける。「何も言えない」だけだ」

そう切り出した浅兵衛は、あの嫌味な男二人について語り始めた。あの大男・針通しの貫吾は、居合師だという。あの背中に背負った刀を縦横無尽に振るい、“春は桜の花びらを、夏は雨粒を、秋は紅葉のひとひらを、冬はふわりと舞う雪を斬る”という芸を見せて人気の居合師だという。そのあまりの正確な抜きっぷりに、“針通し”とまであだ名がついたのだという。

そして隣にいた派手な男・風撥の己吉は、道端三味線師。目にも止まらぬ撥さばきと聞く者を郷愁に誘う、謡うが如き三味線の弾きっぷりに、“風撥”とあだ名がついた。話によると、「風のようにとらえどころのない撥さばき」を略したものだという。

ちなみに、どちらも一流でありながら同業者からは嫌われているという。まあ、その理由はおのずから分かるというものだ。あんなんじゃ、人徳も何もあつたものじゃない。口くでもない人間には口くでもない人間が寄り添うのは世の道理。引き寄せ合うように人徳のない大道芸人二人が出会い、ああやってユニットを組んでいるのだらう。

「どっちも、実力者には違いない。いや、もしかすると、江戸でも指折りの大道芸人だらう。もし大道芸人の番付表があつたなら、きっとあの二人は関脇くらいには名を連ねているだらう」

浅兵衛の言葉に、ちあきはうんうんと頷く。けれど、わからない

！ と叫ぶ。

「けど、だからってあの物言いはないでしょ！」

「いや、ああいうもんなんだ」

と答えたのは勘一。そのまま続ける。

「こう言っちゃなんだけど、俺たち芸人ってエのは人気で食ってる商売だ。まあ、舞台で一席打ってるような芸人の世界は分からないけど、大道芸の世界じゃ、人気があつてナンボなんだ。実力なんて関係ないんだよ。結局のところ、人気のない芸人はこうして場末で銭を稼ぐしかねえし、人気者はああして肩で風切つて歩くもんだ。それで、俺たち芸人は自分の芸でしか物を語れねえ。そういうもんなんだ」

「芸で語ろうにも、俺たちはまだあいつらに届いてない。だから、まだ何も言えない」

「だから、文句も言わずああして負け犬みたいに下を向いてたわけ？」

とげのあるちあきの言葉。

しばし何も言えずに立ちつくす勘一たちだったけれど、ようやくゆつくりと言葉を吐き出した。示し合わせたように、しかし同時に「ああ」

けれどその言葉の割に、勘一の顔からも浅兵衛の顔からも、悔しさの色は消えていなかった。むしろ、さらにその色が強まっているようにさえ見えた。

ああもう、本当にむかつく！

ちあきは心の中で毒づく。

むかつくむかつくむかつく！

別にちあき、針通しの貫吾と風撥の己吉の二人にだけむかついてるわけではない。むしろ、ちあきを苛立たせるのは――。

ちあき、ついにこらえられなくなって思わず叫ぶ。

「あのねえ！ あんたたち、キ。タ。ついでるの！？ 悔しいんですよ！？」

うわぁ……、ちあき。仮にもヒロインが伏字しなくちゃいけないような言葉を使わないでくれないか。やかんのように湯気を頭からぼつぽと上げながら、ちあきはエキサイトし続ける。

「あんなこと言われて悔しいんでしょ？ 悔しいんだったら、喧嘩売ってきなさいよ！ 負けてもいいから、せめて一矢くらいは報いてきなさいよ！ バカ！ つうかヘタレ！」

そのちあきの口をふぎゆると抑えながら、お鶴も口を開く。長い髪を揺らしながら、この娘らしく整然とした言葉選びで。

「ちあきさんの言葉はかなり下品で言いすぎなところがあると思いますが、私もちあきさんとほとんど同じ意見です。何も言えずに悔しいくらいなら、いっそのこと正面からぶつかった方が気持ちいいと思いますよ」

乙女二人は気づいていない。二人の意見というのは、“自分の思い”を優先させているものだというところに。つまるところ、むかつくやつがいるから挑戦して倒す！ といった、向こう見ずなことを言っているだけなのだ。大人になればなるほど、向こう見ずではい

られなくなる。色々ソロバン勘定が上手くなるし、自分が傷つかなくてすむ方法を知ってしまうものなのだ。

けれど――。

浅兵衛は口を開いた。

「ああ、正面から、か」

そう呟いて、勘一を見やる。その顔には、なぜか笑みが差していた。

勘一も、その浅兵衛の笑顔に应じる。

「懐かしいなア。そういえばアレだな。そんな無鉄砲、ずいぶん昔になくしちまったような気がしたなア」

「ああ。駆けだしの頃にはそうやって俺も気炎を放っていたものだ
が」

「応。いつの間にか忘れてたな、そういう無鉄砲」

勘一は思いつきり撥で弦を叩いた。べべん！ 耳をつんざくような大きな音が、辺りに広がった。

がしつと長い刀の鯉口を握った浅兵衛は、えいや！ と鞘を払った。目にも止まらない鞘走りの後に、浅兵衛の刀の切っ先は、東海寺の本堂の方に向いた。きりりとした顔で、物干しざおのように長い刀を掲げる浅兵衛は、真面目くさった顔で宣言した。

「敵は」

べべん。浅兵衛の言葉に合わせるように、勘一の三味線が謡う。

「東海寺の本堂にあり」

べべべべん！

こうして下っ端大道芸人二人は乙女二人にそそのかされ、当代一流の大道芸人に喧嘩を売る羽目になったのだった。

東海寺本堂あたりは、さながらお祭りの様相を呈していた。

紅葉狩りの季節というだけあって、大きな本堂の周りに江戸っ子たちがたむろしている。女をはべらせながらげへへと笑うはどこかの店の若旦那。半纏姿を寒風に吹き誘われてイッキシとくしゃみ

をするはどこかの下っ端大工さん。がやがやと花よ紅葉よとかしましいのは長屋の女房連中。そんな一切合財を飲みこんで、東海寺本堂は盛況を誇っていた。

そして、そんな盛況なところに商売人が集まるのは当然のこと。

子供と子供の間をひよこひよここと移ろい歩くは飴売り。屋台を開いて甘いにおいを運ぶのは甘味売り。そして、百花繚乱、様々な芸を披露する大道芸人。

そんな様々なエネルギーがぶつかるとつぼの真ん中に、ちあきたちは降り立った。

「へえ、やつぱりこの辺だとずいぶんと賑やかなんだねえ」

徳川幕府というスポンサーによって建てられた、とんでもなくでかい本堂を見上げながらちあきは呟く。けれど、ちあきの言葉に、誰も反応しない。と、いうのも……。

ぶくぶくぶく……。

「あ、あの、ちあきさん！」

お鶴がちあきの裾を引く。何？ と振り返るとそこには……。

まるで蟹のように泡を吐きながら気絶寸前の、勘一と浅兵衛の姿があった。

二人を何とか手で支えながらもお鶴は言う。

「さつきからこうなんですぅー！」

うわあ。ちあき、思わず一歩後ずさる。

そう、この男二人、場の空気にしつかりと吞まれてしまっているのである！

しかたないな！。

ふうとため息をついたちあきは、何の前触れもなく二人の頬を叩いた。バチン！ げぶん！ ちあきのそんなビンタによって、ようやく二人は白目がちだった目を元に戻した。

は、はは。ぐぐいと顎の汗を腕で拭きながら（ついでにちあきにぶたれた頬をさすりながら）、浅兵衛は言った。

「武者ぶるいという奴だな」

「ビビって気絶ってわけでなく？」

ストレートすぎるちあきの言葉に、浅兵衛は口をつぐみそうになる。けれど、なにかのタガが外れたのか、半べそを掻きながらちあきに顔を向ける。

「ああそつだよ、ビビってるよ！ 仕方ないだろ！」

【6】

あれ？　なんだかこの人、人格が変わってない？　浅兵衛の口の泡をよけながら、ちあきは心の中で呟く。

そんな浅兵衛の横で、案外冷静だったのは勘一だった。

「……まあ、仕方ねえよ。俺たちみたいなた下っ端が、ろくでもねえ連中とはいえ江戸でも指折りの芸人に喧嘩を売るんだからよ」

笑ってはいるけれど、その顔はしつかりと引きつっている。

どう見ても、明らかに二人とも緊張しきっている。

あらー。こりやもう既に負けてるかも。

ちあきがそう心の中で呟いたその瞬間だった。

「あのう」

ちよこんと手を挙げたのは、お鶴だった。

三人の視線がお鶴に集中する。ちよつとたじろきながら、けれどもはつきりとお鶴は言った。

「よく言いません？　緊張しているときには掌に“人”って三回書いて呑み込むってヤツ」

ああ。あるある。けれど、こんな大一番の前にやることかという疑問だけでも。なんというか、あまりに子供っぽいおまじないの提案だった。

けれど、その子供っぽい提案が功を奏したようだった。

勘一と浅兵衛は顔を見合せて笑う。勘一などは、手に持っている三味線を乱暴にべべべん弾きながら笑った。

「どうせ最初っから負けいくさ。なら……」

「おうよ、だったらせいぜいのびのびやるのが芸人だろう」

そう言うや、男二人は左手の掌を自分の前で広げた。ちあきたちも場のノリで左手を自分の前で広げた。

そして。

人。

人。
人。

三回書いて、呑み込んだ。ごっくん。

すると、二人の表情が明らかに変わった。二人の顔から、緊張が
なりをひそめていた。いや、緊張はしているのかもしれないけれど、
それは体を固くする類の緊張ではなさそうだった。ちあきには、二
人の肩から赤い炎のようなものが浮かんでいるようにさえ見えた。

「よっしゃ！ 浅兵衛さん、行くぞ！」

「おう」

二人は地面を蹴るようにして前に歩き出した。

ちあきとお鶴は顔を見合わせて“してやったり”とばかりにニヤ
リと笑いあう。そして、どすどすと歩く二人の後に続いた。

さて、そうやって本堂近辺を歩くうち、せき止められた水のように
にして人が足を止める一角に突き当たった。背伸びをしながら前の
様子を見遣る江戸っ子もいれば、子供に肩車をしてやって前の様子
を見せようとしている父親もある。そんな人々の輪が幾重にも重な
って、さながらせき止められた川のように人々の流れを止めている。
ここにとどまっている人たちは、紅葉を見ているような雰囲気では
なかった。誰もが「おおー」と歓声を上げたり、「すげー！」と喝
采を送っている。

もちろん、その人の環の中心には。

「さあさ、寄ってらっしゃい見てらっしゃい。江戸じゅうに名の聞
こえたる居合師、何を隠そう針通しの貫吾でござい！ けれどここ
は耳に聞こえた品川東海寺、タクアンを斬るわけには参りません。
そこでひらりひらりと空を舞う唐紅の葉を斬ってみようじゃありま
せんか！」

環の中心でそう叫んだ貫吾は、背中をえいやと抜き放った。

すると、前の方から歓声が沸く。後ろにいるちあきたちには何が
起こったのかは分からない。けれど、観客たちのどよめきは水面の
波紋のように広がってゆく。むしろ、後ろにいる観客の方が、放た

れるどよめきが大きいような気さえした。

そしてその歓声に混じって……。

べん、べん、べん。

まるでそれは、遠く江戸まで奉公に出た娘さんが故郷を想い歌うわらべ歌のようだった。そのどこか郷愁を誘う哀調に聞き入る江戸っ子たちも多かった。

そして、そんな悲しげな旋律を響かせる中心には、やはりあの男、風撥の己吉が立っていた。目を閉じながら、べん、べん、べんと琵琶を弾くようにして哀調を響かせる。あんまり三味線を聞いたことのないちあきでも、あの己吉のやっていることがめちゃくちゃにアバンギャルドなことだということに気づいていた。

「ねえ、あの二人ってさ、本当にすごくない？」

思わずちあき、男二人に振り返る。男二人は一樣にあきれ顔を見せた。

「さっきからそう言っている」

そう呟く浅兵衛の横で、勘一が続ける。

「そうだよ、あの二人は本当にすごいんだ。けど」

「今更、立ち止まることもできないな」

そう宣言するや、二人は人混みの中に飛び込んでゆく。「おらおら、邪魔だあ!」「通せ、通せ!」そうやって、観客たちを押しつけていく二人。やけに背中が大きく見えた。

そうこなくっちゃあ!

ちあきも前に飛び出した。そして、勘一たちと一緒に観客を押しつけ始める。

「おらおら、邪魔! どかないと。すよ!。されたくなかったら早くどいたどいた!」

ケンカっ早い人種の多い江戸にあつて、その大音声ひとつで観客たちがどいてしまうのは、やっぱりちあきの喧嘩師っぷりが半端ないからで決まりであろう。腕をぶんぶんと振り回しながらマジメンチをきめると、観客たちは一樣に青い顔をしてざざつと道を譲る格

好になる。

さて、ここで取り残された格好になったのがお鶴だ。

「あわわわ……」

元々がお嬢様気質なので、今一つこういう喧嘩っぽい場面になじめない。遠巻きにどんな観客たちに分け入っていくちあきたちをただ眺め、「うわあ、私には無理ですう」と呟くばかりだった。

と――。

ふと、お鶴の視界の端に、ありえないものが映った。あれ？ おかしいな。今、あの人は――。

「え？　なんで？　あれは――」

なんとなく引つかかるもののお鶴は、視界の端っこに映ったその二人連れの後を追うことにした。あっちの喧嘩はちあきさんに任せちゃえばいいや。そんな気持ちが裏にあったのは言うまでもない。

一方その頃――。

「ほらほら、どいたどいた！　どいたどいた！　ってアレ!？」

観客たちを二つに割りながら進軍する三人を待っていたのは、長い刀を肩に背負いながらニヤリと見下してくる針通しの貫吾と、べん！　と弦を叩いた己吉だった。

ち、と貫吾は舌を鳴らした。

「後ろの方がうるさいと思ったら、何だお前らかよ。下っ端が俺たちの興行を邪魔しようたア、随分といい度胸じゃねえか、あん？」

「まったくだ」己吉も同意した。「これでは俺の奏でる哀調が台無しだ。お前らみたいな下っ端にぶち壊しになっていいほど、俺の芸は安くないんだぞ」

ぎり、つと歯を噛んだちあきは、ずずいっと身を乗り出した。山のように大きい貫吾を見上げるような格好で思いつき顔をしかめさせて睨みつける。さながら野犬のようにぐるぐる唸りながら。

「あんたら、下っ端下っ端ってうるさいのよ！　そもそも、あんたたち、何様だって言うのよ!」

あん？　ちあきのことを見下しながら、貫吾は言う。

「お子様は下がっててくださいね、と言いたところだが、お前もあの下っ端たちの仲間だろ？　なら教えてやる。俺たちは針通しの貫吾に」

「風撥の己吉だ」

ぎりつと歯を噛んで、ちあきは続ける。身の丈がずいぶん違う貫吾に負けないように威勢を張って。

「そんなのがなんだっていうのよ！！　あんたたち、たかが芸人じゃない！」

と――。

スパコーン！

「あいたー！！」

ちあき、頭を押さえてうずくまった。けれど、その頭を叩いたのは貫吾でもなければ己吉でもなかった。ちあきの頭を叩いたのは、ちあきの後ろに立っていた浅兵衛だった。差していた長い刀を鞘ごと引き抜いて、鞘でスパコーンとちあきの頭を叩いたのである。

え？　なに？　どうして？　何が起こったの？　つうかなんであたし、殴られてるわけ！？　しかも味方に！

そうやって疑問がいっぱいのままでうずくまるちあきの横をすり抜けた浅兵衛は、二人に向いた。

「あー、あの娘は芸人じゃない。ただ、今日一日預かっているだけの子だ。あんたらの芸の程に免じて、許してやってほしい」

ふん、と鼻で笑いつつも、貫吾も己吉も頷いた。

けれど、納得いかないのがちあきだった。

「ちょっと浅兵衛さん！　なんであたしの頭を殴ったワケ！？　しかも謝るってどういうことよ！？　ねえ浅兵衛さん！！　答えなさいよバ」

【7】

ちあきの罵詈雑言を封じたのは勘一だった。悪口ばかり飛び出すちあきの口を、なんとか両手で抑えにかかったのであった。むぐーむぐーとしながら手足をばたつかせるちあき。それでも勘一は口を封じる手を止めない。そのせいでちあきのパンチやキックを何発も食らう羽目となった勘一、今日は厄日なのだろう、きつと。

「ちよつと待ったお嬢ちゃん」

「むぐー、むぐー!!」

勘一の目を見つめ（むしろ睨みつけ）ながら、むぐむぐと言葉を放とうとするちあき。けれど、その言葉を手で封じながら、勘一はあくまで優しく言葉を選んだ。

「今、お嬢ちゃんは言っちゃならないことを言っただ」

「むへ？」

ちあき、思わず手足のばたつきを止める。そして、勘一の顔をまじまじと見遣る。

ようやく静かになったちあきを見届けるや、勘一は続ける。

「さつきお嬢ちゃんが言った、“たかが芸人”ってところさ。うん、確かに俺たちは浮き草稼業に身を染めてる芸人だけだよ、“たかが”なんて気分でやってねえんだ。俺も浅兵衛さんも、ある意味じゃ貫吾と己吉だつてそうだ。芸人だつて普通の仕事の人間と同じく努力はしてるんだ。じゃなきゃ、良い芸は出来ない。お嬢ちゃんのあの言葉は、芸人の一番聞きたくない言葉なんだ」

「……」

ちあき、言葉が出なかった。

そんなちあきの口元から手を離して、勘一は三味線に持ち替える。

「お嬢ちゃん、見せてやらあな。芸人の意地つてやつ」

するりとちあきの脇をすり抜けた勘一も己吉たちの前に立った。そして撥でベベンと弦をはじいて、びしっ指を立てた。

「おうおう！ 針通しの貫吾に風撥の己吉！ おめえらに公開勝負を申し込む！」

「なんとまあ」己吉はあきれ顔を隠さなかった。「無鉄砲な話だねえ。まさか俺たちに勝負を申し込むとはねエ」

「全くだ、だが」貫吾は肩に背負っていた刀の切っ先を大きく旋回させて、鞘に収めた。「こんなに観客が見ている中で勝負を申し込むとは、全くなかなか大した奴らだよなあ。で？ どのような勝負形式なんだ」

「決まってるなあ」

勘一は観客を指した。

「俺たちの芸に金を払ってくれるのはいつもお客様の皆さんだ！

お客様に決めてもらうのが筋ってもんだろがよ！」

すると、観客たちは一斉にどよめいた。そのどよめきはまるで地割れのようなだった。うおおおお！ 熱気の混じった叫びがうねりとなって、ざんざと降りしきる。万雷の拍手、そして万雷の悲鳴。それが四人の芸人に向かって雨のように降り注がれる。

「ははは！ ちゃんちゃらおかしいな！」

そのどよめきを壊すように、己吉は笑った。

「おいおい、正気か？ 今ここにいるお客様は、俺たちを見てくれていたお客様なんだぞ？ お前らにとっては圧倒的に不利になるだろうが」

「それともアレか？ 負けたときのための布石かい？ “あれは客が悪かった” って逃げ口上を打つため、ってことか？ いや、小さい、小さいなアオイ！」

そう貫吾が笑おうとした瞬間に、浅兵衛が口を開いた。

「いや、違う」

「何？」

笑おうとして大きく口を開いていただけに、貫吾の言葉はどこか間抜けた響きとなってしまっていた。元々人よりも頭一つ分身長の低い浅兵衛は大男の貫吾を見上げる格好となっている。が、その威

圧は負けていない。

その浅兵衛が放つ威圧に、全員が吞まれていた。貫吾や己吉はもちろんのこと。ちあきや客たちも水を打ったかのように静かになってしまった。

そんな静寂の中で、浅兵衛は言った。

「何、そっちの方が、勝敗がはつきりするといふものだろう？ あんたらが必死で集めたお客様方を俺たちが全員振り向かせたら、あんたらの大敗ぶりの噂は江戸じゅうに走るだろうからな」

その言葉とともに、観客の歓声が飛んだ。そもそも江戸っ子と云う連中は、この手の諧謔が大好きである。下の者が上の者をやりこめる感じが大好きな人種である。これを俗に「判官びいき」とかいうけれど、結果的に浅兵衛の言葉は江戸っ子たちの「判官びいき」心をくすぐったのであった。

そんな空気の中、貫吾と己吉はぴくぴくと眉をひそませた。

「……てめえ」

「言わせておけばまあ」

すぐむ二人を勘一が言葉で制する。

「おいおいご兩人。ゴタクはこれくらいでやめにしないかい？ 俺

たちは芸人。“芸人”っていうのは畢竟^{ひつきやう}”」

その言葉に、貫吾と己吉は同時に答えた。

「“己の芸でしか己のことは語れない”」

「そうそう」

なぜか面白そうに勘一は笑った。

「よーしいいだろう下つ端ア！」

ついに青筋さえ見え始めた貫吾は、また刀をすらりと抜き放った。四尺はありそうな長い刀を殆ど何の予備動作もなしに抜き放ってしまふあたり、やっぱり貫吾も名人なのだろう。ぶぶんと頭の上で刀を振り回しながら、大見得を切った。

「ここは一丁、俺たちが相手してやろうじゃねえか！ しかも公開勝負とは、その度胸だけは買ってやらあな！ その度胸に免じて、

おめえたちを向こう十年は江戸で商売できねえくらいけつちよんけつちよんに破つてやらあな！」

べべん。

眉根をひそませる己吉は、三味線を弾く。けれど、その感情が三味線の音色にまで伝わることはない。明らかに怒りの表情を浮かべながらも、その三味線から放たれる旋律は氷のように冷え冷えとした哀愁をたたえていた。

「貫吾さんに同じく。大道芸の三味線師として、小生意気なクソガキ三味線師に、三味線のなんたるかを教えてやりましょうかね。……ま、その教授料は高くつきますが、ね」

べべベン！

その三味線の音が辺りに広がる。

「望むところでエ！」

勘一の啖呵は、江戸っ子たちの熱狂に迎え入れられた。

うっはあ。

ちあきはその勘一たちの後ろ姿を眺めながら、うつとりとため息をついた。

「火事と喧嘩は江戸の華、だよねえ」

こうでなくっちゃ。

ちあきも江戸っ子であるからして、そういう対決ムードが大好物なのだった。

かくして、貫吾・己吉コンビ対浅兵衛・勘一コンビの勝負が決まったのであった。

「おい、準備はいいのかよ、下っ端」

客たちの目の前で風呂敷を開く浅兵衛に、貫吾はぶっきらぼうに問う。けれど、浅兵衛はその問いに答えない。ただ。淡々と風呂敷に入っている物たちを拾い上げて、身に付け始めた。晒をたすき掛けにして、手ぬぐいを鉢巻代わりにびしっと巻いた。そして、いやに歯が高い二歯の下駄を履いた。さながら厚底ブーツのような下駄

を履いてもなお、浅兵衛の背丈は貫吾に及ばない。そうして長い刀を拾い上げてみれば、典型的な居合大道芸人が出来上がっていた。

全部で五尺はありそうな刀を左腰に差しながら、浅兵衛は貫吾に向いた。

「ああ、待たせたな」

「……ふん」

二人がびりびりと視線をぶつけ合う。すると、江戸っ子たちの悲鳴にも似た歓声が一層強くなる。中には「俺が許す！ 斬り合え！」とか言っている野次馬もいる。まあ、そんな手合いのことなんて、貫吾も浅兵衛も歯牙にもかけていない。ただ、横に立つ同業者のこただけを見つめている。睨みつけている。いや、睨みつけているのでもないのかもしれない。ただ、相手のことを目に入れていただけのことかもしれない。

ちあきはただ、そうやって立ちつくす二人を見ているばかりだった。何も野次なんて飛ばせない。こうしてマジかで見ているから分かる。あの二人の放つ空気。前にいる観客ほど、その空気を感じ取っているのだろう、誰も化にも言おうとししない。野次を飛ばすのは常に遠くにいる面々だけだ。

う、うっへえ。何コレ？　すげえ。背中に汗かいちゃってるよ。

二人の放つ空気を邪魔しないように、心の中で呟くことしかできない。

ふと、後ろに視線を向ける。後ろでは、己吉と勘一が構えている。どちらも三味線の弦に撥を添わせている。そして、ゆっくりと息をしている。居合師の二人とは打って変わり、三味線師の二人は視線を合わせようとすらしていない。まるで耳を澄ましているかのよう。じつと眼を閉じていた。けれど、二人が二人、びりびりとした空気を造り出していた。

さすがにその空気に押され、後ろの方で騒いでいた野次馬たちも息をひそめ始めた。そして、さっきまでの喧騒はすっかりと鳴りをひそめ、辺りには紅葉が風に揺れる音しかなくなった。

しばしの沈黙。

そして、その沈黙は不意に破られた。

ふっ。

風が吹いた。ようにちあきには聞こえた。が、それが違った。

目にも止まらぬ速さで、貫吾が動いた。

そう、ちあきには見えなかった。だから、ちあきが見ることのできたのは、結果だけにすぎなかった。

ちあきの目に入ったもの――。それは、五尺はあろうかという大太刀を鞘から引き抜いて、横一文字に払っていた貫吾だった。

その結果だけ見れば、その過程は想像ができる。つまり、一瞬のうちに鯉口を切って、誰の目にも止まらぬ速さで抜刀、そして横一文字に切り払う。その結果が今の貫吾の態勢なのだ。

けれど、到底信じられない。あれだけなりの大きい貫吾の動きが、まったく把握できなかった。ただただ一瞬であの大太刀を引き抜く口で言えば簡単なことだけれど、そうそう出来るもんじゃないことはシロートのちあきにだって分かる。そして、その“芸”の裏には長年の血がにじむような修練があるだろうことも。

むろん、お子ちゃまであるちあきにも分かること。江戸っ子たちにもそれは分かる。

ほお。

そんな溜息が辺りに広がる。そしてそれに遅れること数瞬後に、口笛やら「イヨッ！ 日本一！」といった歓声がどっかんどっかん浮かんできた。

その歓声を聞いた瞬間に、たたみかけるようにして己吉が動く。ゆっくりと息を吐き、撥で弦を叩く。まるで綿毛のように繊細な音たちだったのに、ともすれば乱雑で粗野などよめきを一掃してしまった。それほどに己吉の三味線から放たれる哀調には力があつた。さながらそれは、こんこんとわき続ける泉のようだった。

はあ。さっきの溜息とは全く違う溜息が沸いた。

「す、すごい……」

思わずちあき、そう呟いていた。

確かにすごい。何この人たち。

「うんうん、お嬢さん、すごいでやんすねえ、この人たちは」

「え？」

突然話しかけられる格好となつて、ちあきは思わず声の方に向いた。びくりと身を仰け反らせながら。

ちあきの横に、いつの間にか男が立っていた。

青い羽織をまとい、町人髷をきつちりと結っている。だいぶ寒くなつてきたというのに裾をちょこんと上げている。けれど、その男をいちばん特徴づけているのはその顔だった。少し出っ歯気味な歯並びと、ちよつとつぶらでいてきよろきよろとした目、あとは頬から延びるそり残しの長いひげ数本のせいだろうか、なんとなくネズミを感じさせる容姿だった。

こ、これって……。

「ででで、出た、ネズミ男！」

「誰がネズミ男でやんすか！」

どう見てもネズミ男にしか見えないその男は、気色ばんで反論する。けれど、反論するのが時間の無駄と判断したのか、それと云い争いが無駄だと思つたのか、頬をぼりぼり掻きながら、貫吾・己吉コンビに目を向けた。

「いやいや、あの二人、とんでもない実力者でやんすよ」

イキナリ現れて何よ！ 思わず反発しそうになるちあきを横目に、ネズミ顔の男は続ける。

「うん、確かに実力はそう。とんでもないものがあるでやんす。けど、それ以上に、ツカミが上手いでやす。あれだけいた客のほとんどの心を驚掴みにしちゃつたんでやんすから。ま、あとは、挑戦者の浅兵衛・勘一さん方がどう戦つか。それが見物つてところでやんすかね」

そう言うや、男は懷から大福帳のような冊子を取り出し、帯に吊

られていた懷中筆壺から筆を引き抜いた。そして、さらさらりと冊子の上に何やら書き始めた。

む？ その男を眺めながら、ちあきはあることに気付いた。そうして生まれた疑問を、まっすぐに男に向ける。

「ねえ、あなた、どうしてあの二人の名前を知ってるのよ？」

そう、今、このネズミ顔の男は「浅兵衛・勘一さん」と名前を出した。江戸でも名うての大道芸人である己吉・貫吾を知っているならまだしも、あの二人はまだまだ駆け出しのはずでは？

すると、ネズミ顔の男はアレエ？ と心外そうな声をあげた。

「ま、まさか覚えてないんでやんすか！？」

「うん！」

ちあき、即答だったそうな。

がつくりと肩を落としたネズミ顔の男は、むむと唸った。

「いたでやんしょ？ 一昨日、文人長屋の月見の時に！」

「あ」

なるほど。ちあきは手をポンとたたく。確か、長介さんが連れてきた新しい店子さんは全部で四人いた。一人は髪結師のお道さん、一人は居合師の浅兵衛さん、一人は三味線師の勘一さん。そしてもう一人……。確かその三人の陰に隠れていた人がいたようないなかったような……。

ちあき、お酒のせいで記憶が定かでないのであった。いやあ、お酒って怖い。

そうやって呆けるちあきに、男は言葉を云い募る。

「まあ、あのときお嬢さん、お酒をずいぶん飲んでらしたみたいでやんすから、覚えてないかもしれないでやんすけどね！……私ア、助八という者でやんす。江戸の片隅で、瓦版のネタ集めを生業にやってますわ」

瓦版のネタ集め。

そう聞いてネズミ男……もとい助八の風体を眺めてみると、「いかにも」な感じであった。動きやすいように着物の裾を上げて、け

れど上半身は寒いから羽織を着こんでいる。ネズミみたいな印象は、何となく辺りをきよきよとしてるのがネズミのようだったのかもしれない。

なんとなく一人納得しつつ、ちあきは助八に向く。

「ねえ、助平さん」

「助八！」

「ああ、ごめんごめん助平さん」

「助八でやんす！ わざとでやんすか！」

からかいがいのあるやつचनाあ。ちあき、ちょっと現状が楽しい。けれど、聞きたいことがあるのも事実なので、からかうのもコレ程度にしておくことにした。

「っていうか、勘一さんたち、勝てるの？ あの二人に」

「わからんでやんす」

即答だったそう。

「うわー、使えない奴だなア」

「使えないとか言うもんじゃないでやんす！ それに」

「それに？」

「そもそも情報屋なんてものに、見識なんて必要ないんでやんす。いや、もちろん己の見識を振り回してネタを集めるってエやり方もアリでやんすけど、私アそういうネタ集めはしないもんで。見たまま聞いたままを紙の上に写して、それを瓦版に乗せる。それが私の仕事っぷりでやんすから」

「へー」

もうあんまり興味も失せてきたちあき、もはや助八の言葉なんて話半分にしか聞いていなかった。それより何より、目の前で広がる光景が凄すぎた。

客の喝采を浴びながら立ちつくす針通しの貫吾。

三味線を弾く手を止めず、客に向かい笑みを浮かべる風撥の己吉。そして、その二人にやんややんやの歓声を浴びせる江戸っ子のうねり。

どう見ても、勝負が決しようとしている。

まだ、挑戦者の二人は何もしていないというのに。

万雷の歓声の中、貫吾は大太刀を肩に背負いながら浅兵衛に向いた。拍手や歓声に彩られた大男はさらに大きく見える。ぱきぱきと首の骨を鳴らしながら、浅兵衛を見下す。

「ははん、これだけ客が乗っちまうと、もうおめえらに勝機はねえなあ。……今のうちじゃねえか？　今のうちだったら詫びを入れるだけで許してやるぜ？」二度と貫吾様、己吉様に喧嘩を売るような大それた真似はしませんから許してください” って土下座して、三回まわってワン！　って鳴いたら許してやつてもいいんだぜ？　この大観客の中でよお」

貫吾の言葉に、己吉が合いの手を入れる。

「ま、そんなことをすれば、向こう十年、お前らは江戸で商売できないけどな。江戸っ子連中はその手の屈服が大嫌いだからなあ」

ち、なんて物言いなんだ！　あいつらア！

やかん少女・ちあき、頭から湯気を出してがりがりど歯噛みする。ある意味で部外者のちあきでさえそんななんだから、その言葉を浴びせかけられた方の屈辱と云ったらないだろう。

大観客に見守られる中、勘一も浅兵衛も口を開かない。ただ、立ちつくしている。

そんな二人を囁すように、貫吾は笑う。

「おいおい、黙ってるだけじゃ何もできねえぞ！　お客様も退屈しちゃまうだろうがア！」

すっかり貫吾・己吉のオーディエンスと化している観客たちは、一様に黙ったままの挑戦者に野次を飛ばしまくった。おいおい、俺たちは突っ立ってる人間を見に来てるわけじゃねえんだよ！　早く芸を見せやがれ！　怖じけついたならとつとと帰れ！　腑抜け、負け犬！　……思いつくばかりの罵詈雑言。その言葉を聞きながら、人を罵る言葉ってこんなにあるのかア、とふとちあきは怖くなった。りもしていた。

【9】

そして――。

「引っ込め！」

そんな罵声と一緒に、浅兵衛に向かって何か投げ放たれた。空中でバラバラときらきら輝く液体を振りまきながらくると回るそれは。竹筒だった。おそらくは、観客の誰かが持参してきていたタンブラー（水筒）だったのだろう。青竹そのままの円筒が、くるくると円を描きながら浅兵衛に迫る。軌道からして、浅兵衛の頭に当たるコースだ。

「あ、危ない！」

思わずちあきは叫んだ。

と――。

スパン。

浅兵衛にぶつかると一瞬前に、その水筒は空中で静止した。結構な速度で宙を飛んでいた竹筒だったのに、ぴたりと宙で止まった。

けれど、宙で止まったのはわずか一瞬だった。

その一瞬後には、青竹にスウと細い糸のような線が入った。そして、重力のくびきを思い出したようにして地面に落ち始めたときに、青竹はパカッと割れた。

バシャン。

水筒に入っていた液体が地面を少し潤す。その液体とほぼ同時に地面に落ちる、真つ二つになった青竹。そして、その光景を自然体で見遣る、浅兵衛。

最初、何が起こったのかちあきには分からなかった。それは他の観客たちも同じだったらしく、しんと静まり返ってしまった。

けれど、ちあきの横にいた助八が、叫んだ。

「な、ま、まさか、浅兵衛さん、青竹を斬った！」

「ハア！？」

ちあき、思わず助八と浅兵衛を何度も見比べる。

信じられるはずもない。だって――。ちあきは助八の肩をつかむ。
「そそそ、そんなわけないじゃない！　だって、だって……」

ちあきの目には、何も映っていない。あの浅兵衛が刀を引き抜いたところ。あの四尺を超えそうな刀を抜いた瞬間。いや、それだけじゃない。鯉口を斬る動作から、抜刀、斬撃、そして納刀。その一連の流れが全く目に入っていない。いくらなんでも、そんなことがあるわけがないじゃない！　ちあきはただ、信じられずにいた。

「しかも、青竹ってエのがミソでやんすよ」

「どういうこと？」

「ごくりと唾を飲みながら、助八は言った。

「青竹ってエのは表面がつるつるしてるでやんしょ？　だから、上手く歯を噛ませないと、斬れないどころか弾かれちゃうんですよ。よく、お武家さんなんかが刀の修練に使うくらいなんでやんすからね。そんなやつかいなものを、空中でお斬りになったんでやんす」
そう呟く助八の視線の先では――。

「ぐっ――！」

中空に浮かぶ青竹を斬るなんていう神業を見せた浅兵衛を、冷や汗交じりに見下ろす貫吾の姿があった。

「少しは、俺の芸を見直してくださいさったか？」

「ああ」

以外にも殊勝に、貫吾は頷いた。地面に転がる真つ二つの青竹を見つめて、怖い顔をしている。ち、と舌打ちして顎に滴る汗をぐいっと拭くや、貫吾は刀の柄に手をやった。

「意外にも大したもんだ。だが」

貫吾はゆっくりと息を吐いてゆっくりと抜刀し、丁度二人の真上で燃えるような赤を振りまく紅葉に一閃をくれた。すると、ふつという音とともに、ひとひらの赤い紅葉がひらひらと舞った。それを見やるや、しゃきんと刀を鞘に収めた。

「その程度の技量で俺に勝とうとは百年早えぞ！」

ひらひらと秋の風に吹き誘われる唐紅の紅葉は、中空で予測不能な軌道を見せる。ひらりと下に落ちるかと思えば、ふわふわと宙に留まる。留まるかと思いきや、ひらりと下に落ちる。まったくもって気まぐれな動きを見せる葉。その葉を、どこか虚ろな目で見る貫吾は、ひゅうと息を吐いた。

そして。

「喝！」

地響きのような声とともに、貫吾の大太刀が抜き放たれる。五尺を超えるそれは秋の太陽に照らされてギラギラと光る。それはまるで、洞窟の中に差しこむ閃光のようだった。その閃光のような刀身が蛇のようにびゅんと唸って紅葉に迫る。

ふっ。

切っ先が、紅葉の葉を貫いた。

紅葉を捕えた切っ先を、観客に差し出すように掲げる貫吾。その光景を見やった客たちは、目をまん丸にしている。間違いなく、空中で紅葉を刺し貫いた。しかも抜刀しながら。

「で、出た！ 針通しの貫吾のオハコ、“針通し”！」

誰からともなく飛び出す、（ちよつと説明口調の）歓声。その歓声が辺りに広がった一瞬後には、辺りに貫吾コールが巻き起こった。「あひゃあ、あれはすごい」

思わずそう呟く助八。ちあきもその横で呟く。

「うん、何アレ。あんな図体で、あんな器用なことできるの？」

「いや、あれは貫吾の図体だからこそ出来る芸当でやんすよ」

「どういうこと？」

ちあきに促されるようにして、助八は続ける。手に抱える帳面に、筆を躍らせながら。

「あの貫吾の大太刀。お嬢さん、アレ、どのくらいの重さがあるか想像できるでやんすか？」

「へ？」

ちあきは貫吾が軽々しく扱う大太刀を見やる。大体常寸の刀の二

倍くらいの長さ。常寸の刀が大体二百匁（約750グラム）から五百匁（約1900グラム）くらい？　だから……。と、ちあきは頭の中でソロバンをバチバチバチンと弾く。そして。

「多く見積もって、大体、一貫（約3・75キログラム）くらい？」

「はは、全然足りないでやんす」

「へ！？」

「長さが倍だからって重さが倍だと思うのは素人の考えでやんす。

まあ、長さが二倍になれば、重さは四倍にも五倍にもなるでやんす。おそらくは、貫吾が使ってる刀で、きつと重さ四貫（約15キログラム）はあるでやんすよ。軽く見積もって」

「へ！？」

それって、あたしの体重の二分の一くらいじゃん！　あたしの二分の一くらいを片手でぶんぶん振り回してるの！？　具体的な数字を出されてはじめて、ちあきは居合師がやっている“芸”の凄みを垣間見たような気がした。

「けけけ、けど！」

頭をぶんぶん振って、ちあきは言葉を言い募る。

「浅兵衛さんだってほぼ同じ長さの刀を使ってるじゃない！　なら、条件は一緒じゃない！」

けれど、その言葉に助八はゆっくりと首を横に振って応じた。

「いやいや、そういうことを言ってるわけじゃないでやんす。むしろ問題にしなければならないのは――。あの貫吾の芸“針通し”、あれでやんす」

助八は言う。

あの技を行なうために必要なもの、それは正確さ、突きの鋭さの二点だと。そしてその二点は、大太刀を扱うにおいて、一番難しいところであると。なぜなら、大太刀はあまりに重すぎて切っ先が安定しない。その上重さのせいで早い斬り回しが出来ない。つまり、あの貫吾の芸は、一番大太刀が不得意とすることを簡単にやってのけているのだと。

「ほへー」

アホ面下げて嘆息するちあきを横目に、助八は続ける。

「あれは、とてつもない技でやんすよ。お分かり頂けたでやんすか？」

「うん、つつかアンタ、めちゃくちゃ詳しいじゃん。さつき、情報屋は見識なんてなくていい」とか言つてた癖にさ」

「ぎくぎく！」

そんなちあきのツツコミをよそに――。

幾百の目に見守られている貫吾と浅兵衛。まるで大雨のように降りしきる歓声と拍手の渦の中で、貫吾は得意な顔を浮かべて立ちつくしている。今にも鼻が赤らんできて伸びてきそうなくらいに得意満面を浮かべている。一方の浅兵衛は表情から感情が測れない。口をへの字に結んだまま立ちつくしている様は地蔵のようだった。

その顔を、敗北を悟っている顔と取ったのか、万雷の拍手の中で貫吾は言つた。

「おいおい、分かつたろ？ いい加減よ」
すると、浅兵衛は口を開いた。

「……ああ、分かつた。あんたはすごい」
「じゃあ、負けを認めるってか？」

「ああ、認めてもいい。アンタのその芸はすごい。少なくとも俺には出来ない」

浅兵衛の言葉に、ニイと顔を緩めそうになる貫吾。けれど、その顔が満面のものとなる前に、浅兵衛は言葉を継いだ。

「だが！」

浅兵衛は己吉の横に立つ勘一に目配せをした。すると勘一は撥を持つ右手を大きく宙に掲げた。そして、そこから撥を一気に下ろした。

「負けただけで終わる気はさらさらないぞ！」

ベン！

まるで稲妻のような三味線の音色が、江戸っ子の拍手の渦を斬り裂いた。その音には、己吉のそれにはない力強さがあつた。思わず三味線の撥を取り落とす己吉の横で、勘一は撥をゆつくりと動かし始めた。べ、べ、べん。最初は緩やかだった音の流れが、撥のストロークが早くなっていくのに従ってどんどんその速度を上げてゆく。べべべべべべん！

遂には一陣の風のように荒々しい音となる三味線。

己吉の郷愁とは違う。何か人の心を騒がせるような音色。足踏みせずにはいられない旋律。地面を踏み鳴らさずにはいられない節回し。

少しずつ、観客たちの反応が変わってくる。

最初に反応したのは、十歳代の観客たちだった。まだ元服したての侍さまや、結婚して間もないのだろう若奥さんたちが、一番に足踏みを始めた。そしてそういった人たちを中心として、足踏みの輪は散発的に広がってゆく。

「な、なに！？」

己吉、わが目を疑った。自分の横にいる三味線師が、一曲を弾き

終えるまでもなく客の一定数を味方につけた。三味線師として、いや、大道芸人として、そんな芸当ができる奴がいるなんてことが信じられなかった。だが、それは事実だった。

「くっ！」

地面に落ちた撥を拾い上げて、またべんべんと哀調を謡い始めるも、そうして足踏みをする客は己吉の方に熱つばい視線を戻すことはなかった。

「なんだと！？ あの三味線師……！」

貫吾は勘一を見やる。

けれど、それを浅兵衛がとがめた。

「おい、俺の技を見てくれ。アンタの義務だ」

「な、何だと？」

浅兵衛はふつと息を吐いた。

その瞬間だった。

頭上から、紅葉の枝が一枝落ちてきた。十枚ほどの葉を残した小ぶりの枝は、なんとなくふんわりと下に向かってきた。そして、その枝が浅兵衛の目の前にまで降りてきた、その瞬間だった。

シャ！

小気味のいい金属音。まるで鳥の短い鳴き声のような音。

そして。

ヒュンヒュンヒュンヒュン。

まるで飛燕が空の獲物を追うような風切り音。

そして、空中でてんでバラバラの方向に散ってゆく紅葉。

ぽとん。

そうして裸の枝が地面に落ちた瞬間には、まるで紙吹雪のように舞う紅葉がひらひらと宙を舞っていた。いつの間にか、浅兵衛の右手は刀の柄から離れていた。

え！？ 何、何！？ ちあき、目を白黒させながら周りの様子をきよろきよろと見渡す。ちあきつてば、何が起こったのか、さっぱりわからなかったのだ。

仕方なく、ちあきは助八に向いた。

助八は、顎をがたと震わせながら、その震えに負けない震えた声を上げた。

「ま、まさか、あの太刀を素早く振り回して、枝の紅葉をすべて斬り落とした——？　しかも、あんな高い下駄を履いて！？　はは、そんなバカな……」

「ど、どういことよ！」

ちあきに対して、助八は震えながらも説明した。

つまるところ、刀を目にも止まらぬ速さで引き抜いて、まずは枝に一閃した。そして返す刀でまた枝に一閃、また返す刀で一閃。それを何度も何度も、目にも止まらぬ速さで繰り返した。そうして枝と十枚ほどの葉を空中でバラバラにした……。一瞬の間に。

浅兵衛の周りではばらく紅葉がふらふらと宙を舞っていた。けれど、しばらくのうちに、一枚、また一枚と地面に落ちる。そして、

最後の一枚が地面に落ちた、その瞬間だった。

オオオオオオオオ！！

観客たちの言葉が全ておしなべられて、地響きのように響く。

「て、てめえ」

オオオオオオオ！！　迅雷のように響く歓声に、貫吾の言葉がかき消されている。いや、言葉だけではない。その巨体・存在感らかき消しているかのようにだった。今の観客たちの発する言葉は、皆浅兵衛と勘一に向かっている。風は今、浅兵衛たちに吹いている。

さあ！　これからだ！

浅兵衛たちが次なる芸を仕掛けようと構えた。

と、その瞬間だった。

ポッ、ポッ。

不意に、地面が鳴った。

なんだ？　江戸っ子たちは、一人、また一人と空を見上げる。そうして空を見上げた江戸っ子たちの頬に、ピトリピトリと振りかかるは——。

ちあきは頬を吹いた。

「雨」

そうちあきが呟いた瞬間に、悪戯がばれた子供がへへと逃げ出すかのように、雨脚が急に速くなった。ポツポツどころではなかった。もう既に、“ザー”という音に変わっている。文字通り冷や水を浴びせられる格好になった観客たちは頭を抑えながら庇を探して駆けだす。そうして何百の黒山と化していた観客は、蜘蛛の子を散らすようにいなくなってしまった。

「あー！ おひねり投げて帰れよー！ バカー！」

勘一のそんな言葉が聞こえるはずもない。

ザバザバという雨の中で、大道芸人四人と乙女一人、情報屋が一人取り残される格好となった。

その雨の中、誰もが無言だった。貫吾たちにせよ浅兵衛たちにせよ、結局タダ働きのズブ濡れ儲けとなってしまうたのだ。その徒労感といったらない。

最初に口を開いたのは、己吉だった。

「……あー、この勝負、引分けたよな？ 最初は俺たちが場を沸かせてたし、最後の方はお前らがそれなりに客を喜ばせてたし」

ぽりぽりと頭を掻きながら、勘一は答えた。

「あー、それでいいす」

きつと、雨の中でものを考えるのがおっくうだったのだろう。“めんどくせーなあ”という心のうちが顔に書いてあるような表情を浮かべていた。

人間同士の争いなんて、お天道様の前ではほんの些細なことではない。そういうことだ。結局この勝負は引き分けということになって、やるせない半笑いを浮かべて貫吾・己吉コンビは雨霞の中に消えた。

そうして敵が去った後、しばらく浅兵衛と勘一はぼうつとしていた。

雨に打たれるがまま、ただ相手の顔を見つめているだけだった。

ところが、やがて二人はその表情を崩した。口元を次第に緩ませてゆく二人。目をどんどん輝かせる二人。そして。

「よっしゃー！」

「やったな」

ばちん！ 雨の中で、二人が手をぶつけ合う。中空でぶつかる、力いっぱいタッチ。その音は周りの空気を震わせた。

「やったじゃん！」

ちあきも駆け寄ってその輪に加わる。そして、浅兵衛と勘一にハタッチを仕掛ける。ばちん！ ばちん！ 少し苦笑めいた二人の表情は、やがてちあきの満面の笑みにほだされて、結局は満面の笑みに変わる。勘一も浅兵衛も、本当に嬉しそうに笑った。

その様子を眺めながら、助八が「うんうん、“若手大道芸人二人組が大健闘！” この記事は高く売れそうでやんすね！」と呟いていたのだけれど、喜びの輪の中にいる三人が、その呟きに気づくことはなかった。

そして、この三人、あともう一つ、あることを忘れていたのだけれど、もちろんそれに気づくことはなかった。

さてさて、三人がすっかり忘れていること。それは、雨が降ること半刻ほど前――。

ちあきたちと別行動を取る乙女が一人。ちょうど、浅兵衛たちがちあきにそそのかされて貫吾に勝負を挑もうとした辺りのことだ。

【11】

「むむむ、なんであんなところに——？」

そう。我らがクールビューティ、お鶴である。

本来フツの江戸っ子とはちよつと違つた呼吸を持っていることもあり、ちあきたちのノリに乗り遅れてしまった。それが功を奏してこうして一人行動をしているわけなのだけでも。

ほっそりとした顎に指を添わせ、うむむむ、と唸るお鶴は、人波の間に消えそうになる二人連れの後を追う。人でごつた返しているせいでうまく二人の後が追えない。むむむと齒噛みしながら川に浮かぶ笹船のように人波にもまれる。

そうしている間にも、前の二人はどんどん先に行ってしまう。

思わず、お鶴は声を上げた。

「ちよ、待つてください！」

けれど、お鶴の言葉に、誰も反応しなかった。横を歩く江戸っ子たちはてんでバラバラの方を向いていたし、お鶴が追っている二人組が振り返ることなんてまるでなかった。

そうこうしている間に、二人は人波の波間に消えた。

「あ……。なんで、どうして」

お鶴は混乱していた。なんで？　なんで？　どして？　そんな疑問が浮かんでは消える。

けれど、ふとした瞬間、お鶴はあることに気付いた。

「はっ！！　思えばここ、どこ！？」

そう。二人組の追跡に気を取られて、今自分がどこにいるのか分からなくなってしまったのだった。

「ちちち、ちあきさ〜ん？」

半ば涙目でバタバタと辺りを走り回るお鶴。結局なんだかんだで、お鶴もちあきのことを頼りにしている部分があるんです、はい。

「へえ、で、ずっと東海寺の境内を駆け回ってた、と。くしゅん」
ちあきがこれ見よがしにくしゃみをする、さすがお鶴も頭を下げるしかない。湯気にのぼせそうになりながら、お鶴は唇を伸ばす。
「すすす、すいません……」

意外にもちあきはその話題をさして広げなかった。いつものちあきなら、ねちねちねちねち×五十くらいのことのはするの、である。
「まあ、しょうがないよねー。こうして濡れちゃったのは別にお鶴ちゃんのせいってわけでもないし」

かつぽーん、という音を遠くに聞きながら、お鶴は前の手すりにもたれかかる。

「けど、あったかいですねー、ちあきさん。なんだかホンワかしちゃいますう」

ちあきも、前の手すりに頭まで乗っけてホンニヤーとしだす。

「ふんふん、なんだかい気持ちだねえ。でへへ」

さて、ここで問題です。なぜ普段はつんけんとしている二人が、こんなにホンワカとしているのでしょうか。

なぜなら、理由は簡単。

二人して、風呂に入っているからです！

ここは江戸市中。文人長屋に近い風呂屋「おたきや」である。江戸っ子という連中は異様なほど風呂好きだったらしく、こういった風呂屋は江戸に数百とあった。それこそ、“手が汚れた”と言って風呂に入り、“冷や汗をかいた”と言えば風呂に入った。まあ、結局のところ何かにかこつけて入るほど、江戸っ子たちは風呂に入るのを好んだ。出始めの頃は湧き出る湯気で体を温める、現代でいうサウナのような施設だったのだけれど、この頃には湯船が置かれて、現代とほぼ同じ湯に入るスタイルの風呂屋が全盛していたのだった。さて、そして二人がどうして風呂屋にいるのかと言うと……。

そんなちあきとお鶴、後ろからこつんと頭を小突かれた。

「うみゅ」

「ふーん？」

そんな意味不明の乙女二人の言葉をふふんと笑い飛ばしたのは、後ろで肩まで身を浸からせるお道だった。

「ほらほら、もしかして湯あたりでもしてるんじゃないでしょうね！？ 湯あたりしてるっていうなら、早く出なさい！」

そう、このお道さんが連れてきてくれたのだ。

東海寺からの帰り、四人で歩いているとたまたまお道に出会った。お道は蛇の目の傘をさしていて、全く濡れていなかった。そんなお道、四人の濡れ鼠な様を見るや、野郎二人を押しつけて乙女の前に立った。「あらまあ、こんなに服を濡らして！ ほら、今すぐ風呂屋に行くよ！」と半ば強引に風呂屋まで連行されてしまった。そして、着ていたものをくるくるとはがされて、湯船に放り込まれて今に至る。

ちよつと湯あたりしていないこともなかったけれど、ちあきは答えた。

「やだよー！ だってこれ、おごり風呂だもん！ おごりは有効に使わないと！」

うわ、現金なヤツー。

「あのねえ」お道はちよつと頬をひくつかせる。「鼻血が出ても知らないからね！」

「鼻血が出ても風呂に入り続けるってエのが江戸っ子の粹ってもんでしょ！」

いや、それは粹じゃないぞ、ちあき。

はあ。

これみよがしに溜息をついたお道はそっぽを向いてしまった。

そうして乙女二人はまたはにゃーんと手すりに寄りかかる。

けれど、なんとなく暇になったちあきは横のお鶴のことを盗み見る。もちろん、お年頃の子が同い年の同性の何を見るかと言えば、胸のふくらみなのは相場が決まっております。ちらちらとばれないように視線を何度も向け、お鶴のそれと自分の腕と腕の中にあるそれを見比べる。そして、一人敗北感を噛みしめる。

ちあき、心の中で呟く。

“ 負けた……。むむむ、お鶴ちゃんてば、ちっちゃい…… ”

ちっちゃいお鶴の胸に敗北感を噛みしめる。

え？ 「逆じゃないのか」 って？ いえいえ。違うんです。胸が大きいほうがいい、っていうのは、洋装が入ってきてから後の考え方で、和服が生活の中心だった頃は、むしろちっちゃめのほうが良いとされていたのである。なので、ちあきのように健康的に育ってしまった感じよりも、むしろお鶴ちゃんのように細いほうが“きれいなプロポーション” とされていたのである。

さて、そんなころ、同じく敗北感を噛みしめていた奴がいる。

そう、我らがクールビューティ（だったはずの）、お鶴である。

やっぱりお鶴はお鶴でちあきのことをちらちらと見ながら、人知れず溜息をついていた。

お鶴、歯噛みしながら心の中でうなる。

“ ぐむむむ……。ちあきさん、いいなあ、肌の色が健康的で…… ”

そうやって、自分の腕の雪のような白さに溜息をつく。

え？ 「またもや逆なんじゃないのか？」 って？ いえいえ、違うんです。色白の方が美人、っていうのは後々になってからのことで、この時代は「地黒女」といって、浅黒いくらいの肌が好まれたのだ。だから、雪のような白さを誇るお鶴より、こと肌の色に関してはちあきの方が整っているのである。

「はあ」「はあ」

相手の長所に視線をくれながら、二人は同時に溜息をついた。

こう言っちゃアレだけど、胸の大きさはア、肌の色だアなんて一枚のことでもいいことだろうに。けれど、その“ どうでもいいこと ” に気炎を上げるのが乙女という存在で、自分の頭の中にある理想形を追っかけるものなのである。なので、ちあきはちあきで「ちよつとおやつを控えなくっちゃなア……」とひとりごちたし、お鶴はお鶴で、「外出を増やさなくっちゃ」と心に決めていたのであった。

さて、そんな一人反省会が終わって、ちあきはお鶴に向いた。

「そういえば、お鶴ちゃん」

「何ですか？」

「そういえばさ、さっきの話が途中だと思っただけ」

「へ？ ああ」お鶴はちゃぽんと手を水面から出した。「私が東海寺の境内を歩き回ってた、って話ですか？」

「そうそう。で、なんでお鶴ちゃん、あたしたちと一緒に来なかったの？ お鶴ちゃんも見ればよかったのに、あの二人の技をさ」

きつと、このちあきの言葉は何気ない言葉だったはずだ。けれど、そのちあきの何の気もない質問に、びくつと身を仰け反らせたお鶴は、ちあきの少し柔らかい両肩をがっしと握った。

「ななな、何！？」

「そうだった！ ちあきさん、なんだか変なんです！」

「変なのはお鶴ちゃんですよ！ とりあえず手を離して！」

「はっ！」

気づけばなんだかちあきのことをお鶴が押し倒しているように見えないこともない態勢になっている。それに気付いたお鶴は口まで体を湯船に沈めて、視線を外しながらぶくぶくとやりだした。そうしてほとばりを冷ましてから、お鶴は小声で言った。

「実はちあきさん、東海寺で、見ちゃったんです」

「へ、幽霊でも見たの？」

「違います」きつぱりと言い放ち、お鶴は続ける。「実は、東海寺で見たんです。うちの兄上と、変迅堂さんが並んで歩いているところ」

「へ？ イヤミ……もとい仁杉与力と先生が？ 別に珍しくも何とも……」

と言いかけたちあき、はたとあることに気づく。そして、その気づいたことをそのまま口にする。

【12】

「そんなわけないじゃん。先生は今、南町奉行所でお世話になって
いるはずだもんね」

そう。変迅堂は今、南町奉行所に引つ張られている。奉行所に引
つ張られたのなら、奉行所の中にある獄に押し込まれているはず。
いかに横に仁杉与力がいたとはいえ、娑婆シヤバを歩いているはずがない。
「おかしいですね？　なんで……」

「うむむむ……」

そうやってうなる乙女二人の後ろから、合いの手が入った。

「そついや、俺も見たぞ。仁杉与力に変の字」

「へ？」

ちあきは振り返る。と、後ろには頭に手ぬぐいを乗つけて湯船に
肩までつかるカツちゃんの姿があった。

「なんだ、カツちゃんか。カツちゃんか……　つて！　スケベ！」

ちあきは思いつきり湯船のお湯をカツちゃんにかける。湯船に出
来た大波にうつぶと呑みこまれながらも、カツちゃんは反論する。

「な、何言つてんだよ！　そもそも幼馴染の裸なんて見慣れてるっ
つうの！　それに、俺がどの湯船にしようが俺の勝手じゃねえか！」

「いや、まあそりゃそうだけどさー」

ちあきは何ともつかない表情を浮かべた。

つていうか、そもそもこの時代の風呂屋、男女混浴だった。ちな
みに、それを生かして、風呂屋でお見合いをするという随分と思い
きったことをする江戸っ子も多かった。なので、別にちあきたちの
いる湯船にカツちゃんが浸かっているのは特段不思議なことではな
いし助平なことでもない。けれど、江戸に何百とある中で、わざわざ
文人長屋に近い風呂屋で風呂に入るカツちゃんに、一片たりとも
シタゴコロがないかというところというわけでもないんだろっけれど
も。

ともかく、そんないわれなき(?)言葉を浴びることになったカツちゃんは同時にお湯までかぶる格好となった。鼻に入った水をフン、と吐き出してから、カツちゃんは気を取り直して続けた。

「俺ア今日、非番ですよ。ぶらぶらと物見遊山してたんだが、さっき、仁杉与力と変迅堂に出くわしたんだ。で、“おい、変の字イ!”って声をかけたんだ。そしたらよ」

「そしたら?」

ちあきの促しに乗っかる形で、カツちゃんは続ける。

「二人とも、俺の言葉を無視しやがった上、突然裏路地に曲がりやがったんでエ。まるで俺に見つかりたくないのか。それとも何かから逃げてるのか」

「ど、どういうことですか?　なんで兄上と変迅堂さんが、勝次さんから逃げるんです?」

お鶴の問いに、カツちゃんは首を横に振った。

「こつちが理由を聞きたいくらいだ。全くムナクソ悪い」

両腕を組みながら額に皺をつくるカツちゃん。

けれど、そのカツちゃんを見つめながら、ちあきは言う。

「うーん。カツちゃん、先生たち、どこで見た?」

その問いに対して、カツちゃんは品川近くの界隈を指した。つまり、お鶴が見た二人組が変迅堂たちだとして、カツちゃんの見撃情報と矛盾がない。どっちが先かは分からないけど、変迅堂と仁杉与力と思われる人たちは、今日、確かに品川近辺にいたのだ。

「おかしい」

ちあきは呟く。

「おかしいですよ」

お鶴も呟く。

奉行所にひっぱられているはずの人間が、人目をはばかりのようにして町を歩いている。しかも、横にはその人間をしょっ引いたはずの人間がいる。

「一応聞いとくけどさ、カツちゃん。先生に、縄とか、かけられて

た？」

「うんにゃ。両手を振って歩いてたぞ」

うむむむ。ちあきはうなる。

けれど、小さなちあきの頭でいくら考えても、何も分らない。

なんで先生と仁杉さんが一緒にいるわけ？ 一緒に歩いてるわけ？

うむむむむ。

けれど、ちあきにも分かってきたことがある。

お鶴とカツちゃん。二人が同時に変迅堂を目撃している。お鶴はまだしも、カツちゃんなどは確実に「変の字と仁杉与力」と口になっている。きつと、本当に変迅堂と仁杉だったのだろう。

話の限りだと、変迅堂たちは人目をばかっているようだ。正確には、知り合いの目を避けるような仕草を見せているらしい。まるで、行動を知られたくないかのように。

「絶対に、おかしいよ」

結局のところ、堂々巡り。

うむむむむ。乙女二人と少年一人が（裸で）うむむむと唸る。

そんな空気を壊したのはカツちゃんだった。ふうとため息をついて呟く。

「まあ、普通に考えりゃ、変の字と仁杉与力様が裏で何かをやっている、ってことになるんだろうな」

「何か、ってなんですか！ うちの兄上が変なことに手を染めてるんでも！？」

そんなお鶴をなだめながら、ちあきが口をはさむ。

「うん、確かにカツちゃんと同感。先生と仁杉さんが何かをしてるってエ可能性が一番高いと思うのよねー」

と、その瞬間、ちあきは湯船の縁をつかんだ。

がし。めきめき。つかんでいる手が湯船にめり込みそうだ。わなわなと手を震わせるちあきを思わず見上げるカツちゃん。そんなカツちゃんの目に入ったのは、かなりあでやかな格好にもかかわらず（つつか裸だからね）、そんなあでやかさ以上に威圧を振りまくち

あきの姿だった。

ゴゴゴゴゴゴ。

う、うわ、なんだか燃えてるう。

カッちゃん、思わず湯船の中で後ずさる。

肩をわななかせながら、ちあきは続ける。

「くっ……。先生めえ……。つつかイヤミ与力めえ……」

さすがに恐怖を覚え始めたお鶴も、ちょっとちあきから距離を置く。

「きつとあたしを抜きにして、遊んでるに違いない！ 絶対にそうだ！ あいつらア……」

ちあきは拳骨を振り上げる。

「あいつら、絶対にイワしてやる……！」
ざばーん！

怒りにまかせ、ちあきは思いっきり立ち上がる。

その瞬間、湯船の中に大きな波が生まれた。と同時に。

「ぶぶう……！」

辺りに思いっきり鼻血を振りまいて、カッちゃんが湯船に浮かんだ。

ん、カッちゃん、湯あたりですか？

違います。

カッちゃんはちあきの目の前に座っていた。そして、ちあきがざばんと立ち上がった。ということは、思いっきりカッちゃんの視界に、立ち上がったちあきの姿が入ったということだ。もちろんちあきは裸で湯につかっていたわけだから……。

そう、カッちゃん、ちあきの裸をモロに目撃してしまったのである！

うーん、女の子の裸を見て鼻血を出すって、どんだけ純なんだ、カッちゃん。

ちなみにこの後、とめどないカッちゃんの鼻血によりこの湯船が真っ赤に染まり、「血染めの湯」として江戸っ子の間で冗談半分に

語られることになるのだけれど、そんなこと、幸せの中で湯船にぶかぶか浮かぶカッチちゃんの知る由もない。

「カッチちゃんが湯あたりした！ カッチちゃん、大丈夫！？」

鈍い（残念な）子であるちあき、そんなカッチちゃんの心のうちなど知ったこともない。ぶかぶかと浮かぶカッチちゃんの両肩をつかんで揺らす。けれど、カッチちゃんの鼻血は止まらない。つか止まるわけがない。よく考えてみてください。自分が裸の状態で、好きな人に両肩をつかまれて揺らされている状況。しかも相手も一糸まとわぬ裸。ロマンティックは止まらない、っていうか、劣情が止まりません。さっきよりも五割増しの鼻血を滝のように出すカッチちゃんにひたすらあわてるちあき。さながら殺人事件の様相を呈し始めている。お道さんなんか、ぷいっとそっぽを向いて、既に他人のふりをしていた。

そんな二人を眺めながら、“この二人がくつつけばどんだけ話が楽になるんだろ”と一人心の中でつぶやくお鶴は、どこか遠い目をしながら湯船の縁に寄りかかったのだった。

【1】

ざあざあと降りしきる雨。

紅葉の時期だというのに、まったく水を差すような雨だ。

長屋の戸から垣間見える雨模様から視線を外したイエモン氏は、床に寝そべりながら溜息をついた。そして、あの赤い羽織の男から受け取った刀を手元に引き寄せる。

何の奇のてらいもない普通の拵え。

そんな刀が、イエモン氏のこれからを決めるのだから、なんだか不思議だった。

赤い羽織の男は別れ際にこう言った。

『しばらく、家で待機してください。そのうち、あなたの元に人を寄こします。それまで、家で待機してください。間違っても目立つような真似はしないよう。目立ったことをしたら、困るのはあなたですよ』

そうやって仕官がおじやんになる可能性を示唆されては、外に繰り出して酒を飲む気にもなれなかった。そうして、何をすることもない時間を、ただ雨の音を聞きながら過ごしている。

床に転がっているのにも飽きたイエモン氏は、上体を起こした。

そして、拝領した刀の鯉口を切ってみた。

すると――。

心の奥から、何か黒いものがしみだしてくるような感覚に襲われた。雨の日に薰る沈鬱な匂いを煎じつめたような何かイエモン氏にのしかかる。

やっぱりだ。

イエモン氏は心の中で呟く。パチンと刀を鞘に収める。すると、心の奥でうごめいていた何かがふっと鎮まる。

この刀を握った瞬間。あるいは鯉口を切った瞬間。何か変な感覚に襲われる。心の一番奥に、何かとてつもないものが忍び込んでく

るかのような不快感、あるいは快感。目の前の風景すべてがどうでもいいもののように映り、自分以外のものがひどく小さく見える。そして心の奥からわき上がる、あの感覚。

なんだ、この刀は。

けれど、この刀を捨てるわけにはいかない。

これは、お岩ちゃんと生きるために必要なものなんだ。

そう思うと、とても捨てられない。

けれど、捨てたい。

そうやって振り子の中で右に左にと揺れるイエモン氏のことをあざ笑うかのように、入口の戸がどんどん鳴った。誰かが戸を叩いているのだろう。

「ああ、開いてますよ」

イエモン氏の言葉を訊くや、戸ががらりと開かれた。

戸の向こうには、赤い唐傘を開いたままで立ちつくす、赤い羽織の男の姿があった。そしてその横には、菅傘をかぶって、蓑を背負う男の姿があった。赤い羽織の男だって決して背が低いわけではない。けれど、赤い羽織の男の横に立つ蓑姿の男はとてつもなく大きかった。大きいがゆえに、怖い。顔が見えないのも、イエモン氏に恐怖を感じさせる一因なのかもしれない。

「ああ、これは」

イエモン氏は赤い羽織の男を迎えようと腰を上げた。けれど、赤い羽織の男はそれを手で制した。そんな必要はない、とばかりに。

「ちよつと急ぎなものでしてね。早速ですが、お仕事です」

「はい、なんなりと」

イエモン氏の言葉に、赤い羽織の男はニヤリと笑う。そして、隣の男を指した。

「この男を、しばらく匿^{かくま}つてほしいのです」

「か、匿^{かくま}う？」

なんてこった。心の隅で、イエモン氏は呟く。“匿^{かくま}う”ということとは、この男、何かから逃げているに違いない。この平和な時代、

“逃げている”人間なんて口くなものではない。そして、そうやって何かから逃げる人間の手伝いをしている赤い羽織の男が真人間のはずはない。何か後ろ暗いことに手を染めているに違いない。

そんなイエモン氏の心の動きを察知しているかのように、赤い羽織の男は莞爾とする。

「はっは、イエモンさん、あなたはまた随分とお心の内がお顔に出る方ですな。ご心配めさるな。別にこの“人”は、誰かに追われているわけではありません」

ではなぜ匿う必要があるのです？ そう訊くと、赤い羽織の男は莞爾^{かんじ}たる笑顔のまま続ける。

「何、家中の都合、というやつですよ。元々は何処かの家中にあられたあなたならばお分かりでしょう？」

そう。家中には色々ある。数年前までさる家中で過ごしてきたイエモン氏には痛いほどよくわかる。平和な世の中。けれど、家中には色々な火種がある。政の方針をめぐって権力闘争、なんてこと、イエモン氏の勤めていた家中にだってあった。他の家中の中には、誰かが追われたり匿われたりといった激しい権力闘争もあるのだろう。普通の世界ならばどこか危険の匂いのする“匿う”という言葉が、「家中の都合」という言葉で随分と印象が薄まってしまふことがあまりに不思議だった。

赤い羽織の男は、男に何かを言った。

すると、赤い羽織の男はするりと蓑を脱ぎ棄て、菅傘を取り、地面に投げ捨てた。そうして男の姿が露わになった瞬間、イエモン氏は絶句してしまった。尻もちのままであわあわと口を動かす。

「どうしました、イエモンさん」

どこか面白気に、赤い羽織の男は言う。

何度も言葉を吐き出そうとしてもうまく出ず、魚のようにぱくぱくと口を動かすイエモン氏。腹に力を入れて、なんとか紡ぎ出した言葉がこれだった。

「ななな、なんで、こいつが……」

「おや、知り合いましたか」

くすくすと赤い羽織の男は笑う。

イエモン氏の前に現れた男――。それは、数日前の夜に出会ったあの男だった。

緘の大鎧を纏い、槍を持つあの男。やはり、目にあたる部分は赤く光っていた。槍こそ持つていなかったにせよ、数日前に出会ったあの槍を持った奇妙な武士に相違なかった。

赤い羽織の男は言った。

「ああ、こいつはですな。厳密には人間ではないんですよ」

「え、どういうことです。まさか、妖怪だとでも？」

くぱーんと目を赤く光らせる男に少しおびえながら、イエモン氏は赤い羽織の男に向く。すると、何が面白いのか赤い羽織の男は目尻を下げる。

「絡繰ですよ」

「か、からくり？」

「そう。特殊な動力――おそらくはあなたには理解できない系けいを用いた――で動くものです。実は、あなたにお願いしたい仕事はこの絡繰についてなのです」

「へ？　どういうことです」

すると、赤い羽織の男は自分の懷をまさぐった。そうしてイエモン氏の前に、手には収まりきらないくらいに大きいぜんまい巻きを差し出した。蝶々のような形をした、真鍮で出来たそのぜんまい巻きは、少しだけ傷がついていて、そこから少しサビが起こり始めていた。

そのぜんまい巻きをイエモン氏の手の中に落とすと、赤い羽織の男は続けた。

「この絡繰の背中には、このぜんまい巻きを差し入れる穴があります。一日に一度、時間はいつでもかまいません。そのぜんまいを巻いてください。あとは、夜にこの絡繰を連れて町に出てください。そして、その日の夜に起こったことを、逐一私に報告する事。あな

たにお願いするのはそれだけです」

イエモン氏は手の中に落ちてきたぜんまい巻きを眺めた。見た目よりも重いそれは、イエモン氏に何かを迫っているかのようだったけれど、イエモン氏には迫りくるそれが何なのか分からない。

この時のイエモン氏は、蛾も同然だった。目の前にあるきらびやかな未来のために、ばさばさと羽を鳴らすが如く。ただ、イエモン氏は気づいていない。そのきらびやかな未来にはとてつもない熱があつて、近づいた瞬間にその身を焦がしてしまうのだということに

イエモン氏は頷いた。

「はい、分かりました」

「ええ。お願いしますよ」

赤い羽織の男の目が、蝋燭の炎のように赤く揺らいだ。けれど、イエモン氏はそれに気付かなかった。

その日の夜。

イエモン氏は絡繰とともに街に繰り出した。

街、とはいっても、華やかな色街に足を伸ばすわけにもいかない。居酒屋に入るわけにもいかない。なにせ相方は鎧武者なのだ。結局、長屋が延々と続く誰もいない通りを歩くしかない。

地面は昼間の雨でぬかるんでいた。雨でしけた空気が風となつてイエモン氏の肩を撫ぜる。

「ちっ、寒くなってきた」

イエモン氏は横を歩く絡繰を見上げる。絡繰は何の感慨もなさそうに、目を赤く光らせながらイエモン氏に続いている。

「おい」イエモン氏は絡繰に話しかける。「お前、喋れないのか?」けれど、絡繰は何も答えなかった。ただ淡々と歩を進めるばかり。にしても、江戸の町に鎧武者とは、ずいぶんと笑えるもんだ。

イエモン氏はふと思う。

【2】

この平和な時代、鎧なんてどのお武家さんでも蔵の肥しになっているだろう。かくいうイエモン氏の場合、浪人して二年目の夏に質に流してしまった。元々が足輕に毛が生えたような家柄、大した具足ではなかった。けれど、父祖伝来の鎧がわずかばかりの小判になつてみると、なにやらわびしいものがあつたのも事実だつた。もうその小判はどこにも残つていないけれど、わびしさだけはただ残る。ちくしょう。

イエモン氏は空を見上げる。けれど、空が曇っているのか、星一つたりとも見えはしなかった。そうやって夜の道を歩いていると――。

前から、人影が見えてきた。

二人組。一人は随分と大きい。そしてもう一人は細い。大きい方は、何やら何か長いものを背負っている。

やばい！

イエモン氏は思わず身を隠そうとする。確か赤い羽織の男から、「人目に付かないように」ときつく言われている。けれど、そんなイエモン氏とは裏腹に、絡繰は動こうとしなかった。むしろ、その歩を止めて、仁王立ちまでし始めたのだつた。

「な、何をやってんだ！」

思わず言葉が出てしまう。

けれど、そんなイエモン氏のことなど最初から眼中にないかのように、絡繰は行動を開始した。胸がパカンと開き、中から何かを取り出すと、クポーンと目を光らせた。その光に呼応するかのように、絡繰の右手にあるそれは、ガシヤンガシヤンと音を立てて、その姿を変えた。そうして絡繰の手には、切っ先が鈍く光る素槍が握られていた。

ま、まさかあいつ。

ふと、数日前の光景が脳裡に浮かぶ。

そうしている間にも、どんどん二人組が近づいてくる。二人とも酒にでも酔っているのだろう。呂律の回らぬ口で「ちくしょー！あの雨さえなけりゃあ！ あいつらに遅れを取ることはなかったんだ！」「まあまあ…… 負けたわけではないんだから」「あんなの、負けも同然だろうが！」と口々に言い合っている。

が、そんな二人組も、やがて仁王立ちで立ちつくす絡繰に気付いた。

二人組はぴたりと足を止めた。

その二人組の大きな方が口を開く。

「なんだア、てめえは。鎧武者たあ随分と物騒じゃねえか。やる気満々、つてか？」

細い方が、少し声を震わせる。

「か、貫吾さん、こいつ、槍を持ってるじゃないか！」

その言葉を、大きい方が笑う。

「はん、舐めんなや。こちら……」

大きい男は、背中に背負っていた何かに手を伸ばす。イエモン氏の目にはそれが何なのかは分からなかった。けれど、スラリという音とともに抜き放たれたその鈍い輝きが目に入った瞬間、それが何なのかようやく見当がついた。大きい方が持っていたそれは日本刀。しかもあの長さからして大太刀なのだろう。

大きな男は大太刀を構えた。

「今日、ずいぶんとむしゃくしゃしてるんだ。俺に喧嘩を売ろうつてエなら、容赦なく相手してやるぜ？ おオ？」

が、絡繰は、たじろきもしない。仁王立ちしているばかりで、何の反応も見せない。

どうやら、そんな絡繰の反応が気に食わないらしい。ちっ！と舌打ちをして、大男は構えている大太刀を振りかぶった。よろめきさえもせず、長さ四尺にもなるうかという大太刀を持ち上げる様は戦国武者もはだして逃げ出す迫力だった。

どどど、どうしよう……。

気が気でないイエモン氏。それはそうだ。「あまり人目に付かないように」と厳命されているのに、だというのに、人に見つかった上にこうしておおごとになりかけている。だけれど、かといって大太刀を大上段に構えている大男の前に割り込むことなんて絶対に来ない。

結局、物陰から物事の推移を見守ることしかできずにいる。

そして、イエモン氏の目の前では――。

「おい、構えねえか！」

いつまで経っても構えない絡繰にしびれを切らしたのか、大男は動いた。

びゅんと一步踏み出し、ぐおんと大太刀の切っ先が振り下ろされる。そしてその剣先が、絡繰の肩口に迫る。とてつもない風切り音が、イエモン氏の耳にまで届く。

き、斬られた！

思わずイエモン氏、目をそむける。
が。

ガキイイーン！

大太刀が肩口に当たった瞬間、びりびりとした音が辺りに広がる。そして遅れて届く、大男の悲鳴ともつかない困惑の声。

「な、なんだと！？」

なんと、大太刀の切っ先は、蜘蛛の巣のように亀裂が走っていた。まるでそれはビイドロ細工を地面に落したかのようにだった。

それを見届けるや、絡繰は赤い目をクポーンと光らせた。

そして、右手にある槍をゆっくりと構え――。

「突キイ――！」

槍の切っ先を大男に向けて放った。

びゅん！

速かった。この刹那、イエモン氏にはある期待があった。この前この絡繰と出くわしたときのこと、あまり絡繰は強い突きを打って

こなかった。尻もちをついていたイエモン氏でさえ、容易にかわせる程度の攻撃しか出来ていなかったのだ。にもかかわらず、今のイエモン氏の両眼に映る絡繰の突きは、さながら颯^{はやて}だった。かわせそうにもない。

そして。

「ぎゃあああああ！」

断末魔が、江戸の夜を引き裂く。

クポーン。

地面に崩れ落ちる大男。槍をブンと振って血を払う絡繰。そのコントラストが闇の中に浮かび上がっていた。

「ひ、ひ、ひ……」

大男の連れは、引きつった声を上げていた。がたがたと肩を震わせながら、地面に崩れ落ちている大男と絡繰とを見比べていた。けれど、やがて茫然としてしまっていた自分に気付いたのだろう、今自分が何をすべきなのか得心したと見え、連れの男は手に持っていた何かを投げ捨てて絡繰に背を向けた。

に、逃げるのか。

ホツとすると同時に、このまま逃がしていいのかとふと思うイエモン氏。このまま逃がしたら、俺の咎^{とが}が露見するんじゃないか？

そんなイエモン氏の心の底を代弁するかのように、絡繰は動いた。クポーン。

逃げる連れの男の姿をその赤い目で捉えるや、絡繰は駆けた。さつきまでのノソノソとした動きからは想像できないくらいに軽快で俊敏な動き。闇を飛ぶ蝙蝠のように闇を駆けてゆく。がしゃんがしゃんという音が、イヤに耳に残る。途中、男が投げ捨てたものをがしゃんと踏みつぶしながら、さらに絡繰は迫る。

「ひ、ヒイ！ た、助けて助けて、誰か、たすけ」

「突キイ！！」

「ぎゃは！？」

イエモン氏には、もはや声だけしか届かなかった。鼻をつままれ

ても分からないような闇の奥で、何が起ったのか全く見えない。けれど、声を聞いただけで、何が起ったのかは容易に想像がついた。

な、なんてことを。

イエモン氏は物陰からすつと姿を現す。

厚い雲に覆われて月明かりのない夜のもと、大男の手にある太刀だけがざらりと輝いていた。けれどその輝きは刀身に入った亀裂のせいでどこかいびつに輝いていた。

大男の倒れるところより少し奥に、もう一人の男が投げ捨てたものの残骸が横たわっていた。

それは三味線だった。

恐らくはかなり上等な品なのだろう。皮にも張りがあつたし、弦に差してあつた撥も透き通るような茶色をした鼈甲だった。けれど、絡繰に踏みつぶされて真ん中から折れ曲がり、地面のぬかるみによつてすっかりと汚れてしまったそれは、もう二度といかなる音をも放つ気配は無かった。

そして、さらに奥に、絡繰は立っていた。

地面に倒れる三味線の持ち主を見下ろしながら、絡繰は立ちつくしていた。

右手の槍が、手の中でその姿を変えてゆく。ガシャガシャ、と音を立て、槍であつたはずのそれは手に収まる程度の塊にまで小さくなる。

「お、おまえ」

イエモン氏は思わず絡繰に声をかける。

「なんてことをするんだよ」

【3】

もちろん、返答なんて期待していない。絡繰はあくまで絡繰。絡繰に言葉などあるはずもない。いや、突きを放つときに「突キイ！」と発音しているけれど、それは恐らく槍を操る動作の時に抱き合わせになっている反応なのだろう。いや、そもそも、歯車のかみ合わせだけで動いている絡繰に、感情なんてものがあるはずもない。

けれどもなぜだろう。イエモン氏の目には、絡繰が肩を落としているように映った。

「お、おい……」

思わず声を掛けたその瞬間だった。

闇の向こうから、バタバタと音がする。何人もの慌ただしい足音。闇の中に浮かび上がる提灯の明かり。そしてその提灯に書かれた文字“御用”。

ま、町奉行所！

きつと、騒ぎを聞きつけたに違いない。誰かが町奉行所に駆け込んだに違いない。

「こんなところで……」

つかまってたまるか！

イエモン氏の脳裏に浮かぶは、妻のお岩の笑顔。

無我夢中で、イエモン氏は絡繰の手を取った。そして、強引に路地裏の方に引っ張って行った。たどたどしい足取りでイエモン氏に続く絡繰。裏路地から裏路地へ駆けるイエモン氏。どこまで駆けても御用の提灯が迫ってくるような気がして、足を止めるどころか後ろを振り返ることさえできない。無我夢中で駆けるに駆けた。右に左に。ただ駆けまわった。

がしゃん、がしゃん。

絡繰の垂が鳴らすお祭りめいた音を嫌というほど浴びながら、イ

イエモン氏はなんとか長屋に帰りついた。その段になってようやくイエモン氏は振り返る。闇の中に、“御用”の提灯は浮かんでいなかった。

空を眺めても、月は姿を隠していた。

次の日、医者所に顔を出してみると、既にお岩は床から出ていた。大丈夫なの？ そう訊くと、お岩はどこか虚ろに微笑んだ。それはまるで、小春日和の太陽のような笑みだった。

「ええ。もう大丈夫」

そうは言うけれど、まだ頬がやつれているし顔色も悪い。お医者曰く、「あまり食ってなかったせいで、まだまだ多くは食えないよ。うだ。食ってもいくら吐き出してしまうようだ」とのことだった。きつと、幾分か元気になったとはいえ、まだ本調子ではないのだらう。

「ああ、良かった」

イエモン氏は心からそう言った。床に突っ伏していた頃のお岩は、まるで死人のようだった。あれと比べれば随分と状況は好転したといえるだらう。

そうやってほっと溜息をつくイエモン氏の顔を、お岩は控えめに覗き込んだ。

その視線に気づいたイエモン氏は、お岩に視線を合わせる。

「ん？ どうしたの、お岩ちゃん」

「え、ああ」

お岩は不意に表情を曇らせた。結婚する前、お岩はころころと表情を変える娘だった。その表情には全く屈託がなくて、感情を隠そうともしなかった。けれど、結婚してからというもの、お岩の表情は曇りがちだった。そんなことに今更気づく。

話を促すと、幾度か悩んだような表情を見せながらも、お岩は言葉継いだ。

「イエモンさん、無理をしていませんか」

「無理？　なんで」

「なんだか、見ない間にお人が変わってしまったみたい」

え？　思わず頬をさするイエモン氏。顔の肉付きに変化はなさそうだ。それに、お岩に心配はかけたくないからといつもより身たしなみには気をつけているはずだ。だらしない格好で訪ねて余計な心配をさせまいといつもより丁寧にひげを抜いたはずだし、髪の毛結った。

お岩は続ける。

「なんだかイエモンさん、笑わなくなったみたい」

その言葉を、イエモン氏は、はは、と笑い飛ばした。果たして笑顔と一緒に作れたかどうか、イエモン氏には分からない。

「今、例の家中から仕事を受けているところなんだ。久しぶりの仕事なもんだから、きつと慣れてないだけだよ。でも、疲れてさえないんだ。平気だよ」

その言葉にウソはない。赤い羽織の男が持つてきてくれた“仕事”には、何の疲れもない。こう言ってはなんだけれど、一日の疲れっぷりは浪人をしていた頃と殆ど変わらない。殆ど変わらない、はずだ。

なのに。

イエモン氏はふと心の中で問う。この、体に染みついた重い感覚は何だ、と。

けれど。それをお岩に悟られるわけにもいかない。既に悟られているのならば、必死で否定するしかない。

「大丈夫だって。ほら、数年間ぶらぶらしてたんだ。仮に無理をしてるんだとしても、それくらいの無理は無理のうちに入らないよ」

「……」
もう、お岩は何も言わなかった。伏せ目がちにして、黙りこくってしまった。

その沈黙が合図だった。何かに追われるようにして、イエモン氏はその場を立った。お岩はそんなイエモン氏を見上げる。

お岩はほのかに微笑んでいた。けれど、その笑みはなんだか痛々しかった。まるで心の奥にある思いのすべてをかみ殺しているような微笑み方だった。いつから俺はお岩にこんな微笑み方を覚えさせてしまったのだろう、とイエモン氏は問いにならない問いを重ねるけれど、その答えは見つからない。

部屋から出る直前に、イエモン氏は振り返った。

「頑張るから」

自分に言い聞かせるようにして、イエモン氏は言った。

「俺、頑張るから」

折れそうになりそうな心に接ぎ木をするように。

「待ってて、お岩ちゃん」

お岩は返事をしなかった。

もう、肚は決まった。暗い廊下を歩きながら、イエモン氏は両頬を叩く。

蛇の道だろうが鬼の道だろうが、俺はもう、引き下がれない。

いや、引き下がるわけにはいかない。

いかないんだ。

長屋に帰ると、玄関先に赤い羽織の男が座っていた。薄く笑みを浮かべながららんとした部屋の中に座る様は、なにやらイエモン氏を戦慄させる。

「おやおや、お帰りなさい。ご留守のようでしたから、こうして待たせて頂きました」

「……いえ、構いませんよ」

イエモン氏は赤い羽織の男を中に促した。けれど、男は決して雪駄を脱ぐことはなかった。「何、用件はすぐ済みますもので」と。

いやにノホホンとした男にいらだちを感じながら、それでもその思いを何とかかみ殺す。

「……どういことですか」

「どういこと、とは？」

楽しげに眼を細めて下目がちにしていた赤い羽織の男はイエモン氏に向いた。けれど、そうやってイエモン氏に向いた瞬間には、その目には狂気の色が浮かんでいた。その目に、今更ながら男の本性を見たような気がしたイエモン氏だったけれど、もう引き下がれない。そんなことはイエモン氏自身が良く分かっている。だが、聞いておかなくてはならないことがあるのもまた事実だった。

イエモン氏は、部屋の隅で足を投げ出して座る絡繰を指した。

「あれはいつたい、何なんですか」

「あれ？ 言いませんでしたか」赤い羽織の男はその顔をゆがめる。「あれは絡繰です」

「そういうことを聞いているんじゃないありません」イエモン氏は続ける。「あれはいつたい、どういう目的で造られたものなのですか」イエモン氏は履物を脱いで上に上がり、赤い羽織の男の前で正座を組んだ。

が、赤い羽織の男はすくりと立ち上がり、イエモン氏に向いた。

赤い羽織の男はイエモン氏を見下しながら、笑う。いや、嗤う。

「それは、あなたの知っていい話ではありませんな」

「な、なんですって？」

赤い羽織の男は続ける。

「私はあなたに“命令”しました。あの絡繰を匿い、深夜には街に連れ出すように、と。私があなたに命令したのはただそれだけです。“あの絡繰の正体突き止める”なんて命令を下した覚えはありません」

「だが、アイツは……」

「くどいですな」

がしつ。赤い羽織の男の右腕が蛇のように伸び、イエモン氏の襟首を掴む。とても中年の力とは思えないほどに強い。万力でぎりぎりと締め上げられているかのようだ。呼吸さえも苦しい。袖から覗かせる太い腕から繰り出される暴力が、イエモン氏から自由を奪う。もう赤い羽織の男は何の表情も浮かべていなかった。怒りでも悲

しみでも、喜びでも楽しみでもない。ただ、ぼうつとした顔を浮かべて、イエモン氏を見ていた。

ぼつりぼつり、まるで落ちゆく枯れ葉の奏でる音のように、赤い羽織の男は言葉を継いでゆく。

【4】

「家中の都合。そう言えば、お分かりですか？ わが家中になんとしても加わりたい、イエモンさん？」

家中の都合。

武門に生きる者にあつては絶対の言葉。そして、武門に生きたい人間にとっては、命を賭しても従わなくてはならないもの。

結局、イエモン氏には一つしか選択肢は残されていない。

「……ああ」

悲鳴のような声は、赤い羽織の男を追認するしかなかった。すると、赤い羽織の男はフンと鼻を鳴らし、無造作に襟首を投げやる。

「ごほつごほつ！」

首を絞められている格好だったイエモン氏は思わず咳込む。そのイエモン氏を涼しい顔で見下しながら、赤い羽織の男は続ける。

「ああ、そういえば、聞きましたよ」

何を？ イエモン氏の言葉は咳によつて阻まれて言葉にならなかった。

ふうつと、赤い羽織が揺れた。その瞬間、身を切るような風がイエモン氏の頬をかすめる。

「昨日の夜、変な事件があつたそうですなあ。大道芸人の二人組が、何者かに襲われた、と」

イエモン氏は何も言えなかった。

そのイエモン氏の心の底を図っているかのように、赤い羽織の男はイエモン氏を覗き込む。

「下手人は未だに捕まっていない。そして、恐らく下手人の得物は槍だという」

こいつ……。

イエモン氏には期待があつた。もしかすると、今日の前にいる男

は、あの武者絡繰がどういうものであるのかを知らないのではないかと。きつとあの男も上役に命じられているだけの善意の人なのではないかと。けれど、そんな可能性は粉碎されてしまった。でなくば、ああやって昨日の夜の話をしたりはしない。

ふう。

赤い羽織の男は、肩をすばませて笑った。

「あなたも、共犯なのですよ。いや、正確に言えば、あなたはこの事件の真犯人なのです。仮にあなたがこの件で捕まるとしても、捜査の手は私にまで届かない。なぜかわかりますか？　だって、あなたは私がどの家中の誰なのかを知らない。あなたが仮に私の存在を暴露したところで、どこのだれかは分からないですよ。いかに江戸の奉行所が優秀といえども、百万人もいる中から私を見つけ出すのは不可能でしょう？」

そうだった。イエモン氏はこの男の素性を全く知らない。どこの家中なのか。どういう身分にあるのか。そもそも名前さえ分からない。確か聞いたような気もしたけれど、そこらへんの記憶があいまいで、どうもはつきりしない。どういうことだ。

赤い羽織の男は指を立てた。

「つまり、あなたは何が何でも、是か非でもこの任務を果たさないとならないですよ。あなたのために、ね」

「ああ、なるほど、ね」

逃げることは出来ない。捕まるわけにもいかない。結局、イエモン氏の眼前には、ただ赤い羽織の男に従うしか選択肢が残されていない。

「一つ、聞いても」

「なんででしょう」

「本当に、この件が終わったら、俺を家中に加えてくださるんでしょうか？」

ふう。赤い羽織の男は控えめに笑う。

「もちろん。武士の魂に賭けても」

イエモン氏はこくりと頷いた。

「ならば、もう迷うことはありません」

「そうですか」

ふいに赤い羽織の男はパアツとその表情を崩した。パン、と手を叩き、言葉を重ねる。

「まあ、これからこの絡繰は人を襲い続けるでしょう。が、昨日のあなたの逃げっぷりをみて安心していたんですよ。きっとあなたならば、首尾よく全てを果たしてくれそうです」

「どういうことです」

「とと、口が滑る滑る」ぱちんと自分の頬を叩いて、赤い羽織の男は続ける。「なんでもいいじゃないですか。あなたは何が何でも家の中に入りたい。そして私は何が何でもこの絡繰をどうにかしたい。その二人の思惑が重なっているのですから」

それで言葉は途切れてしまった。

沈黙。あまりに息苦しい沈黙。その沈黙を嫌うかのように、赤い羽織の男はくるりと踵を返した。がらりと入口の戸をあけ外に出ると、少しだけ振り返った。

「では」

まるで能面のような顔を浮かべる赤い羽織の男は、イエモン氏の前から姿を消した。

一人取り残される格好となったイエモン氏は、部屋の中で溜息をついた。

もう、引き下がれない。

がりつと唇を噛んで、前を見つめる。

その、瞬間だった。

がしゃん、がしゃん。

不意に、部屋の隅から音がした。はっとして音の方を向くとはたして、絡繰がこちらに歩を進めてくる。がしゃん、がしゃん。鎧武者姿なのに、絡繰にはまったく勇壮さが無い。風が吹けば飛びそうなくらいにたどたどしい足取りでイエモン氏の前まで歩を進めるや、

イエモン氏に背中を向け、腰をかがめた。

「ああ、そうか」

イエモン氏は思い出した。

この絡繰は一日に一度、ぜんまいを巻かなくてはならない。

懷から蝶にも似たぜんまい巻きを取り出すと、背中にぽっかりと空いているぜんまい用の穴にぜんまい巻きを差し入れた。そして、カチカチと時計回りに回す。手ごたえはあまりない。カチカチ、カチカチ、と何かが巻き上がっていくような音だけが辺りにこだまする。

その背中を見つめながら、イエモン氏は思わず一人ごつ。

「なあ、お前はそれでいいのか？」

無意味な問い。何せ、この言葉を投げやっている相手はただの木偶人形ではない。木偶人形だろうが絡繰だろうが、自分の意思なんぞあるはずはない。武者のなりはしていても、目の前に座るこれはただ人の形をとった鉄の塊なのだ。けれど、今、イエモン氏の傍らには、絡繰しかない。

そうやって背中を眺めていると、ふと、イエモン氏はあることに気付いた。

絡繰の右肩のあたりに、小さな傷があった。

その傷に思い当たるものがあつた。

昨日、あの二人組と出会ったとき。絡繰は大太刀で斬りつけられていた。確か、その大太刀の切っ先は、肩口に入ってはいなかったか。

「なあ、お前は悲しくないのか？」

思わず、イエモン氏は背中越しに絡繰に問うた。

イエモン氏にだってもう分かっている。今こうしてねじが巻かれるのを待っている絡繰は、きっとロクでもない理由によって造られ、そしてロクでもないことに使われるものなのだろう。そして、ロクでもない使われ方をして少しずつ傷つき、そしてロクでもない死に方をするのだ。

そしてそれは、自分を見ているかのようだった。

ロクでもない武門の世界に育ち、ロクでもない武門の論理に生き、ロクでもない武門から弾かれてもなお、そのろくでなしな世界に憧れる。不毛なことは自分が一番分かっている。

けれど、イエモン氏には後がない。武門での生き方しか知らないイエモン氏は、武門でしか生きられない。「誰かに仕えたら負けだと思ってる」なんて強がってみたところで、それは負け犬の遠吠えにもなっていない。

イエモン氏は呟いた。

「俺もお前も、やるしかないんだな」

力チリ。ぜんまいが全て巻かれた。

その瞬間、絡繰の肩が細かく震えた。

まるで、泣いているが如くに。

けれど、例の如くイエモン氏は気づかなかった。

そうやって、さながら冬眠前の虫のようにして、イエモン氏は夜を待った。

【1】

「いやあ、参っちゃいましたよね」

変迅堂はカラカラと笑う。その様に、向かいに座る仁杉与力はこれでもかというほどに顔をしかめた。その顔を不思議そうに見遣る変迅堂は仁杉に訊く。

「あれ、どうしたんですか、仁杉さん？　なんでそんなお顔を？」

「決まっているだろう」仁杉はちよつと青筋を立てた。「計画が狂った。まさか、昼間のうちにお前の知り合いと出くわすとは。お鶴たちにはお前の件は全く話していないのだぞ」

「まあ、しょうがないですよ」と、変迅堂。「なんとか、ごまかしでもらうしかないんじゃないですか」

そう。変迅堂は一応南町奉行所に引つ張られた格好になっている。にもかかわらず、二人で品川あたりを歩いてるところをカツちゃんに見られてしまったのである。しかもご丁寧にも、遠くではあつたけれど「おお！　変の字！」と声まで掛けてきた。その場をすぐに離れて事なきを得たけれど、この噂が広まってくると、面倒なことになるのは違いない。特にお鶴とちあきの耳に入れば、この話に首を突っ込んでくるに違いない。

そう心配している仁杉を尻目に、変迅堂はカラカラと笑う。

「ま、仁杉さんの心配は分かります」

「いいや、お前は何にも分かっちゃいないぞ！　この件はお遊びじゃないんだ！」

珍しく、仁杉の言葉は冷静さが無かった。いつもはよっぽど変迅堂の方が落ち着き無いくらいなのに。ともかく、変迅堂は鼻息荒い仁杉をなだめた。

「まあまあ、落ち着いて。なら、お鶴殿たちが首を突っ込んでくる前に、解決しなきゃいけないだけのことでしょ？」

まごうことなき正論に、仁杉も口をつぐむしかない。不満げな顔

を浮かべて、浮きがちだった腰をどすんと下ろした仁杉は、変迅堂に向く。

仕切り直すかのように、横に積んである雑記帳を広げ、蠟燭の炎の元、その文字に目を通す仁杉。ふん、と鼻を鳴らし、苦々しげに言った。

「おさらいだ」

仁杉の言うところはこうだ。

約半年前だから、今年の春先のことだ。江戸市中に「槍突き」なる辻斬りが現れた。普通辻斬りというと刀をすらりと抜き放ち道行く人に斬りかかるのが常のところ、その下手人は槍を使った。槍で心の臓を一突き。すっかり血がこぼれおちてしまったあとの死体の胸には、三角形の穴がぼつかりと空いていた。三日と空けずに繰り広げられた惨劇。槍を振るう謎の辻斬り。そうしていつしか、その辻斬りは「槍突き」と呼ばれるようになり、江戸の闇をまた一層深くした……。

「懐かしいですねえ。たった半年前のことなのに、もう何年も経ってしまっただかのようにです」

変迅堂の間抜けた言葉に、仁杉は苦々しく顔をゆがめる。

「ふん、何事も“喉元過ぎれば”だからな。だが、あの頃の江戸市中はとてつもなくぴりぴりしていたな。全く、人はあまりに忘れるのが早いのだ」

だが、と付け足すのを仁杉は忘れなかった。

「そうして江戸っ子たちが高まくらで眠れるのも、我々奉行所の働きののおかげだな」

そう呟いて、仁杉は雑記帳——捜査日誌——に目を落とす。そして、“槍突き”の一件の顛末を喋り始める。

“槍突き”の被害者は、どんどん増えていった。もちろん、殺害事件だから奉行所もそれなりの捜査陣を敷いた。だが、その被害者が増えるにつれ、“將軍のお膝元でかような不埒な犯罪が野放しでよいのか？”という風潮が幕閣内にも広がる。かくして、被害者数

が両の手に収まりきらない頃になると、この件の捜査陣は近年まれにみるほどに大規模なものとなった。その必死な捜査が身を結び、春の終わり頃には、下手人が上がった。

「確か下手人は、徳川家のお侍だったんでしたっけ」

「ああ」苦々しげに、仁杉は頷く。「まあ、その日暮らしの下級御家人だったがな。何にせよ、徳川二万騎の面汚しもいいところだ。だが」

ここだけの話、と仁杉は前置きして続けた。

「少し、かわいそうな奴ではあったがな」

下手人の御家人は、暮らし向きが貧しかった。この時代ともなると、土地を持たず給料として米を支給される切米取りきりまいとの武士層は貧乏生活を余儀なくされていた。給料として渡される米が、全く金にならないのだ。そのせいで土地のない武士たちは“サンピン”と江戸っ子たちから嗤われながら商人に頭を下げて米を買ってもらっていた。その下手人も、そんな武士の一人だった。

それに、仕事もうまくいっていなかったらしい。槍の名手で知られていたらいいのだけど、この時代、そんなもの、手慰みにもならない。この時代の武士に求められているのは、武の力ではなくて、むしろ算術やら経済やらといった学問だった。若いころから武が好きで勉強があまり得意でなかったその御家人は、同僚からもバカにされる日々だったという。

珍しく、仁杉は感傷的なことを言う。

「どんな生活だろうな。米を売るために人に笑われ、仕事をすれば同僚から嘲あざわらられる生活とは。きつとあの下手人は戦国の世に生まれていれば良かったのだろう。さすれば、槍でいくらでも働けたに違いない」

事実、取り調べの最中、下手人はこう口にしたという。

“俺は、生まれる時代を間違えたのだ”と。

そして、生まれる時代を間違えた下手人は、ぼつりと仁杉は言った。

「まあ、もうこの世の者ではないが、な」

「そうなんですか」

「ああ。遠島になるはずだったのだがな。獄で死んだ」

かくして、“槍突き”の一件は終わったはずだったのだが。

変迅堂は続ける。

「で、最近、また槍で人を刺す妙な辻斬りが現れたんですよ？」

「ああ、そうだ」

数日前のことだ。そう仁杉は前置きした。

第一報は、ある町人からの届け出だった。その町人は真夜中に南町奉行所の戸を叩いた。助けてくれ！ 助けてくれイ！ 半ば錯乱気味だったので、門番も邪険にするわけにもいかず、とりあえず中に通して落ち着かせた。がたがたと震えるその町人をなだめること四半刻、ようやく開かれた口から飛び出したのは。

『“槍突き”が出た！』

その者の話によれば、全身きらびやかな鎧をまとった武者が槍を持ち、町人に向かって槍を突いてきたのだという。ただ、恐ろしく遅い突き手のおかげで、なんとか命からがら逃げてきたのだ、とも「最初は、何かの間違いだろうと思った」と、仁杉は頭を抱える。「何せ、下手人はもう死んでいる。だというのに、“槍突き”はまた江戸の街に出没するようになった」

「ってことは、可能性は二つ、ですね」

変迅堂はメガネをくいと上げた。蠟燭の明かりが、メガネのレンズに反射してキラキラと輝く。メガネを上げた指を二本立てて、変迅堂は続ける。

「一つ目は……。以前に捕まった“槍突き”になぞらえてそんなことをしている輩がいる、っていう可能性」

つまり、模倣犯がいるという可能性。変迅堂は指を一本折って続ける。

「そして、もう一つは――」

「いや、皆まで言わなくていい。分かっている」

仁杉が変迅堂の言葉を遮った。

「奉行所の拿捕した下手人が、真の下手人でなかった可能性、だろう」

「ええ」

闇の中、変迅堂は頷く。眉間にしわを作りながら、仁杉はポツポツと言葉を重ねる。

「一番奉行所が恐れているのがそれだ。仮にも徳川二万騎の端くれだった者が辻斬りで捕まっただけでも一大事だったというのに、それが誤認拿捕だということになってみる。目も当てられん。しかもその本人が死んでいるとなれば、名誉回復など出来んぞ。——と、上の連中は騒いでいる」

「上の連中……“は”？」

変迅堂に促されるようにして、仁杉は続ける。珍しく、熱っぽい口調で。

「模倣犯だろうが誤認拿捕だろうが、俺には関係ない。ただ俺は、江戸の安寧を脅かす不届き者を拿捕したいだけだ」

「はっは、そのせいで誤認逮捕されたんじゃ、たまったもんじゃないですけどね」

カラカラと笑う変迅堂。けれど仁杉は眉一つ動かさずに続ける。

「ふん、相手は辻斬りだぞ？ まさかこの件を大っぴらにして、あの小娘を巻き込むのは不本意だろう。私としても、お鶴を巻き込むのが不本意だったただけだ」

つまり、こういうことだ。

今回の辻斬りの件において、仁杉は変迅堂の協力が欲しかった。けれど、変迅堂を普通の形で召し出せば、ちあきやらお鶴やらといったうるさいやつらがついてきてしまう。それを嫌った仁杉は一計を案じた。変迅堂にでっち上げの罪をなすりつけ、無理矢理自由を奪ったのである。もちろん、変迅堂も納得の元で、である。何かの事件の容疑者ということであれば、ちあきたちもついては来れない

だろう、というのが仁杉の見通しだった。そしてその見通しは当たる。事実ちあきとお鶴は変迅堂たちと離れている。この件について、あの小娘たちが首を突っ込んでくることはない。

【2】

けれど、唯一の手違いが、あんなに早く変迅堂の姿を知り合い（カツちゃん）に見られたことだったのである。

バツが悪そうに頭を振って、仁杉は話の方向を変えた。

「で、どうだった？ 今日のアいつは」

「ああ」変迅堂は続けた。「針通しの貫吾さん、でしたっけ？ い

やあ、あの大道芸はすごかったですねえ」

「そうじゃないだろう」

「あいてて、痛いですって！ いやホントに！」

ぐりぐりと拳骨を変迅堂の頭にすりつけながら、仁杉は続ける。

「あれが一番の容疑者だろう。あんなに長い大太刀をあもたやすく抜き放ったのみならず、目にも止まらないその武。おそらく江戸中を探してもそうはおるまい」

そう。仁杉は、針通しの貫吾を疑っていたのであった。なので、この日、変迅堂と連れだって容疑者・貫吾の姿を見に行ったのであった。が、そこに行く途中でカツちゃんに見つかったのだった。：

…まあ実はお鶴ちゃんにも目撃されているのだけれど、二人はそれに気づいていない。

「まあ、正直、あまり武術に詳しくはないですけど。あれだけのものとなると、相当の修練が必要でしょうしねえ」

「だろう。ならばあの大太刀を槍に持ち替えれば――」

仁杉の言葉に対して、変迅堂はかぶりを振った。

「なんだ」

仁杉がとがめると、変迅堂はのんびりと答えた。

「いえいえ、刀と槍は別物でしょう。それに」

「それに、なんだ？」

「ここ数日出ている辻斬りの被害って、どんな感じなんです？」

「けが人二人。槍を鼻先でちらつかされて腰を抜かした連中がほと

んだ。怪我をした連中だって、お尻を少しつつかれた程度とか、あるいは腿を少し突かれたとか、それ程度のもんだ」

「だったらおかしいじゃないですか」と変迅堂。「こう言っちゃアレですけど、この事件の下手人、あんまり槍の腕がいいとは思えませんよ。だって、槍ですよ？ 遠く戦国の世で、多くの武者を殺してきた武器です。そんなものをこの太平の世に持ち出していながら一人の死者も出していないということは、下手人はカラキシなくらい腕が立たないヤツですよ」

ぐむむ。仁杉は唸る。

「つまり、お前の見立てでは、アイツは下手人ではない、か」

「ええ」

即答。

けれど、仁杉は反論を試みる。

「だが、目撃証言から考えるとあいつが一番怪しい。目撃情報によると、下手人は相当に上背が高かったという。それに、鎧をまとっているながら追いかけてきたとの証言もある。相当体格に恵まれているに違いない。江戸広しといえどもそんなことを出来る人間は限られてくるだろう」

「まあ、そりゃ確かにそうですね……」

特に反論できるような要素もなく、ただ変迅堂は口をへの字にしてみよう。

と――。

「ひ、仁杉様！」

二人のいる部屋の戸が騒々しく開け放たれる。夜の冷たい風を纏いながら部屋に入ってきたのは、仁杉与力の部下である中年同心さんであった。白髪の混じる武家鬚を少し乱している様から見ても、どこから駆けてきたのだろう。心なしか呼吸も弾んでいた。

「おや、どうしましたか」

少し言葉を改めて、仁杉はその部下に訊く。

「そ、それが……」

何かを言おうとした中年同心さんだったけれど、ぐぐつと言葉を押さえこんだ。変迅堂の顔と仁杉を見比べて、どうしたものかと逡巡しているようだった。

同心さんのためらいの理由に思いが至った仁杉はニコリと微笑む。「ああ、ここにいる町人のことはいないものだと思って扱って頂ければ結構ですよ。この者は口が堅いですから」

すると、中年同心さんはゆっくりと口を開いた。

「で、出ました！ “ 槍突き ” 」

部屋の中に、さあつと緊張感が広がる。びりびりとした空気の中で、仁杉も変迅堂も微動だに出来ない。中年同心さんでさえ、その空気の中で委縮していた。けれど、その空気の中から一人抜け出た仁杉は、ゆっくりとため息をついた。

「そうですか。で？ 今回はどこで？」

「品川界限です。被害者は二人なんですが……」

「被害者？」 仁杉は顔をしかめた。「何やら、物騒な言い方ですね。それではまるで——」

「そうなんです」

懷から手ぬぐいを取り出した中年同心さんは頬を盛んに拭いていた。その顔には、深い困惑と虞おそれのようなものさえ浮かんで見えた。

そうやって汗を拭きながらしばし下を向いていたのだけれど、やがて意を決したようにして口を開いた。

「被害者は二人。それが、二人とも重傷です」

「重傷、ですか」と、仁杉。「医者は何と？」

「医者が言うには、命に別条はないようです。が、最近の“ 槍突き ” とは全くそのやり口が違います。怪我を負った二人が二人、大きな傷を作っています。たまたま急所から外れていたからよかったよなもの、もしもあの傷が急所に入っていたら危なかった、と医者は申しておりました」

しかも。そう前置きして、同心さんは続けた。

「今回の被害者、我々が注目していた針通しの貫吾と、そのツレな

んです」

その言葉を聞いた瞬間、仁杉の顔色が変わった。さっきまでは冷徹を絵にかいたような顔をしていたのにも関わらず、その言葉を聞くと興奮のため頬を赤く染めて目をくわっと見開いた。

「な、なんですって？」

「それが、事実なんです」

ぐむむ。仁杉は両腕を組んで唸る。けれど、しばらくするとその驚愕顔を引っ込めて、元の冷静な顔に戻るや、仁杉は訊く。

「で、下手人は」

「目下、搜索中です」

そうですか、なら目明しを使いこれから搜索を続行するように、あとあなたは休んで結構です、と中年同心さんに声をかけ、暗に部屋から下がるように促した。すると、同心さんはその意味を察したのかすつと頭を下げ、部屋の戸を閉めて去っていった。

しばし、沈黙。

仁杉は腕を組んだまま硬直している。そして変迅堂も、蠟燭の明かりのなかでただ座っている。その場に座っているだけで身が縮こまってしまふような気分になる類の、イヤな沈黙。

その沈黙を壊したのは、変迅堂だった。

「あのう」

「言わなくていい。分かっている」

そう。針通しの貫吾は下手人ではなかった。

そして――。

苦渋に満ちた言葉を、仁杉はひねり出す。

「それ以上の問題は、この辻斬りの被害が激化していることだ。前まではせいぜい切り傷程度の傷をつけている程度のものが、明らかに殺意のあるものへと変貌している。早く止めねば大変なことになる」

「これ以上被害を出さないために、ですね」

変迅堂の言葉に、仁杉は頷く。

「協力してくれるか、変迅堂」

「もちろんです。江戸に住む人間として、やっぱり気になります。それに」

それに何だ？ そう仁杉が話を促すと、変迅堂は答えた。

「だって、他ならぬ友達の頼みですもん」

何の気負いもなければ照れもない言葉。そういう言葉はむしろ聞く側にテレをもたらすもので……。

緩みがちな口の端をなんとか抑え込みながら、けれどそれを認めたくない仁杉から出る言葉は少し乱暴になるのだった。

「ふん、だったら早く下手人を捕まえるような名案を出せ！ 俺がお前に期待しているのはその一点だけなんだからな！」

顔を真っ赤にしながらそっぽを向く仁杉。障子の向こうは真っ暗だった。おそらく、月は出ていないのだろう。

月のない江戸は、何と暗いことだろう。

言葉に出そうとしたが、あまりに気障なのでついぐんでしまった言葉は、仁杉の心の奥底に沈んでいった。

【1】

秋晴れ甚だしい江戸の街。ところは江戸のビバリーヒルズと異名取る日本橋。日本のすべての道に通ずる橋、日本橋を中心に広がるこの街は、当時日本で一番栄えた界限であつた。日本最大の魚河岸もあつたし、三越呉服店もデデンと立つていた。江戸の小判の五割くらいはこの日本橋で消費されているに違いない。そんな江戸時代最大の繁華街には観光でやってくる者たちさえもあるほどであつた。けれどその表通りから一本入ると、まさに“閑静な住宅街”を絵にかいたような光景に変わる。深川なんかのように、貧乏長屋が続く光景などありはしない。お武家さまでもびっくりな広い敷地に、大商人たちやその家族が住んでいる。貧乏大名もびっくりな派手な門構えに、真つ白な漆喰の囲いが続く。

そんな日本橋裏界限に、戦慄が走る。

その戦慄の熱源となっていたのは、日本橋裏界限にある、長介の隠居宅であつた。隠居宅だけあつて、他の家々と比べればはるかに手狭でこじんまりとはしているけれど、そもそも町人で一軒家に住むことができるという時点で結構な特権階級なのだ。ともかく、そんな高級住宅街の真ん中、長介の客間にて、不穏な空気は醸されているわけ――。

「どういうことが、説明してください！」

お鶴が唇を伸ばして長介に迫る。その言葉に長介は取り合おうともしない。正座のまま、長介は微笑むばかりだつた。

「いやいや、何のことですか？ さつぱり訳が分からないのでねえ、お答えのしようがありませんなあ」

あくまで逃げの姿勢を崩さない長介にしびれを切らしたのは、お鶴の横に座るカッチャんだつた。鳶口を畳の上に横たえて、自分の膝に両手を置く。

「あんたなら知ってるんだろ？ ウソは良くねえよ、爺さん」

「ほっほっほ、何のことですかな？」

あくまではぐらかす気満々の長介。けれど。
どっごーん。

一瞬、客間が揺れた。というのも、カツちゃんの横に座るちあきが、思いつきり畳に拳骨をくれたからだ。ちあきの拳骨のダメージを吸収しきれなかったと見え、畳はちあきの拳骨の形に歪む。

ふるふると口元を少し振るわせる長介を尻目に、ちあきは目をキュピーンと光らせる。

「言わないと、こうだよ？ 長介さーん？」

何だか口調は優しい。けれど、なんだかすつげえ怖い。

もちろん、そんな威圧感たつぷりのちあきを前にして、長介も怖くないはずもない。さつきから隠しきれないほどにだらだらと冷や汗をかいて、ちあきたちから視線を外しまくっている。けれどそれでも必死で「さあ、なんのことですかな？」と震えた声で話をはぐらかしている。

そんなタヌキ爺を前にして、なかなかしぶといなア、とちあきは呆れ半分に心の中で呟く。

さて、どうしてお鶴・カツちゃん・ちあきが長介さんの家にいるのかという――。

前日、三人で「仁杉と変迅堂が二人で何かをしているに違いない」という点でコンセンサスがとれた。まあ、ちあきなどは、「きつと二人でどこか楽しいところに行っているに違いないわ！ キー！ ちくしょーあのクソ与力！ 先生と二人であいびきなんて！」とズレたことを心配しているのだけれども。ともかく、ちあきたちの前から姿を消した二人の行方を知っているのは誰か、ということになり、三人の頭に同時に浮かんだのがこの長介さんだったという次第なのである。

と、いうわけで――。

「ねえ、長介さん？ 早くゲロっちゃった方が楽になると思うのよねー。まさか長介さん、この歳でみぞおちに一発入りたくないでし

よ？」

「おうおう、ちあつちゃんの正拳突きは痛てえぞー！ 早く喋ったほうがいいんじゃないかねえかア？」

「なんだったら、私も一発……」

と、少年少女に自白を迫られている格好になっている長介なのだった。けれどそれでも、長介はぴーぴーと口笛を吹きながらそつぽを向く。その様に、ちあきはいらだちを隠せない。

「ちよつと長介さん！ 聞いている！？」

ちあきの金きり声が部屋中にこだまする。まるでチワワのようにふるふると小刻みに体を震わせながら、長介はちあきに向いた。ちなみに、涙目で。

「い、いや、何のことですかなー？ ワシ、何にも知らないもんねー」

ドン！

正座に組んでいた右足を畳の上に着いて、ちあきは手を長介の顎に伸ばす。開いた手を長介の両頬を掴むように当て、そしてそのまま握る。ちようどひよつとこのように顔をゆがませる長介に、ちあきは値千両のマジメンチをきめる。

「ウソは良くないんじゃない？」

青筋を立て、ギリギリと歯噛みしながらきめるマジメンチ。

「わわわ、ワシ、なんにも知らないもんねー」

さつきよりも小さな声で反抗する長介。その様を誰かが見たら、きつと借金取りとその借金取りにいじめられている哀れな爺さんのように見えるだろう。恥も外聞も知ったことではないちあきは、そんな借金取りの雰囲気 GANGANG 周りに振りまきながら続ける。

「先生はどこ？ クソ与力は？ ねえ、どこ！？」

「そうですよ」ちあきの背中越しに、お鶴も言い募る。「兄上、昨日は家に帰ってきませんでした。奉行所からの使いの方から、“仕事が終わらないから今日は家に戻らない”と託を頂きましたけど、そんなこと今までなかったんですよ！？ 何かあったんですか！？」

けれど、それでも長介は何も言わない。ただ、「な、何にも知らないもんねー」と涙目で白を切り通すだけだ。

そしてついに、ちあき、キレる。

「むきー、このくそじじいー！ 早く吐けよこんちくしょー！ もう決めた！ 決めたもんね！ イワす！」

長介の顎辺りにかかる手をさらに強く握る。

形が変わるほどに長介の頬をむぎゅぎゅと握り込もうとするちあきを前に、さすがに不穏なものを感じたカツちゃんが割って入る。

「ちよつと待った、ちあつちゃん！ まずい、不味いつて！」

「むきー！」

なんとかちあきを長介から引き離してお鶴にとりあえずあずけたカツちゃんは、ちあきの代わりに長介に向かう。そして、思いのほか優しく言葉をかける。

「なあ、長介さん、いい加減喋ってくれねえか？ だつてさ、おかしいじゃねえか。逮捕されたはずの変迅堂シヤバがどうして娑婆シヤバを歩いてるんだよ、しかも与力さんと一緒にさ？ あんた、その理由を知ってるんだろ？ なら、教えてくれい。別にそれを知って悪いことをしようってエわけでもねえだろ？」

カツちゃんの横でぶんぶんと腕を振ってムキーと唸るちあきも、そしてそのちあきをなんとか抑え込むお鶴も、カツちゃんの言葉にうんうんと頷く。

けれど、それでも長介は何も言わない。

むむむ……。

三人の間に「こりや無理かも」とばかりに溜息が浮かびそうになる、その瞬間だった。

「長介さん、もう、これくらいにしませんか」

突然、障子のがらりと開かれた。その奥には、いつものようにおとなしい柄の小袖をまとうお道の姿があった。そのお道の姿が目に入るや、珍しく長介は少し乱暴な口調を放った。

「お、お道さん、何をしてたんですか！ あなたのお役目、お忘れ

か!？」

「ええ、分かっておりますよ」

思いのほか落ち着いた口調でちあきたちを見つめたお道は続ける。
「ちあきちゃんとお鶴ちゃんを監視する事。それが私の仕事でした。けれど、その少年を監視しろとは一言も言われておりませんでしたので。どうも、変迅堂さんたちがこの少年と出くわしちやっただいたいなんですよね。だったら、私たちがもう隠し立てする必要はないんじゃないでしょうか」

「ぐむむ……」

ちよつと不機嫌そうに眉根をひそめた長介は両手を組んだ。少し組んだ手を緩めてはしわだらけの顔を撫で、お道とちあきたちを見比べる。けれど、お道の言葉に反論する事に決めたのだろつ、長介はお道のことを睨んで口を開いた。

「けれど、これはそういつた問題ではないんです! 変迅堂さんたちから頼まれたから、とか、そういつた意味合いのことじゃありません!」

さて、その言葉を聞くや、ちあきたち三人はずずいつと長介に迫った。三人に凝視されながら迫られる格好となった長介は思わず身を仰け反らせる。あまりにも、三人が怖すぎる。

口火を切ったのはお鶴だった。

「今の長介さんの言葉……。おやア、長介さん、墓穴を掘っちゃったみたいですね」

まくしたてるように、カツちゃんも加わる。

「おう。変の字と何かしらの約束みたいなものがある、ってことまで分かったぞ? オイ」

そしてとどめはちあき。

「やっぱりなんか知ってるんだ」

その三人に、お道まで加わる。

「ほら、もうばれちゃってますよ。いい加減、もう喋っちゃいましょうよ。今回の件がばれちゃうのは、別に私たちの責任じゃ——」

【2】

けれど、そのお道の言葉は途中で遮られた。

「黙らっしゃい！」

稲妻のような長介の一喝によって、さっきまであれほどやいの言っていた三人はぴたりと口を止めた。もちろん、お道もぴたりとその口を止めた。

珍しい。

思わずちあきは心の中でそう呟いていた。

あの長介さんが、怒鳴るなんて。

ちあきにとつて長介さんは、気のいいじい様だ。いつもニコニコとしていて、怒ったところはもとより声を荒げたところさえ見たことがない。そんな長介が、感情をあらわにして声を上げたのが、ちあきには新鮮だったのだ。

けれど、そうやってちあきがどこか冷静に長介を観察できたのは、長介の怒りの矛先が自分に向いているわけではないからだ。長介の怒りの方向はきわめて分かりやすかった。その矛先は、あきらかにお道に向かっていた。もちろんちあきにも分かるということとは、ほかのみんなも分かっている。顔を蒼白にするお道に向かい、長介は怒鳴り続ける。

「全く、あなたまでそんなことを言いますか！ それでも大人ですか！？　なんで変迅堂さんたちがこの子たちに口止めしているか、あなたには分からないんですか！？　その意も汲めないんじゃない、大人失格もいいところですよ、お道さん！」

「で、ですが……」

なんとか反論しようとするお道のことを、長介は許さない。

「黙らっしゃい！　なにが“ですが……”ですか！？　ほんとうに――」

けれど、今度は長介の言葉が遮られる番だった。

「うるさーい!!」

長介の言葉を遮ったのは、ちあきだった。長介のどなり声なんか風前の灯。ちあきの一喝によって吹き飛んでしまった。皆の視線がちあきを集まる。さっきまでガミガミと怒鳴っていた長介さえ、その怒りの感情を忘れてちあきを注視したくらいだった。

そんな鶴の一声を放ったちあきは、さっきまでの声から想像できないくらいにか細い声で続けた。

「ねえ、長介さん、先生の居場所、知ってるんでしょ？　なんで隠すの？　ねえ、なんで？　そりゃ最初はさ、仁杉さんに引つ張られたって聞いたから、心配は半分だったにせよ、まあまあ安心だったんだよ？　でも、そうやって隠されると――。先生に何かあったんじゃないか」とか、心配になるのが人情じゃない？」

いつからか、ちあきの丸っこい目から、つうと伝うものがあつた。それはちあきの頬を濡らして顎にまで伝う。そして顎にたまつたそれは、ぴんとちあきの膝の上に落ちる。

そう、おくびにも出していなかったけれど、ちあきは変迅堂のことを心配していたのだ。けれど、仁杉がついているからと何とか言い聞かせて、その心配を小さな胸に隠していたのだ。そういう心配は、宵闇が深くなればなるほど大きくなる。そのせいで、昨夜小さな胸を押しつぶさんばかりに悩んでいたのだ。

「ねえ、長介さん。お願い、先生の居場所、教えて」

しばしの沈黙。皆、ちあきを見つめたままで固まっている。誰もがちあきのことを、一樣な目で見つめていた。ただ、長介を除いては。

長介だけは、ちあきのその涙をどこか離れた所から見ていた。決して冷淡なわけではない。むしろ、無理矢理距離を置いてみようと努めているようだった。

長介は口を開く。

「いや、お嬢さん。申し訳ないがお教えする事は出来んよ」

涙を拭きもしないで、ちあきは長介に向く。涙の流れた跡がきら

きらと光つてきれいだった。

「……なんで？」

「それはな、お嬢さん。お嬢さんがまだ子供だから、ですよ」

「どういうことよ」

「なぜ変迅堂さんが、何も言わずにどこかに行ったのか。それはね、お嬢さんを巻き込みたくなかったからなのでしょうなあ。お嬢さんを怪我させるわけにいかない。そう思ったのでしょう。そして、変迅堂さんに口止めをお願いされたとき、ワシもそう思いました。……けれどね、もしお嬢さんが大人だったなら、ここまで隠しだてしようとは思わなかったでしょう。なぜか分かりますかな？」

ぶんぶんとちあきは頭を振った。すると長介は諭すように続ける。「大人は自分で自分の責任を持てますし、持つべきなんです。けれど、まだお嬢さんは子供だからです」

「大人と子供の、何が違うっていうのよ」

「大違いです」長介はぴしゃりと言い放った。「子供は、大人たちが必死で守らなくてはならないものです。だからこそ、変迅堂さんは口止めを頼んだのでしょう」

その言葉を聞いた瞬間、ちあきの中で、何かが弾けた。

怒りとも違う、悲しみとも違う。なんていうか、心の中が全部洪水にさらわれてまっさらになってしまったような、そんな気分だった。ぐわんぐわんと世界が揺れる。目の前にいる長介の顔がゆがむ。そんな中でも、ちあきはずっと考え続ける。

あたし、先生から見れば子供だったの？ 先生にとってあたしって、ガキンチョなわけ？

なんでこんなにそのことが心をかき乱すのか、ちあきには分からない。けれど、分かることが一つだけあった。いろんな思いがちあきの小さな胸の中ではじけまくる。けれど、結局煎じつめれば――。

「なんだか、むかつ腹なんですけど」

「は？」

意外な言葉に、ちあきを除く皆が頓狂な声を上げた。

もう一度、ちあきは言った。

「むかつ腹なんですけど！」

すると、虚を突かれた格好となった長介はププ、と吐息を漏らした。

その笑いをちあきがとがめるてもなお、長介はさらに笑い続けた。ププ、から始まり、くつくつく、に変わり、そして最後にはあつはっは、とまでその笑い声を変えた。

そうやって笑う長介はお道に向いた。

「あー。お道さん。あなたの口から説明してやってください。変迅堂さんたちのこと」

「は？ いいんですか」お道は目を白黒させた。「さっきまで“言わない”の一点張りだったの、長介さんじゃないですか。意味分かりませんよ」

すると、長介はほっほ、と笑う。

「まだまだ、修行が足りませんなあ」

そうお道の肩を叩いて立ち上がった長介は、お道に重ねて言った。

「あとは、あの子たちに協力してやってください。お願いしますね」不承不承を見てとれるような顔を浮かべて、お道は頷いた。

よしよし。

そう呟いた長介は、「奥の部屋で休んでいるから」と言い残し、出口の戸に向かっていった。けれど、何か思うところがあったのか振り返り、ちあきの名を呼んだ。

「何？」

ちよつと機嫌が悪いちあき。そりゃそうだ。さっきから怒ったり泣いたりとくるその感情を変えている。怒りと不安に揺れに揺れ、結局“不機嫌”という位置に立っているのだった。

そんなちあきに秋の日差しのようにさわやかな笑みを向けて、長介は口を開いた。

「いやあ、時が経つのは早いすなあ」

「は？ どういう意味？」

「この前まで子供だと思っていたのに。気づけばあなたも大人になるうとしてるんですなあ」

「ハア？」

思いつきり首をかしげるちあきをよそに、長介はほっほっほ、とウソ臭い笑い声を上げて部屋を後にしてしまった。そうして部屋には四人だけが残された。

「ねえ、アレ、どういうこと？」

ちあきの言葉に、お道はこう答えるしかない。

「……さあ？」

結局、四人の間で「やっぱり長介さんは変わったじじいだ」という結論が共有される羽目になったのだった。まあ、えてして本心を喋らない人間なんて、こういう扱いを受けてしまうのだけれども。

「……と、いうわけなのよ」

お道は自分の知りうるすべての情報を話した。実は、変迅堂の逮捕というのはでっちあげであること。そして変迅堂は仁杉与力とともに、ある事件の下手人を追っていること。だから、変迅堂も仁杉与力も、江戸のどこかにいるということ。

「へえ、なるほどねえ」カツちゃんは両腕を組んだ。「ってことは、俺っちが見たのは、下手人を探してるところだった二人、ってことかい」

「そして」お鶴もカツちゃんの言葉に乗っかる。「私が品川で見たあの二人組も、兄上と変迅堂さんだった、ってことですよね。あの二人を見間違えるはずはないんですよ、私が」

ふふんと胸を張るお鶴。そのお鶴を押しつける形で、ちあきが会話にも割り込む。

「でも、二人はどんな事件を追ってるの？　そもそも、なんであしたちに隠すのよ」

その言葉に頭を振りつつ、お道は答えた。

【3】

「理由は分からないけど、それだけ秘密にしたいような事件なのか、あるいは危険な事件なのか。どっちかだね。巻き込みたくない、つてエならさらにその可能性は高からうかと思うけど」

そのお道の言葉を境に、部屋にどんよりとした空気が広がる。もちろん、その空気のもとにはちあきだ。下を向いて呆けながら、畳をくるくると指ではじく。誰がどう見ても、ヘコんでいる図だ。

あー。

頭をかんざしで搔きながら、やっちまった、とでも言いたげな顔を浮かべるお道は、とりあえず自分の言葉のフォローに回る。

「ま、まあまあ！ まだそうと決まったわけじゃないし！」

「……じゃあ、それ以外の可能性があるっての？」

いつもはボケ娘のくせして、こういうときだけやけに鋭いのだ、ちあきは。

ちあきの言葉に負けそうになるお道。けれど、ここで負けるわけにいかない。むぐぐ、とちあきの言葉を受け止めながら、そのちあきの視線をかわす。けれど、なんだかイライラしてきたお道は、遂にガーンと言葉を吐き捨てる。元々お道さんも、気が短い（上に思慮が浅い）のだ。

「ああもう、むかつ腹！ あんたはもう！」

「何がむかつ腹なの？」

「……そうやってウジウジしてるんじゃ、いつまで経っても状況は変わらないでしょうが！」

その言葉に、ちあきは顔を上げる。

ニヤリと口元を緩ませたお道は続ける。

「ここでいくらウジウジしてたって、変迅堂さんは見つからないでしょうが！ そんなウジウジしている暇があったら、早く立ち上がる！」

そうだ。そういえばそうだ。ちあきは心の中で呟く。こんなところで先生の心配なんかしても始まらない。いくらこんなところで心配したって、あたしの手は絶対に先生に届かない。あたしの声は先生に届かない。なら、こっちから先生を捕まえに行けばいい。それだけのことじゃん！

答えが分かれば、この娘は迅い。

両頬をパン！と景気よく叩いて、顔に潜んでいたウジウジの虫を追いつ出した。そうしてお道に向けられたちあきの顔は、どこまでも屈託のない自信たっぷりの笑顔だった。

「どうしたらいい？ お道さん」

ちあきはお道に聞いた。

ふふん。なぜか鼻を鳴らして笑うお道は答えた。

「決まってるでしょ？ 江戸じゅうから変迅堂さんたちを探すのよ」その言葉に横槍が入る。その横槍の主はカツちゃんだった。

「いや、そりや確かにそうだろうけどヨオ、江戸の街ってなアでかいんだぜ？ 百万人の中から、目的の二人を見つけ出すってエのはかなり至難なんじゃねえのかい？」

「何言ってるのよ」ぴしゃりとお道はカツちゃんの言葉を封じた。

「あんた、昨日、偶然変迅堂さんたちに会ったんでしょが。百万人もいる江戸の街で」

「……ま、まあ、そりやそうだけでも……」

まごうことなき正論に抗うことも出来ずにいるカツちゃんに、お道は追い打ちをかける。

「少なくとも、こうやってダラダラと部屋の中で話をしているよりは、街に出て変迅堂さんを探したほうが見つかる可能性は高い。そういうことよ」

「ってことは」

お鶴が口をはさむ。

「これから私たちがすべきことは一つってことですな」

「はは、この中じゃ、一番お鶴ちゃんが頭いいみたいね」

そう皮肉をかましてから、お道はお鶴の言葉に頷く。

「そう。街に出て変迅堂さんたちを探す。変迅堂さんに会いたいな
ら、そうするのが一番ってこと。手分けで探せば、きっと見つかる
はずでしょ？」

で、でも！　ちあきが声を上げた。

「手分けって言うけど、それじゃ不味くない？」

「どうして」

そうお道に促されるがまま、ちあきは続けた。

「だって、先生を見つけたのがお道さん一人だったりしたら、不味
いんじゃないの？」

けれど、そんなちあきの言葉をお道は笑い飛ばす。

「そんなことないわよ。だって」

「だって？」

「変迅堂さんを見つけた一人が、変迅堂さんを問い質して、文人長
屋に戻ってくるように言えばそれでいいのよ。もし弁が立たないつ
てエなら、首根っこ捕まえて文人長屋に強制送還。それでいいじゃ
ない」

「そっか」

そう。結局そうなのだ。別に、全員で変迅堂を捕まえる必要はな
い。この中の誰かが変迅堂を見つけ出して、説得するなり無理矢理
連れ帰るなりすれば目的は果たされる。ちあきたちの目的はあくま
で、変迅堂を見つけ出すことにあるのだ。

けれど、なんとなく納得いかないちあきはむむむ……、と唸る。

ちなみに、もう一人同じく納得していない奴がいた。お鶴である。
お鶴も顎に指を一本添わせて、「むー……」と唸っている。頭では
分かっているけれど何となく腑に落ちない。そう言いたげに。

そんな乙女二人のことを、お道は笑い飛ばす。

「まあ、お嬢さん方は変迅堂さんを何としても自分の手で見つけた
いんだろうけどね」

そう言われてはじめて、乙女二人は自分の胸の中にあるモヤモヤ

に気付いた。つまるところ、なんとしても自分の手で変迅堂を捕まえたいたのであった。独占欲、ってやつですね。

そして、ちあきもお鶴も、当座の敵にようやく気付いた。ちあきにとつてはお鶴。お鶴にとつてちあきが敵なのだ。

「ふふん、ちあきさん、ここでウジウシしてくれますかね？ 変迅堂さんは私が見つけ出しますから！」

「なにおう！ 先生を探すのはあたしの仕事！ お鶴ちゃんはせいぜいお兄さんでも探さないよ！」

「兄上はいいんです。だったらちあきさんが探してくださいー！」
なんていうか、この期に及んで痴話げんか。しかもその相手は不在。

あー、もう。
バン！

両手で畳を叩いたお道は、ちあきとお鶴を睨みつける。そのお道に気づかないはずもない二人はピンと背筋を伸ばしてお道に向いた。
「はいはい！ 無駄話してる暇はないでしょ！ それより……」
「それより？ なんかあるってエのかイ？」

二人の代わりに訊いたカツちゃんに、お道は少し眉間にしわをよせた顔を向ける。

「うん、もうそろそろ来るはずなんだけどなア……」

「ん、なんのこっちゃ？」

そんなこんな話しているうちに、やがて戸の外がやかましくなった。さつきまではしんと静まり返っていたというのに、なんだかこの屋敷の中に江戸の喧騒が忍び込んでしまったかのようだ。

その声の主は廊下をバタバタと歩きながら、「お道さーん？ お道さーん？」と声を上げている。

うむ？ どつかで聞いたことのある声ねえ。

何となくちあきがそう思っている横で、お道は笑みを浮かべる。

「やつと来た」

「え？」「うへ？」「ハア？」

三者三様の声を上げる三人のことなんか、お道は気にしない。廊下の方に目を向けて、声を上げた。

「こつちこつち！ 遅いわよ！」

「ああ、そつちでやんすか！」

ん？ 「やんす」？

なんとなく、その語尾に聞き覚えのあるちあき。うむむむむーと首をかしげるものの、すんでのところで思い出せない。もうそこまですでにいるんだけど、何となく引つかかるものがあつて思い出せない。そんな感じだ。うむむむむむむ。

そうして首をかしげているちあきをよそに、戸が思いつきり開け放たれた。

「おっ！ いい女発見でやんす！」

「おオ？ どこだどこだ！」

男二人のバカな会話が江戸の往来で響く。バカだ、バカすぎる。何というか、ノリがどこかの商人のドラ息子だ。昔からバカだバカだとは思っていたけれど、これほどとは……。ちあきはなんとなくうなだれる。

「はあーあ」

そして、深い深いため息をついた。そのため息は秋風吹き荒れる江戸の空に溶けてゆく。道を歩く誰もが、冬の足音をひそませる風に身を縮ませながら行く手を急ぐ。もちろんそれはちあきたちも例外ではない。背中を撫ぜる冷たい風に追い立てられるようにして往來を急ぐ。

けれど、横を歩くカツちゃんはちあきのため息に茶々を入れる。

「おいおいちあつちゃん、そうやってため息ついていると、幸せが逃げるぜ？」

その言葉に、肩をすばませながら歩くちあきが思い切りかみつく。

【4】

「やかましい！ あんまりにもバカな話をしてるあんたたちのせいよ！ それに、すつごく寒いんだからしょうがないでしょ！」

そうなのだ。今日はとてつもなく寒い。

昨日の雨から打って変わってかんかん太陽が輝いてはいるのだけれど、空には雲ひとつない。冬空のように曇り一つない空。そして、あたりに立ちこめている湿気のせいで、太陽の光が熱に変わらない。湖の底のような、ひどく静かで冷たい空気が江戸の街に立ちこめている。

「はっはっは、そういう時期なんだからしょうがないでやんしょ？」

二人の後ろからあっけらかんとした声が届く。

「もう十月でやんすよ？ 滝野川の紅葉も見ごろだつて話でやんす。

紅葉の見ごたえのある時期は、寒いってエのが当り前でやんすよ」

そんな言葉に、ちあきはキー！ と癩癩かんしゃくを起こす。

「うるさいうるさい！ いくら寒い季節だからって寒いのはヤダ！

つつか」

ちあきは思いつき振り返る。

「どうしてあたしたち、助平さんについていけないとまらないのよ！」

「あの、お嬢さん！ あっしは助平じゃなくつて助八！ 何度言えは分かるんでやんすか！？」

そう。ちあきたちと歩いていた三人目。それは文人長屋の情報屋・助八なのだった。

その助八、ちあきたちの後ろで鼻のかしらを大きくしながら不満げに口をゆがめる。

「そもそもあつしだって、こんなことをしてる暇はないでやんすよ。なのに、お道さんときたらもう！ あつしのことを暇だと思ってるでやんすね！」

ぶりぶりとする助八を見つめながら、“ああ、お道さんと一緒だったらどんなに楽しかったろう……”とふと思うちあきなのだった。

さつき、長介さんの家にやってきたのはこの助八だった。どうやらお道さんに呼ばれていたらしい。戸をあけて部屋に入ってくるなり、「お道さん、何か用でやんすか？　大家さんの家に来いとはまた、変な注文でやんすな」と一方的にまくしたててきた。

そんな助八に、お道は言った。「ちよつとさ、この子たちの人探しに協力してよ」。最初助八は明らかに面倒そうな顔を浮かべた。けれど、それに気付いたお道がにこりと微笑みながら拳骨を作ったのが功を奏したのか、助八に「へい……、手伝いますです……」とまで言わせるに至った。

そして、お道の采配によってお鶴がお道と組み、ちあきとカツちゃん助八と組むこととなり、変迅堂を探す運びとなったのだった。助八のことを背中越しに盗み見ながら、“うわあ、お道さんについて行った方が絶対にうまくいくに違いないのになあ”と心の中で毒づくちあき。子供であるちあきの目から見ても、助八という大人はふわふわしていて頼りがいが無い。往来のあつちやこつちを見回しながら、「おつ、いい女発見でやんす！」とか叫んでる大人、誰が見ても口クでもなく映るのは当り前だけれども。そして、そんなダメな大人に追隨する幼馴染というヤツにも殺意めいたものを感じる今日この頃なのだった。

そんなわけで、ちあきのため息は深い。
と――。

「あ、そうでやんした」

往来のいい女探しに飽きたのか、助八がぼんと手を叩いた。ちあきはそんな助八にじとつとした目を向ける。

「なんだつてのよスケベ！」

「なんでやんすか、そのじとつとした目は……、一般に言うケーベツのまなざしってやつでやんすか？　それにスケベじゃなくて助八！　って、今、本当にスケベって意味でスケベって言ったでやんし

よ！！ きー！」

「なによ、さつきから鼻の下伸ばしまくりのバカに言われたくないですー！」

「男はそういうもんなんでやんす！」

「きー、スケベー！ ハゲ！」

なんていうか、ただの罵りになってるちあきの言葉。そこに割り込む形でカツちゃんが口をはさむ。

「まあまあ……つつか、助八の兄ィ、どうしたんでエ？」

いつの間にか助八のことを“兄ィ”とか呼んでるカツちゃん。殺意がわからないでもないちあきだったけれど、とりあえず捨て置くことにする。

カツちゃんの言葉に促されるように、助八は口を開く。

「ああ、実はちよつと顔を出したいところがあるんでやんす」

「顔を出したいところ？」

「うん、ちよつと」と、ちよつと二ヒルに助八は言葉を継ぐ。「野暮用でやんす」

さて、そう二ヒルに言葉を放った助八だったけれど、次の瞬間には顔を真っ青にする羽目になった。なぜかと言えば、それはもちろんちあきのせいである。

助八に向かって振り返るちあき。さながら見返り美人のような立ち姿だ。けれど、その顔はあの名画と比べるべくもない。顔の彫りを普段比二百%（当社比）にして見返る様に、とてもうなじのきれいさを愛でることなんてできない。ただ、猛獣を前にして凍りつくうさぎの如く、がくがくぶるぶるするしかない。

けれど助八、なかなか豪の者である。声を震わせながらもなんとか声をひねり出した。

「え、ええと、なんでやんしょ……？」

その瞬間、ちあきはニコリと微笑んだ。けれど、さつきまでのあの顔のせいで、その笑顔すらも怖い。

びくんと身を仰け反らせる助八を笑顔で見下しながら、ちあきは

口を開く。

「おい、助八」

うわア、もう「スケベ」なんて冗談を言わないよ、ちあき。ただならぬものを感じたのだろう、額から汗をダラダラ流しながら、助八は震える声で答える。

「は、はい、なんでしょ」

がし。

ちあき、右手を助八の首にあてがう。そのまま、ベアクローの要領で助八の細頸を絞めにかかる。もちろん、ちあきのベアクローを食らって無事なはずはない。

「うぐ、うぐぐぐぐ！」

顔を青くしながら、立ちつくす助八。彼岸に飛ばされる寸前の助八の横で、その助八に負けなくらいに青い顔をしているカツちゃん。

ちあきはそんな二人を舐めまわすようにして睨んだ。

「二人ともさ」

ちあきの言葉は、さながら地獄の底に響く悪鬼の呻きのようだった。その声におびえる二人を尻目に、ちあきは続けた。

「先生を探す気ないでしょ？ うん、分かる分かる。さっきから女の人のケツばかり見てることくらい、あたしだってわかる。うん、いいんだよ別に。でもイワす。つつか。す」

ちよつと待ってちあきちゃん！ 江戸の往来の真中で、殺人予告なんてしないでちょうだい！

ヒイヒイヒイ！

二人はいよいよビビりを超え、命の危険まで感じ始めたのだった。カツちゃんなど、尻もちをついて後ずさり始めている。そもそもがちあきとの付き合いが長いので、本気で怒らせたらどうなるか、カツちゃんには痛いほどよくわかる。っていうか、体がすっかり覚えてる。マジでキレたちあきの正拳突き的威力を知っているからこそその尻もちなのです。

けれど、ここで踏ん張ったのは助八であつた。首を締め上げられながらも心は折れていない。出がらしになりかけている声を、なんとかひねり出した。

「四半刻！ 四半刻もあれば十分でやんす！」

「四半刻？」

現代で言えば三十分。しかも、この時期は秋分を過ぎているから、もう昼間の一刻が短くなっている。四半刻といつても、現在の定時法に直せば二十分くらいだろう。

ちよつとちあきの心が揺れる。ぐいつと助八を手繰り寄せながら、マジメンチをきめる。

「本当に四半刻？」

青い顔をしながら、助八は応じる。

「……ほほほ、ホントでやんす！」

「もし四半刻を過ぎたらイワすけど？ つつか。すけど？」

「——四半刻なんてかからないでやんす！」

そう言うや、ちあきは助八の首にかかつていた手を外した。すると助八は先に尻もちをついていたカツちゃんの横にどさりと落ちて、えほっえほっ！ と苦しそうな咳を何度もついた。

けれど、ちあきはそんな二人に何の斟酌も与えない。顎で立つように促しながら、ちあきは言った。

「ほら、助八さん。早く行こ」

案外言葉尻が優しくなっていた。

おやおや、もしや、怒るだけ怒って機嫌が治ったのかしらん。そう助八もカツちゃんも当たりをつけるほどだった。けれど、その希望的観測は外れのようなだった。

ちあきは続けた。

「つてか、もう数え始めてるからね」

「な、何をでやんすか」

「もしや……。助八とカツちゃんは顔を見合わせる。」

まあ、もしやもやしもないわけですけども。

にっこりと微笑みながら、ちあきは続けた。

【5】

「決まってるじゃん、四半刻のや・く・そ・く。……ほんの少しでも時間をはみ出したら、。すからね？」

ヒイヒイヒイ！！

なんて邪悪な靈波動！　なんて邪悪なる意思！　ちあきの背後に何か常ならざるものを垣間見てしまったような気がしたのは、助八だけではなかった。カツちゃんまでも、齒をがち言わせ始めた。そして。

「わわわ、わかりやしたでやんす〜！」

「兄イ！　早く行こう！　早く行からいでか！」

男二人は何かに急きたてられるようにして、ドバビュンと江戸の街を駆けだした。

ふん。まったく。ケツを叩いてやらないとダメなのよねー、男って。

なんだか、お前は結婚二十年目の主婦かと突っ込みたくなるようなモノローグを浮かべたちあきは、二人の後をスキップ（のような運足）交じりの軽やかな足取りにて追いかけるのだった。

そうして江戸の街を駆けること少しして、助八が足を止めたのは一軒のお屋敷だった。日本橋から歩けば四半刻ほどの距離にありながら、町並みは日本橋と比べるべくもない。江戸のビバリーヒルズ・日本橋。けれどそこから一本道を隔ててしまえば、江戸によく見られる長屋街が続いている。そんな江戸のどこにでも見られるような街並みの合間に、その建物はポツンと建っていた。どこか場違いなたたずまいを湛えながら、その建物の門はでんと立ちつくしていた。

「はあはあ、ここでやんす、ここでやんす……」

ぜいぜいと肩で息をしながら、助八は二人に向かい言葉を放つ。

「ヒイヒイ……、ずいぶんと、マア、立派な建物だなあや……うつ

ぶ

カッちゃんも肩で息をしながら応じる。

けれど、ちあきは全く動じていない。

「つてか、ここ何？ どこ？」

「はあはあ……なんでお嬢さん、全然息切れしてないんでやんすか？」

「決まってるじゃん、気合よ気合！」

満面の笑みをたたえるちあきに、ただ助八は啞然とするばかりだった。

まあ、実はちあきが息切れしていないのにはちゃんとした理由がある。至極簡単な話で、いつもちあきはお鶴と猛レースを繰り広げていて、少し走ったくらいじゃ息切れなんかしないのである。

そんなひょうひょうとしたちあきは、まだ肩で息をしている助八に訊く。

「で、ここは何？」

ここでやんすか？ 息を整えてから、助八は答える。

「ここはお医者様でやんす」

「お医者？ ああ、助平を治してもらおうつての？」

「もういい加減、助平から離れてほしいでやんす！」

ぷりぷりと怒る助八に助け船を出したのはカッちゃんだった。ちあきと助八の間に入って、ちよつと取りなす。

「まあまあ二人とも……、それより兄イ、こんなところに何の用なんでエ？」

「マア二人とも、黙ってついてくるでやんす」

そうニヒルに言い放った助八は、ひょいっと門の敷居を飛び越えた。ちあきたちも後に続く。

門の中に広がっていた景色は、思いのほかのんびりとしていた。白っぽい浴衣のような服を着ているおばあさんは、縁側にちよこんと座って日向ぼっこをしている。またおばあさんと同じような服を着ている若い人は、庭にある木の枝をパチパチハサミで切り落とし

ていた。数人の子供たちはおそろいの白い服を着て、やいのやいのと騒ぎながら追いかけていた。けれど、その誰もが何となく顔色が優れない。だれ一人として頬に赤がさしていない。

ゆつくりと時間が流れるような錯覚に襲われつつも、ちあきは前を歩く助八に訊く。

「ねえ、あの人たちは——」

「ああ、このお医者様のお世話になっている人たちでやんす」

「へ、ってことはあの人たち、病人さんなの？ 寝てなくていいの？」

「……それは、素人の考えることという奴だなア」

そんなちあきの言葉に答えたのは助八ではなかった。もちろんカツちゃんの声でもない。カツちゃんのそれにしては少しその声には年嵩が感じられた。

ちあきは思わず声の方に振り返る。

庭に張り出している縁側に男が立っていた。手ぬぐいをほっかむりにして被り、黒っぽい粗末な着物をまとっている。大きな上背と熊のようないかつい顔立ちは、何となく乱暴そうな印象を受ける。

なにも言えずにいると、その男は口を開いた。

「病人つてエのはな、あんまり寝ていちゃいけねえ。もちろん、ある程度治すためには寝ていることも大事だが、病気を根治させるためにはむしろあやうって動いて体に喝を入れてやるのがいい」

ようやく助八がその男を紹介した。

「ああ、ここのお医者様でやんす」

すると、その男——お医者様——はどこか怖そうだった顔を緩めた。すると、さっきまで感じていた乱暴そうな印象はすっかり鳴りを潜めた。

「おう、助八じゃねえか！ ……悪いが、今日は何にもネタはねえぞ」

ぐわしぐわしと助八の頭を乱暴に撫でながら、お医者様は言う。けれど、その言葉に助八は笑って応じた。

「いやいや、そつかア、それは残念でやんす」

なんとなく、助八の言葉はわざとらしくった。それは、言葉に全く感情が乗っていないからだろうか。

すると、その意味を察したのか、お医者様はカラカラと笑った。

「あ、てめえさては」

「な、なんでやんすか」

「最近うちで世話してる、お武家さんの細君殿、あれに会いにきてやがるな!？」

お武家さんの細君殿？

ちあきが首をかしげる横で、助八は顔を柿のように真っ赤にして反論する。

「い、いや! 違う、違うでやんす!」

いよいよ、お医者様は満面の笑みを浮かべた。

「はっはっは、まあそう言っなイ! おめえとは付き合いが長いんでエ! いい加減おめえの考えそうなことはお見通しだアな! でもヨオ」

「なんでやんすか」

「おめえ、道ならぬ道に好き好んで入ることはねえんじゃねえか?」

「ぎくぎくっ!」

「分かりやすい奴だねエ」

ため息をついてそう苦笑いを浮かべるや、お医者様はちあきたちに怪訝な目を向けた。そして、ちよいと首をかしげながら助八に訊く。

「おいおい、誰だイ? この子たちは」

「まあ、話すと面倒でやんすから、割愛させてくれやんす」

「まあ、いいけどよ」

ぶっきらばうに首元を撫でるお医者様は、面倒そうな顔をちあきたちに向けた。ちあきもカツちゃんも、どういつ顔を浮かべたらいのかわからずに、ただぎこちない頬笑みを浮かべるばかりだった。そんなちあきたちの心中をとるかすかのように、お医者様はにつこ

りと頬をほころばせた。きつとこのお医者様は、自分のいかつい顔を理解しきっているのだろう。

「おう、少年少女！ この助八ってエのはロクなもんじゃない。いずれ百叩きにあつて江戸から追放されちまう口の奴だからな、気をつけるよ！」

お医者様の軽口のおかげで、ようやくちあきにも元の元気が戻る。「ええ、もっちろん！」

がつくし。助八がズッコケたのは言うまでもない。

ふふん。そう笑うお医者様は手をひらひらとやりながら、奥に歩いて行つてしまった。「今日は忙しいんでエ。いや、医者に休みはねえんだ」と声を上げながら。そうしてお医者様は廊下の奥に消えてしまった。

その背中を目で追いながら、カツちゃんは呟く。

「なんだかまあ、イヤミな人だなアや」

「全く全く」

そう苦々しげに言いながらも、なぜか助八はちよつと恥ずかしそうにして笑っていた。まるで、親友を目の前で褒められているときみたいな笑い方だった。

「と」

そうやって笑っていた助八だったけれど、はたとその表情を引っ込めた。

「ああ、行くでやんすよ。時間が無いんでやんすから」

その言葉を合図にして、三人はまた庭を歩き出した。庭に敷き詰められてある白い玉砂利の音を聞きながらぐりと建物を回ると、奥に勝手口のような引き戸があつた。そこらへんの木切れで作られたような引き戸を開けると、中からひんやりとした空気が外に漏れてくる。三和土特有のひんやりとした空気。そこは台所だった。

助八は全くひるむ様子なく、三和土に足を踏み入れる。いつもはよくしゃべる助八なのに、全く言葉を放つ様子が無い。まるでこの三和土の作り出す静寂を壊さないようにしているかのようにだった。

なんとなく足を踏み入れることが出来ずにいると、助八が振り返った。

「さ、早くするでやんす」

【6】

その言葉に追い立てられるようにして、ちあきたちも助八に続いた。

屋敷の中のくねくねとした中廊下。しんと静まり返った廊下を抜けた先に、ちよつと開いた襖から光が漏れている一角に差し当たった。

何もちあきたちに言わず、助八はその襖を開けた。

その襖の奥は、六畳ほどの部屋だった。違い棚に床の間。縁側に面していて、庭の様子がよく見えた。よくよく見れば、さつきあきたちが見てきた庭の風景が、この部屋から望めたのだった。そして、その部屋の真ん中には布団が敷かれていて、そこには人が一人伏せていた。

その人の枕元に、助八はゆっくりと座った。ちあきたちは、その助八の後ろに同じく座る。

女のひと。しかもひどくきれいな人だった。透き通るような白い肌。地黒女は江戸美人とはいっても、その白磁めいた白さは息をつかせるような魅力が隠れていた。形のいい唇。目から鼻にかけての形。どこをどう見ても、どこをどう切り取っても、この人は美人のそれだ。

はあ、すげえきれいな人……。

ちあきでさえ、心の中でそう呟くほどだった。

ちなみにカツちゃんなど、顔を真っ赤にして鼻の下を伸ばしていたのだけれど、ちあきがそれに気づくことはなかった。よかったね、カツちゃん。これ以上株を落とさなくて。

人の気配に気づいたのか、そうやって伏せていた女の方は、閉じていた目をぱつちりと開いた。瑠璃色の光彩を助八に向けて、すくりと上体を起こそうとした。けれど、すかさず助八が手で咎める。すると、女の方は布団から手を出して小刻みに振った。

「いえ、いいんです」

うわあ、声までも美人。思わずちあき、そう心の中で舌を巻く。鈴の音のような、とか、歌うような、とか、声の美しさを褒める言葉はいくらでもある。けれど、この女の人の声はそんな取り澄ました言葉では語れないような艶があった。

その艶にどきどきするちあきを尻目に、女の人は続ける。

「もう、体はいいんです。けれど、なんだか気が滅入ってしまったて先生からは、“日の光を浴びるように”と言われているんですけどね」

助八は首を振る。

「いや、伏せりたいときにはいくらでも伏せればいいでやんすよ。あの医者、随分と乱暴なところがあるんでやんすから、お岩さんもお気をつけくださりやす」

「ふふ」

本当に面白そうに、“お岩さん”と呼ばれた女の人は笑った。

けれど、やがてお岩さんは、後ろに座るちあきたちに気付いた。

「あれ、そちらのお嬢さま方は？」

「ああ、ちよつと預かっているだけの子らでやんす。どうも長屋の連中に押し付けられてしまったみたいでやんす。本当はこんな子供たちの相手なんてしていたくないんでやんすけど」

な、なにおう！？

思わず拳骨を作っていたちあきだったけれど、その手を振り出すのがためらわれてしまった。

それはあまりにも、助八の顔が真面目くさっていたからだろうか。「で、お岩さん」ちあきになど一瞥もくれず、助八は続ける。「具合はいかがでやんすか？」

「なんとかおかげさまで。……もう、体の方は随分といいんです」ほんと上掛け布団に置かれた手が、少しだけ震えた。ほっそりとした指。けれど骨ばつてもいない手。けれど、掌は傍から見ても分かるくらいにアカ切れしていた。

「……で、イエモンさんはいかなすってるんでやんすか。まだ、働いたら負け」とか言つて、遊び回っているんでやんすか？」

「ええ、そのことなんですけど」

お岩さんはゆっくりと話し出した。

「最近、さる家中からお呼ばれがあつたみたいで、その家中で仕事をしている、とのことですよ」

「はあ、仕事が見つかったんでやんすか」

お祝い事にもかかわらず、何となく呆けたような顔を作る助八。けれど、それは助八だけではなかった。お岩さんも、どこか浮かない顔をして助八を見ていた。その視線に気づいた助八は、あ、と呟いて首をブンブン振り、頭をぱりぱりと掻いた。

「……なんか、あつたんでやんすか」

「いえ、そういうことじゃあ」

「お岩さん、何でも言つてくれて結構でやんすよ。何せおいらはイエモンさんたちに助けてもらったようなものでやんすから！」

どん！ と小さな胸を叩く助八。

そんなけなげな助八に、お岩さんはちょこんとこうべを垂れた。

「いつも、ありがとうございます」

なんとない二人の会話。

けれど、その会話には、二人にしか分かりえない何か横たわっているようだった。ちあきもカツちゃんも、ただ正座をしてその様を見つめているしかなかった。ピリピリと足が痛くなつてもなお、ただ二人の憤ましやかな会話に耳をそばだてるしかない。

あー、なるほど。

ちあきはクスリと笑つて頬を掻いた。

「いやあ、済まないでやんす」

医者小屋敷からお暇して、大通りに出たところで助八は頭を下げた。ひょうきんめいたいつもの顔立ちからは想像できないほど、助八はすがすがしい顔をしていた。

当然、気にならないはずはない。

「なあ、兄イ」

カツちゃんが声を上げた。

「あのお岩さん……だっけか？ あれ、兄イとどういう関係なんでエ？」

はは。少し苦笑いを浮かべながら、助八はカツちゃんの言葉に応じる。

「ああ、あの人は……」

助八の言うところはこうだった。

まだまだ助八が情報屋の駆け出しだった頃、数年前のこと。ともかく助八は貧乏だった。瓦版の売れ方でその稼ぎが決まってしまうこの稼業、慣れるまでは結構大変だったんでやんす、とは助八の弁ともかくも、その頃の助八はその例にもれず、とんでもない貧乏暮らしをしていたのだという。粗末、どころか屋根さえあるかも怪しい長屋で暮らし、いわし一匹で三日を乗り切ったこともあったらしい。

そんな頃……。

「あのお岩さんの旦那、イエモンさんと出会ったんでやんす」

出会いは偶然のことだったらしい。たまたま裏路地で野犬に絡まれて困っていたところ、一緒になって追いつけたのがそのイエモンさんだった、とのことだった。颯爽と一刀のもとに追い払ってくれたなら絵になったのに、とため息をつきながら、その時の様を助八はこう語った。「だってイエモンさん、助けに入ってくれたまではいいでやんすけど、ダンビラを振り回しても犬に負けそうでやんすもん。めっちゃくちやかっこ悪かったでやんす」。まあ、確かに想像するにかっこ悪い。「ほら、犬ども、そっちいけ、しっしっ！」とか言いながら刀を振り回す侍。しかも犬に負けそうになっているなんて。

まあ、出会いはなんてどうでもいいでやんす。

そう言いたげに頭を振ってから、さらに助八は言葉を募る。

人の縁とは分らない。一緒に傷をこさえながら野犬を追い払ったのが縁で、なんとなくイエモンさんとの付き合いが始まり、そしてその奥さんであるお岩さんとも付き合いが始まったのだという。

「へえ、ってえことはアレですか。お岩さんってえのは、そのイエモンさんの奥さんってエことですかい」

「……そうでやんす」

ふむふむと頷くカツちゃんをよそに、助八は続ける。

そうやって行き来が始まれば、当然お互いに悩みを聞くようになつたりして、どんどん加速度的に仲良くなつてゆくもので。イエモンさんと助八もその例に漏れなかった。そうやってある日、助八は一番奥にある悩みをイエモンさんに打ち明けたのだった。

「一番深い悩み？」

ちあきの問いに、助八は言う。

「まあ、簡単でやんす。“売りたい”。それだけでやんす。……こう言つちやアレでやんすけど、情報屋なんて商売に手を染めるやつなんざ、そもそもがロクでもない人間なんでやんすよ。真面目に働くのが嫌か、あるいは大金をせしめたいか。どっちかってエのは相場が決まつてるんでやんす」

そして、あつしは金が欲しい口だったんでやんす。そう助八は口にした。

そのまま、ありのままをイエモンさんに打ち明けた。そして全て打ち明けてしまつてから、しまった、そう思つたらしい。真面目に働くのがイヤにせよ、大金をせしめたいにせよ、当時の徳目で言えば軽べつされてもおかしくないような言い分だ。

けれど、そんな助八に、イエモンさんは言った。

『まあ、そうだよな。楽して稼ぎたいし、金も欲しいよな。だってら助八、お前、武士にでもなつたらどうだ？ 武士は楽だぞ？ 出世さえ望まなければ、それなりに暮らせる。……あんまり面白くないが』

【7】

滅相もない。そう首を横に振ると、イエモンさんはこんなことを言い出したのだという。

『なら、俺をネタにすればいい』

は？ 旦那を？ 最初助八はいぶかしんだ。それはそうだ。正直なところ、イエモンさんはどこにでもいるような浪人の端くれではない。そんなどこにでもいる浪人など、瓦版のネタになるはずもない。それに、助八からすれば、知り合いを瓦版のネタにするなど以ての外だった。

「へえ、あんたにそんな甲斐性があるなんてね」

皮肉交じりのちあきの言葉に気色ばむ助八。

「当り前でやんす！ お嬢さんだってそうでやんしょ？ 如何に自分が困っているからって、友達をダシに使うことなんてしないでやんしょ？」

助八の言葉には、普段の彼にはない強い響きがあった。へらへらと笑っているいつもの助八とは何かが違った。それがイエモンさんへの思いの裏返しであることに気付いたちあきはちよこんと頭を下げた。すると、ちよいと頷いて、さらに助八は続けた。

“自分をネタにすればいい”。そんなイエモンさんの言い分を、最初助八は拒否した。“ネタになんてならないでやんすし、絶対にネタにしないでやんす！”と。けれど、イエモンさんも譲らなかつた。“なに、ネタならどうにでもなるだろ。「仕官したら負けだと思っている負け犬浪人がいる」なんていうのでどうだ？”と。

「その話を聞いた時、いける、って思ったんでやんすよ」と、助八「確かに、あの惹句はとてつもなく魅力的だったんでやんすよ。確かに面白いネタになりそうだったんでやんす」

けれど、それでも、納得できないものが胸の内に残っていた。そんな助八の背中を押すようにして、イエモンさんは続けた。“これ

は、俺を助けることになるんだ」と。

『なら、こうしよう。このネタで稼いだ金の一割を俺に出来ないか？ 情報提供者への返礼ってことで。そうすれば、お互いに納得じゃないか』

そこまで言われてしまつては、もう断ることもできなかった。結局助八はその話を版元に持つて帰り、事実瓦版のネタとした。

そして、その瓦版の売れ行きが良かったことが、現在の助八が情報屋として成功を掴んだきっかけとなっているのだった。

ふう。

ため息をついた助八は、空を眺めた。

「まあ、今、あつしがこうして表を歩いてられるのも、あの夫婦のおかげなんでやんす」

「うんうん、そうだよなあ。なんだか、前が見えねえ……」

なんだか知らないけど、カツちゃん、両眼に涙をためてうんうんと呟いていた。平均的江戸っ子であるカツちゃん、この手の人情ものに弱いのである。

そんなカツちゃんに聞こえないように、ちあきは助八の耳に手で衝立を作つて、そつと聞いた。

「ウソ、ついてるよね、助八さん」

「な、何がでやんす」

がっしりと助八の肩を掴んで、ちあきは続ける。

「うん、なんだか解ぜないのよねー。確かにそれなら、イエモンさんへの思いは分かるんだけど、どうして奥さんにまでその気持ちに向くわけ？ なんで奥さんのお見舞いにまで行くわけ？」

ぎくぎく！

思いつきり肩を震わせる助八だったけれど、それでも何とか言い逃れしようと言葉を募る。

「いや、子供には分からない大人の事情つてものがでやんすね……」
するとちあき、助八を掴んでいる両手に力を込め始めた。めきや、ごりごり。まるで万力で締め上げられているかのような音。助八、

声も出ない。

「ちよつと助八さん、あたしの推理、聞いてくれる？」

「ははは、はい……」

ぶくぶくと口から泡を立てる助八を尻目に、ちあきは不敵な笑みを浮かべつつ続ける。

「ってか単純明快。助八さん、あのお岩さんのこと、好きなんでしょ」

ぎくぎくり！

明らかにあわて始める助八。ちあきの手から逃れようともしがく。けれど、ちあきがそれを許すわけもない。満面の笑みをたたえたまま、ちあきは短く言い放った。

「凶星、だね」

「……」

最初、何も言わなかった助八だったけれど、言い逃れもできないと思つたのか、こくりと頷いた。そして頷いてから、タガでも外れたように、助八は顔を真っ赤にした。

「ああもう！ 煮るなり焼くなり好きにすればいいでやんす！ つうか、嗤いたければ嗤うがいいでやんす！」

けれど、ちあきは不意に、満面の笑みを引つ込めた。すうつと笑みが消えた後に残つたのは、憐みにも、あるいは悲しみにも似たさびしそうな目だった。

「嗤わないよ。けど、代わりに訊きたいことがあるんだけど」

なぜかちあき、声まで沈んでいた。

「……なんでやんすか」

ちあきの変化を感じ取つた助八も、声をひそませた。

「それってさ、すんごくキツくない？」

助八は何も答えなかった。首を動かすことさえしなかった。けれど、その顔は答えを物語っていた。

キツくないはずはないのだ。好きな相手が既に結婚していて、しかもその相手は知り合い。しかも、助八の語りぶりから察するに、

友達と呼んでも差し支えない間柄だろう。友達の奥さんを好きになつてしまった。その恋を通そうとすれば角が立つ。さりとて諦めるには意気地がない。そうしてウダウダと過ごすうちに、こうやって二人のために心を砕く日々に至つてしまったのだろう。

ちあきだつて、もうガキではない。多少なりとも助八のそんな現状が透けて見えていた。

はあ。

ちあきはため息をついた。

「うん、分かる。分かるよ、何となく。だつて——」

あたしだつて似たようなもんだし。その言葉が、どうしても出なかった。

届きそうで届かない距離。一言で言えば、それだけ。けれど、ちあきとその思い人の間には、それ以上の隔絶がある。年齢もそうだし、今のご身分だつてそう。けれど何より、ちあきは“子供”で、あの人は“大人”なのだ。その柵を破らない限り、きっとちあきの手はあの人に届かない。

けれど、何となく察するものがあつたのだろう。助八はゆっくりと頷いて、ひよいと前を向いた。

「……行くでやんすか。変迅堂さんを探しに」

「あ、でも」

「でも、なんでやんす？ 変迅堂さんを探すのは、むしろお嬢さんからすれば願つたりでやんしょう？」

「でも……」

ちあきの頭の中には、色々な疑問が頭をめぐっていた。あんたはそれでいいの？ 今のまんまで。こんな、生殺しみたいな状態で。

そのちあきの心の言葉を読みとつたかのように、助八は笑つて振り返る。実に痛々しい笑顔をしていた。けれど、その笑顔は一瞬のこと、すぐにいつもの屈託のない笑みに戻る。

「そういうもんなんでやんす」

「……そう」

そういうもん。そう言われてしまえば、反論するすべなどどこにもない。ちあきは何も言えずに、歩き出した助八の後を追うしかなかった。

一方その頃――。

「うつわあ、お道さん、私、お道さんについてきて本当に良かったですー！」

普段になくコーフン気味なお鶴の口をお道はとっさに塞ぐ。

「ちょ、お嬢ちゃん！ ばれたらどうするの！」

もごもごとうるさいお鶴をなだめながら、お道は暗い裏路地から大通りを覗き見る。けれど、誰もお道たちに気づく様子はない。ほとと溜息をついて、ゆつくりとお鶴の口から手を離す。

「ぶつはあ！ って、何するんですか！ 窒息しちゃうかと思いましたが！」

「あのねえ、せっかく百万都市江戸で探し人を見つけたっていうのに、取り逃がしたくないでしょ！」

「それはそうですけど――」

お鶴もひょいっと裏路地から顔を出す。わずか五間ほど先に目的の人がいるのに、全く手が出せないでいるこの状況が、なんだか腹立たしかった。その苛立ちはお道に向かうのも無理からぬことで。

「だって、あんな近くに変迅堂さんがいるんですよ！ …… ついでに兄上も」

そう。わずか五間先の茶屋に、変迅堂を見つけたのであった。…

…あと、ついでに仁杉与力も。

それは変迅堂搜索を始めて四半刻も経たぬうちのことだった。お道と組んで変迅堂搜索に出たはいいけれど、結局何の手がかりもない。“こうなったらシラミつぶしだわね”というお道の言葉にうんざりとするのは人情というものだろう。ふと、甘味処に目が行ってしまっても、それは無理からぬことだろう。と、そうやって視線

を泳がせたお鶴の目に、店先の長椅子にてシャーシャーと茶とお団子をしばいている二人が目に入ったという次第だったのである。

最初、“突撃しよう”とお鶴は息まいた。けれど、それをお道は止めた。“ここで焦って二人を逃がしたりしたら面倒だから、ここは様子を見ましょう”と。

そうして約四半刻の間、甘味処から五間ほど離れた裏路地から、張り込みを敢行しているのであった。

けれど、張り込みという奴はかなりご無体な仕事だ。かたや裏路地で息をひそめながら気を張り詰めていなくてはならない。けれど、張り込まれている側はシャーシャーと茶をしばきながら、時折ハツハツハ、と談笑をしている始末。南向きの甘味処の店先は、かなり暖かそうだ。けれど、裏路地はイヤに冷える。昨日の雨によって出来た水たまりが残っている。それがまた寒さに拍車をかける。うむむむむ。

ちよつと齒噛みしながら、お鶴は恨めしげな眼を表通りに向ける。「兄上ったら！ 変迅堂さんとあんなに楽しそうに……」

「まあまあ……。きつとそのうち動くから……。ん？」

お道は短く声を上げた。思わず声が出そうになるお鶴の言葉を手で制す。

変迅堂たちが動いた。

長椅子から腰を上げた二人は、奥に声をかけていた。すると奥から出てきた甘味処の店主に、仁杉は何かを渡した。おそらくはお勘定をしているのだろう。一方の変迅堂はパンパンと下半身を叩いて笑顔で仁杉に頭を下げていた。仁杉は頭を振って、向こうを指で差した。その仁杉の指に従うようにして、二人は大路地の流れに乗った。

「さ、動いたみたいだね。……追うわよ！」

「は、はい！」

お道に続いてお鶴も大路地に出る。そして、お道の後ろを歩く。

変迅堂たちは、一定の歩幅で歩いている。そのあとを、お道たちも五間ほど距離を取って追う。お道に何か声をかけようとしたお鶴だったけれど、そうして覗き込んだ顔があまりに鬼気迫るものがあったて、声をかけそびれてしまった。

そんなお鶴、一人考える。

変迅堂さんたち、どこに行く気なんだろう？ それにそもそも、なんで“逮捕した”なんて嘘をつく必要が？

その理由がまさか自分たちにあるとは知らないお鶴、うむむむ、と唸った。

と――。

そうやって考え事をしているお鶴の眼前は、いつの間にかお道の背中であいつぱいになっていた。

「うっぷす！」

突然足を止めたお道の背中に思い切り顔をめり込ませる格好になったお鶴は、のろのろと鼻のかしらを撫でながらお道を覗き込む。

「あのう、お道さん、止まるときには止まるって言って下さいよ」けれど、お道はそんなこと聞いていなかった。厳しい顔をして、ただ前を見つめていた。

何となくただならぬものを感じて重ねて聞くと、ああ、と声を上げてお道は口を開いた。

「あいつら、裏路地に入っちゃった」

「裏路地に？ それが何か不味いんですか？」

「不味いのなんのって」お道は眉間にしわを寄せながら続ける。「大通りならこうやって簡単に尾行できたけど、裏路地となるとそうはいかないのよ」

表通りの尾行なら、人ごみに紛れることができるからさして難しくない。それに周りが騒がしいからちよつとやさつとでは尾行に気づかれない。けれど、人の数がぐつと減る裏通りとなると、仮に音を立ててしまっただけでも尾行に気づかれる恐れがあるし、身を隠す必要だって出てくる。

「わかる？ 素人さんにはちょっとキツイ仕事ってわけ」

そのお道の言葉に、お鶴は首をかしげる。

「どうでもいいですけど、その言い方、まるでお道さんが尾行の玄人みたいな言い方ですよ」

「そんなことはどうでもよろしい！」お道は裏路地に目を向ける。

「で、どうする？ 尾行、続ける？」

そのお道の視線に促されるようにして、お鶴もまた視線を裏路地の入口に向ける。昼間だというのに暗い裏路地の入口は、異界の化け物のようにぽっかりと口を空けていた。

けれど、ここで「追わない」なんて選択肢はない。

コクコクとお鶴は頷いた。

「行きましょう」

なぜか嬉しそうに、お道はニヤリと笑った。

「ええ、行きましょうか」

そうして二人は裏路地に飛び込んだ。

路地の中はひどく冷えていた。水はけは悪くないらしく水たまりはなかったものの、何となくひんやりとした空気がお鶴の頬を撫でる。人二人が何とか通ることのできる狭い路地には、重苦しい空気がまどろんでいた。じやり、じやり、という履物と地面がこすれる音が、辺りに響く。

その中、息をひそめて歩くお鶴。ひさしから落ちるしずくの音さえ聞こえる。

やがて、曲がり角に差し掛かった。あと数間で左へ曲がる曲がり角。ゆっくり、ゆっくりと歩を進める

と――。

ぽとつ。

「ボトツ？」

思わずお鶴は呟く。そして、辺りを見渡してその音の正体を探すうち、その正体が目に入った。

曲がり角のちょうど真ん中。そこに、手に収まる程度の球状の何

かが置かれていた。そして、その黒い球からはちよろりと紐のよ
うなものが出ていて、しかもその紐の先にはパチパチと灯がともっ
ていた。

ん？ これ、どっかで見たことが……。

コチーンと固まりながら、ふと記憶の底をサルベージするお鶴。

ええと、あれは確か……。

最近のことのはずだ。それこそ、数日前に見たような気がする。

ええとこれは……。

「あ！」

思い出した。

「これ、ちあきさんが私に投げてきた……、あの眠くなるヤツじゃ
ないですか！」

そう。爆発したが最後、出てきた煙によって眠りの世界に落ちて
しまつ「眠り玉」なのであった！

や、やばい！

思わずその場から逃げようとするお鶴は身を翻した。

けれど、逃げることができない。

だって、後ろに立っているお道が、お鶴の通せんぼをしているか
らだ。両腕を思いっきり開いて通せんぼ。しかも顔にはひよっこ
にも似た防毒お面を被っている。

「ちょ、どういことですか！？」

その言葉に、お道はコフーコフーと言わせながら答える。

「ごめんね、お鶴ちゃん。あともう少しらしいのよ。あともう少し
したら、変迅堂さんもあなたのお兄さんも帰ってくるから、それま
で待ってて？」

けれど、その言葉にお鶴はかみつく。

「そうやって待ってられないから——」
バン。

お鶴の後ろで破裂音。そして、フシューウウウウ、と煙が巻き
あがる音が響く。

けれど、そんなことはお構いなし。お鶴は叫ぶ。

「待ってられないから探すんですよ！ 私も、ちあきさんも！」
「ごめんね」

その言葉が限りだった。辺りの風景が、黄色いガスによっておしなべられてしまう。黄色い世界に取り巻かれると、上も下も右も左もない。どこを見ても黄色い。目の前にいたはずのお道の姿さえ見えない。

そして、襲いかかってくる眠気。

最初は何とかその眠気に抵抗してみたお鶴だったが、結局その眠気に勝てなくなってくる。重くなるまぶたに逆らい切れず、お鶴はやがてその目を閉じた。

「へん……じんどうさん……、ちあ……きさん」

そうして、お鶴は眠りの世界に落ちた。

【1】

黄色いガスが、秋風に吹き誘われて少しずつ晴れてゆく。

全く視界がなくなっていた辺りの風景が、少しずつ明らかになってゆく。裏路地の低い庇。壁際に幾重にも積み重なったガラクタの山たち。少し乾いた地面の土。

そして、路地に立つ、三人の人影。

コフーコフーと息をしながら顔を突き合わせる三人。そのうちの一人、黒っぽい小袖をまとっている一人は、すうすうと寝息を立てるお鶴を細い両腕で抱えていた。

お鶴を支える一人が言った。

「コフーコフーコフー」

その言葉に、二人目が応じる。

「ココフーコフーコフコフー」

三人目も口を開く。

「ココツコフー、コフー、コフー」

……。

三人とも、顔を見合わせる。そして、三人とも、今の状況にため息をつく。そう。三人が三人、防毒お面をつけているせいで言葉がはつきりもしないのだ。それどころか、お面のせいで顔色さえ分からない。

眠り誘発性分の入っているガスが晴れたのを確認してから、お鶴を抱えていない二人は防毒お面を外した。

「……ふう！ 息苦しいものだ、全く」

「まあまあ、そういう発明なんですから……。それに、これがないと、ぐっすり夢の世界ですよ？」

防毒お面を外したのは仁杉与力と変迅堂だった。そして変迅堂は、まだ防毒お面をつけている一人から、お鶴を任された。ひょいっとお鶴を抱える変迅堂（どうでもいいけど、もしこれをお鶴が覚えて

いたら、鼻血ブーものでしょうな）をよそに、最後の一人がお面を外した。

「ぷっハア！ 確かに息苦しいわね」

最後の一人はお道なのだった。

そのお道に微笑みかけながら、変迅堂は頭を下げる。

「いやあお道さん、助かります。ここまで骨を折って頂いちゃいます」

変迅堂の横に、不意に黒い羽織の中年男が立った。「ああ」。変迅堂は抱えるお鶴をその中年男に預ける。そうやってお鶴を抱え止めた男は目礼して、さっと三人の元から姿を消した。あの人は、南町奉行所の同心さん。つまりは仁杉与力の部下に当たる人だ。お鶴を（というか、子供たちを）眠らせたなら南町奉行所に運び込むように手はずを打つてある。

「私からも礼を言おう」と、仁杉。「まったく、あの火消しに見られたのみならず、まさかお鶴にも見られていたとはな。ついてない」そんなどこかのんびりとした二人の言葉にこれ見よがしなため息をついたお道は続けた。

「あのね。てか、あなたたち目立ちすぎなのよ。そのせいで、私たちがどれだけ苦労したか！」

「本当にすいません。けど、まさかちあき殿たちを品川に連れていくなんて思ってたんですもん」

変迅堂の言葉に、思い切りお道はかみつく。

「それは私だつてそう！ それにあんたたち、品川に行くなんて言っていないでしょ！ 長介さんからもらった紙にはそんなこと書いてなかったわよ！？」

正論。仁杉も変迅堂も、子供のように頭を下げるしかなかった。

ま、けど。お道は微笑む。

「成功して良かったじゃない。とりあえず、お鶴ちゃんはこれにて陥落」

ふん、と仁杉与力は鼻を鳴らした。

「あの長介とかいう老人、相当な食わせ者だな。油断のならぬじい様だ。せいぜい、江戸の一市民で終わってほしい人間だな」

三人は、この件の筋書きを書いた長介の顔を思い浮かべた。

“カツちゃんのみならず、お鶴にまで目撃されてしまった模様”。そんな知らせが、お道から長介、長介から仁杉たちに届いたのは昨晚のことだった。カツちゃんに見つかったのは仁杉たちにも分かっていただけれど、お鶴にまで目撃されていたのはさすがに予想外だった。そうやって二人に目撃されているとなれば、ちあきたちが不審がるのは当然のことだ。おそらくちあきたちの性格からして、変迅堂たちを探す流れとなるだろう。そう踏んだ長介によって一計が案じられた。つまり、一緒に変迅堂を探すふりをして大人がついてゆき、ちあきたちをミスリードするなり足止めするなりすればいい。そうして、一芝居が打たれた。

きつと長介の家に怒鳴り込んでくるだろうちあきたちを、最初長介は突っぱねる。そこにちあきたちの理解者を装ったお道が入り、お道の言葉やちあきたちの言葉に長介がほだされたふりをして、さりげなくその搜索にお道を同道させる。そうすれば、あとは煮るなり焼くなりお好きに。

そんな長介の案は、見事に的中したのであった。

事実、お鶴はこうして変迅堂の腕の中でグースカと眠りの世界に落ちていくし、ちあきたちも助八によって関係ないところに連れていかれているはずだ。結局のところ、ちあきたちを危険な目に遭わせなければそれでいいのだ。

まあでも。お道は心の中で呟く。

助八、大丈夫かしらね？　へまをやらなきゃいいけども。

そんなモノローグを頭の隅から追い出して、お道は二人に向いた。「ってか、大事なのはこれから」と、お道は口を開く。「で、あなたたちの追ってる事件とやら、今日中に解決するのかしら？」

「ええ」

力強く頷く変迅堂は、ふところから何かを取り出した。

それは、赤べこだった。“赤べこ”というと首を振る牛の形をした張り子の人形のことだけど、変迅堂が取り出したのはまさにその赤べこだった。ただし、なぜか足に車輪がついている。

「何ソレ？ 赤べこ？」

「いいえ、これ、“名犬等志男君”^{めいお}って言います」

「ハア？」

お道の頓狂な声に促されるように、変迅堂は説明を重ねた。

「ああ、これはですね、犬のからくり人形なんですよ」

「は、これが犬？ 牛でなく？」

そうお道が問い直すのは無理もない。

どう見てもその造形が牛なのだ。ってか、赤べこなのだ。なんとなくずんぐりとした体つきといい、丸っこい顔立ちといい、絶対に犬ではない。牛だ。けれど、変迅堂は自信たつぷりに言い放つ。

「犬です」

「はっはっは、変迅堂。これは犬じゃあるまい！」

仁杉の容赦ない大笑いに、変迅堂は唇を伸ばしてふてくされる。

「……いいんです。とにかくこれは犬なんです。じゃないと話が進まないんですけど」

と言われたところで、変迅堂の手にある張り子はどう見てもヘタクソな造形の牛でしかなく。笑いをこらえながらその“犬”を見つめる二人。その二人にじとつとした視線を向けながら、変迅堂は続ける。

「繰り返します！ この犬はですね、“名犬等志男君”って言います」

変迅堂は“名犬等志男君”の背中を撫でながら、説明を加える。

「僕の発明なんですけどね。本当は、落し物の持ち主を捜すための物なんです。落し物に含まれる持ち主の匂いを覚えさせると、その匂いを求めて自動的に動き出して、持ち主の元にまで進む、っていう、まあ、ありがちな発明ですけど」

「落し物？ 今回は落し物を探すわけではないが？」

仁杉の至極もつともな疑問に、変迅堂は答える。

「今回の事件で、下手人は針通しの貫吾さんと風撥の己吉さんを襲いました。……二人とも、命に別条ないのが何よりですけど。で、確か“鎧姿の武者にやられた”とか言ってるんですけどっけ？」

「ああ」仁杉は苦々しく頷く。「“鎧武者”など、この太平の世に
いるわけあるまいに」

「まあ、ともかくですね。その件があつて、下手人にはある匂いが
ついてるんです。その匂いを追えば、下手人に必ず到達します」

ここでお道が割り込む。

「あのさあ。いい加減、話を進めてくれないかしら。そうやって先
延べにされるのが一番イヤなの！ “ある匂い”って何よ！」

「はい、これです」

懷に手をつ突つ込んだ変迅堂は、手元からスルリと何かを取り出し
た。長いひも状の物。最初はそれが何なのかよくわからなかったけ
れど、ところどころにつく赤黒い斑点やシミのおかげで、それが何
なのか、仁杉たちにも分かってくる。

「これ、貫吾さんの手当てに使った晒です。ところどころ、血がつ
いてます。……この、血の匂いを追います」

「なるほどな」仁杉は頷く。「下手人には、貫吾の血の匂いがつい
ている。湯あみでもしうが、得物には匂いが染みついているはず。
その匂いを追えば、やがて下手人に至るということか」

「そついうことです。……さて」

【2】

ポチっとな。そう口にしながら、変迅堂は“名犬等志男君”の背中のボタンを押した。すると、さっきまでは置き物のように何の動きも見せていなかった“名犬等志男君”が何やら活動を開始しはじめた。首を上下に動かし始め、尻尾をぶんぶん振り始めた。けれど、そうやって首を振れば振るほど、赤べこにしか見えなくなってくる。そんな仁杉たちの視線を無視するように、変迅堂は“名犬等志男君”を地面に置いた。すると。

コロコロ……。

足についている車輪が少しずつ転がり、“名犬等志男君”は前進を始める。

けれど、まるで赤ちゃんのハイハイのようなその遅さ。ちよつと早歩きをするだけで追い抜けてしまいそうだ。

「お、遅いな」

見たままの感想を述べる仁杉。

「これが最高速です」

のろのろと地面を歩く様は、本当に犬ではなかった。牛歩という言葉があるけれど、まさにそれだ。イライライライラ。

そんな後ろ二人の苛立ちなどどこ吹く風、変迅堂は朗らかに言い放った。

「さ、行きましょう」

変迅堂の言葉に従い、仁杉たちは“名犬等志男君”の後を追う。

“名犬等志男君”はすぐに大通りを出た。

ご機嫌に首を振り振りしながら歩く牛のような犬の張り子。そしてそんなご機嫌な張り子の後を追う、ご機嫌な大人と不機嫌な大人二人。傍から見てもちぐはぐ極まりない一団。

当然、目立たないはずはない。

すれ違う江戸っ子たちは、「アレア新しい大道芸人かね？」とば

かりに振り返った。けれど、「これア見世物じゃねえんだよ」とばかりにイライラマジメンチをきめる仁杉・お道二人によって、江戸っ子たちはぶいっと顔をそむける。そんな二人のイライラなどどこ吹く風。“名犬等志男君”も変迅堂も、なぜか秋空にお似合いの朗らかな足取りを披露している。

「いやあ、いい天気ですねえ」

変迅堂のその言葉の瞬間、仁杉の手が一瞬刀の柄に伸びたのはここだけの話。

一触即発のパレードの中、“名犬等志男君”は首を振り振りしながら、マイペースに歩を進めるのだった。

そうやって江戸の街を歩くこと数刻。

既に、殆ど日は傾きかかっていた。腹時計の具合と周りの風景が噛み合わない。この前まで、この腹時計の頃は明るかったはずなのに、と首をかしげるのは変迅堂だけではない。秋の日はつるべ落としの如し。夕陽によって赤く燃える空。そして木の塀や板葺の屋根達、ドブ板までも、ほのかに赤く染まる。伸びる陰が、どんどん長くなってゆく。

コロコロ。

“名犬等志男君”も、いよいよ赤べこにしか見えなくなってくる。うむむ、と仁杉がうなる。

「なあ、変迅堂。いつになったら到達するのだ？」

「うーん、こればかりは明言できませんねえ」

変迅堂も首をかしげる。

いつしか、三人と一匹はさびしいところに来ていた。江戸の端っこ品川の一角。貧乏長屋が続く裏通り。沈みかけの太陽は、等しく江戸の街を照らす。

「けど、下手人が潜んでいるには、ちょっとおあつらえ向き過ぎやしない？」

そうお道が肩をひそめるのも無理からない。“名犬等志男君”が

コロコロと歩を進めている一角は、貧乏長屋でも特に貧乏な区画。堅気の商売をやっているような人たちが過ぐす一角ではなかった。すれ違う人たちは誰もかれも余所者である変迅堂たちを睨みつけるものの、仁杉に気づいてさつと視線をそむける。与力に目をつけられては困る連中ばかりが住んでいるところなのだ。

「ふん、まあそうだな」と、仁杉。

やがて、そんな長屋の軒が続く一角で、“名犬等志男君”はぴたりと歩を止めた。一尺ほどの間、同じ場所を行ったり来たり。ついには同じところをぐるぐる回り始めた。あ、この仕草だけはなんだから犬っぽい。

かがみ込んだ変迅堂は“名犬等志男君”の頭を撫でた。

「お疲れ様」

“名犬等志男君”の背中ボタンを押した。すると、さっきまでぶんぶん頭を振っていた“等志男君”はその動きを止めた。そうしてただの張り子の人形に戻った“等志男君”を懐に入れてから、変迅堂は前を見据えた。

前には、戸があった。

長屋の戸。何の変哲もない。他の家々は障子が破れていて当り前だったけれど、この戸の障子はきつちりと白く張られている。並びの長屋の戸とは違い、蹴破られているような跡もない。

「清貧、って感じね」

お道はそう呟く。その言葉を仁杉が笑う。

「ふん、分からんぞ。……変迅堂、本当にここなのか」

「ええ。きっと。“名犬等志男君”は、ここを指しました。間違いなく」

「そうか、ならば」

仁杉は、刀の柄に手をかけ、音もなく抜き払った。そうして右手で刀をたさばみ、変迅堂の脇をすり抜け一番前に立った。ひゅっと息を短く吐いて、変迅堂たちに声をかける。

「おい、お前たちは下がっている。ここは、私が入る」

無言で頷くお道と変迅堂。それを確認するや、仁杉は戸を叩いた。
「すいません。誰かおられませんか？」

さっきまでの居丈高な言葉とは全く違う。

けれど、奥からは反応がない。

もう一度、仁杉与力は戸を叩く。

「すいません、誰かおられませんか？」

しーん。

反応がない。

うむむ？

仁杉は、中の様子をうかがおうと、戸に耳をくっつけた、その瞬間だった。

ブスリ。

変な音が、辺りに響いた。張り詰められた紙を、何か尖ったもので突き破ったような音。

というか、事実その通りのことが起こっていた。

仁杉の眼前わずか数寸のところに、銀色に輝く刃物がちらついていた。その刃物は戸の上半分を占める障子からにゅっと伸びていたあと数寸ずれていたら、仁杉与力のこめかみに大きな穴があいていたところだ。

「……！？ ……！？ くぁwせdrftgyふじこーp」

仁杉、声が出ていない。口をがくがくと動かしながら、ゆっくりと変迅堂に向く。珍しく、顔が真っ青だ。

にゅっ！

不意に、障子から飛び出していた刃先が部屋の中に消える。

と、ようやく動きをフリーズさせていた仁杉が少し飛びのいた。

そして、小声で変迅堂たちに言う。

「おい！ 離れろ！」

もちろん、そんなことを言われる前に、変迅堂たちは既に離れていたのだけれど。

ちっ、と舌打ちをした仁杉は、壁に張り付いて、戸の横に立った。

そして、思いつきり戸をがらりと開いた。

「南町奉行所だー!!」

が、その仁杉の言葉は、途中で遮られた。

戸が開いた瞬間、二つの人影が飛び出してきたからだ。

一人は侍風の男。そしてもう一人は鎧姿で槍を持つ人間。なぜか、侍風の男は鎧武者の手を引いていた。その動きはまるで弾丸のように、仁杉はじめ、変迅堂やお道も捉える事が出来なかった。

「な!?!」

脇をすり抜けられる格好となった仁杉は悲鳴にも似た声を上げる。もちろん、変迅堂たちに何が出来てもない。すり抜けられるのをただ見ているばかりだった。

そうして脱兎のように逃げ出す二人組を背中で見送りながらも、仁杉は勝ち誇る。

「ふふん、こんなこともあるのかと、長屋の入り口近辺に人員を配置しておいてある。これにて事件解決……」
が。

二人組が走って行ったほうから、妙な声が聞こえる。

「うわああ! とか、ひいひい!」といった声が、遠くの方でこだまのように響く。で、最後の方は「ちくしょう!」とか「しまった!」とか、「追え! 追え!」とかいう悲鳴めいた声が聞こえる。

あれー?

仁杉は変迅堂たちと顔を見合わせる。

「……追うぞ」

「……そうですね」

「がってん」

そうして三人は、夕闇迫る江戸の街を駆け出したのだった。

【1】

クポーン。

薄暗い部屋の中で、絡繰の目が光る。足を投げ出して座る絡繰は、何を見ているのだろうか。どこを見ているのかなんて、イエモン氏には全く分らない。

外は晴れているらしい。障子から漏れる明かりに目をやる。ひどくまぶしい。久しぶりに目に入る日光はひどくまぶしかった。

そういえば、俺は何年、日の光を避け続けたろう。

思わずイエモン氏は指を折ろうと目の前に手を晒す。けれど、それさえも億劫で、結局手を引っ込めてしまった。

薄暗い部屋の中では時間がゆっくりと流れる。いや、正確には、時間の感覚が鈍ってくる。遂には止まってしまふのではないかと疑ってしまふ空気の中、イエモン氏はただその空気と同化しようと努めていた。けれど、どうしても同化できずにぶかぶかと浮いてしまふ。

仕方なく、イエモン氏は口を開く。

「なあ、お前は何者なんだ」

その問いが形にならないのは言葉を発したイエモン氏自身よく分かっている。なにせ、イエモン氏が水を向けた相手は、心なき絡繰なのだから。

答えなんか期待してなかった。

けれど。

確かに、イエモン氏の耳に言葉が届いた。

“我は、絡繰”

その声は、本当に耳に届いているものなのだろうか。まるで心の奥で響くようなその声は、どこかふわふわとしていた。幻聴のようなものだろうか。

幻聴なら幻聴で、まあいいか。暇つぶしにはなる。

どこかまどろんだ空気の中、捨鉢な気分になっているイエモン氏は続けた。

「うん、絡繰なのは分かるよ。でも、お前は一体何なんだ？ いきなり槍を取り出したり、拳句は人を襲ったり」

すると、絡繰は答えた。

“戦のために生まれた絡繰なれば、当然のこと。戦のために生まれた我は、対する相手に槍を突き出すことしか叶わず”

「はん、喋ってるじゃないか」

そう笑うと、絡繰は応じた。

“この声は、きっと我と主にしか聞こえぬ”
やっぱりなあ。

半信半疑だったけれど、事実そう言われてしまうと“そういうもんなんだろうなあ”という気分になってくる。こう言うてはなんだけど、人間大の人形がガシガシと動き始めて槍を突き出すのだって、イエモン氏からすれば到底信じられるものでもない。最初から、この絡繰に関しては信じられぬことばかりだ。信じられぬことが一つ増えたくらいで、あまり驚きもしない。

「なあ、聞きたいことがある。いや、そんなに立て込んだ話じゃない。どうせ暇なんだ、いいだろ？」

“ああ”

絡繰はクーポンと目を光らせた。瞬間、緘の鎧が少しだけぶつかり合ってカラカラと鳴った。

「お前、このままでいいのか？ このまま、人を襲い続けるのか？」
しばし、絡繰は何も答えなかった。どこに向けているのか判然としない目を泳がせながら、木石のようにただその場にあった。

イエモン氏は、床に寝そべって天井の木目を眺めた。けれど、そうやっていてもなお、絡繰の答えを待っていた。

不意に、絡繰の声が響いた。

“我は……我は”

「お前は、なんだっていうんだ」

すると、絡繰はしばらくしてから、声を震わせた。緘の札が、カラカラと鳴る。

“我は、人を殺める目的で造られた人形。なれば、人を殺めぬことには存在の価値なし。人を殺めることよりも、存在の価値がない方がはるかに怖い”

「存在の価値？」

初めて聞いた言葉であるかのように、イエモン氏はその言葉を口の中で転がした。甘くもなくしょっぱくもなく、苦いばかりのその言葉を。

“主は、怖くないのか。存在の価値もなく生き続けて”

ああ。存在の価値。問い返されてはじめて、その言葉がイエモン氏の中で意味を持ち始める。

思えば武士として生きていたあの頃。あの頃には意味のある生活があった。家中のため。若妻のため。そして自分の野望のため。そうしてあくせくと生きてきたあの頃。あの頃は、何も疑っていなかった。だが、突然その生活は全て奪われてしまった。

そうして浪人暮らしになって、存在価値を無くしてしまった。そのまま、こうやってダラダラと生きている。

その瞬間、イエモン氏の両の目に、伝うものがあつた。

「俺は、俺は……」

絡繰は何も言わなかった。まるで、イエモン氏の言葉の先を待っているかのように。

「俺は、怖いよ。存在の価値もなく生きていくなんて」
すると、絡繰は笑った。

“なんだ、似た者同士ではないか。我も主も”

「ああ、そうだな」

イエモン氏も力なく笑う。

“なれば”

「ああ」

“我々のやることは、決まっているだろう？ 我は人を殺める道を

進み、そして主は主が価値を感じるところで生きてゆけばいい”

だけれど、その言葉に素直に頷くことのできないイエモン氏がいた。

それでいいのか。きっと、俺はどこかの家中に入ることこそ価値のある人間だ。いや、家中での生き方しか知らない。それはまるで、“人を殺めぬことには存在の価値なし”と言い放つ、絡繰と鏡映しのようによく似ていた。

「お前は、それでいいのか」

その問いは、実は自分自身に向けられたものだということに、イエモン氏は気づかなかった。そして、絡繰もそれには気づかなかった。

“それでいい。否、それしかない”

「それでいいのか」

“それでいい”

重ねて示される意思。けれど、イエモン氏は叫ぶ。

「それでいいのかよ、お前は！」

……。

気づくと、障子から漏れてくる明かりが赤色をまとっていた。

ぼけつとした目をこすりながら、ぐっと上体を起こす。頭の奥にしびれがある。体がけだるい。きっと、ついうとうとと昼寝をしてしまったのだろう。

ぶんぶんと頭を振りながら、ふとイエモン氏は絡繰に視線を向ける。絡繰は、部屋の隅で足を投げ出して座っていた。目は赤く光ってはいなかった。糸の切れた操り人形のようにして座る絡繰は、ただ部屋の隅を占めて座り込んでいた。

「夢？」

ふと、イエモン氏は呟く。

夢、だろうか。

普通に考えれば、そうにきまっている。絡繰人形が喋り出すなん

てことあるはずがない。しかもその絡繰が自分の境遇を憐れんでくれたなんて笑い話じゃないか、そうイエモン氏は考え直した。

少しだけ開いている障子からこぼれる光は、まるで血のように真っ赤だった。その光はイエモン氏の手先を赤く染める。それが、まるで血が少しずつ滴り寄ってきて、自分の手を浸食しているようだった。反射的に、さっと手をひっこめて、部屋にただよう赤い埃の粒たちを、ただ見ていた。

そうしてどこかまどろんだ空気の中にいるイエモン氏だったけれど、ふいにその空気は破られた。

ドンドンドン！

戸が叩かれる。方向からして、玄関。

そして、

「すいません。誰かおられませんか？」

というひどく慇懃な呼び声がこだました。まるで、大人が子供を呼ぶ時のような、やわらかい言葉。

なんだ？

胡散臭い。一瞬にしてイエモン氏はそう見抜いていた。

【2】

こんな貧乏長屋に暮らしている人間にとって、あんな慇懃な受け答えをする来客など絶対にあり得ない。イエモン氏のところには来ないけれど、隣の家などは、「おうおうおう！ 借金をいい加減返してもらおうかい！」とか、「てめえの娘を売り飛ばしてやつてもいいんだぞ！」というダミ声を放つ来客に難渋しているようだ。あんな、猫でも撫でるような声音で呼ばれる来客なんてこの長屋には来ない。

胡散臭い。相手をしない方がいい。

居留守をきめこもうとするイエモン氏は息をひそめた。

その瞬間だった。

クポーン。

別に止まっていればいいものを、ヤツが動き出した。

ガシャン。体を揺らしながら歩く武者の絡繰。そして、胸から、例のブツを取り出す。びゅんと振って、ようやく形になったそれは、昨日通りかかった男二人を傷つけた、あの槍であった。

「……おお、おい……？」

小声で絡繰に問いかけるイエモン氏。そんなイエモン氏を尻目に、つかつかと絡繰は戸の方に足を進めていく。さすがに放っておくわけにもいかない。いざというときには絡繰を羽交い絞めに出来そうな位置取りを心がけながら、イエモン氏も結局絡繰の後を追う。

ぴたり。絡繰が玄関の戸の前に立った瞬間、また戸が叩かれた。

「すいません。誰かおられませんか？」

二度目だ。しかも、二度目も慇懃。

どういうことだ——？

けれど、そのイエモン氏の問いは、途中でぶった切られた。と、いうのも。

ざくり。

そうやってイエモン氏が何かを考えるよりも先に、絡繰が行動してしまつたからだ。右手に持っていた槍を、戸の障子越しに突き放つたのだ。

あ、て、てめえ、なんてことを……。

これでもう、終わつた。思わず血の気が引くイエモン氏。

この絡繰の行動のせいで、もうイエモン氏の取るべき道は決まつた。居留守を使えばよかったのに、存在を示してしまった上に槍までも突き出してしまつた。誰が相手だろうが、どう言い訳したらいいものか分からない。言い訳はなしだ。かと言って、今更居留守も通じまい。

逃げるしかない。

けれど、小さな庭の向こうにある塀はかなり高い。絡繰と一緒に逃げられないだろう。

と、なれば――。

イエモン氏は、目の前に立つ絡繰のさらに向こうにある、小さな戸を睨んで固唾を飲んだ。ここから、逃げるしかない。一目散に。何が何でも。そうやって逃げないことには、この窮地を脱する事が出来ない。そうなれば、家中への仕官もままならない。そうなれば、お岩と一緒に暮らすことなんて夢のまた夢だろう。

ちくしょう。ちくしょう。ちくしょう。

ぎり。

思い切り歯噛みするイエモン氏は、絡繰の左手を取つた。その瞬間、絡繰は前に繰り出していた槍を引つ込めて、その槍を胸の中に収める。

絡繰は、前に向けていた顔を、イエモン氏に向けた。鉄面で覆われたその顔にはなんの表情もない。仮にその鉄面を外したところで、その奥に顔などありはしないのだろう。けれどなぜだろう、イエモン氏には絡繰がはにかんだ頬笑みを浮かべているかのように見えた。ごくつ。

イエモン氏は唾を飲み、前の戸に全神経を集中させる。

機を見計らって表に出る。けれど、向こうの様子が全く分からないのだから、いつ飛び出たらいいものか、さっぱり分からない。結局、ドブにうずくまるネズミのようにして、息をひそめているしかない。

と――。

ガラリ。

戸が開け放たれた。

その瞬間だった。

絡繰が動いた。

ぐんと腕を引かれる格好となったイエモン氏は、半ば足を浮かせる格好になっていた。そうやって腕を引かれて、今が飛び出す機だということに気付くや、浮きかけの足を何とか地面につけて今度は自分の方から絡繰の手を引いた。

「南町奉行所……だ」

戸の前に立っていた男の声を背中に浴びながら、イエモン氏と絡繰は長屋の狭い通りを駆け抜けた。相手の顔なんて見なかった。そんな場合でもなかった。ただ逃げる。イエモン氏が取るべきはそれだけだ。そうやって走る間だけは、恐怖を感じることはない。

が、長屋街の出口に差し掛かった時、イエモン氏の心中に恐怖がぶり返してくる。

数人の一団。赤い房の十手を持つ男たちや長柄の刺又を手挟む男たちが控えていた。どう見ても、奉行所の捕手たちだ。その一団が、長屋出口にて、待ち構えている。

たしか、うちの戸を叩いていた奴は「南町奉行所」とか言っていたはず。つまり、あの連中はさっきの野郎の仲間で、自分を捕まえに来たんだ――。

が、そんなイエモン氏を尻目に、絡繰が動いた。

胸から折りたたまれた槍を取り出して一瞬にして槍に仕立てた絡繰は、イエモン氏の手を振り払った。ぐんと走る速度を上げて、右片手で槍を頭上で振り回す。その勢いのまま、槍の穂先をその一団

に向かつて繰り出した。恐ろしく速い。その切っ先は、まるで空を飛ぶ燕のようにとらえどころがなかった。

数に恃んで心の内に油断があつたのだろう。イエモン氏を捕まえようとしていた四人はたじろいた。「うわあ!」「ひい!」と短い悲鳴を上げ、絡繰の繰り出した穂先を必死によけていた。

そのおかげで、一瞬、行く手に道が開いた。
よし!

イエモン氏はまた絡繰の手を取った。ぐいっとな手を引っ張って、長屋の出口を突破した。

しまった!　ちくしょう!　追え追え!

そんな言葉たちを背中に聞きながら、イエモン氏と絡繰は脱兎のように江戸の街を駆け抜けていく。そうやってぐいぐいと速度を上げてゆくイエモン氏と絡繰は顔を見合わせた。

「やったな、おい!」

絡繰は何も言わない。頷きさえしない。

ちえ。

やっぱり、あれは夢だつたんだろうか。絡繰が、自分に話しかけてきた、あれは。

混乱しそうな頭を振り払いながら、イエモン氏は走る。江戸の街がどんどん後ろに流れてゆく。自分の心音と息使いだけが耳の奥に響く。そこには、自分と絡繰しかいなかった。そうやって、どこへも逃げていけるような気がした。

けれど、不意に絡繰が足を止めた。

「ど、どうした!　早く逃げない!」

そう言うてはみたものの、イエモン氏も足を止めざるを得なかった。

イエモン氏の行く手に、女の子が立っていた。背格好からして、年のころは十五くらいだろうか。

けれど、足を止めなくなるのもむべなる格好をしていた。

小袖姿。なのに、肩に火事半纏を羽織って立っている。しかも、

足には車輪のついた下駄をはいている。ぱつと見て、どういう立場の人間なのか判別できない。

夕方の逆光のせいで、その女の子の表情は判然としなかった。けれど、その女の子の意思は明確だった。どう見ても、自分たちの行く手を遮りたいようだ。

なんだっていうんだ。ちくしょう。

顔をしかめるイエモン氏を尻目に、その女の子は言い放つ。

「イエモンさん、だよな。あなたはここで止めるから。何があっても」

その女の子は、腕で顔をぐいと拭いた。その女の子の顔は少し泥で汚れ、しかも少しすりむいていた。

【1】

随分と日が傾いてきた。

さつきまでポカポカと暖かったはずが、気づけば空気が冷え込み始めている。身を切るような風が時折吹き荒んで、ちあきたちにぶつかってゆく。

「うわ、寒っ！」

ちあきは身を少しだけかがめる。

そんなちあきのことを、カツちゃんは笑う。

「はは、ちあっちゃん、そんな薄着で出てくるからだアな」

「なにおう!？」

すぐんでみても、やっぱり寒い。綿入りをそろそろ下ろすべきかしらん。袖をちよいとつまみ上げながら、ちあきはむむむと唸る。そして、むむむと唸るシジマに、くちつとくしゃみをする。そのくしゃみはまるで猫のそのようで、ひどくかわいらしい。いかに世紀末覇者・ちあきといえど、ふとした瞬間に見せる仕草はしっかりと女の子なのだ。

むろん、きゅんとなないわけはないカツちゃん。

おもむろに自分の半纏を脱いだ。

「ほれ、ちあっちゃん、使いなイ」

「えー、いいよ。カツちゃんが寒いじゃん。平気、平気——」

とか言いつつ、くちつくちつと二連続でくしゃみをするちあき。

苦笑いを浮かべながら短く息を吐いたカツちゃんは、ちあきの肩に半纏をふんわりとかけた。

「ほれ、貸してやらアな」

むー。唸ってはみるものの、まあ事実暖かい。

「ありがと」

短く言って、ぷいっと前を向いてしまう。

まあ、そんなちあきの仕草にさらにカツちゃんがモエモエしてい

るのは言うまでもない。つていうか、もう心臓バクバクの鼻血ブーものなんである。

そんな甘酸っぱい青春的一幕をぶち壊しにするように、助八が口を開いた。

「ねえ、二人とも。もう探すのは止めにしないでやんすか？　もう、夕方も近いんでやんすよ？」

少しずつ日が落ちてゆく江戸の街は、その日の動きに比例してその元気を失っているようだった。さっきまでがやがやという喧騒の中を歩いていたはずが、今はその声もまばら、風の音が一番大きく響く。確かに、夕方はもう近い。

けれど、水を向けられたちあきは振り返りざまに顔を思い切りしかめていた。

「まだ帰らない！」

ちあきにけんもほろろに断られる格好になった助八は、カツちゃんにも向く。けれど、カツちゃんもまたこう答える。

「まだ、帰らないッス」

けれど、その顔はちあきのそれとは若干違った。ちあきの言葉に合せているのが見え見えだ。

ふう、とため息をついて、助八は二人の後を追う。

けれど、まばらになりゆく江戸っ子たちの波の中に、目的の人を見つけることが出来ずにいた。

お岩さんとやらのお見舞いに、大体半刻くらいを費やしてしまった。約束の手前、助八はちあきによって。されるはずなのだった。けれど、「ん、まあ、いいよ別に……」というちあきの寛大な言葉によって助八の首は何とかつながった。そしてそのあと半刻ほど江戸の街にて変迅堂たちの行く手を探しているのだけれど、一向に尻尾はおるか足跡すらもつかめない。

見つかるはずもない。そもそも、江戸の街には百万もの人間が生活している。その中で一人の人間を見つけるなんて、砂浜に落ちた砂金の一欠片を見つげ出すに等しい。

頭を振りながら、助八はちあきに言葉を放つ。

「ねえ、お嬢さん。そもそも一人の人間を江戸の街から探すのなんて無理があるんでやんすよー。ねえ、聞いてるでやんすか」

そんな助八の言葉をスルーしながら、ちあきはどすどすと前に進む。めげずに、助八は続ける。

「そうやってお嬢さんが探さずとも、そのうち変迅堂さんは帰ってくるでやんすよ」

ちあきは無視。

カツちゃんも、助八とちあきの顔を見合わせて、結局前を向いてしまう。

うむむ。

助八は少し声を荒げる。

「それに、変迅堂さんにはお鶴さんのお兄さんがついてるんでやんしょ！　なら、なんの心配もないでやんしょ！」

ようやく、その言葉にちあきは足を止めた。

お、ようやく耳を貸す気になったでやんすか？

最初、助八はそう思った。が、振り返ったちあきの顔を拝んだ瞬間に、自分がいま修羅場に立っていることに気付いた。

ちあきは、思い切り眉間にしわを溜めていた。ぐいっと首をかしげ、助八の顔を覗き込んでいる。こ、怖い。

「ななな、なんでやんす？」

気づけば及び腰になっている助八。その助八に覆いかぶさるようにして、そのメンチ顔を助八に近づけるちあき。生きた心地がしない。そうやってビビっている中でも、“なんかヤバいことを言ったでやんすかなあ？”と疑問を持つだけの心持だけは持っていた。

そんな助八に、ちあきは言った。

「ねえ、どうして助八さん、お鶴ちゃんが仁杉与力の妹だって知ってるの？」

へ？　助八は首をかしげる。へ、おいら、変なこと言ったでやんすか？　と。

ちあきは続ける。思いつき顔を助八にぴったりつけたまま。

「だって助八さん、殆どお鶴ちゃんと話してないはずよね？ だって月見の晩だって殆ど話してないし、昨日に至っては全く会っていないはずだし、今日だってちょこつと顔を合わせた程度でしょ？ どうしてそんな助八さんが、お鶴ちゃんのことをそんなに詳しく知ってるの？」

あ。

そう。お鶴ちゃんと助八はほとんど顔を合わせていない。だといふのに、助八はお鶴に関するあれこれを知っている。まるで、誰かに言い含められているかのように――。

ぎくぎく。

あからさまに肩を揺らす助八。けれど、ここでそれを認めてしまふわけにもいかない。無理があることを承知しつつも、助八は言い訳を試してみる。

「……い、いや、だってあつしは情報屋でやんすよ？ 与力さんの妹さんのことくらい、調べるのはさして難しくないでやんすよ……なはは」

遂には、カツちゃんまで助八に疑惑の目を向け出した。じとつとした視線をよこしながら、ふと呟く。

「無理があらアな、兄ィ」

「う、うるさいでやんす！」

けれど、そうやって助八が反論できたのはその一瞬だけのことだった。

なにせ、ちあきがそんな助八の肩を思い切りつかんだからだ。

「ウソをつかないでくれる？」

ぎりぎり。両肩を万力で掴まれているような感覚に、助八は悲鳴を上げる。けれど、そんな中でも何とか反論の言葉をひねり出す。

「なんでウソだと思っんでやんすか！」

するとちあき、満面の笑みを浮かべて答えた。即答だった。

「勘」

女の勘とは、げに恐ろしい。

あまりに自信たつぷり過ぎて、なんだか怖い。ちあきの肩から立ち上る殺気にも似た自信に押される助八。いや、押されているのは気分だけではない。実際にちあきは助八を往来の端っこにまで押しやって、壁にどすんと背中をつけさせた。

逃げ場がない。

「ひiiiiiiiiい!!」

「さあさ、答えてもらいましょうか!」

こつてりと油を絞りましようか、とばかりにちあきが意地悪そうに微笑んだ、その瞬間だった。

「あ、そこにいるは助八さん!」

ちあきの背中に、聞きなれない声が降りかかる。思わずちあきは振り返る。

視線の先には小男が立っていた。心配そうに眉根をひそめながら、ちあきの背中越しに助八の様子をうかがう様はさながらネズミのようだった。なんとなく落ち着かない町人風のいでたちは、助八とよく似ていた。

おお、と助八は声を上げた。

「どうしたでやんすか? こんなところで奇遇でやんすな」

そんな間抜けた時候の挨拶に答えない小男は、顔を真っ赤にしてやけに大きな身振りを交えた。

「それどころじゃないですよ! それがですね、最近江戸の街を騒がしてる例の辻斬りが誰か、分かりそうなんですよ!」

「え?」

その言葉に一番反応したのはちあきだった。助八を抑え込んでいる手を引っ込め、その小男の方に向いた。ようやく自由の身になった助八も、ちあきの横に立つ。

【2】

「ど、どういふことでやんすか」

「どういふことも何も」と、小男は続ける。「下手人と思しき野郎が目撃されていたらしいんです。で、どうやらその下手人の正体が分かってきたみたいなんです！」

ふーん、と鼻を鳴らすカツちゃんの横で、助八が訊く。

「な……、で、どこの誰なんでやんす？」

すると、小男は懷から大福帳にも似た帳面を取り出し、パツパとめくり始めた。そして、丁度帳面の中くらいで手を止めるや、口をぼそぼそと動かした。

「品川の貧乏長屋に在住の、イエモンとかいう素浪人です」

「え！？」

目をまん丸にして息を吐いた助八。けれど、小男は助八の心の機微を測るつもりはないらしかった。ああ、じゃあともかくお伝えしましたからね！ と釘を刺すように助八に宣言してから、その小男は品川方面に走って行ってしまった。

その男の残した空気の余韻の中で、最初に口を開いたのはカツちゃんだった。

「あれ、誰なんでエ？」

「……ああ」助八はどこか呆けた声を上げた。「あれは同業者でやんす。おいらたち情報屋っていう商売は持ちつ持たれつなところがあるんでやんす。だから、ああして情報をくれたりやつたりし合うものなんでやんす」

「まあ、そんなところは少し大した問題でもないような気がするけどな」と呟きながら、カツちゃんは頭をぽりぽりと掻いた。「で、あの同業者さん、こう言ってたよな？ “品川に住むイエモン” が下手人かもしれねえ、って」

「……そうでやんすね」

カツちゃんは助八の顔を覗き込む。

「それって、兄イの知り合いで、あのお岩さんの旦那さんだっという“イエモン”じゃねえのかい」

「……わからんでやんす。わからないでやんすけど……」

ぐむぐむと唸る助八。目をせわしなく動かしながら、ひたすらに考え事をしているようだった。

けれど、ここでちあきが割って入った。この娘らしく、大声で力いっぱい割り込んだ。

「あの子！　こんなところで悩んでも無駄なんじゃないの!？」

その言葉に、助八はすつと顔を上げた。

ちあきは続ける。

「そのイエモンさんが、助八さんの知り合いのイエモンさんかどうかなんて、ここで考えてたっていつまで経っても分かりやしないわよ！　そうやって悩む暇があるんだったら、確認しに走って行った方が早いじゃない!」

ようやく、助八は口を開いた。

「それは、そうでやんす。けど」

「けど、何!？」

「そうしたら、変迅堂さんとのお約束を破ってしまうことになるんでやんす」

「は？　先生とのお約束？」

そうして遂に、助八は自分に課せられた役割について話してしまった。変迅堂たちは噂の辻斬りを追っているのだということ。そして自分は、ちあきたちを変迅堂に近づけないためにこうして一日中見張って様子を見ているということ。

「それってつまり……あたしたちをハメてたってわけ？」

「そうでやんす」

力なくちあきの言葉に頷く助八。

「なんでそんなこと——」

「それが大人つてもんでやんす。変迅堂さんにとって、お嬢さん方

がどういう位置づけにある人たちかなんてこと、あつしには分からないでやんす。けど、大事な人を危ない目に合わせたくない。その気持ちだけは分かるんでやんす！」

「知った風な口を——」

聞かないでよ、と振り上げたちあきの拳骨は、何者かの手によって抑えられてしまった。怒り心頭、何するのよ、とばかりに振り返ると、拳骨を掴んでいたのはカツちゃんだったということが分かった。カツちゃんは、珍しく神妙な顔をして首を横に振っていた。そんなカツちゃんの姿に毒気が抜かれてしまったちあきは、雨に濡れた子犬のようにしゅんとしょげてしまった。

ちあきの言葉に割り込むようにして、カツちゃんが口を開く。ちあきの拳骨を優しく握ったまま。

「まあ、今回ばかりは変の字の気持ちも分からねえではねえよな。どういう経緯で変の字がその辻斬りを追っているのかはビタイチ分からねえけど、そんな危ない目にちあっちゃんを巻き込ますようなマネはしたくねえわな。もし俺が同じ立場だったら、迷わず同じことを——」

と、その瞬間だった。

カツちゃんが、何の脈絡もなく数間吹っ飛んだ。

悲鳴もなく宙を舞うカツちゃん。きりもみ回転しながら舞うカツちゃんを見送る助八の目には、鬼のような形相で、カツちゃんに向かってグーを繰り出したちあきの立ち姿が目に入る。

どっしやあ。

カツちゃんが地面に落ちた瞬間に、ちあきは叫んだ。

「あたしはそんなこと頼んでない！」

「いい、いや、頼んでるとか頼んでないとかそういう話でなくて、でやんして」

何とかなだめようとする助八だったけれど、ある瞬間にちあきの変化に気付いた。さっきまで顔を真っ赤にして怒っている風だったちあきなのだけれど、ある瞬間から目から涙を流しているのだった。

蜘蛛の糸のように細く伝う涙は、まるで月夜の晩に葉っぱから流れ落つる雨露のようで、ひどくきれいだった。

「あ、あの、お嬢さん？」

変化に敏感に気付いた助八。

ちあきはただ、両の目から涙を流し続ける。涙を拭きもしない。

ただ、助八を見て立ち尽くす。

「ねえ、助八さん」

「な、なんでやんすか」

「先生にとって、あたしって何なんだろう」

「へ？」

予想外の質問に、助八は頓狂な声を上げてしまった。そんなこと、付き合いの短い助八に分かるはずもない。というか、ちあきにだってそのことは分かっているだろう。それが証拠に、ちあきは助八の答えを待ったりはしなかった。

「先生にとつて、あたしは守ってやらなきゃならないような存在なわけ？　あたしが子供だから？　でもさあ、それ、すんごく困るんだよね。だってそれじゃあ、先生にいつまで経っても届かないんだもん。あたしの気持ち」

ああ、そうでやんしたか。

付き合いの短い助八にも、目の前で涙を流す乙女の心のうちが何となく分かってきた。

きつとこの娘は、大人になりたいのだろう。そうして、変迅堂と肩を並べたいのだろう。これまでの二人の関係を見てきていない助八ではあつたけれど、今回の件の運びからしても、何となく変迅堂がちあきをどう扱っていたのかが分かる。きつと、子供扱いしていたところが多かったのだろう。そして、目の前にいる乙女は、そんなどこかよそよしい関係を取っ払ってしまいたいのだろう。

きつと、このちあきという女の子は、変迅堂のことが大好きだから。きつと、誰よりも。

ふふ。不意に助八は笑う。ちあきは眉根をひそめて口を伸ばす。

「むー、何よお。……笑いたかったら笑えばいいわよ！ もう！」
けれど、助八は首を横に振って両手を上げるにとどめた。

「……いや、お嬢さんも大変そうでやんすね」

「……うるさい」

目に涙をためながら悪態をつくちあき。

そのちあきを眺めながら、助八は「よし」と短く呟いた。

「お嬢さんには負けたでやんす」

「は？」

今度はちあきが目を丸くする番だった。目に溜めていた涙がその拍子にポロリとこぼれた。

「よし、変迅堂さんとのお約束、破ってしまおうかなと思ったんでやんす」

「いいの？」

控えめに聞いてくるちあきの言葉に、助八は苦笑いを浮かべた。

「本当は良くないんでやんすけど、お嬢さんの心意気に負けたんでやんす。あっしだって江戸っ子の端くれ、立派な心意気を前にしてその心意気に答ええないのは——」

満面の笑みでちあきは答える。

「江戸っ子の名折れ！」

顔を見合わせて、二人は笑った。

その笑いのしじまに、ふとちあきは呟いた。

「けど、助八さんって江戸っ子なの？」

「まあ、最近流れてきたヤツでやんすけど、神田川か隅田川の水を飲めば皆江戸っ子でやんす」

江戸っ子という人たちも随分と牽強附会なところがあるけれど、この助八さんの言葉はさらにその上を行っている。厚かましいというかなんというか。けれど、その厚かましいメンタリティは確かに江戸っ子のそれに違いなかった。

【3】

「違うない」

ちあきもからからと笑った。

ところで――。

「うーん、うーん。俺、死ぬかもしれねえ……」

地面に転がるカツちゃんがそう呟いていたのだけれど、そんなこと、ちあきも助八も気づきはしなかった。

カツちゃん、不運な奴である。

ブーン。

モーターが回る音がちあきの耳に入る。そして、びゅんびゅんという風切り音が容赦なくちあきの頬を撫でてゆく。

ふとちあきは空を眺める。さっきよりも、はるかに空が赤らんできている。もう一刻もすれば江戸の街は闇の中に沈んでしまうだろう。迫りくる宵闇に急ぎ立てられるようにして、ちあきは江戸の往來を滑るようにして駆け抜けてゆく。

けれど、疲れはない。

ちあきはふふんと笑う。

「たまには、先生もいい発明をしてくれるよねー」

ちあきは視線を足に落とす。その視線の先には、快足下駄を履いたちあきの足が。

下駄についている車輪が自動的に回ること、何の疲れもなく街を疾走できる発明「快足下駄」。バイクのイナバくと速さを比べるべくもないけれど、それでも普通に走るよりはるかに速い。

けれど、その快足下駄のスピードも、ちあきを満足させてくれない。

急がなくっちゃ。急がなくっちゃ！

なんでかはちあきにも分からないけれど、不思議な胸騒ぎがある。

先生、大丈夫かな。怪我してなければいいけど。

やる方のない疑問ばかりが渦巻いて、ちあきの小さな胸を焦がす。ちくちくと胸の奥に鈍い痛みが襲いかかってくる。

そんな感覚を振り払うように頭を振ったちあきは、関係ないことを考えることにした。無理矢理に。だから、考えようとしたことを口に出してみた。

「もう、ってか、本当にカツちゃんは役立たず！」

そう。カツちゃんである。

さつきちあきに（何の脈絡もなく）グーで殴られて、地面に崩れ落ちたカツちゃん。世紀末覇者・ちあきの拳を無防備で食らって無事にリカバリーができるはずもなかった。ゆすつて見ても往復ビンタを重ねても、カツちゃんが目を覚ますことはなかった。ただ、「うーんうーん、パンチはノーセンキューアルよ」とよく分からないことを呟いて白目を剥いていた。おー怖！

や、やつべえ。

そうちあきが思ったが先か、助八はカツちゃんを担ぎ上げた。

『この子はもう戦線離脱でやんす。お医者様にまで連れて行くでやんす』

『え！？ ちょっと待ってよ！』ちあきは叫んだ。『助八さんがいなくなっちゃったら、イエモンさんとやらの居場所が分からないじゃない！』

けれど、助八も負けてはいなかった。

『あのう！ この子をこんなにしたのはお嬢さんでやんすよ！』

確かに正論だった。ぐむむ。ちあきも口をつぐむしかない。

助八は続ける。

『それに、ちょっと寄りたいたいところがあるでやんす。お嬢さん、先に品川まで行ってくれでやんす。品川の貧乏長屋界限。そこら辺を探せば、きっとイエモンさんが見つかるはずでやんす。そうやってイエモンさんを探せば、変迅堂さんたちも見つかるでやんすよ』

結局、この助八の言葉に寄り切られるようにして、ちあきと助八

は別行動を取る運びとなつたのだつた。

そうして別行動となつて品川に足を向けたちあきだったけれど、ふと今の地点が変迅堂の家である文人長屋に近いことに気づいて、快足下駄やら使えそうな発明やらをかつぱらつて現在に至っている。「全くカツちゃんはダメよねー」ちあきは呟く。「道の真ん中でおねえなんて」

肩に掛けられているカツちゃんの半纏が、風に揺れてバサバサと鳴った。まるで、ちあきの言葉を笑つかのよう。

さて、そうやって江戸の街を疾走する事少し、ちあきは品川界限にまで足を踏み入れていた。大路には帰途を急ぐ江戸っ子たちが、ちあきとは逆方向に流れてくる。こんな状況で快足下駄を使うわけにもいかない。少し速度を緩めるしかない。

そうやってちあきと向かい合わせにやってくる江戸っ子たちは、皆笑顔だった。真つ赤な夕陽に背中を照らされているから、あまり顔の造作は分らない。けれど、その誰もが幸せそうな空気を醸していた。親子は手を握りながら。友達同士と思しき人たちは、お互いの顔を見つめ合いながら。おそらく、昼間の紅葉狩りについてあれこれと話しているのだろう。

ここにいてももちが明かない。

ちあきは裏道に入り、また快足下駄に頼る。ウィーンと音を立て、快足下駄はちあきのイメージ通りのスピードを出してくれる。

けれど、表通りと比べて、裏道はでこぼこしている。がたがたと快足下駄が鳴る。それにつられて、ちあきの頭もそのたびに揺れる。けれど、そんなことにかまっている暇はない。もっと速く。もっと速く！ 気持ちばかりが先に走る。

と――。

がちん、という鈍い衝撃の後、突然ちあきの体が浮いた。そしてちあきは前のめりに倒れこんでしまった。

「ぎゃふー！」

思い切り顔面から地面にぶつかるちあき。すぐにすくつと上体を

起して、後ろを見やる。ちあきの後ろには、ちよつとした石ころがあった。きつと快足下駄の車輪がその石ころを噛んでしまったのだろう。そして、つんのめって倒れてしまったのだ。

しかも――。

たちの悪いことに、そこら辺に置かれていたザルやらクワやらといったものがちあきに向かってガラガランと音を立てて襲いかかってくる。重くはないけれど、一々降り注いでくるものたちは、お祭り騒ぎのような盛大な音を立てる。

痛い。

ちあきは思わず自分の顔を手で触る。ざらざらとしている。それにちよつと湿っている。血でも出ているのだろうか。

けれど、ちあきは止まらない。

我が身に降りかかってきたクワやらザルやらを投げ捨てるや、すくりと立ち上がりぐいつと頬を腕で拭う。ぎりつと歯を噛んで前を向く。着物についた埃を払うのもそこそこに、また走り出す。

そうやって走るは狭い道だ。

だから、時折肩が路地の壁にぶつかる。時折飛び出している木片にぶつかる。けれど、そんなことを気にしてはいられなかった。

路地の底に切り取られた空は、まるでなつめのように赤くなってきた。その鮮やかな赤が、ちあきにタイムリミットとイヤな予感を迫る。

「先生、先生、先生！」

江戸の端っこで、ちあきはただそう呟きながら、延々走り続けた。と――。

悲鳴めいた声が、辺りの空気を引き裂いた。「うわあ!」「ひい!」。まるで、目の前にドスをちらつかされたチンピラのような声。そして遅れて、「しまった、取り逃がした!」「追え追え!」という声。さらに遅れて、「御用、御用」の大合唱。少し遠い、男たちの声。

いかにちあきが勘の悪い娘とはいえ、そんな声が示す状況がどん

なものか、想像くらいはついた。

捕り方？

ってエことは。

ちあきの頭の中のソロバンが、パチンと鳴った。

その瞬間、ちあきは耳を澄ましてその声の方に向いた。運良くというか悪くというか、その声は行く手のほうから聞こえる。そしてその声はどんどんこちらに近づいてくる。つまりは……。

ふん。

鼻息を荒く吐いて、ちあきはその場に仁王立ち。

さあ、来い！

かの弁慶もびつくりなくらいに威圧感たっぷりの仁王立ち。やがて、行く手から何者かが走ってきた。最初は芥子粒のような大きさでしかなかったけれど、近づいてくるにつれ、その姿が明らかになってくる。

二人。一人はボロの服を着ているいかにもな浪人さん。そしてもう一人は……。

二人目の風体が目に入った瞬間、思わずちあきはたじろく。

「な、何アレ」

ちあきがそう呟くのも無理からない。何せ二人目が、鎧武者姿なのだ。しかも、よく質屋の軒先なんかで見るような当世具足ではなくて、遠く平安の武士たちが使っていた緞の大鎧姿。

【4】

しかも、その鎧武者、件の浪人さんと手をつないでこちらに走ってくる。「御用、御用！」の掛け声が聞こえなかったとしたら、何かの仮装だろうかと疑うところだ。

けれど、気を取り直してちあきはふっと息を吐く。

やがて、向こうもちあきに気付いた。

鎧武者が足を止めた。

「ど、どうした！ 早く逃げないと」

そう言いながら、浪人さんはちあきに視線を向ける。鎧武者とちあきを見比べながら、得心したように頷くと足を止めた。

そうして対面する格好になったちあきたち。

どちらも声を発する事が出来ずにいた。どう話しかけていいものか、お互いに戸惑っているのだろう。けれどいつまでもお見合いをしているわけにもいかない。

びゅんと風が吹いた。カッちゃんの半纏が翼の羽ばたきのように鳴った。

その風が止んでから、ちあきは口を開いた。

「イエモンさん、だよね。あなたはここで止めるから。何があっても」

ぐいっと頬を腕で拭いたちあきは、浪人さんに目を向けた。

すると、その浪人さんは、驚きの目をちあきに向けた。

「なんで、俺の名を？」

意外に若々しい声だった。いや、近くで見ると、案外若いようだった。恐らくは二十代の前半くらいだろうか。顔になんとないあどけなさが残っている。けれど、着ているものが粗末なこともあって、遠目には三十歳代くらいに見えていたのかもしれない。

少し戸惑いながら、ちあきは答える。

「うん、助八さんから聞いた」

「助八……ああ、情報屋の助八さんか」浪人さん——イエモン——は少し顔をほころばせた。「助八さんの知り合いか。悪いんだけど、今ちよつと取り込んでてな。どうということのない用事なら、あとにしてくれないか」

ちらちらと後ろを窺うイエモン。

ちあきは答えた。

「いや、どうということのない用事じゃないんです」

「何だと？」

イエモンさんの戸惑いを尻目に、ちあきは続ける。

「情報屋仲間の間で、イエモンさんが辻斬りの下手人だっていう情報が流れているらしいんです」

その瞬間、イエモンはその顔を思い切りしかめた。いや、そんな生易しいものではない。憎悪と憤怒をないまぜにしてこつた煮にしたようなおぞましい顔をして、ちあきに向いた。

「その顔、やつぱりあなたが——」

ちあきの言葉を、イエモンが遮った。

「だったら、どうだと？」

ひんやりとした空気が辺りに流れる。それは決して、秋風だけのせいではない。

そんな冷たい空気の中、ちあきは続ける。

「うーん、ぶつちやけたことを言うかね、別にあたし、あなたが辻斬りであろうがなかるうが何のカンケーもないの。でも、あなたが辻斬りだっていうなら、あなたを止めなくちゃならない事情があるの」

「……事情、だと？」

「うん、事情」

イエモンに向かい、ちあきは指を二本立てた。そして、指を一本折りながら続ける。

「あなたを止めないことには四六時中一年三百六十五日何百年と会いたい人に会えないの。それが第一」

自分勝手な理屈。けれど、それが今のちあきの偽らざる気持ちだった。

イエモンは何も言わずに立ちつくす。

また、ちあきはもう一本の指を折る。なぜか、ちょっとはにかなだよつな困惑顔を浮かべながら。

「あと、あたしの友達があなたを止めたがつてる。うーん、それも違うかな。……その友達は、あなたの幸せを願ってる。友達がそうやってあなたの幸せを祈るなら、その友達のために一肌脱ぐのが江戸っ子ってやつでしょ？」

これも、偽らざる本音。

なぜだろう。心が乗った言葉というのはどんなにくぐもっていても相手の耳に届く。ちあきの小さな声は、イエモンの耳に届く。「……ああ、助八さんか。そうか。あいつは俺を止めたがつてるか」「うん。お岩さんとあなたのこと、すごく心配してた」「そうか」

まるで闇夜の中に揺らめく蠟燭のように揺らめくイエモンの言葉が、裏路地に響く。ゆらゆらと揺れる言葉尻は、はたしてイエモンの心中を鏡映しにしたものなのだろうか。

けれど、イエモンの心の中の天秤は、悪い方に振れたようだった。きっかけは、後ろから追い迫る奉行所の面々。御用、御用と声をそろえながら迫る男たちは、既にちあきの目に入っていた。もちろん、イエモンにだって分からないはずはない。追い詰められた格好になったイエモンの天秤は一気に振れた。

シャラリ。

腰にある刀を抜き放ったイエモンは、切っ先をちあきに向けた。

「お嬢さん、どいてくれ」

低くくぐもった声。さっきまでのイエモンのそれとは明らかに意を異にする声。

唾を飲みながら、ちあきはそれでも首を横に振る。

「どかない」

ちあきの目には、強い焔が灯っていた。絶対にどかない。そんなちあきの意思を代弁するかのような目が、イエモンを捉える。

迫りくる捕り方とちあきを見比べるイエモン。ギリギリと歯を噛みながら頭を振る。

が、ここで予想外のことが起こった。

イエモンの横に立つ鎧武者が動いた。

さっきまでまるで木石のように佇んでいた鎧武者が、胸から何かを取り出してブンと振った。鎧武者の手の中にあつたそれは一瞬のうちに槍の形を為した。そうやって一瞬のうちに取り出された槍を、鎧武者はちあきに向かって繰り出した。

ピッ。

槍の切っ先が、ちあきの首に浅い傷を作る。

思わずちあきは自分の首に手を当てる。じんわりという手の感触。思わず手を首から離して目の前にかざす。赤々とした染みがまるで異国の花が咲き誇っているかのように手の中に広がっていた。

動こうと足を出そうとするちあき。けれど、動けない。まるで自分の体じゃないかのように、自分の身が重い。それが相手への恐怖によるものだということに気付くのをさえ、随分と遅れた。

クポーン。

目を光らせる鎧武者は槍を構えた。ちあきに向かって切っ先を向ける。そして、ゆっくりと槍を引いて、ちあきに向かって突き出す――。

「おい！」

けれど、槍の手は止まった。いや、無理矢理止められた。

イエモンの声によって。

「槍を引け！」

そのイエモンの言葉に、鎧武者は素直に従った。手にある槍を一瞬のうちにたたんだ。

その鎧武者から視線を外したイエモンは短く怒鳴る。

「どけ」

けれど、ちあきは動けない。

小刻みに震える足がいうことを聞いてくれない。喉がからからで、言葉さえ出ない。唇の震えも止まらない。尻もちをつくことさえできない。

ち。

舌打ちをしたイエモンは鎧武者の手を引いて、ちあきの脇をすり抜けた。

目ですら二人を追えずにいるちあきは、ただ心の中で「なんで？」を繰り返していた。

なんで？　なんで？　なんで？　なんであたしの足が動かないのよ、バカ。この期に及んで何が怖いのよ！　なんで、なんで足が動かないのよ！？

言葉さえ出ないちあきは、ぼつねんと立ち尽くすばかりだった。

けれど。

不意にある光景がちあきの頭に掠める。

助八のさびしそうな笑顔。

あれはいつ見た顔だっただろうか。ひどく疲れた子犬のような顔を浮かべている助八。自分の心の奥にある思いを噛み殺しながら、それでも人の幸せを祈る人間の顔。あんな痛々しい顔を浮かべながらも、助八はそれでも笑う。

その笑顔が頭を掠めた瞬間、ちあきの中で何かが弾けた。その音を、確かにちあきは聞いた。

凍っていたちあきの心が、またゆつくりと動き出した。

イエモンさんを止めなくちゃ！　あたしのために、助八さんのために！

【5】

そんなちあきの心を汲んだかのように、足元の快足下駄が唸りを上げた。

ギヤギヤギヤギヤギヤ！

耳をつんざくようなモーター音。その音に一瞬遅れて、一気にトップスピードに乗る。あわてながらもちあきは何とか狭い路地で身を翻してイエモンの背中を追う。わずか十数間。追いつき追い越したのは一瞬のことだった。きつとイエモンからすれば、突然ちあきが目の前に現れたように見えたらう。

イエモンの前に立ったちあき。

ちあきの前に立たれて戸惑うイエモン。

「どけ！」

「どかない！」

ちあきはイエモンを見つめる。イエモンがちあきから少しだけ視線を外す。

「どいてくれ」

「どかない！」

「お嬢さん、頼む」イエモンは頭を少しだけ下げた。「見逃してくれ。じゃないと、お岩が……」

その声は、不思議とよく響き、宵闇迫る江戸の裏小路に響く。

お岩？ ああ。

ちあきは心の中でなんとなく得心する。

今日の前にいるイエモンがどんな理由で辻斬りなんかしているのかは分からない。最初は憂さ晴らしか何かで辻斬りをしているものだとはかり思っていた。けれど、そんなイエモンの口から衝いて出たのは、奥さんの名前だった。

どという経緯かは分からないけれど、イエモンの理屈の中では、奥さんのための辻斬りなのだろう。

だからこそ、許せなかった。

思い切りちあきは怒鳴った。

「バカじゃない!？」

「な、何だと？」

ちあきは続ける。

「そんなこととして、奥さんが喜ぶと思う？」

「喜ばないかもしれない」イエモンはぼそりと呟いた。「だが、俺は現在を守りたいだけなんだ。そのためだったら、何でもやってや——」

その言葉は、全て形になることはなかった。

何せ、快足下駄を思いっきり発動させたちあきがトップスピードに乗ったままで拳をイエモンに向かって突き放ったからだ。ちあきの拳固はイエモンの頬を捉えた。思いっきり頬を殴られた格好になったイエモンは裏路地の一角に積み重なっているたらいにぶつかる。がらがらと崩れるたらいがイエモンを包み、遂にはたらいの山に埋もれてしまう。

「ふざけんな、バカ！」

がらんがらんと音を立てるたらいの山に向かって、ちあきは怒鳴りかけた。けれど、語尾がかすれているおかげで少し優しげに響く。「あのさあ、なんで男の人っていつもこうなのかな？　なんで、女の人に相談なしに、そうやって危ないことをしようとするわけ？」

たらいの山の中から起き上がったイエモンは、ちあきを見据えた。殴られた頬を腫らしながら、それでもちあきから目を離さずにパンパンと服の埃を払う。

「……きつと、大事だからだろう。この浮世の中で誰よりも。それだけだろう」

ちあきは転がってきた小さなたらいを蹴り飛ばした。

「それが余計だつつの！　聞くけどさ、アンタの奥さん、あんたが守らなくっちゃならないほど弱い女なわけ？　そうじゃないでしょ？　……あたし、お岩さんに会ったよ。けど、そんな弱い人には

見えなかったもん」

立ちつくしたまま、イエモンはちあきをただ見つめる。ちあきの言葉には答えない。けれど、ちあきの言葉を何とか噛み砕こうとしていることは、傍から見ていても分かる。だからこそ、ちあきは何も口にしない。ただイエモンの言葉の先を待つ。

しばしの沈黙。

遠くに「御用」の声が聞こえる。それでも、イエモンは動かない。ちあきはただイエモンの言葉を待つ。

「俺は、俺は」

イエモンの中で、何かが弾けそうになるその瞬間だった。ふっ。

風切り音が辺りに響く。

え？

ちあきには何が起こったのか分からない。けれど、一瞬遅れて脇腹に響く衝撃と、体が浮かんでいる感覚がちあきに襲いかかる。思わずちあきは横を見た。やっぱりちあきの思うとおりだった。イエモンの横にいた鎧武者がいつの間にか槍を取り出して、ちあきの脇腹を痛打していた。切っ先は触っていないものの、遠心力のかかった一撃がちあきを宙に浮かせていたのだった。

うげ、しまった。

ふんわりと宙に浮かんだちあき、やがて地面に落ちる。着地しよと地面に足に向けてみたものの、まったく足に力が入らない。結果として、足から地面に崩れ落ちた。

そうして地面に転がった瞬間になって初めて、体の軸を食い破られるような痛みに襲われる。ビリビリと全身が痛む。

「お、おい！」

イエモンは鎧武者を睨む。けれど、鎧武者はイエモンを一瞥すらしない。

頭を振ったイエモンは、今度は地面に倒れるちあきを見つめた。
「……お前が悪いんだ」

けれど、そんな言葉はちあきの耳に入らない。痛い、痛い、痛い。ビリビリとした痛みがちあきを捉えて離してくれない。ぼつかりと穴があいてしまったかのように、打たれたところに感覚がない。その周辺が恐ろしく痛い。呼吸さえままならない。

はーはーはー。

無理矢理胸の中に息を取り入れる。冷たい空気が頭にめぐる。

痛いのは変わらない。けど。

ちあきは歯を噛んだ。

そして、ゆっくりと立ち上がる。

唇が震える。痛みのせいだ。けれど、それでも無理矢理に言葉を放つ。

「ふざけんな、バカ」

まともに直立できない。打たれた脇腹をかばいながら、何とか立っている。倒れそうになるから、「はしたない」なんて言ってもらえない。いつもよりも足を広げて立つ。

けれど、目だけは死んでない。

「な、なんでそこまで……」

イエモンが声を上げたその瞬間、ちあきの目にある光景が入った。驚きの顔を浮かべながら立ちつくすイエモンのはるか向こう。少し闇に霞む道の向こうから、三人の人影が見える。

しかも――。

思わず、ちあきは呟く。

「あれ、顔見知り」

何を言っているのか分からないとばかりに口をぽつかりと開くイエモンの後ろを走ってくるのは、ちあきの顔見知りだった。

はは。心の中でちあきは笑う。

ようやく見つけた、バカ。

そうやって走ってくる人の姿は、不思議とかすんで見えた。

「おい！ 神妙にしろ！」

ああ、このイヤミ声。

「つて、あれ？ あの子ちあきちゃん！？」

あ、この姉御肌の声。

思わずちあきは微笑む。

そして。

「え、ちあき殿？ ま、まさか！ つて、本当だ！ なんでここに！」

優しくて、かつこよくて、けど無粋でどうしようもない人。あたしのことを子供扱いしてばかりの人。いつまで経ってもあたしを女の子として見てくれない人。でも、この世界で一番好きな、あの人。

「へへ」

ちあきは短く笑う。ようやく追手に気付いたイエモンはちあきと見比べて舌打ちをし、ちあきの脇をすり抜けようとした。けれど、それをちあきは許さなかった。イエモンの袖を思い切りつかんで離さない。

「離せ！」

そんなイエモンの言葉などどこ吹く風、ちあきは言った。

「もう、年貢の納め時つてやつじゃない？」

ぐ、と息を飲むイエモンに、さらに声がかかる。嫌味っぽい声。

【6】

「小娘の言うとおりだ」

そう言い放つや、いつの間にかイエモンの後ろに立っていた仁杉与力は、十手をイエモンに向かって振り下ろす。あわててそれをかわしたイエモンは思い切り壁に肩をぶつける格好になった。

ちあきをイエモンから隠すようにして立ちほだかり、仁杉はちあきに声をかける。

「小娘、なぜここに」

「決まってんじゃん」斜に構えつつちあきは答えた。「あんたに先生を任せておけないから。そんだけ」

「フン」

鼻を鳴らした仁杉与力は左の刀を抜き払った。そして、鎧武者とイエモンを見比べる。と、ようやく算段が定まったのか、大音声で命令を飛ばす。

「おい、お道さん、アンタは浪人の方を頼む！ 俺はあの鎧の方に当たる！ 変迅堂は小娘を！」

「はいよ」

短く答えたお道はかんざしを頭から引き抜いてイエモンの前に立つ。そして、ちあきを守っていた仁杉は鎧武者に向かった。そして

「ち、ちあき殿！？」

変迅堂がちあきの前に立った。

「あ、先生」

ちあきは満面の笑みを浮かべた。と――。

がくんとちあきの膝が崩れた。けれど、今度は地面にぶつかつたりはしない。変迅堂がそれより前に抱き止めたからだ。

「ち、ちあき殿！？ 一体何があつたんですか！ それに、どうしてこんな怪我を！」

実はちあき、今とんでもない顔をしている。思い切り転んで顔を

少しすりむくわ、鎧武者に切り傷を作られるわ、果てには思い切り脇腹を打たれるわ。

けれど、ちあきは笑う。

「へっへっへ、これくらいなんて程のもんでもないよ」

「何言ってるんですか！　なんて無茶を！　なんでこんなこと……」

変迅堂の腕の中にいるちあき。変迅堂の胸の鼓動まで聞こえそうなくらいに近い距離。変迅堂の体温さえ感じるくらいに近い距離。心配に顔を歪める変迅堂の顔が、本当に近くにある。

ちあきは変迅堂の頭に自分の手乗つけた。

そうして変迅堂の頭を撫でながら、ちあきは言った。

「きつとあたし、ここに來たかったんだよ」

「へ？」

変迅堂には何の事だか意味が分からない。

「相変わらず無粋者だね、先生は」

「どういうこと？」

「さあ、どういうことでしょう？」

わざとおどけて見せるちあきの両眼から、涙がこぼれそうになる目頭が熱い。けれど、それをなんとか我慢しながら、頭をぶんぶん振って切り出す。まだ、言わなくちゃならないことがある。やらなくちゃならないことがある。

「あのさ、先生。お願いがあるんだけど」

「お、お願い？」

少し困惑する変迅堂に、ちあきは耳元で怒鳴る。

「こないたいけな女の子に怪我をさせたお詫び！　いい！？」

「ひいいい！」

鼓膜が破れんばかりの大声。目を回しかける変迅堂に、ちあきは続ける。

「あの浪人さん、——イエモンさんって言うんだけど——、文人長屋の助八さんの友達なんだ。なんとしても助けてあげたいの」

「うん、わかった」

変迅堂はこくりと頷いた。いつものほんとした顔ではない。薄氷のように冷たく、そして灼熱の炎のように熱い顔。

ふん、そんな顔もできるんじゃない。

ちあきは変迅堂の頬をぱちんと叩く。けれど、強くは叩けない。ぺちん。弱く響く。

「じゃあ先生、よろしく」

「けど、ちあき殿は……」

「あー、あたし？」ちあきは力なく笑う。「先生に抱きしめてもらったおかげで元気になったみたい。それに、そこらへんに座ってるから。ともかくよろしく」

「う、うん」

変迅堂はちあきを裏路地の端っこに座らせた。ちあきは親指を立てて変迅堂に笑顔に向けた。ニツと八重歯を見せる。その笑顔に薄く微笑み返した変迅堂は、くると踵を返してイエモンたちの方に走る。

そんな変迅堂の背中を見送りながら、ちあきは呟く。

「うん、これで、よし……」

地面に腰をおろしているちあきは、がつくりと頭を垂らした。

「仁杉さん！」

変迅堂が仁杉の背中に声を掛ける。

けれど、仁杉は振り返らない。刀を構えながら、鎧武者と対峙したままだ。変迅堂を一瞥さえしない。けれど、返事だけはしてくれた。

「おい、小娘はどうだ？」

「なんとか大丈夫そうでした！」

「ふん、まったく困ったものだな！」仁杉の呼吸は少しだけ荒い。

「下手人を追い詰めたかと思いきや、まさか目前で取り逃がすは小娘がこの件に首を突っ込んでいるわ！まったく上手くいかんものだ！……それより変迅堂！お前はお道の方を手伝ってやれ！」

「そ、それが」

変迅堂はお道の方に視線をやった。

五間ほど向こうにいるお道はかんざしを逆手に構えながらイエモンに対している。イエモンは刀を抜いているとはいえ、まるで抜け殻のように立ちつくすばかりだった。

「お道さんからも言われちゃったんです。 “ 仁杉与力の方を手伝ってこい ” って！」

「ふん」

仁杉は鼻で笑う。けれどその笑い方には全く余裕がない。

「まあ、助かるな。何せ相手は鎧武者だ」

仁杉の言葉に促されるようにして、変迅堂は鎧武者に視線をやる。典型的な槍構えを見せながら素槍を構える鎧武者が、微動だにせずにいる。緊迫には違いない。

そんな緊迫のさなか、変迅堂は叫んだ。

「仁杉与力！ 防毒お面を被ってください！」

「そ、そうか！」

仁杉が防毒お面を被るのが先か、変迅堂は眠り玉を鎧武者の足元に投げやった。遅れて少しして、眠り玉からシューシューと黄色い煙が飛び出す。そしてすぐに、あたりは黄色い煙幕につつまれる。

コフーコフーと呼吸しながら、変迅堂は指を一本立てる。

「眠り玉は半径二間にいる生き物の多くを眠らせる作用があります。鎧をまもっていてもそれは同じです」

「なるほどな」

この眠り玉の効果をもう何度も見ている仁杉、思わず刀を引いて腰に手を当てた。やっぱりコフーコフーと呼吸しながら。

辺りに広がる安心感。けれど、すぐにその安心は破られる。

黄色い煙幕の向こうから、銀色の切っ先が飛び出してきた。

「 突キイ！ 」

仁杉や変迅堂もすっかり煙幕の中に吞まれている。なので、全く状況が分からない。ただ、煙幕の向こうから飛び出してくる槍の穂

先を闇雲によけるしかない。

「おおおおおい！ 変迅堂！ どうなってる！？ “生き物の多くを眠らせる” んじゃなかったのか！？」

ブン、と音を立て迫りくる穂先をなんとかかわしつつ、仁杉は変迅堂にかみつく。

「いや、眠らせるはずですよ、間違いなく！ この眠り玉の成分は肺の腑から吸収されるんです！ 息さえしていさえすれば、どんな動物にも有効です！ ……ん？ 動物？ 肺の腑？ 息？ も、もしかして……」

うむむむむと唸りながら立ちつくす変迅堂。槍の穂先が飛んでくるこの場面で。

「もしかして、何だ！？ 早く言え！」

仁杉の言葉に、変迅堂は答えた。

「もしかして、この鎧武者、人間じゃないんじゃ……」

びゅんびゅんと押しては引いてくる穂先をかわしながら、仁杉は怒鳴る。

「人間じゃない、だと！？ どういうことだ！！ 何でもいいから早く結論を言え！」

「じゃあ仁杉さん！ あいつの兜を割ってください！」

「は！？」

【7】

突然何を言うのだコイツは、という心中が丸見えな仁杉の頓狂声。けれど、困惑しながらも刀を収めた仁杉は左に手挟んだ三振り目の刀を抜き払った。刃引きされている刀のようなそれは、相手の武器や兜を壊すのによく使われた鉄刀と呼ばれるものだ。

そんなこんな言っているうちに、黄色い霧が晴れてきた。霧の向こうには、槍をしごいて精密極まりない突きを繰り出す鎧武者の姿があった。

ふつと息を吐いた仁杉は前に出るのと同時に鉄刀を振りかぶる。蛇の頭のように飛び出してくる槍の穂先を一足でかわし、懐に入る隙だらけの鎧武者。刃引きされていない分、刀より重い鉄刀を腕の力を頼りに振り下ろす。その鉄刀は満月の形を描いて鎧武者の兜の鉢に極まった。

ガキン！

金属同士が弾けあう音。けれど、その中に、ピシリ、と固いものにひびが入るような音が潜む。さらに、ピシピシという音は大きくなる。やがて、骨を蝕むようなその音が止んだ。すると、鎧武者の兜が真つ二つに割れた。それに合わせて、頬当ても同時に落ちた。

「おー、さすが！」

「これでも剣の腕には自信があつてな」

ふふんと鼻を鳴らしてうそぶく仁杉。

けれど、次の瞬間、仁杉の表情が変わった。顎をガコンと開いて目をくわつと見開くその様からは、さっきまで余裕しゃくしゃくに鼻を鳴らしていた面影がない。

「な、なんだこいつは」

そうやって息を飲む仁杉とは対照的に、変迅堂はあまり驚かない。「やっぱりそうですか」

当り前のことであるかのように、変迅堂は呟く。

けれど、未だ状況が呑み込めない仁杉は困惑気味に変迅堂に問う。
「なんだ、コイツは！」

仁杉は鎧武者の顔を指した。

鎧武者の兜を割った。であるからには、その中には人間の頭があると考えるのが自然だ。けれど、兜の中にあつたのは人間の頭ではなかった。ばねやねじ、歯車や配線で、何となく人の顔に成形されたものだった。ふとした拍子にカタカタと歯車が動く。人間の目に当たる部分にビイドロで出来た球状のものがあつたけれど、人間の顔との共通点はわずかにそれだけ。

変迅堂は答える。

「絡繰です、恐らくは」

「絡繰？ 茶運び人形とかのあれか？ しかし……」

「そうです、あまりに精巧すぎます。普通絡繰は決められた動きを反復的にしか出来ません。けれど、この絡繰は違う。さながら人間のように臨機応変に動いています。と、いうことは」

「と、いうことは、何だ！」

促されるようにして、変迅堂は続ける。

「エレキテルによって制御されている可能性が大了。エレキテル回路を作れば、何十もの行動類型を取ることができるでしょう」

懐をまさぐった変迅堂は、その中から何かを投げやった。節分の豆のようにして飛ぶそれは、地面に落ちるや黄金色の輝きを一瞬だけ見せた。まるで稲妻のような。地面を走る稲妻は鎧武者の足から全身に一瞬にして広がり、一瞬だけ黄金色に光った。

「これは、瞬間エレキテルです。雷とほぼ同じ力を持つエレキテルを一瞬だけ放つものなんですけどね。これで、エレキテル制御をされているものは活動を停止——」

するはずです、という変迅堂の言葉は、他ならぬ鎧武者によって阻まれた。

黄金色の光に包まれたはずの鎧武者が、動いた。

手にある槍を大きく振りかぶり、一陣の風のように鋭く振り払っ

た。

「え!？」

槍の穂先が変迅堂をすっかり捉えている。変迅堂の胸に穂先が迫る。元々武芸が得意でない変迅堂、ただ立ちつくすばかりだった。

「ちっ!！」

仁杉の判断は速かった。鉄刀を捨てて変迅堂の腰に向かってタツクルをかます。そのタツクルによって宙に浮かんだ変迅堂と、勢い余って宙に浮いてしまった仁杉は、二人仲良くもつれ合いながらドンガラガツシャンと壁に激突する。

「痛い! 本当に痛い! 腰が、腰が!」

悲鳴を上げる変迅堂の頭を仁杉が小突く。

「馬鹿かお前は! あの槍を食らってたら“痛い”じゃ済まんぞ! それに」

仁杉は路地の端っこで腰をおろしているちあきに目を向けた。

「そんなことでは、あの小娘を守れんぞ、変迅堂」

その言葉に、変迅堂の顔色が変わる。痛みに歪めていた顔から、甘えの色が消える。

「そうですね」

こくりと頷く変迅堂は立ち上がる。そして仁杉の手を持って立ち上がらせると、鎧武者に向いた。

さて。頭を掻きながら、変迅堂は言う。

「仁杉さん。ここからが正念場です」

「ああ、分かってる。なかなか骨が折れそうだ。全く、ロクでもないことばかりだ」

変迅堂は笑う。

「全くです。瞬間エレキテルも効かない。恐らく肝心な個所には絶縁処理でもしているんでしょう。となると、この絡繰を倒すためには、物理的に壊すしか手がありません」

「ブツリテキ?」

「簡単な話です」変迅堂は言う。「動かなくなるまで叩いて壊す。

それだけです」

「分かりやすい説明だな、変迅堂」仁杉は笑う。「今までのお前の言葉の中で、一番洗練されていて分かりやすい言葉だぞ」

「一言余計ですよ、仁杉与力」

きつと眼力を込めた二人は鎧武者に向いた。

醜悪な素顔を見せたまま立ちつくす鎧武者は、いかなる感情をも露わにしない。ただ、槍を構えるばかりだった。まるで、それが自分の存在意義だと自己主張しているかのよう。

一方その頃――。

「ねえ、アンタ、いつまでそうやって突っ立ってるつもりなのかしら？」

イエモンに対するお道はカリカリしていた。

ぼーっと呆けて動かないイエモン。けれど、気を張り詰めないわけにはいかない。何せ、呆けているとはいえどもイエモンは刀を抜いて立っている。緊張の糸をいつまで経っても緩めることができない。カリカリしないはずはない。

しかも、しかもである。

こういう修羅場で、なんで自分がこんな目に！ という思いに襲われているのだった。

この手の修羅場の場合、しかも男二人に女一人だったなら、男二人がばらけてことに当たるのが筋だろう。なのに、どうして女である自分がダンビラを抜いたヤツを独りで抑え込んでいなくてはならないのか。

きー！

心中穏やかではない。けれど、誰に文句を言うわけにもいかない。けれど、いつまでもこのままというのもキツイ。

イエモンから意識を外さないまま、お道は仁杉たちに視線をくれる。どうやら、鎧武者に男二人で苦戦しているらしい。ここは自分一人で切り抜けるべきなのだろう。

ただの一般人でしかないお道だったけれど、女の細腕一つで江戸

を渡ってきた。ヤバい修羅場も自分の腕だけで切り抜けた。男社会の中で生きた商売者としての誇りみたいなものがお道に妙な力を与える。かんざしを逆手に構えたまま、様子をうかがう。

けれど、イエモンに動こうとする様子がない。まるで浮かぶ雲を眺めているかのように胡乱に空を見上げるイエモン。

構えを解かないままで、お道が口を開く。

「ねえ、アンタ、聞いてる？ 聞いてるんだったら、ダンビラをしまいなさい」

無反応。

「ダンビラをしまつて！」

無反応。まるで石像のように何も言わずに立ち尽くすイエモン。

「ダンビラをしまつ！」

無反応。

ぶっちん。

さすがに堪忍袋の緒が切れそうになる。ていうか切れた。思わずかんざしを投げつけたくなる衝動に駆られる。けれど、そんなことをするわけにもいかない。刺激したらまずい。

かといって何もしないのは癪。

すたすたとイエモンとの歩を詰めたお道。そのまま殴つてやろうかしらん、という肚だった。

が――。

びゅん！

一陣の風が吹いた。いや、違う！

たまらずお道は後ろに跳ぶ。やはり案の定だった。一瞬のうちにイエモンが手にある刀をなぎ払ったのだった。もはや刀は目に映らない。ただ風切り音だけが響いた。

怖い怖い。けれど、その怖さを抱えたままでは恐怖に押しつぶされてしまう。お道は声を上げる。

「あのねえ！ いきなりダンビラを振るなんていい度胸じゃない！」
右手の刀をブンと振ったイエモンは顔を上げた。

瞬間、お道は身の危険を覚えた。さっきまである意味で気楽に構えていたお道だったけれど、ことがここまで至って初めて肚の奥からわき上がるような恐怖を感じ始めていた。

それは何も、ダンビラを目の前で振るわれたからではなかった。

なにより、イエモンの顔があまりに恐ろしい。

無表情だった。イエモンの双眸には、いかなる感情の炎をも灯っていない。喜び、悲しみ、怒り、楽しみ。どれも無い。まるで人形のように何の感情をも灯らない表情を張り付けて、ただ立ちつくしていた。その顔には、暴力を楽しむ人間の俗悪さが無い代わりに、人を傷つけてしまうという憂いの色さえもない。

まるでさっきまで雰囲気が違う。さながら、イエモンの魂が抜けてしまつて、代わりにまがまがしい何かが滑り込んだかのようなだった。

や、やばい、かな？

そのお道の予感はある。

「ウエアアアア！」

まるでそれは、サルの雄叫びだった。どんな理屈もない。理性も何もない。そして、その声と同時に手にある刀を振り払ってくる。そのどれもが鋭い。事実、空を切る切っ先は途中壁やたらいといったものを斬りつけてはいるけれど、刀の方に損傷が全くない。斬ら

れた壁には大きな刀傷ができたし、たらいは真つ二つになっていた。
なんで！？ 何がどうなってるわけ？

さっきまでと全然違う。お道はイエモンの変化を感じ取っていた。
けれど、なすすべなく後退してゆくしかない。ざりざりと後ろずさ
るうちに、背中が何かとぶつかった。

「うわっち！」

後ろの声に思わず振り返ると、ちよつとバランスを崩す変迅堂が。
「あ」

変迅堂の横には、冷や汗をダラダラ流す仁杉の姿が。そして、変
迅堂と仁杉の背中越しに鎧武者の姿がある。その瞬間、お道はある
ことに気づく。

その気づいたことを、背中越しの仁杉に向ける。

「ねえ、もしかして、私たち囲まれてないかしら？」

ちつ。仁杉は舌打ちをする。

「ああ、忌々しいが、実にその通りだな」

そう。位置関係としてそうなっている。変迅堂・仁杉・お道が背
中を合わせて相手に対峙している。ということは、変迅堂たち三人
はすっかり囲まれているというわけだ。

「あのう、仁杉さん、奉行所の方々はどうしたんでしょうか」

ぶるぶると震えながら発された変迅堂の至極まっとうな問いだっ
たけれど、その問いに明確な答えを出すことができない仁杉は
腹立ち紛れに怒鳴る。

「知らん！ まったく、俺たちよりも前を走っていたくせに、どこ
で油を売っているのやら！」

それに、と仁杉はお道に向かい怒鳴る。

「なんでお前が俺たちの後ろにいる！ イエモンはどうした！」

「だだだ、だつて！ イエモンさんの様子がおかしいんだもの！
さっきまでと様子が全然違うの！」

言われて初めて、イエモンの変化に気づく仁杉&変迅堂。逆に言
えば、一瞬ちらと見ただけで分かるほど、イエモンは異様な空気を

放っていた。

「前門の虎、後門の狼、か」

「ば、万事休すですか？」

「やっぱー」

三者三様に感想を口にした。前には槍を構える鎧武者。後ろには刀を振り回すイエモン。

その、瞬間だった。

ガコン！

金属がひしゃげるような音が響き、鎧武者が地面に崩れ落ちた。

そして、その鎧武者の背後には、五尺はありそうな刀を地軸まで振り下ろした姿で佇む小男の姿があった。

「へ、だ、誰！？」

お道の涙目発言に、その小男は不服そうな声音で応じた。

「誰だ」とはご挨拶な」

あ！

お道にはすぐにピンときた。五尺もの長い刀を操る小男。そして、あの鎧武者を一撃で潰してしまうほどのヤツ。そんなヤツ、江戸広しといえど一人しかない。

そう、三人の前に現れたのは文人長屋店子・浅兵衛だった。

そして。

ベベベン。

宵闇近づく空気をつんざく高音。イエモンの後ろから聞こえるその音色はどこか荒々しい。だしぬけに響く音に驚いたのか、イエモンが後ろを向いた。その瞬間。

「おらア！」

そんな掛け声に遅れること一瞬、イエモンは宙に浮かんで地面に落ちた。イエモンが立っていたところには、三味線を構えたまま右足を振り出して佇む勘一の姿が。

予想外な登場に、お道は半ば涙目。

「えええええ！？ どうしてあんなたちここに來たわけ！？ あん

たたちにはこの話をしていないはずなのに！」

その言葉に答えたのは勘一だった。ベベベン、と節をつけながら答える。

「ああ、助八から話があつてよ。“手伝つてくれ”つて。それで来てみれば結構な修羅場じゃねえか。そんなわけで、割り込んでみた」
あつけらかんとした言葉は、何となく勇気をくれる。

「俺も勘一に同じく」と、浅兵衛も言う。「助八から聞いた」

「良かった！ あんたたちが来てくれれば百人力、いや千人力！

つていうかもう倒しちゃったんでしょ！？ さすが文人長屋の武闘派二人！！ どこそ男二人より頼りになるわ！！」

お道の涙目の言葉は、浅兵衛によつて袖にされる。大太刀を構え直しながら、地面に崩れる鎧武者を睨む。

「お道さん、そう話は簡単ではない」

「ど、どういうことよ」

その言葉に答えたのは勘一だった。勘一は勘一で地面に倒れるイエモンから目を離さない。ひゅつと息を吐いて、つまらなそうに口を歪める。

「お二方、まだやる気みたいだぜ」

まるでその言葉に呼応するかのように、のろのろと起き上がる鎧武者とイエモン。ふらふらと起き上がる様は陽炎のようだった。けれど、なぜかそんなボロボロの二人には威圧が残っている。むしろ、さつきまでよりも醸す威圧が増えたようにさえ思える。

クポーン。

「……」

鎧武者もイエモンも、何も言わずに立ち尽くす。雨の日に仕舞い忘れられた洗濯物のように、二人ともがボロボロだった。けれど、二人とも、一歩ずつ足を踏み出した。鎧武者は浅兵衛に。そしてイエモンは勘一に。イエモンの足取りはおぼつかない。だが、それゆえに恐ろしい。鎧武者の背中には、浅兵衛がさつき刀で斬りつけたときに出来たのだらう大きな傷が出来ていて、その傷からゼンマイ

や歯車、配線などを覗かせていた。

「ん？」

変迅堂は首をかしげる。

横にいた仁杉が変迅堂を咎める。

「なんだ？」

けれど、変迅堂の耳には仁杉の言葉が届いていないらしい。ただ、鎧武者の背中を眺めて怖い顔をしている。だが、いい加減付き合いの長い仁杉には分かる。変迅堂が今見せている顔は、何かを考えているときの顔だ。そして、変迅堂の考えがハマれば、状況が打開できるに違いない。

だからこそ、仁杉は何も言わずに変迅堂が口を開く瞬間を待った。その甲斐あって、案外早く変迅堂の頭に答えが閃いたらしい。満面の笑みで仁杉に向いた変迅堂は指を一本立てた。

「仁杉さん。あの鎧武者、私がなんとかします」

「な、なんとかだと？ お前に？」

あの鎧武者をか？ さっきまで男二人で圧されっぱなしだったあいつをか？ お前が？ そんな仁杉の疑問を察しているのか、変迅堂は重ねて言う。

「ええ。私がなんとかします」

その顔はあまりに確信に満ちていた。その顔のまま、変迅堂は続ける。

「ですから、仁杉さんはあの浪人さんを何とかしてください。お道さんも勘一さんも、普通の一般人ですからね。危ない目に合わせるわけにいかないでしょ？」

「それはそうだが……」

なおも洩る仁杉に、変迅堂は微笑みかける。

「大丈夫です。僕を信じてください」

しばし変迅堂の顔を覗き込む仁杉。なんのつもりか首を縦に振る変迅堂。

——フン。安心しろとでも言いたいのか。変迅堂の分際で。

仁杉はクルリと踵を返す。黒羽織の裾が少し宙を舞う。

「いいだろう。信じてやろう。……ただし」

イエモンに向かって飛び出したのと同時に、仁杉は言葉を放った。

「怪我をしないこと！ いいな！」

「はい！」

変迅堂も、鎧武者の背中目がけて飛び出した。

前をゆっくり歩く鎧武者は、まったく変迅堂に気づく様子がない。重そうに足を振り出す鎧武者は大太刀を構えて佇む浅兵衛だけに注意を放っていた。

懷をまさぐりながら鎧武者との距離を詰める変迅堂。懷の中から探り当てたそれを秘めて懷から手を出すや、懷にあったそれを鎧武者めがけて投げた。

それは、さっき投げた瞬間エレキテルだった。

もちろん、さっき効かなかったものをそのまま投げる変迅堂ではなかった。

変迅堂の手を離れた瞬間エレキテルはあるところを目がけて飛んで行った。その、“あるところ”とは――。

浅兵衛が鎧武者の背中についた、刀傷。

内部構造が覗いて見える刀傷――隙間――目がけて、変迅堂は瞬間エレキテルを投げ放ったのだ。そして、その変迅堂の意思通り、ゆるい放物線運動を描いた瞬間エレキテルはその隙間に入り込み、一瞬後に。

爆ぜた。

バチーン！

シューウウウウウ。

関節という関節から黒い煙を吐き出した一瞬後に、鎧武者は両膝をついた。まるで正座をついたかのようにして地面に落ちた鎧武者の向こうには、驚嘆の色を隠せない風の浅兵衛が立っていた。刀の先にこもっていた緊張を少し解きながら、浅兵衛はぽつりと呟く。

「な、何があつたんだ」

変迅堂は浅兵衛に悪戯っぽい笑顔を向けた。

「浅兵衛さんのおかげですよ」

「どういう意味だ」

「内部構造まで絶縁がされていなかったってことです」

「ナイブコウゾウ？ ゼツエン？ なんだそれは」

「要は、もうこの鎧武者が動くことはありません。そういうことです」

ちんぷんかんんな話に首をかしげる浅兵衛を尻目に、変迅堂は振り返る。

その変迅堂の視界には――。

「ああもう、ようやく助けに来てくれたってわけ？」

「ふん！ うるさい！ 耳元で騒ぐな！」

お道と仁杉がギヤーギヤー言いあいをしていた。そして、その二人の前には刀を片手に持ちながら勘一に歩を進めるイエモンの姿がある。

「おおお、おい！ お二人さん、そんな言い合いしてる場合じゃねえだろ！」

勘一は少し後ずさりしながらギヤーギヤー騒ぐ。

そんな勘一に、イエモンは一步一步距離を詰めてゆく。ざり、ざり。地面がまるで誰かの嘲りのように鳴る。

ひゅつと息を吐きながら、イエモンは刀を思い切り振り上げた。その刀の間合いの中には、既に勘一が入っている。が、勘一は肝を

冷やしてしまっているのか、すっかり硬直しきっている。

「い、いかん！」

仁杉は刀を捨てて飛び出した。すぐにイエモンの背中に追いつがるや、動きを取らせまいと羽交い絞めに持つていこうと腕を動かす。傍から見て、仁杉の動きにはキレがあった。恐らくはこういう修羅場をいくつもくぐっているのだろう。だが。

羽交い絞めにされるやされないやの間に、イエモンはその仁杉の手を振り払った。いや、振り払ったなどという生ぬるいものではない。体の筋力全てを使つてすぎる仁杉の体そのものを払い飛ばした。思いつきり体を振り回される格好になった仁杉。やがてイエモンから手が外れ、壁に思いつきり背中から激突した。壁にぶつかり、ずるずると地面に落ちそうなところをなんとかこらえながら、仁杉はイエモンを睨む。

「な、なんて力だ、これは一体……」

人一人を振り払うほどの力。確かに、大の大人の中にはそんな芸当ができる人間がいるだろう。だが、さして上背が高いわけでもなく、筋骨隆々とは程遠いイエモンがそれを為してしまった。この場にいる誰もが、目の前に立つイエモンに常ならぬものを感じ始めていた。

そんな中。

「こまつたもんです」

ため息とともに、場の空気が割れた。

その言葉の主は、変迅堂だった。

「僕の発明が、悪用されてますね」

場にいる全員が変迅堂に向く。全員が、顔をしかめる。

「どういう意味だ」

仁杉の困惑交じりの言葉は辺りに広がり、夕陽に溶けてゆく。余韻がすべて消え去るのを見計らったかのように、変迅堂は答える。

「その浪人さんの持っている刀ですけどね。あれ、僕の発明なんです。もっとも、僕の作ったそれは、剣術が上手くない人の教練に使

う竹刀だったんですけど。柄に流れる微弱なエレキテルで腕の動きを制御して、効果的な振りに矯正する、っていう」

「その発明がなんだと？」

仁杉の言葉にせかされた格好になった変迅堂は、言葉を重ねる。

「それを作っている段階で、腕の力まで強化してしまった失敗作があったんです。もちろん失敗作ですから、しっかりと廃棄したはずですが」

しかも。変迅堂は頭を掻く。

「その失敗作には、とんでもない副作用があったんです。……柄を持った人間の自制心を奪うっていう効果が見受けられたんです」

「それって、つまり」

お道の言葉に、変迅堂は頷く。

「どういう経緯かは分かりませんが……。なぜか私が捨てたはずの発明が、こうして浪人さんの手にある。そしてそのせいで大暴れしているってことでしょう」

その言葉のしじまに、イエモンはだらりと下げていた刀を構える。正眼に構えた切っ先とほぼ同じ高さにある目はひどく虚ろで、殆ど焦点が定まっていない。

「変迅堂、お前に訊きたいことは沢山ある。が」仁杉は短く言い放つ。「とりあえずは止めなくてはならんか」

仁杉は角帯に差してある十手を取った。いつも手になじませている螺鈿細工のものではなくて、黒く地が光る実用一点張りの十手。そして、身をかがめて一步一步間合いを詰める。

変迅堂も、イエモンとの間合いを詰める。

にじり寄る二人。そして、二人を恐ろしい顔で見比べるイエモン。先に大きな動きを見せたのはイエモンだった。

「ハアアアアアア！」

絶叫しながら放たれる横薙ぎ。しかも、思い切り踏み込みながら。仁杉はそれを察知し、何とかかわしきれた。

が、例の如く、変迅堂は対応しきれていない。

「あ」

短く嘆息する変迅堂。

絶体絶命。変迅堂の首元に、イエモンの放つ剣閃が迫る――。

が、不意にイエモンの手が止まった。ぴたりと止まった切っ先を見つめつつ、がくがくと震える変迅堂は、やがてぺたんと地面にへたり込んだ。

そうやって変迅堂の首がつかっているのは、突然に辺りに響いた声のおかげだった。

「イエモンさん！」

鈴を転がしたような声に、場にいた全員が声の方に向く。その声の方には大人しい色の小袖をまとった女の人が立ちつくしていた。若い。恐らくは二十代だろう。走ってきたのだろうか、少しだけ小袖が着崩れていた。肩で息をしながら桃色の唇を震わせる様は、本当にきれいだった。

そして、その後ろに。

「はあはあ。なんとか、間に合ったでやんすか……」

助八が続いていた。

「ちよつと助八さん！ どういうこと!？」

ギャーギャーうるさいお道に、肩で息をしながらむせる助八はほうほうの体で答える。

「ああ、イエモンさん、この浪人さんのお内儀さんで、お岩さんでやんす。きつと、この場を何とかできるのは、お岩さんだけだと思いやして」

そうなのだ。

助八が今まで何をしていたのか。そう。助八はノビてしまった力ツちゃんを医者に連れて行ったり、勘一・浅兵衛に助けを求めただけではなかった。お岩のところに行き、お岩をなんとかここまで引っ張ってきていたのであった。『イエモンさんがあんなことをするわけがない。もし犯人だというなら、何か事情があるに違いない』と考えての結果だった。

「イエモンさん」

光に誘われる蝶を思わせるような足取りで、イエモンに近づいていくお岩。足がおぼつかない様子だったし、事実なんてことないところで転びそうになっていた。けれど、きれいな造作をした顔に収まる両の目には、明確な意思の炎がたぎっていた。

「イエモンさん、何をしているの」

お岩の言葉に、イエモンは何も答えない。焦点の定まらない目は相変わらずだったけれど、その表情には妙な影が差した。それを狼狽と取るのは、樂觀が過ぎるだろうか。

さらに歩を進めながら、お岩は唇を動かす。

「イエモンさん。ねえ、答えて。何をしているの？」

イエモンは何も答えない。

遂にイエモンの前に立ったお岩は、刀をモノともせずイエモンの両肩を持った。そして、ガクガクと揺さぶりながら聞き続ける。

「イエモンさん？　ねえ、イエモンさん、忘れちゃったの？　私との約束」

少しずつ、お岩の言葉が不明瞭になってゆく。しゃくりあげるよ

うな嗚咽が混じり始める。それと同時に、両の目からポロリポロリと涙が流れて地面に吸い込まれてゆく。ぼけっと佇むイエモンの胸に顔をうずめながら、お岩は続ける。

「ねえ、本当に忘れちゃったの？ 私はずっと、その約束だけがあればいいって思ってたのに。なのに、イエモンさんは忘れちゃったの？ ねえ、ねえ」

約束。

その言葉に、イエモンは一瞬肩を揺らせた。

え？

お岩は顔を上げた。

確かに、イエモンの顔に変化があった。

さっきまで無表情に近かったはずなのに、まるで痛みをこらえるかのような顔へと変化していた。いや、それも違う。何かに思い悩んでいるようにも、何かに苦しんでいるようにも、あるいは何かを恐れているようにさえ見えるその顔。

「う、う、う」

声にならない声が、イエモンの口からこぼれる。

「イエモンさん」

イエモンの顔を見上げながら唇を動かすお岩の目にたまる涙。いくら我慢しようとしても、留まる事を知らない。

「イエモンさん！」

「う、う、う」

イエモンの顔色が変わった。

「ウワアアアアアア！」

それは絶叫だった。怒りによるものとも、悲しみによるものともとれる。けれど、どっちの感情によるものなのかは誰にもわからない。きつと、イエモンにだって分かっていないのだろう。

が、イエモンの手は、明確な行動を見せた。

ドン！

「きゃ！？」

尻もちをつくお岩。イエモンが、左手でお岩を振り払ったのだ。
た。

そして。

「ウエアアア！」

右手の刀をまた握り直し、仁杉に迫った。

もちろん、反応できない仁杉ではなかった。右手に持っていた十
手を構えてその剣閃に応じた。けれど。

カッキーン。

甲高い間抜けた音とともに、十手があらぬほうへ飛んで行つてし
まった。刀の勢いをさばききれず、結局手からすっぽ抜ける格好と
なってしまったのだった。しかも、刀を抜こうにももう全ての刀を
抜いてしまっている。仁杉の刀は全て既に地面に転がっている。

「しま」

ニヤリと笑い、イエモンは切り払った刀を旋回させ、仁杉に繰り
出した。
と。

仁杉と刀の間に、お岩が滑り込んだ。

両手を広げて立ちほだかる様は、さながら蝶々のようなだった。

「な！？」

「え？」

「おい！」

「い！？」

「きゃ！」

時が凍る。

五者五様の叫び声。けれど、一番危機にあるはずのお岩は声を出
さない。ぐっと桃色の唇を噛みしめながら、イエモンを見つめてい
る。その目には全く恨み節がない。むしろ、憐れんでいるようにも
見える目をしていた。

が、凍り切った時間の中、唯一動いた者があつた。関節を動かす
たびにバチバチと音を立てるそれは、さっきまで見せることのなか

った俊敏な動きを見せた。一瞬にしてイエモンとお岩の近くにまで達するや、仁杉とお岩を肩で突き飛ばし、イエモンの剣閃の前に立った。

クポーン。

そう。イエモンの前に立ったのは、変迅堂が壊したはずの鎧武者だった。

がしゃ。

思いのほか鈍い音が響く。斜め上から振り下ろされた剣閃が、鎧武者のやわな頭部にめり込んだ。

クポーン。

まるで、またたきでもするかのように光る眼。けれど、その光はどんどん弱くなつてゆく。そして遅れて、関節から鳴っているのと同種の音がし始める。

バチバチバチ！

鎧武者の頭で鳴っていた電流が、イエモンの持っていた刀にまで伝播する。そして、柄でも同じような音がして、やがて柄から黒い煙が出始めた。

イエモンは両膝をついた。

それから一瞬遅れて、鎧武者も地面に崩れ落ちた。頭とヒザを地面につけて「くの字」に倒れる様はさながら尺取り虫のようだった。けれど、誰一人としてそんなことは言わなかったし言えなかった。

「お、おい」

ぼーっとしてあんぐりと口を空けていたイエモンだったけれど、やがて声を発した。顔には全くさっきまでの狂気の色がない。

「おい！ おい！」

鎧武者の両肩を掴み、がくがくと揺らす。けれど、鎧武者はほとんど反応を見せない。ガクガクと肩を揺らしているうちに、頭にめり込んでいた刀がゆつくりと抜け、地面に転がった。それとともに、どんどん関節が外れて手や腕のパーツが崩れてゆく。がしゃんがしゃんと音を立て、どんどん人の形から遠ざかってゆく。

「おい！　しつかりしろ！」

イエモンの言葉だけが辺りにこだまする。この中で、鎧武者とイエモンの関係を知っている者は無かったけれど、あまりに悲痛な言葉の響きに誰一人として割り込むことができずにいた。

イエモンの手の中で、死にゆく鎧武者。

クポーン。

大きく、目を光らせた。まるで、消える直前に爛々と輝くロウソクの炎の如くに。

そして、イエモンの耳には、確かにこんな言葉が届いた。

「我は、人を殺めることでしか存在が認められぬ絡繰。されど、人を生かすところに己の存在を置きたかった。我が運命は憎まぬ。ただ――。主は人を生かすところで生きてほしい」

その声が耳の中で溶けた瞬間、絡繰の頭がどしゃんと地面に落ちた。

【1】

黄色く光る月が江戸の闇夜を照らす。板葺の長屋の屋根屋根を黄金色に輝かせながら、月は笑う。

すれ違う人もない。まるで江戸じゅうが時を止めてしまったかのように、しんと静まり返っている。ただ、足音だけが辺りに反響する。

そんな中、ちあきはふと眼を覚ました。

「……ん？」

目をこする。ふわふわとした黄色い光に包まれた江戸の街。体も不思議と軽い。まるで、空に浮いているみたいだった――。

いや、違う。本当に浮いている。いや、もっと正確には。

誰かに、背負われている。

ちあきはようやく、目の前にある大きな背中に気づく。紺色の着流し。そして、月代をそり上げていない髪の毛。ようやく、ちあきは気づく。誰が自分のことを背負っているのかを。

「先生？」

ちあきの言葉に、ちあきを背負う変迅堂が応じた。

「ああ、ちあき殿。寝てていいよ」

優しい声。心から安心する声。背中から薫る先生の匂い。背中に顔をうずめつつ、ちあきは口を開く。

「……先生のスケベ」

「な、何が！」

「手」

「あ、ああ！」

変迅堂は自分の手の位置に思いが至ったらしい。あわあわと反論する。

「仕方がないでしょ？ 背負おうと思ったたら……」

そう。人を背負おうと思えば、当然両手は背負う人間の太ももから尻辺りを掴むことになってしまう。実に当り前のことだ。

あわて気味な変迅堂のことを、ちあきはふふつと笑い飛ばした。

「まあ、いいや。疲れちゃったから」

くふー、と深くため息をついて、ちあきは変迅堂の肩に回している腕に力を込めた。けれど、優しい抱擁。ふとあることを思い出したちあきは、変迅堂に訊く。

「ねえ、先生、イエモンさんはどうなったの？」

“イエモンさん”？ ああ、あの浪人さんね。仁杉さんが何とかしてくれるよ」

変迅堂曰く、ことが何とか収まった後に仁杉が「この浪人を引立てる」と言い放ったのだという。けれど、そうやって真面目くさった顔を浮かべる仁杉が変迅堂に視線を寄こした瞬間、仁杉は不意に顔を緩めたのだという。

安心しろ。

そう言っているように思えた、とは変迅堂の弁。

「あの人がああいう顔をするときは、なんとかしてくれる時だよ。

あの人、なんだかんだで優しい人だからね。いい加減付き合いも長いから、あの人の行動も分かってくるよねえ」

呑気な変迅堂の言葉が優しく響く。

それよりも。

変迅堂は後ろを向いてちあきに微笑みかける。

「ちあき殿、これから医者に連れていくから。もう少し我慢してね」

医者？

その言葉を聞いた瞬間、不意にちあきの体が疼いた。

「イテテ！ あ、ホント痛い……」

「だだだ、大丈夫！？」

大丈夫なわけがない。鎧武者の槍のなぎ払いを受けているのだ。刃先で食らったわけじゃないから流血はしていないけれど、もしかしたら骨の一本や二本は折れているのかもしれない。

「なんとしても、お医者様に治して頂くからね！ 嫁入り前の娘さんを怪我させたとなったら、色々和不味いもの」

ちあきに言い聞かせるようにしてゆるゆると歩く変迅堂。けれど、ちあきは変迅堂の後ろでもじもじしながらも口を開いた。

「……まあ、先生が貰ってくれるっていうなら、別に治らなくてもいいんだけどね」

実はちあき、この一言に全身全霊を込めてみたつもりだった。

まあけれど、そこは日の本一の無粋者、変迅堂なわけで。

「治らなくていい」なんて言うもんじゃないよ！」

と、若干ずれたことを言うのだった。

ああ、もう！ この無粋者！ つうか鈍感！ 死ね！ つうかあたしが。す！

変迅堂の背中に思い切り正拳をかましたくなるちあきだったけれど、体中が痛いのでどうしようもなかった。でも、そのおかげで、普段のツンケンした虚勢はなりを潜めていた。代わりに飛び出してくるのは、ちあきの偽らざる本音の言葉だった。

「ねえ、先生」

「ん、なーに？」

間延びした変迅堂の言葉は闇夜に溶ける。その言葉を見送りながら、ちあきは続ける。

「なんで先生は、あたしに何にも話してくれないの？」

「ちあき殿には何でも話してるじゃない」

「ウソツキ。ウソツキは泥棒の始まりだよ、先生」

ちあきはうずめていた顔を上げて、変迅堂の肩に顎を乗せた。変迅堂の頬に自分の頬を添わせながら、ちあきは続ける。

「今回の件なんてそう。何にもあたしに話さないまま、危ない目に合ってるじゃない」

「今回の件はしょうがないんだ。だって、危ないことは最初から分かってたんだ。ちあき殿たちをそんな目に合わせるわけにいかないよ」

ふと、二人の間に沈黙が滑り込んだ。

長い長い沈黙。変迅堂の履物の音だけが辺りにこだまする。月が
気まずい二人をハラハラしながら見下ろしている。

その沈黙を破ったのは、ちあきだった。

「先生。先生にとつてあたしって、お荷物なの？」

「な、何を——」

変迅堂の言葉を遮りながら、ちあきは続ける。いつもの元気はどこにもない。湖の真ん中にぼつぼつと浮かぶあぶくのような言葉たち
が辺りに響く。

「あたしが居るんじゃ、何もできないんでしょう？　あたしがいない
方がいいんでしょう？」

「そんなこと、あるわけじゃないじゃないか」

けれど、そんな変迅堂の言い分なんか聞かない。ちあきは続ける。
いつからか、目に涙を浮かべながら。

「あたしが邪魔だから、そうやって内緒でどこかに行っちゃうんで
しょ？　いつも先生はそうなんだよね。肝心な所じゃ、あたしを
そうして——」

「違うよ！」

ちあきの言葉は、変迅堂の言葉によつて遮られた。思えば、変迅
堂がちあきの言葉をこうやって遮るのは初めてのこともしれな
かった。いつも、最後まで話を聞く変迅堂が。
慣れないことに戸惑うちあき。

変迅堂は空を眺めた。空に浮かぶ月に向かってため息をひとつ
いて、変迅堂はぼつりと呟く。

「ちあき殿に、怪我してほしくないから」

「へ？」

頓狂な声が辺りに溶ける。

変迅堂は続ける。

「ちあき殿を怪我させるわけにいかないもの。だってちあき殿はま
だ子供だもん。大人として、子供を危ない目に合わせるわけにいか

ないよ」

その言葉に、ちあきの血管が切れる。

けれど、体中が痛いので、グーが出ない。

代わりに。

変迅堂の耳をそつとつまみ、そこに向かって大声で言い放った。

「うゝざゝいゝゝ!!」

「いひー!!」

耳元で怒鳴られる格好になった変迅堂はちよつと体のバランスを崩す。なんとか持ち直すや、変迅堂はちあきに向いた。

「え、何？ 私の耳がおかしくなければ、“ウザい”って言わなかった？ 今」

「うん、言いましたけど何か」

頬を膨らませながら目を腫らして、変迅堂を睨むちあき。けれど、いつものような迫力は出ない。こうして二人つきりだと、ちあきだつてただの女の子になってしまう。

変迅堂は困った顔をしている。きつとちあきのお怒りの原因が分からないのだろう。

もう、しょうがないやつचनाア。

【2】

ちあきは不承不承口を開く。

「あのさあ、あたしはもう大人なの！　もう十と五！　いい話があったらお嫁に行ってもおかしくないような歳なの！　そこらへんのこと分かつてる！？」

歩き出す変迅堂は答える。

「うん、頭では分かつてるよ。でも、実感が追いつかない。そんな感じだね」

既に変迅堂は前を向いてしまっている。ちあきからは、変迅堂の顔の様子が分からない。

けれど、なんとなく変迅堂の心の奥に潜むものが分かったような気がした。本当に変迅堂は、ちあきのことをお子ちゃま程度にしか思っていない。少なくとも、ちあきにはそう思えた。

「先生の、バカ」

ちあきは変迅堂の背中に顔をうずめた。

「うん、バカなのかもしれないね」

変迅堂は応じた。

「本当にバカ。大バカ。いつペン死んで治して来て」

外した片手でぼかぼかと変迅堂を叩くちあき。いつものグーとは比べるべくもないほどに弱い。

「ごめんなさい」

「何を謝るのよ」

「いや、ただなんとなく」

「バカ」

“バカ”という言葉の数回繰り返した後、ちあきは黙りこくつた。変迅堂はあえてちあきに声をかけることをしなかった。眠ったものとばかり思ったのだ。

けれど、沈黙のしじまに、ちあきは口を開いた。

「ねえ、先生」

「ん、なんだい」

声をとどころで詰まらせながら、ちあきは聞く。

「いつかはさ、バカで無粋者で鈍感でどうしようもない先生でも、あたしが大人になったって思ってくれる？　あたしを大人として見てくれるときが来る？」

変迅堂は答えた。

「うん、きっといつかは、そんなときが来るんだろうね」

「そっか」

ちあきは変迅堂の頭を撫でた。

「じゃあ、今日のところは許してあげる」

そう言うや、ちあきは変迅堂の頭を撫でた手を首に回した。そして、全体重を変迅堂に預けた。そしてしばらくすると、スースーという寝息が辺りに響いた。

「寝ちゃった、か」

変迅堂は誰にともなく呟く。

よ、とちあきを背負い直し、変迅堂はまた歩き始める。

冷たい空気に少し体を冷やししながら、変迅堂は空を眺める。

と――。

「ふん、そんな子供の子守とは、貴様それでも武士か？　夏之丞」

悪意のこもった低い声が、どこからともなく響く。

空から視線を落とした変迅堂は、声の方にも向かずには答える。

「変迅堂です。言っただでしょう。私は武士を捨てています。今は発明家の変迅堂です」

「は、そうか、変迅堂」

不意に闇から飛び出してきたのは、赤い羽織の男だった。顔を思い切り歪めながら立ちつくし、変迅堂に向く。そうして、下卑た笑顔を浮かべる。

珍しく、変迅堂は顔をしかめた。いや。むしろ赤い羽織の男を睨みつけた。怒気孕みの声を、男に向けて放つ。

「あなたですね」

「何がだ」

いつしか、変迅堂は足を止めていた。

「あの鎧武者。それに、あの浪人さんの刀。少なくとも、あの刀は私が以前発明したものではありませんです。それに、あの鎧武者。あの絡繰技術はあなた方の家中にしかないものです」

「はは、“あなた方の家中”じゃない。“お前の家中”だ」赤い羽織の男は口角を上げる。「そう。あの鎧武者をあの浪人に預けたのも、そしてあの刀を与えたのも、俺だ」

「なぜ、そんなことを」

変迅堂の問いに、最初赤い羽織の男は答えなかった。肩をすばめながら、醜悪に顔を歪めるばかりだった。けれど、考えがまとまったのか、それともただの思わせぶりか、ともかくもしばらくしてからゆっくりと口を開いた。

「理由？ 決まっているだろう。家中は全くブレてはおらん。お前が居なくなっただけから、家中の皆は家中の悲願を為そうと必死だぞ？」

「ま、その“悲願”とやらについていけなくなって、私は家中を抜けたわけですが」

皮肉つぽくつぶやく変迅堂の前に、赤い羽織の男は口を開く。

「……おい、夏之丞」

「変迅堂です」

けれど、赤い羽織の男は己の言葉を訂正する事は無かった。

「これが、最後通牒だ。殿からの、な。殿からのお言葉だ。高々足輕に毛が生えた程度のお前に、殿からのお言葉が下賜されること自体異例のことだ。謹んで受けよ」

「断ります」

が、そんな変迅堂の言葉を無視しながら、歌うようにして赤い羽織の男は続けた。

「夏之丞、家中に帰還せよ。さすれば家中を勝手に出奔した罪を

赦し、没収した家禄を保証するのみならず、さらなる加増も約束しよう。だが、もし戻らぬというのなら、お前のみならず、お前に関係した全ての人間に危害が及ぶだろう”」

はっ。変迅堂は鼻で笑う。

「飯にも殿ともあるうお方が恫喝ですか。つまるところ、家中に帰還しないなら殺す、って脅しているわけですね。まあ、それも当然ですか。もし私が家中の“野望”を幕府の方に話せば、とんでもないことになっちゃいますもんね」

ぎり、と齒を噛みながら、赤い羽織の男は口を開く。

「――殿を愚弄するな。さあ、返答を」

変迅堂はきつぱりと口を開いた。

「お断りです。家中に帰れば、あなたの元で無意味なものを造って過ごしたあの一番つまらない頃に逆戻りです。あの頃は一番勉強になりましたが、一番つまらない時でした。そして何より、一番他人様の役に立たない物ばかりを作っていた頃でした。もうあんな張り合いのない日々は御免です」

「そうか」

赤い羽織の男は顔色を変えた。その顔に寂しさのようなものが浮かんでいたような気がしたのは、変迅堂の気のせいだろうか。

けれど、その表情を一瞬で消して、赤い羽織の男は変迅堂に向いた。

「いいだろう。それがお前の結論か。ならば、そのお前の言葉、殿に伝えさせてもらうぞ」

「ご勝手に」

そう言い捨てて、変迅堂が足を踏み出した瞬間、赤い羽織の男は口を開いた。

「分かっているとは思うが、これから我らはお前の命を狙うことになる。いや、お前だけではない。お前と縁した連中皆に類が及ぶと思え」

「出来れば、私の命だけ狙って頂けますか。他の人たちは何の関係

もないでしょう?」

「悪いが」赤い羽織の男は言う。「お前も、殿のお人なりを了解しているだろう。ならば、その願いが無意味なことくらい分かるう。私としては、お前をなんとかしても部下に加えたいんだが、殿が何と言つかわからん。おそらく、もう待つてはくれまい。殿はもう、お前を敵と見なすだろうな」

「そうでした、あの方、とんだ鬼畜ですもんね」

変迅堂は振り返りもしなかった。闇夜に向かって足をゆっくりと振り出す。

そんな変迅堂に、赤い羽織の男は声をかけた。

「さらばだ、夏之丞。いや、変迅堂」

思わず、変迅堂は後ろに振り向く。

けれど、もうそこに赤い羽織の男の姿は無かった。そこにはただ、闇の小路が続くばかりだった。

前を見ても後ろを振り返っても、闇が続くばかり。

ならば。

変迅堂は呟く。

「なら、前に踏み出すほうが幾分マシ、ですね」

そんな変迅堂の呟きは、誰にも拾われずに消えゆくはずだった。けれど。

「うんうん……、そうだそうだ……!」

びくり!

ふいに飛び出た声に、変迅堂は背中をびくつかせる。けれど、その声の主は合点が行って、変迅堂は頬を緩めて背中がちあきに向いた。

【3】

背中で眠るちあきの寝言が、変迅堂の言葉を拾う格好となったのだった。

ふとちあきの方に変迅堂は視線を向ける。背中に体を預けながら眠るちあきは、淡く顔を緩めながら眠りの世界に遊んでいた。その寝顔に微笑みかけながら、変迅堂は呟く。

「ちあき殿、ありがとう」

また、変迅堂は歩き出した。

月の照らし出す江戸の小路は、黄金色に輝く。変迅堂はまるでワルツのステップを踏むようにその小路を抜けて行った。どこかふわふわとした足取りで。

一方その頃……。

「あのう、与力さん、ど、どこに行くんでやんすか？」

助八が、前を歩く仁杉の顔を覗き込む。けれど、表情を測られるのが嫌なのか、仁杉は助八の視線を肩でかわす。その代わり、饒舌な言葉が放たれる。

「ふん、決まっているだろう」

歩みを止めないまま、仁杉は振り返る。そして助八の後ろ、お岩にもたれかかるようにして歩くイエモンを見やった。

「イエモンの罪に対して罰を与える。それだけのことだ」

その冷たい響きに、助八は身を震わせる。のろのろと歩くお岩とイエモンを肩越しにちらちら見ながら、助八は口を開く。

「あの、与力さん、見逃してくれないでやんすか？　今は持ち合わせがないからダメでやんすけど、黄金のお菓子がご所望ってことでしたら何が何でも集めさせてもらうでやんすから」

ふん。仁杉は鼻で笑う。

「受け取ってやってもいいが、だからといって裁定がひっくり返ることは無い」

「うわあ、物分かりが悪りでやんすね！」

そんな助八の心のつぶやきを見透かしたかのように、仁杉は続ける。

「実はな、イエモンには別件での容疑がかかっている」

「へ？」

仁杉いわく、イエモンには今回の件とはまた別の辻斬り容疑がかかっているのだという。目撃証言や背格好、辺りの状況などから考えて、ほぼ間違いないらしい。

「そ、そんな！ イエモンさんがそんなこと……」

イエモンに時折視線を向けながらあがあがと顎を動かす助八。そんな助八を尻目に、仁杉はため息をついた。

「ああ、安心しろ」

けれど、イエモンにかかっている別件容疑は、大した事件ではないという。道行く人に刀を抜き放って見せつけたり、斬りつけても打撲にもならないような怪我を負わせるだけだったと。仁杉いわく、「本物の刀を振り回していて、誰一人怪我をしていないなんてよっぽどの下手くそだな」とのこと。

「なんだ、そうでやんしたか」

「“なんだ”とはご挨拶な話だな、けが人がいないとはいえ、江戸の治安を脅かした辻斬りには違いない。……よっぽど鬱屈していたのだろうな。浪人とはいえ、武士には気苦労が多いからな」

なぜか、仁杉の顔にはさびしげな色が浮かんでいた。

ふん。

その表情を鼻息で吹き飛ばした仁杉は、また歩みを速めた。必死でそのあとを追う助八。時折ちらちらとイエモンたちに振り返りつつ。

「あのう、与力さん」

「なんだ。さつきからガヤガヤとうるさい奴だな」

とげのある仁杉の言葉にむっとしつつも、助八は続ける。

「南町奉行所、こつちじゃないでやしよ？ さては道に迷ったんでやんすか？」

そう。仁杉たちの足は南町奉行所に向かつていない。むしろ、どんどん奉行所から離れている。つまり、どんどん江戸の中心街から離れている。

風に黒い羽織をたなびかせながら、仁杉は答える。

「バカを言え。それでも私は江戸の安寧を守る与力だぞ？ その与力が、江戸の地理を知らぬはずはあるまい」

「じゃあ、どこに……」

そう呟いた瞬間に、仁杉は足を止めて振り返った。

え？

助八は、その終着地に驚きを隠せなかった。

仁杉がイエモンたちを誘った場所。それは、江戸境だった。境とはいっても、何があるわけではない。どこかの国につながっているのだろう道がただ続くばかりだ。ただ、この江戸境は、与力にとっては重要すぎる意味を持つはずだ。江戸町奉行所の管轄は、基本的には江戸市中なのだ。

仁杉はイエモンの前に立った。お岩に支えられる格好で立つイエモンは頭を垂れ切っていた。

「顔を上げる、イエモン」

イエモンは顔をあげた。その目には、まるで生気がなかった。

「今から、お前に罰を言い渡す」

むしろ、横に立つお岩の方が動揺しているようだった。黒目がちだった目を震わせながら、仁杉を見つめていた。その顔には仁杉への反発の色は無かった。まるで子犬のように身を震わせるお岩。

ふん。

鼻をならす仁杉は言い放つ。

「イエモン。お前は江戸市中所払だ」

所払。つまりは江戸に定住してはいけないという刑罰だ。

そして。

「その妻お岩。お前もイエモンと共に江戸所払だ」
キョトンとするお岩。

けれど、その横のイエモンは、目を見開いた。虚ろだった瞳孔を思い切り広げ、仁杉に困惑した顔を向けた。やがて身を震わせはじめ、吸う息をしゃがれさせ始めた。そして最後には、鼻水やら涙やらで顔をぐしゃぐしゃにしながら、口を開いた。

「いいのか？ 見逃して、くれるのか」

「何の話だ」と仁杉。「お前には所払という罰を与えた。のみならず、その妻にまで同罪を負わせたわけだ。そのどこが、“見逃す”という話になる？」

所払という罰は、微罪に対して用いられることが多かった。それこそ、ケチな泥棒などに適用された罰だ。決して、人を何人も傷つけた辻斬りに適用される罰ではない。事実上、見逃しと言われてもしょうがない。

ただし。仁杉は言った。

「今すぐ江戸市中を離れること。今すぐ、だ。もし、お前たちが今すぐ江戸から離れないということならば、正規のお白州が待っていると思ってくれ」

つまり、もつと重い罰が下されることを、仁杉は暗に示した。

「ただ、分かっているとは思うが、江戸からの所払は——」
「分かっているさ」

イエモンは頷いた。さびしげな顔をして振り返ったイエモンの表情は、仁杉からは測れない。

「江戸から出てしまえば、俺はもうどこかの家中には仕えることが出来ないだろうな」

この時代、どの家中も人員が過剰だった。特に、国元などは人員を削っているところの方が多くくらいだった。“江戸から離れてしまえばもう武士には戻れない”とは、そういうことだ。

仁杉は頷いた。

「そこまで分かっているならもう何も言わん。——どうする？　今すぐ江戸を去るか。それとも、獄を抱くか」

イエモンは、お岩に顔を向けた。

お岩は、そんなイエモンに微笑みかける。ぎこちなさなんてみじんもない。本当に自然体に、ふんわりと微笑んでいた。まるで、イエモンのことを後押しするかのように。

そして、イエモンは仁杉に向いた。

「ああ、所払を受けさせてもらう」

「そうか」

顔をほころばせた仁杉は身を翻して、イエモンたちに道を譲った。夜の帳に塗られたくられた道。けれど、天に輝く月が、行く手をおぼるげながら照らし出していた。

その道を、イエモンとお岩は歩く。

ゆっくり。一步一步。まるで、足元を確かめるかのように。

「イエモンさん、お岩さん」

助八が、そんな二人に声をかけた。

二人は同時に振り返る。二人とも、不思議と柔和に微笑んでいた。けれど、声をかけただけで、助八は何も言えずにいた。あんな柔和な顔に対して、何を言えいいのか分からずにいるのだろう。

そんな助八を笑うかのように、イエモンは頬をほころばせた。

「助八さん、世話になったな」

お岩も、口を開く。

【4】

「何から何まで、ありがとうございました」

お礼を言われているにもかかわらず、助八は下を向いていた。まるで泣いているかのように。けれど、いつも皆に見せる笑みを顔に張り付けながら、助八はおどけて見せた。

「おいらは何もしてないでやんすよ！……お礼を言うのはこちらのほうでやんす。今まで、本当にお世話になりやした！」

「ああ」

イエモンはそう頷くと、また前を向いた。お岩もそれに続く。

二人はゆつくりと、けれど確かに前に進んでいった。

仁杉と助八は、二人の背中が見えなくなるまでその場に立ち尽くしていた。

○

帰りの道すから。

今日はじめて会った二人なので特に話すこともなく、夜道を歩いていた仁杉と助八だったけれど、不意に仁杉が口を開いた。

「おい、ちよつと聞いてほしいことがあるんだが」

「へえ？」

怪訝そうに顔をしかめる助八を尻目に、仁杉は続ける。

「言っても詮なきことだということとは分かつてはいるんだが、かといつて言わずにいるのも苦しい。ときには、そんなこともあるだろう？」

「はあ、ぜひともお話し下さいやす。ただし、おいらの話も一つ聞いていただけやすか？」

「ああ。いいだろう」

「なら、お聞きしましょう」

助八に話を促される格好になった仁杉は、不意に空を眺めた。

「……半年前、友が死んだ。江戸の武士、しかも徳川家の侍。俺が

ら見れば同僚に当たる。とはいっても、まったく配属されている部署が違ってから仕事で会ったことはない。たまたま同じ剣術道場の門を叩いた縁でな、随分と長く友人付き合いをしていたものだった。そいつは剣こそヘタクソだったが、槍が上手くてな。きつと、乱世に生まれていれば、出世が出来たろうな。……いや、そうでもないか。あいつはどうも優しいところがある奴だった。虫も殺せないよな、穏やかな男だったよ。少し、繊細だったのかもしれないな」

ふう。ため息をついて、仁杉は続ける。

「だからこそ、信じられなかった。あいつが、槍で辻斬りをしでかしていると分かった時には」

「え？ 槍？」

少し混乱する助八。微妙に話がイエモンの話とつながっているよな気もしたけれど、それは違うようだ。仁杉の語る“友”は、もう半年前に死んでいるらしいのだから。

「その友を縄にかけたのは、他ならぬ俺だった。縄にかかった瞬間、あいつはどんな顔をして、なんて言ったと思う？ あいつは、こう言ったんだ。“俺は、生まれた時代を間違えたのだ”、そう言ったよ。あいつの配属されているのはソロバン勘定の多い部署でな。槍働きが認められるような部署ではなかった。それに、あいつの言うには、上司からのいやがらせに耐えられず、そのやるかたない憤懣ふんまんを辻斬りで解消していたらしい」

「けど、それは……」

「ああ、許されることではないさ。そんなこと、分かっている。だからこそ、一切の情もかけずに奴を評定所に引き渡し、その結果奴は遠島と相成った。ま、刑が執行される前に、ヤツは獄中にて死んだがな。……事実そのものに対して、言うことはないさ。ヤツは法を犯し、俺は職務に従いヤツを捕まえ、結果江戸は平和になった。が、後悔は残る。ヤツが凶行に及ぶ前に、もっと何かが出来なかったものかと」

つまり。

助八は口を動かす。

「この処分は、与力さんなりの罪滅ぼしってことなんでやんすか？
自分のお友達に出来なかったことを、たまたま似たような境遇に
あったイエモンさんにやってやった、そういうことでやんすか？」
「さて、な」

仁杉は空に輝く月を眺めた。その顔には、普段の仁杉に張り付いて
いる、ある種の感情が抜け落ちてしまっていた。

まるでおもちゃを扱うかのように十手を空に投げた仁杉は言った。
「この件は、ヤツの亡霊が化けて出てやったことだ。……そう思っ
た方が、はるかに簡潔な結論になるような気がしないか？ それに、
二人の間を救うことが出来たんだ。あいつも喜んで罪を被ってく
れるだろう」

言い終わった瞬間に、仁杉の手に十手が落ちた。それとともに、
仁杉はもとの与力の顔を取り戻していた。

と、そんな仁杉は助八の方を向いた。

「そつえば」

「なんでやんすか」

仁杉は言った。

「お前、確か話したいことがあるとか言っておらなんだか？」

「ああ。あつたでやんす。けど」

「けど、なんだ」

怪訝そうな顔を浮かべる仁杉に対して、助八はにこりと笑って見
せた。

「もう、言っても仕方のないことでやんす。自分の肚の中で腐らせ
てしまえばそれでいい話でやんす」

その言葉に、仁杉が茶々を入れる。この人らしく、皮肉ぽく。

「ほう、それは、お前が実はあのお内儀のことが好きだった、とか
いう類の話か」

ぎく！

思いつきり顔を赤らめて口を開く助八のことを、仁杉は笑った。

「なんだ、凶星か。なんとまあ分かりやすい奴だ」

「な、なんでわかったんでやんすか！」

「なんとなく、だ」

ぐうの音も出ない助八。

その助八に向かい、仁杉は言う。

「こう言っではなんだが、“誰にとっても最善の結末”なんてもの、どこにも存在しないものだ。少しずつ皆が我慢して、これくらいだったら仕方ない、という落とし所を探すのが一番現実的なだろう」
一つ聞く。仁杉はそう前置きした。

「この結論は、お前にとってどんな結論だ？」

その言葉に、助八は表情を凍らせた。けれど、そうやって凍った表情の裏には、様々な感情が渦巻いているようだった。あるいはイエモンとお岩の記憶が巡っているのかもしれないかった。

その間、一切仁杉は口を開かなかつた。せかすことなく、ただ助八の答えが紡がれるのを待っていた。

助八もまた、空を眺めた。空には月が輝いている。月はただ空にぼつかりと浮いているだけなのに、なぜか月面に答えが書いてあるかのように、助八は月を見つめていた。

ふう。

助八は視線を下ろし、仁杉に向いた。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「まあ、なんとか我慢できる結論でやんす。……いつかは忘れられる痛みでやんす」

声には、あまりに様々な感情が混ざり込んでいた。納得できているのだけれど納得しきれていない。嬉しいんだけど悲しいような。いくつもの対立する思いを抱えながら立ちつくす助八は、実にひたむきな笑顔を浮かべていた。

「……そうか」

少しだけ、仁杉も笑う。その顔に少し哀調が混ざるのは助八の気のせいだったろうか。

「苦しいな」

へへ。助八は笑う。

「まあ、いつかはこうなるはずだったんでやんすよ」

月は一切を等しく照らす。まるで、この世界に息づく全ての者に微笑みかけるかのように。

その1「あの時の約束」

遠くまで続く青い空。笠の縁をくいつと上げて空を見る。雲ひとつない空に、雁の群れが飛んでいる。ふと視線を山に落とす。江戸より数週間早い紅葉が、山を赤く染めていた。

ふと、来た道を振り返る。もう、江戸の喧騒など見えるべくもない。豊作の畑や刈り取りの終わった田んぼが見渡すばかりに続く光景のどこにも、江戸の空気はない。

随分、遠くまで来たものだ。

イエモン氏は一人、心の中で呟く。

つい何日か前までは、ずっと江戸の片隅で悩み続けていた。答えのない袋小路に入り込んでいたような気がしていた。けれど、こーやって喉元を過ぎ去ってみれば、案外取るべき答えは簡単なものだったのかもしれない。何もかも捨て放って、こうして江戸を飛び出せばよかったのだ。

「イエモンさん！」

旅姿の妻・お岩が道端に腰をかがめて、イエモンを手招きする。

その手招きのままに、イエモン氏はお岩の横に立つ。お岩はまるで少女のような笑みをイエモン氏に振り向け、くいくいと前を指差した。お岩の指の先には、時折銀色に輝く小川の流れが。

「きれいですねえ」

ちよろちよると響くせせらぎに、イエモン氏も耳を傾ける。

まだお岩が少女だった頃。あの頃のお岩も、こーやって屈託もなく笑う女の子だった。そのことを思い出しながら、イエモン氏はお岩に訊く。

「なあ、お岩ちゃん。これで、よかったのか？」

お岩はすくつと立ち上がった。そして、イエモン氏の顔を覗き込む。不思議と、冷たい顔をしていた。

その顔に追い立てられるようにして、イエモン氏は続ける。

「だって、今回の件のおかげでもう俺は武士には戻れないだろう？
武士である俺と結婚したのに。それに、義父上にも黙って出てき
ちゃったし……」

その言葉に、いちいちお岩は頷いていた。けれど、イエモン氏が
言い淀んだのを見計らったようにして、桃色の唇を動かした。心な
しか頬を赤く染めながら。

「ねえイエモンさん、イエモンさんは、約束、覚えてる？」

約束？

イエモン氏は首をかしげる。

すると、お岩は両頬を膨らませてイエモン氏に顔を近づける。そ
の仕草はまるでどこかのおしゃまなお嬢さんのようだった。

「その顔！ 忘れてるでしょう？ …… 祝言の前に約束をしたでし
よ？ 父上もお友達もいない、二人きりの時に」

え？

ああ。

そこまで言われて初めて、イエモン氏の頭にある光景が掠めた。
神社の暗い境内の中で、頬を染めるお岩。そして、高鳴りゆく心
の臓の音をただただ聞いていた自分。記憶の彼方にたたずむ二人は、
現在よりも幼い。

けれど、それでもイエモン氏は思い出せずにいた。

何を約束したんだっけか、俺は。

もう、五年も前の話だ。思い出せないのも無理からない話だ、
…と、自分にとって都合のいい言い訳を心の中で繰り返し返す。

全然何も思い出せていないイエモン氏の顔を見るや、お岩は眉根
を潜めた。ぐいぐいと身をイエモン氏に寄せながら、詰問口調にな
る。

「思い出せてないでしょう！」

「い、いや、思い出せてるよ。うん、本当に」

「本当に？」

「うんうんうん」

「じゃあ」お岩は指を一本立てた。「なんて約束したか、言ってみて！」

え。

言えるわけがない。何せ、何も思い出せていないのだ。

あがあがと顎を動かすばかりのイエモン氏。

ふう。

呆れたようにため息をついたお岩は、くるりと踵を返して歩き始めた。

「まあ、いいですよ。どうせ覚えてないんでしょうし」

「ああ、ちよつと待って！ 何としても思い出すから！」

その言葉を、お岩が笑う。

「別に良いですよ。どうせイエモンさんは思い出してくれないでしょうから。それに」

「それに？ なに？」

「今は、その約束が叶っているんですもの」
へ？

首をかしげるイエモン氏。俺、今、何かしているんだろうか。自分の体を見渡す。けれど、いくらそうやって探してみても、自分の身には旅姿が張り付いているだけで、何をしているわけではない。

そんな見当違いなイエモン氏の行動を見ながら、お岩はカラカラと笑う。その声はしばらくやまなかった。けれど、ようやくその笑いを引っ込めて、お岩は言った。

「これから、約束、守ってくださいね」

「いや、とは言っても」

イエモン氏の言葉に、キラリンと目を光らせるお岩。

「とは言っても？」

「覚えてないんだから守りようがないじゃないか」

その言葉を聞くと、お岩はぐるっと振り返った。

「やっぱり覚えていないんじゃないですか！」

ぎくぎく。

だらだらと汗を流すイエモン氏。もちろん冷や汗。
ふふつ。

不意にお岩は笑った。そして、指二本でバカ面を下げるイエモン氏のおでこを叩いて、くるりとまた前を向く。

「いいですよ、別に。五年前のイエモンさんの言葉は、今でも私の中で響いてますから」

「えゝ！　どういう約束だったのか教えてよゝ！」

「自分で思い出してください！」

まるで新婚さん二人のような睦まじい二人組は、どこかの空へとつながっている道を、延々と歩いてゆくのだった。

道端にたたずむ地藏さまも、妙にポカポカした日の光の元で、思いつきり苦笑いを浮かべて二人の背中を見送っていた。

「お岩ちゃん、うちの嫁に来てくれるかい？」

「ええ、よろこんで。……でもね、一つだけ条件があるの」

「条件？　お岩ちゃんのためだったら、出世だってなんだってするさ！　一生樂をさせてあげるよ！」

「出世なんかしなくても、樂じゃなくてもいいの。私が望むのはただ一つ」

「え？　何？」

「……一生、私と一緒にいて。何があっても。お金なんてなくても、出世なんかしなくてもいいから」

「——うん、お安い御用さ！」

その2「助八さんの決意」

「なかなか、寒くなってきましたねー」

変迅堂は、開け放たれていた障子を閉めた。小春日和の日の光は障子をこともなげにすり抜けてゆく。ふんわりと落ちる光は、奥に座る助八の膝に降り立つ。

「そうでやんすね」

やけに穏やかな顔をしながら、助八は障子に向いた。やわらかな光に向かつて、まぶしそうに目をそむける顔からは、その感情のありかを読み取ることが出来なかった。変迅堂は助八の前に敷かれている座布団に腰をかけた。

「でも助八さん、朝からここにおいでとは、珍しいですねー」

変迅堂は、自分の部屋を見渡した。奇麗にしているとはいえ、男の一人暮らしの長屋だ。掃除が行き届いているとはいえない。そんな自分の部屋に苦笑いを浮かべつつ、変迅堂は前に座る助八を見据える。

まるで助八は猫のようにして座っていた。別に座布団に乗っかって丸まっているわけでもないし、顔をくいくい洗っているのでもない。けれど、なんとなくその座る姿は猫を思わせた。

少し視線を泳がせながらも、助八は口を開いた。

「いや、ただあつしの話を聞いてくれそうなのが変迅堂さんだけだった、ってだけの話でやんす。大道芸人の二人は忙しそうでやんすし、お道さんにするにはちょっと湿っぽい話でやんすし」

なるほど。変迅堂は一人頷く。

浅兵衛さんや勘一は早くも仕事に出ているのだろうし、お道さんはどうにも気風が良すぎて他人の話を聞くようなタイプではない。言い替えば、暇そうで且つお人良しそうなのが変迅堂だけだった、というただそれだけのことだ。

ふうとため息をついてから、変迅堂は切り出した。

「何か、お話したいことがあるんじゃないんですか？」

しばしの沈黙。

ああ、と短く息を吐いた助八は、ぽつぽつと口を動かし始めた。

「お恥ずかしい話でやんすけど、あっし、失恋したんでやんす」

「そうですか」

変迅堂の言葉は、決して突き放しているようには響かない。むしろ、聞くものを包み込むかのような優しさを秘めている。そんな優しい言葉たちにほだされるようにして、助八は続ける。

「まあ、けど、良かったでやんす。きつとあの人は幸せになったんでやんすから」

じゃあ、と変迅堂が口を開く。

「どうして助八さんは、そんなに苦しそうなんです？」

「え？」

自分の頬を触りながら不思議そうな顔を浮かべる助八。変迅堂は言う。

「なんだか、今にも泣きそうな顔をしていますよ」

はは。そう助八は笑う。

「そうでやんすか？」

そううつろに答える助八の顔は、確かに沈み切っていた。

すると、変迅堂は不意に笑った。遠くに、どどど、という音を聞きながら。

「平気ですよ、助八さん」

「え、どういうことでやんすか？」

「不思議なもので、人間は苦しいこととかイヤなことは忘れるように出来ているものです。大丈夫、きつといつかは今の気持ちを忘れることが出来ます」

どどどどど。朝の江戸の街には不似合いの、けたたましい音が外から聞こえる。その音に苦笑いを浮かべつつ、変迅堂は続ける。

「それに」

「それに？」

「ここは文人長屋ですよ？　ここは――」

けれど、変迅堂の言葉は、とてつもない轟音によって遮られた。どんがらがつしゃーん！

ブオンと音を立てて宙を飛ぶ入口の戸。そして、そうやって開かれた入口から、もうもうと土煙を立てて飛び込んできたのは……。

「せーんせい！」

「変迅堂さん！」

はい、包帯でところどころをぐるぐる巻きになっているちあきと、いつも通り長い黒髪を揺らすお鶴なのだった。

「ね？」

ちあきたちに向けていた目を、変迅堂は助八に戻した。そして、ちよつとウインクして見せる。

「こんな騒がしかったら、悩む暇なんてないでしょ？」

そんな変迅堂の手を取るちあきとお鶴。ちあきが右手を取り、お鶴が左手を取る。もちろん二人は変迅堂の頭上でバチバチと火花を飛ばしている。

「変迅堂さん、今日は確か、甘いものを食べさせて頂けるんですよね？　ちあきさんは抜きで！」

「ななな、なにおう！　この黒髪オバケ！」

「キー！」

「ままま、まあまあ！」

騒がしい奴らでやんすね。

目の前でうるさい一幕を見せつける三人。頬を掻きながら、思わず心の中でそう呟く助八。いつしか、顔がほころんでいた。

「――ねえ、助八さん、助八さんったら！」

ちあきの大声によつて、自分がぼけつとしていたことに気付いた助八は、頭をぶんぶん振つてちあきに向いた。

「な、なんでやんすか？」

変迅堂の腕を思いつきり抱きしめる格好になっているちあきは、唇を伸ばす。

「助八さんも、甘いものでも食べに行かない？」
「はは。」

思わず助八は心の中で笑う。確かに、変迅堂さんの言う通りでやんす。悩む暇なんて、ありやしないでやんすね。

「ああ、あつしも行くでやんす」

立ち上がった瞬間、助八は、心に決めた。

そうだ、イエモンさんたちのことを、文章にしてみよう。瓦版のネタじゃなくて、架空の話だっていう体裁を取って。別に理由なんてない。ただ、あの二人のことを、いつか忘れてしまいそうなのが怖かった。ただ、それだけのことだ。

ちなみに、この助八の決心は、半分叶う。

自分で書こうとは思ったものの、元々が飽きっぽい性格だったこともあって、結局手がつかないでいたネタを腐らしていた助八は、ある知り合いの戯作者二人にそのネタを話半分に披露した。その戯作者のうち一人は、「槍で人を殺していた侍」という奇談を仲間内に披露して、江戸の好事家たちを楽しませた。もう一人はイエモン夫婦の名前を使って怪談を作るに至る。どちらも、助八の頭の中にあつた光景とは随分違ったものになってしまったのだった。

まあ、そんなことを、現在の助八が知ろうはずもなく。

そして、そんな助八の心の内など知るはずもないちあきは、助八をせかす。

「ほら、早く行こうよ」

すでに三人は履物を履いて表に足を踏み出すところだった。

ああ。そう呟いた助八も、履物を履いて三人に続いた。戸を超える瞬間、真っ白な光が助八を優しく包んだ。確かにその瞬間、心の隅に刺さっていたとげの痛みが少しだけ和らいだような、そんな気がした。

さてもさても、紅葉が散つてもなお人々の暮らしが続きますように、このお話もまだまだ続きます。

さらに深まる変迅堂の出自の謎。ちあき、お鶴、カツちゃんの恋路はいかに？ 赤い羽織の男は何者なのか？ 何が目的なのか！？
……と、様々に謎を残しておきまして。
けれど、これにていったん終幕。
また、お会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4669/>

明日は晴れるだろ 3rd season

2010年12月19日10時25分発行